

虚空を翔ける鋼の騎士

蒼依游輝

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人類がその生活圏を空へ移してから幾星霜。

西暦から遙かな未来、人々はクレイドルと呼ばれる人工の楽園で暮らしていた。

怪異と呼称された敵性存在からクレイドルを守る魔導機鎧アサルトフレームや、そのパイロットである

契約者と呼ばれる者たち。

これは、一人の契約者を主人公に見据えた物語。

大切な誰かの為に契約者となった、一人の少年のお話。

第一部・魔神戦線【エピローグ投稿完了】

揺り籠が空に上がって五千年の時が過ぎた。

舞台は空歴4996年、クレイドル07攻防戦。

それは少年が想い出を取り戻すお話。

目次

第一部 空歴4996年・魔神戦線

クレイドル07攻防戦

第十話	269
第九話	240
第八話	205
第七話	183
第六話	153
第五話	121
第四話	91
第三話	60
第二話	31
第一話	1

第十一話	307
第十二話	333
第十三話	361
第十四話	390
エピローグ	

第一部 空歴4996年・魔神戦線

クレイドル07攻防戦

第一話

空中に浮かぶ人工の楽園。いつかの人類が夢見た光景は、ここに実現されていた。人々は何の恐れも抱かずにただ安寧を享受し、生まれ、育ち、やがて死んでいく。

この楽園に住まう人間は絶対に安らか且つ幸福な生涯を約束される。無知な赤子を乗せて空に揺蕩う揺り籠。

五千年前の人類の遺産。

——人はそれを、クレイドルと呼んだ。



虚空に、黒い影が走った。

剣の刃を思わせる鋭角的なフォルムに、背中に背負った人工物の翼。

異様なその全身鎧を身に纏った何者かは、何人にも邪魔立てされる事はなく。魂の赴くままに、空を翔けていく。

『トリスリッター、指定空域に突入。作戦を開始してください』

機械鎧の中に組み込まれたシステムが声を拾い、自らの主に届けた。

それを聞いた担い手は、短く返事を返す。

「了解——リタ、行くよ」

『はい、主様……ご武運を』

視界に未だ映らない異形を認識すると、鎧は全身の装甲を変型させる。

巡航モードから戦闘モードへ、蕾が花を開くように滑らかに移行する。

変型が終わると、右手に光の粒子が集まり、それは銃の形を成した黒い金属へと姿を変える。同じく左手に、今度は少し銃身の短い銃を持つ。

「さて……オペレーター、数は？」

『下級種が九、上級種が三です。交差戦術を提案します』

戦闘準備を終え、鎧を通じて確認を取る。

特に異常は見られない。今回も指示通りに片付ける事にする。

「はいよ。リタ、聞いたな？」

『メインブースター、起動します！』

主に尋ねられると、鎧は背中の翼に焰を灯した。

いつでも準備は万端という合図だ。それを察した担い手は、両手に携えた兵装をしっかりと構える。

「――掃討作戦、開始する」

『システム・トリスリッター、任務を遂行します』

人工の翼が人ならぬ力の焰を吐き出し、鎧は超高速で直進する。

やがて敵を視認すると、担い手は右手で握り締めたグリップを意識して、引き金に指をかける。

有効射程距離に敵を収め、そしてゆっくりと引き絞るように指に力を込める。

途轍もなく重い引き金だったが、しかし呆気なく弾丸は放たれた。

――否。それは弾丸ではなく、光の奔流だ。

その光は容赦無く空を喰らい尽くし、一切の抵抗無く異形の存在に辿り着く。

その巨体に風穴を開け、着実なダメージを与えた。

そこへ左手の銃から断続的に放たれた光の弾丸が次々に直撃し、異形は撃沈した。

『良い調子です、主様。一度空域を通過します』

「ああ、調子も悪くないらしい。俺も捨てた物じゃないのかもな？」

『もちろん、主様はいつだって絶好調ですよ』

巨体を一つ沈めてその脇を通り抜け、高速で反転。

狙いをきつちり定め、右手の——ラディアントマグナムという——銃から連続して高出力の光線を射出、二つ目の異形を撃破する。

更に左手の銃、フォトンライフルからも射撃を行い、小さな個体を二つ纏めて空域から叩き落とした。

そして再び交戦距離から離脱。

「だと良いけどな。……でかいの一つ、小さいの七つか。リタ、最短ルート」

『表示します。極力被弾は抑えてください』

「解ってるよ」

視界に映し出される仮想のラインに従い、翼の焰を偏向して高速域に突入する。

ラディアントマグナムの一射は高火力な反面、撃ち切りな上に再装填の時間が掛かる。そちらは絶対に外さない。

フォトンライフルは所謂アサルトライフルであり、多少は外しても残弾に余裕がある。そもそも残弾という概念はあつて無いような物だが。その為、こちらは少し粗めの狙いを付けた。

『バトルレンジ、入ります！トリガーを！』

「——ッ！」

右手の人差し指にイメージを送り込み、重くて仕方の無い引き金を一気に引く。銃身内で成形され、空間に弾き出された光の奔流が虚空を駆け抜ける。

更にそこへ左手を差し向けると、比較的軽い引き金を引き絞る。

『上級種、損傷確認しました。下級種、残り四』

鎧から届けられた戦況確認。それにより、二つの光による視界不良を物ともせずには照準を再度合わせる。

まずは数を減らす事を選択。一定のダメージが確認できた上級種は置いておき、先に下級種を撃破する算段らしい。

少し手首を回しつつ、ラディアントマグナムを撃つ。薙ぎ払うように放たれた光線は、狙い通りに複数の異形を焼き尽くす。次いで撃ち損ねた最後の一つへフォトンライフルの弾幕を叩き付け、撃破。

左手へのエネルギー供給を断ち切り、右手へ一極化させる事でリロードを加速、回復する前に上級種へ砲口を向けた。

「恨むなよ」

間髪開けずに撃ち出された第二射により、三体目の上級種は呆気なく消滅した。

周辺空域に敵対存在が居ない事を確認すると、そつと両の人差し指から力を抜いた。

引き金から離れた指を遊ばせながら、開いた装甲を閉じていく。

『状況、終了しました。お疲れ様です、主様』

「ああ、お疲れ様、リタ。……オペレーター、帰投許可は？」

『既に出ています。クレイドルに戻ってください、トリスリッター』

「了解。じゃ、帰って録画したアニメでも見ますか」

装甲が完全に閉じられると、システムが巡航モードへ移行した。

それに従って愛銃達は光に還り、両腕を構成していたパーツも空気抵抗を考慮した形状へ変形を果たす。

後ろへ向けられた翼から勢い良く焰を吐き出すと、黒いその機体は超音速で空域を離脱した。



とある空間に、立体映像が投射されていた。

そこには七人の、それぞれ異様な雰囲気を纏った人間が集まっており、彼らは一様にその映像を見ていた。

黒い機体——クレイドル07セブンに宛てがわれた魔導機鎧アサルトフレーム、トリスリッターの戦闘

記録だ。

「……やはり、あの機体は」

「ああ、間違いない。セラフの後継機だろう」

鋭い目付きをした男が、不意に呟いた。

それに対して年老いた男が頷き、肯定を返す。殆ど断定していると言つて良いその物言いには、ただの確信だけではない物が宿っていた。

「となると、零号機は動くのか？」

「封印は何れにせよ解ける。それが今か後かは、事ここに至れば大きくは変わらない」

二度目の発言をした男に、中性的な容姿の女が答える。『封印』という物をあまり重視していないような事を口にしたが、その実『零号機』の動向は気に掛けているようだ。

「……否。情報は依然足りない。決め付けるのは愚かしい」

それまでの流れに反した発言。喪服を連想させる黒い装いの少女。

他とは段違いの異常性を感じさせる彼女の瞳は、真実何も映してはいなかった。

「しかしな。宮殿から消えた零号機に、出所不明の七号機……それも、同じ意匠と来ている。断定しても、早計とは思えないが？」

「人はそれを客観性が無いと形容する。……零号機を早期に取り戻したいのは理解できる。それでも、無関係の可能性は取り除くべき」

見た目から予想できる年齢よりも遥かに落ち着いた様子を見せる少女に、他の六人は沈黙した。

そう、それは正しく早計と言うべきものである。

未だ姿を見せない零号機に焦りを感じるのは人間として正しい反応ではあるが……この場でそれは禁忌である。

寧ろ、人間離れた少女の態度の方がここに於いては正しい。この場所に、普遍的な人間性を持ち込んではいけない。

「……では、見送ると？」

「追加の根拠が無いのであれば、七号機の……トリスリッターの撃墜命令は凍結する。危害を加えることも、捕獲する事も禁ずる」

「……チツ」

誰かが、小さく舌を打った。

それが誰かは明瞭であったが、同時に不鮮明だった。

この場の六人は、互いを正確に識別する機能を阻害されている。最高格の少女を除いて。

その為、何処の誰がこれを仕組んだのかは解らず終いという訳である。まさかこの場を抜けてから自白するような真似をする愚か者は居ないであろうからして。

俯瞰視点からの思考を終えると、少女は再び口を開いた。

「既存六機に対しても同様。零号機に関連した情報は隠蔽する事を厳守、規定に変更は無い」

それに反抗する発言は無かった。その心の裡は不明なれど。

少なくとも、公の立場を以て彼女に敵対する存在は居ないという事である。私的な感情は彼女にとつて些末な事であり、それだけ確認できれば良いのである。

「……以上、議会を終了する。各員、各々の責務を果たすように」

一言のみ言付けると、少女は真つ先にその空間から消え去った。

それを見た六人は次々に姿を消す。まるで、スイッチを落とした照明が如く、何の前触れも無く。

その絡線を説明するのであれば、小難しい言葉は必要無いだろう。この空間はそもそも仮想の存在、生身で議会に参加した人間なぞ一人も居なかったのである。

誰も居なくなつた円卓の中央で、装甲を閉じた黒い機体が虚空へと翔けていった。



不意に、目を開いた。

何かの違和感を拾った訳では無い。

或いは何らかの発見があった訳でも無く。

単に、体を休めているだけの静寂に飽きが来ただけである。

「主様、お目覚めですか？それならお茶でも淹れましょう、今日の配給はアールグレイでした」

「……おはよう、リタ。元気だな、お前は」

ベッドから上体を起こすと、部屋の外から差し込んだ太陽が眩しかった。

目を細めて何も無い空を眺めていたが、それにも飽きて立ち上がった。

「はい、おはようございます。わたしはいつでも元気ですよ。よく眠れましたか？」

「少しは休めたよ。何か変わった事はあった？」

「いいえ、何も。そもそも主様が帰投してから一時間と経っていませんから」

「……道理で太陽が眩しいと思った」

白いシンプルな陶磁器に注がれた紅茶を口に流し込み、一つ深呼吸した。

慣れた空気が肺を満たし、急な戦闘で緊張していた体が少しずつ解かれていった。

「今日も美味しい紅茶ありがとうございます。目が覚めた」

「きつと茶葉が良いんです。さあ、主様。今日はどうしますか？もちろんこの部屋でわ

たしと退廃的な一日を過ごすのも歓迎ですよ」

「冗談は程々にな、リタ」

別に、それはそれでまた一つの幸せの形なのかもしれないが。

さすがに相棒との爛れた生活に憧れる程に飢えているつもりはない。

「あら、残念です。それなら外に行きましようか。時刻はまだ朝と昼の間です。散歩には丁度の良い時間でしよう?」

欠片程にも残念に思っていないような表情で彼女は手を引つ張っていく。

それに抗う事もせず、玄関で靴に足を引つ掛けてそのまま外へ。特に何も着飾らずに、ただの散歩へと繰り出した。

「クレイドルは変わりませんね。……主様が守った空です。少しは誇ってくださいね」

「驕って落ちるような下手は打ちたくないから少しだけな」

「もう、そうやって謙遜して」

仕方なさそうな表情をするリタは、それでも楽しそうだった。

魔導機鎧アサルトフルームの統制人格——本来なら人の形を得られるような存在ではない彼女が、

こうして担い手の身の回りの世話をしているのには、込み入った事情がある。

しかしまあ、互いにそんな事は気にしていない。

今はただ、こうして触れ合える幸せを享受しているだけで良いのだ。

「……ねえ、主様」

「何だよ、リタ」

「……………いいえ、呼んでみただけです」

「何さ、それ」

見慣れた場所と人通りを抜けていく。今日は少しのんびりと歩く予定らしい。

暫く歩いていくと小さな公園があつた。決して寂れている訳ではなく、管理は行き届いている。

遊具は少ないが、そこで遊ぶ子供達の顔に不満は見えない。この公園に満足しているようだ。

「……………今日も平和ですね」

「子供があんな風に遊べるなんて、随分と穏やかになつたもんだ」

「数年前までクレイドル7の周囲には大量の怪ホロウヘイブ異が跋扈していましたから……………。それを全て片付けたのは主様の功績です」

また、彼女はそう言つて称える。

過去の栄光に縋るつもりなんて無いが、少しくらいは自負を持つた方が良いのだろうか。

そんな事を考えつつも、足は勝手に適当なベンチへ向かつた。

ちよつと歩いた。足を止めてゆつくりと過ごすには良いタイミングだ。

はしゃぐ子供達を視界から外し、何一つ変わらない空を見上げる。ここに怪異の影響は無く、クレイドルという空の揺り籠に居る事も忘れそうだった。

——どれくらい、そうして居ただろう。

時間にして何分か、それとも何十分と数えるべきなのか。

ふと、リタが呟いた。

「それでは主様、お昼にしましょうか」

「もうそんな時間……と言うか、いつの間に準備したんだ？」

出掛けるときに何かを持っていた様子は無かった。魔導機鎧アサルトプレームの機能を使ったのだから。

無駄遣いとは言わないし、言わせない。

「主様が休んでいる間にですよ」

「……俺が家に引き籠もってたらどうするつもりだったんだ」

少し気になった事を尋ねる。

すると、リタは何でも無いように答えた。

「その時は晩御飯になるだけですよ」

「お前の昼は？」

「場合によっては抜きます」

「やっぱり馬鹿だよお前」

リタは魔導機鎧アサルトフレームに芽生えた人格、普通の人間とは違う部分も多々あるが。

しかし、生きている事には違いない。睡眠もすれば食事もするのだ。

その重要な食事を何とも無い様子で「抜く」と言われてしまえば、あまり気は抜けないくなる。

「冗談ですよ。少しくらいは食べます」

「だと良いけど。リタはすぐに遠慮するから」

「わたしだってお腹が空いたら正直になりますよ」

さて、それはどこまで本当なのか。

その詮索については後の楽しみに取っておくことにして、リタが広げた昼食に視線を落とした。今日も美味しそうな食事が並べられている。

紅茶を淹れる腕前もそうだが、彼女は基本的に女子力と呼ばれるステータスが高い振る舞いを見せる。料理などやらせればもう自炊なんてしてられない。

「まるで話に聞くピクニックですね。たまにはこんなのも良いかもしれません」

「たまにはな。俺は家でゆっくりしてる方が好きだよ」

「それはわたしを独占したいと?」

「それもある」

特に動じずに答えてみせる主に、魔導機鎧は嬉しそうな顔で笑う。

リタはこんな遣り取りを交わさなくても、自分へ向けられている信頼やそれ以上の想いに気付いている。

それでもこうして、繋がりを確かめたくなくなってしまふ。

そんなどうしようもない自分に付き合ってくれる主に、従者は笑顔を向けたのだつた。



目を開けると、まだ日は登っていないかった。

日の出を見るなら丁度良い場所がある。何となしに、そこへ足を伸ばす事にした。

部屋を出てベランダを経由して屋根に上がり、小さなスペースに腰を掛けた。

「……まだ、掛かるかな」

どうやらかなり早い段階で目を覚ましたらしく、早朝どころかこれは未明である。

だが、のんびりと太陽を待ち受けるのも一興。とりあえず朝食まではここに居る事にする。

見ていると落ち着く色合いの空をじっと見上げて、さて何分が経過したのか。

地平の果て——その表現が正しいのかは解らないが、視認できる限界地点に光が見え始めた。

それと同時に、視界の端に黒い影がひよつこりと顔を出した。

「……何か用かな、アリサ」

「あ、いや……その……」

そちらを見ずに声を掛けると、彼女は驚いた様子で硬直した。こちらが気付いていないと踏んでいたらしい。

見事に予想を外したアリサ——黒鐵^{くろがね}アリサは、身を隠す事を諦めて素直に出てきた。赤い瞳は真っ直ぐにこちらを見る事なく揺れている。

「……遊びに来たんだ。少し早起きしてみたみたいだから」

「うちに来られても何も無いけどな。見てくか？」

「ん。良ければご一緒させてほしいな」

少し横にずれて場所を空ければ、銀髪の少女は遠慮がちに腰を下ろした。視線の高さを同じくして、未だ開けない宵の空を見上げること数分。

ふと、アリサが口を開いた。

「……ねえ。君はさ、自分が契約者^{テストメンタ}になった事に不満を持った事はある？」

「不満、か？ いや、無いけど」

「……そっか」

端的な返答に短く返すと、彼女はまた口を噤む。

しかしそこには負の感情は無かった。不満は無いというその答えに異を唱えるつもりは無いらしい。

「君が契約者になったのは、半分は私のせいだから。もしその役目を嫌っていたら、どうしようって思っちゃって」

安心したような顔で、アリサは呟いた。それは殆ど独り言のような物だったが、確かに否定しなければいけない事があった。

「……いいや。リタと会えたのは幸せな事だし、お前と同業になれたのは良かった。それに、この仕事はやりがいもあるしな」

「やりがい?」

オウム返しに聞き返す彼女に、自然に笑顔を浮かべて頷く。脳裏には、真つ黒な服を着たプラチナブロンドの少女の姿が浮かんでいた。

「そう。俺がクレイドルを守れば、喜んでくれる人が居る。嬉しそうな顔をしてくれる人が居る。……まあ、上司^ゼただけ」

本人が言う情報から推測するに、あの少女^コはこのクレイドル07の管理者と呼ばれる存在なのだろう。

上位者は、常に超然とした態度を保つ。というよりも、そんな形でしか他者と触れ合えないのだろう。

それでも不器用なりに功績を称え、精一杯に喜んでくれる人が居る。

一人の契約者を動かすには、十分に過ぎる理由だ。

「……少し、解るよ。私も、誰かの為に頑張ってるから」

「そうか。……ああ、そっちは安泰か？」

「もちろん。私の居場所は私が守るよ。どうしてもって時は君の力を借りるけどね」

にこり、という擬音が似合う表情のアリサ。そんな彼女に少し見惚れていると、不意に空の色が変わっている事に気が付いた。

「……時間だね」

「もうこんな時間か。……いや、そんな物か」

時間の速度は、主観的に見た時の充実感に比例して加速する。親しい友人との会話なんてその代表と言えるよう。

だから不思議には思わない。ただ、考えていたよりもアリサとの会話を好ましく思っていた事に驚いただけ。

「今日も日が出た。あれがまた落ちるまで……せめて、少しでも平和だと良いね」

「……ああ。全く、そう思うよ」

日の出を目に焼き付けると、アリサが立ち上がる。

彼女の本来の居場所はクレイドル06、ここではない。

魔導機鎧六号機——グレイエンプレスの契約者である以上、クレイドル07で遊

んでいる暇は無い。ここに来られたのは、日の出がいつもより少しだけ早かったからだ。

「それじゃあ、またね。これでも私は君の先輩だから、何かあったら頼ってね」

「できるだけ迷惑は掛けないつもりだよ。それじゃ、気を付けて」

「うん。そつちも。……姫様、起きて」

静かに魔導機鎧アサルトフレームを身に纏い、そつと飛び上がる。

魔導炉によるブースターの推力で飛行するトーリスリッターとは違い、グレイエンプレスは反重力機構を用いている。その為、無反動且つ無音での飛行が可能なのだ。

「私は傍には居られないけど……リタとゆっくり過ごしてね」

「解つてる。姫様も元気だな」

『……お前に心配される謂れはありませんが、受け取っておきます。有り難く思いなさい』

「手厳しい事です。じゃあな」

飛行というより浮遊に近い動きで空へ上がったグレイエンプレス。

それを見送ると、再び太陽の方へと視線を向けた。

「……精々、今日も平和を祈っておくよ」

数瞬ほど目を閉じていたが、すぐにいつもの調子に戻して部屋へと足を向けた。

まずは相棒を起こし、それから朝食にする。

今日は不思議と、良い事が起こる予感がした。



一つ、息を吸い込む。

そこから酸素を奪い尽くすと、用済みと言わんばかりに吐き出す。

それを数度繰り返すと、落ち着かない場所にも慣れてきた。

「……陽彩？」

「いや、何でも無いよ」

一応、確認する。

俺の名前は御童陽彩^{ごどうひいろ}、十六歳の契約者^{テスタメンタ}だ。

相棒はトリスリッター、魔導機鎧^{マジルトフレーム}の中でも最新の七号機。

よし、とりあえず頭の方は問題無さそうだ。

そうなれば問題があるのはこの現実、という事になるのだが――。

「陽彩、そんなに凝視して、何かあった？」

「だから何でも無いって」

喪服を連想させるような、真つ黒の装い。記憶が確かであれば、ゴシックロリイタと言うのだったか。

旧世紀である西暦から存在する服装と言う事で、かなり格式の高い服装なのだろうが……。

実際、この少女はかなりのお偉いさんである。

「だったら、どうして私を？特に理由も無く？」

「全くその通り。……いや、思う所が無いとは言わないけど」

彼女の名はゼロ。名字は知らない。

俺の暮らすクレイドル07、その管理者である。

そしてここはゼロの自室。つまる所、このクレイドルにおいて最も豪華絢爛な一室である。

「……私はただ、いつも突然の依頼に対応してくれる陽彩を労う為にここに来た。この部屋が好ましくないなら、別の場所に行く」

「いや、わざわざそんな事しないでいいから」

表情は硬いし口調もどこか事務的だが、ゼロは俺の事を一人の人間として大事にして
くれている。

普通なら契約者など人間として扱われたりはしない。アリサなんかが良い例だろう。
テストメンタ
基本的に自由は無い。

だが、俺の所属するクレイドル7は違う。何せ管理者がこれだからだ。

「……?でも、努力に褒賞が与えられないのは誤り。なら、どうすれば良い?」

「別に深い事考えなくて良いから。単にご苦労様つて一言があれば十分だよ」

「でも、それは……」

「俺が良いって言ってるの。だからそれで良い」

何度言ってもゼロは聞いてくれない。仕方無いので、そのプラチナブロンドの髪を梳
いて誤魔化しておく。

無表情ながら煮え切らない雰囲気を漂わせるゼロに苦笑しつつ、俺は部屋を見渡し
た。

相変わらず殺風景だ。一目見れば豪華絢爛さに目を惹かれるが、しっかりと見ればそ
こは空虚な伽藍堂だと解る。

「むう……」

「まあまあ、そう不満そうな顔するなよ」

ゼロの表情は、アリサやリタに言わせれば殆ど変化していないらしい。しかし俺にはすっかりと、少し上目遣いで抗議するような感情が見えた。

俺としてもそんな顔が見たくてここに来たわけではない。なので、とりあえずご機嫌取りから始める事にする。

「ほら、今日も話を聞かせてよ。西暦の話が良いな」

「……あんな昔話、楽しい？」

「俺は楽しいよ。ゼロが嫌だつて言うならしなくても良いけど」

俺が迷い無くそう言うと、彼女は少し考えてから言葉を発した。

「……なら、良い。つまらない女のつまらない昔話で楽しんでくれるなら、無駄な記憶にも意義はある」

「それを無駄とは言わないさ。それじゃ、前回の続きからお願いでできるか？」

頭に乗せていた手を離して、近くのベッドに腰を下ろす。ついでにゼロも隣に座らせる。

さあ、これで準備は終わりだ。

ゼロが乗り気になってくれると良いけど。

「……前回、どこまで話した？」

「クレイドル計画の発端まで。俺としてはセラフの話をもう少し聞きたい」

「セラフ……でも、うん、望むなら。……陽彩は物好き」

少し複雑そうな表情をしていたが、ゼロはすぐに元の無表情に戻る。セラフ、と物語の中で語られる存在に、彼女は少し思う所があるらしい。

とは言え嫌と言う訳でもないらしく、また口を開いた。

「でも、そんな物好きだから好き。それなら、まずは——」

彼女は俺に語り聞かせてくれる。西暦という太古の時代の話を。

最早どんな書物にすら記載されていない、遙かな昔。

そこにも今と同じように人は生きていて、それも空ではなく地上に足を付けて生活していたという。

そんな有り得ない話でさえ、ゼロが話せばどうしてか素直に真実だと思える。

その不思議な力は彼女固有の物で、だから俺はこうしてゼロに話をせがむ。

リタはこんな俺を、親に子守唄を歌わせる子供のようだと言っていた。

「——そう。それは、いつか人が零号機セラフと呼んだ失敗作のお話。何でもできた最弱の魔神と、何もできない最強の魔導機の物語。最初の翼が大空に羽撃くまでの、長い長いプロローグ——」

きつとこれは、俺にとつての子守唄なんだろう。

だってほら。

彼女の声はこんなにも。

聞いているだけで、心が安らぐのだから。

いつまでそうして居たのだろう。

ふと気付けば、明るかった外はすっかり暗くなってしまった。

話の合間に摘んでいたお菓子の類いは全て消え、ただ空き袋がいくつか散乱しているだけになった。

「……今日はお終い。また続きは次の機会に」

「ん、解った」

机に広がった物を纏めてゴミ箱に投げ入れ、ベッドから立ち上がる。

少し動いていなかった事で凝り固まった背中やら腰やらを解し、軽く背伸びをする。

「今日もありがとう、ゼロ。楽しかったよ」

「楽しんでくれたのなら、それで良い。私の話なんかで満足してくれる人間は、陽彩しか居ない」

「さあ、どうだろうな。アリサやリタ辺りも興味持つんじゃないか？」

「……それこそ、僥倖。だとしたら、無意味に重ねた記憶も無駄じゃない」

どこか嬉しそうな微笑みを見せて、ゼロは軽い動作で立ち上がる。どこがお気に召し

たのかは解らないが、珍しい物が見れた。

今日は昼御飯の時に唐突な招集を掛けられたが、それ以外は特に何も無かった。ほぼ一日中ゼロと喋っていただけだ。

明日もこんな風に平和だと良いんだけど、俺は経験則的に知っている。怪異が少なかった日は、その翌日に大量、或いは超大型の怪異がやってくる。

……少し、気を引き締めておかないと。

「……陽彩？」

「いやさ、少し考え事。……なあゼロ、お前にもしも人を守る力があつたとしたら。そんなでもって、誰かに助けを乞われたら。……お前は、迷わずそれを助けてやれるか？」

「随分と唐突。でも……うん、きつと迷わない」

少し考えてから、ゼロはそう言った。

そこに迷いや揺らぎは無く、それが紛れも無い本心だと解った。

「そっか……ゼロは、凄いな」

「私はそんな褒められた存在じゃない。本当に凄いなのは、陽彩のほう」

「へ？」

「自分の身を以て誰かを助ける事を実践している」

……いや、それが仕事なんだけど。

「仕事だろうと何だろうと、君がやっている事は誰かに讃えられて然るべきもの。だから、私は陽彩にはできるだけ自由にしてほしい。……それだけと言う訳では、無いのだけれど」

「え？」

「……いいえ、何でもない」

最後の部分は少し聞き取れなかったが、相変わらずゼロは優しい。だってほら、アサルトフレームの契約者なんて、その為に調整された兵器みたいな物なんだから。それを人間として扱って、尚且つ適切な評価も下してくれる。

彼女はただ、俺を甘やかしている訳じゃない。俺がだらけている時にはちゃんと叱ってくれるし、立ち止まった時には強引にも立ち上がらせてくれる。

その上で、俺の働きに対してこうして何かを提供してくれる。専ら俺は昔話をせがむのだが。

「ずっと独占しているとリタに怒られる。そろそろ、家に帰るには良い時間」

「そうだな。後は今後の楽しみにとっておくよ。次はラプラスの話をお願いして良いか？」

「……セラフはもう良いの？」

俺の言葉を聞くと、ゼロは不安そうな顔で俺を見上げた。身長差のせいで、自然と俺

が彼女を見下ろす形になる。

しかしどうして突然そんな事を言ってきたのか。そもそもゼロは自分からはセラフの話をしてくれないのに。

「飽きたって訳でもないけど、一つの話だけ聞いてても世界が見えて来ないなって。だから、その後にもまた聞くよ」

「……うん、解った。それは、正しい物の見方」

少し残念がつているが、それでも納得したらしい。ゼロは俺の目から視線を外して、思い出すように部屋の中を歩き回る。

「それなら、ラプラスの事も少し調べておく。リタも知っている事はあるかもしれないから、聞いてみるのも良いかもしれない」

「同じ魔導機アサルトフレームだもんな。解った、後で聞いてみるよ」

昔話はゼロにばっかり聞いていたけど、確かにリタも知らない訳では無いだろう。たまにポツリと二号機であるシエキナーについて愚痴を言っていた気がする。

トリスリッターは七号機で、ロールアウトしたのもつい最近だが、その核となる魔導炉とコアは全て同時期に完成している。つまり、他の魔導機アサルトフレーム達と知らない仲でも無い筈なのだ。

問題はリタがそれを話してくれるかどうかだが、見た所姫様とも仲は悪くないようだ

し、他も特別仲の悪い相手も居ないだろう。きつと快く話してくれる。

「今日は家まで送る。……来て、陽彩」

「良いのか？ ありがとう、甘えさせてもらおうよ」

ふと足を止めると、ゼロはこちらに向き直って手を伸ばす。

それに対して俺も手を伸ばし、彼女の小さな手を取る。

「……邪魔が居る」

「え？」

「いいえ。帰る前に少し付き合って、陽彩」

「ああ、解った。何をすれば良い？」

「基本はトリスリッターと同じ。右はキャンソんで左はパルスになっている」

まるで何の話か解らないが、トリスリッターと同じというのはどういう事だろう。

そう思う間に、ゼロは空間を開く。俺だけが知っている、彼女の力。世界のどこか二地点を結ぶ、転移能力。

「飛ぶ。備えて」

「いつでも」

門から光が溢れ、視界が白く塗り潰されていく。

その中で、俺は黒い影を見た。

どこかトリスリッターに似たフォルムの、灰色の魔導機鎧^{アサルトフレーム}。
気付けばゼロはそこには居らず、俺は空へと足を踏み出していた。

第二話

光で視界がホワイトアウトしたのは数秒、俺はすぐにはつきりと周囲の状況を確認できた。

目の前には夕暮れの空、そして足が浮いている感覚。クレイドルの地面よりも慣れた空だ。

「……………」

『クレイドル07の直下。上を見れば良い』

どこからか聞こえてきたゼロの声に従い、上に視線を向けるようにイメージする。すると俺の意思を汲み取った体が、首を上に向けた。

そこには黒い巨大な物体があった。その内部には赤黒い球体が脈動しており、今も稼働していることが見て取れる。

あれは魔導機アサルトフレームにも搭載されているが、それとは格が違う。普通に生きていくのなら見る機会など無い筈の、超弩級の縮退魔導炉。

「え———あれがクレイドルの魔導炉か………凄いな、今まで資料でしか見た事なかったけど生で見る機会が巡ってくるとは思ってなかった」

あの魔導炉が見えるという事は、ここは間違いなくクレイドル直下の空中なのだろう。そして、クレイドルより高度が低い位置に存在するのは、管理者達の議会くらいだ。その上に立っている訳でもなし、となれば、やはり俺は今この瞬間も何の足場も無く空を飛んでいる訳だが。

そうなると当然、俺は魔導機鎧アサルトフレームに搭乗している筈だ。しかし、これは俺が適性を持つトリスリッターではない。普通なら適性の無い機体には、魔導炉との接続が不完全になつてしまつて上手く稼働できないのだが……。

「……この機体、トリスリッターに似てる……?」

『元を辿ればモデルでもある。似ているのは当然』

「リタのモデル? って言うと——」

『来る。陽彩、準備して』

ゼロは俺の言葉を遮つて注意を促す。そういえば、ゼロはどこに居るんだろう。

そんな事をふと考えていると、ゼロは唐突に忌々しげに呟いた。表情は見えないが、きつと眉を顰めているんだろう。

『……せつかくクレイドルの下に隠しておいたのに、何故露見した』

「隠して……? いや、待て。あれは……」

視界の端に見慣れた光が映り込んだ。魔導機鎧アサルトフレームの推進機、その炎だ。

特徴的な背面のダブルウィングブースター、そして胸部の二つのコア。あんな機体は一つしか知らない。

「——アルビレオか！クレイドル04の守護者がなんだって07に？」

『この機体を確保する為に。クレイドルは今、この機体を巡って二つの勢力に別れてい
る』

「人間っていつも仲間割れしてるのな！」

超高速で突っ込んできたアルビレオを回避、両腕に武装を展開させる。

右はキャノン、左はパルス。たぶんだけど、そこまで感覚は変わらない筈だ。

『全くその通り。愚かしくも浅ましい種族』

「同感だよ、それでどうすれば良い？」

『撃墜まではしなくて良い。追い払ってほしい。可能？』

「俺を誰だと思ってる」

長さの違う二種類の銃を構え、全身に戦闘意識を張り巡らせていく。

「これでもトリスリッターの契約者だ」
テストメンタ

右手の引き金に指を掛けて、照準を合わせる。射撃管制装置Fの規格は同じ、つまり十字のレティクルに合わせれば当たる。

狙いが付くまでの間に左手のパルスライフルを撃ち、牽制の役目を果たさせておく。

さて、相手は魔導機^{アサルトフレーム}四号機であり、クレイドル04を守護する指令を下されている筈のアルビレオ。本物かどうかは解らないが、見た感じ性能は偽物ではない。

特徴らしい特徴と言えば、動力源である縮退魔導炉が二つ搭載されている事か。それ以前の機体と比べ、出力の差は明白である。

因みにトリスリッターの魔導炉も二つである。この機構はジエミニシステムと名付けられており、並列起動させる事で本来の二倍以上の出力を得ている。このオリジナルとなったのがアルビレオだ。

『なら、要請する。報酬は……』

「特に要らない。サービス残業って事にしとくよ」

レティクルに上手く合わせられるようになった所で、キャノンを試し撃ち。ラディアントマグナムと使い勝手は似ている。

弾速はこちらがやや上だろうか。大凡の性能は同じと言って良い。

『でも』

「良いから。この機体、大切な物なんだろう？」

『……』

「それに、ゼロにはいつも世話になってる。恩返しって事で、ここは一つ」

『……解った』

まだ納得は行っていないようだが、とりあえず反論してくるのは辞めたらしい。

ならこれで良い。俺がゼロに恩を返せるのは、こんな事ばかりだから。

「この機体に名前はあるのか？」

『……ある。だけど機密』

「なら良いや」

もし名前があるなら呼んでやりたいが、言えないなら仕方無い。その場凌ぎの組み合わせだが、それでも命と背中を預ける相棒なんだ。どの道信頼は置いておかないと。

「さて、お相手さんは……つと」

アルビレオのスペックを大まかに思い出す。確かに凄まじい機体出力は持つものの、それに対応できる武装は数少なかつた筈だ。主兵装はシンプルな三点式レーザーバズーカと、超高出力のレーザーブレード。特に左腕のブレードは受けてはいけない。この機体の防御力は解らないが、あれはクレイドルの防護バリアを容易く斬り裂いてしまう程の威力を持っている。

ブレード、と言えばトリスリッターにも搭載されていたが……この機体に予備兵装というものは無いらしい。レーザーキャノンとパルスライフルだけでアルビレオを撃退する必要がある。

「向こうも様子見か？なら便乗してもう少し休ませてもらうか……？」

一応だが、構えは解かない。戦闘態勢を崩したらまたすぐに突進してくるだろうか。

さて、どうする。普通に撃つても当たらず、かと言って的確に当てられる距離は向こうの確殺圏内だ。アルビレオの運動性を前に接近戦を挑むのは自殺行為に近い。

『……陽彩、イメージして』

「え？イメージって……」

攻めあぐねていた俺に、不意にゼロが言葉を投げ掛けてくる。

オウム返しに尋ねると、彼女はそのまま続けた。

『君が一番頼りにしている存在を』

「俺が……頼りに……」

……俺が一番頼っている存在は——

——アサルトフレーム魔導機鎧七号機、俺だけの相棒。

トリスリッターに他ならない。

「リタ……」

その名前を呼んで、空を仰ぐ。

夕日に赤く染まる天空に、一つの閃光が走った。

光の行く先を見守るような愚は犯さず、俺はただ前進する。

あれが何かは解っている。俺の相棒の性質は、俺が一番よく知っている。

「ゼロ、この機体にフォトンフィールドは展開されてるか？」

『標準ではトリスリッター基準で十二枚。場合によっては出力を傾ける』

「いや、良いよ。それなら耐えられる」

フォトンフィールドとは、魔導炉のエネルギーを物質化して、その粒子を電磁フィールドを用いてバリアのように展開した物だ。魔導光線、つまりは魔導機^{アサルトフォーム}の兵装の大半に用いられている物を偏光させる事ができ、物理的な衝撃もある程度は無効化できる。

トリスリッターのフォトンフィールド出力は現時点で最高峰。それが十二枚もあればクレイドルの防護バリアに匹敵する防御力を発揮する。

そして、トリスリッターのラディアンマグナムはクレイドルの防護バリアを破れない。

「悪いが退いてもらおうよ、アルビレオ！」

パルスライフルで牽制しつつ、意識をこちらに引き寄せる。向こうはまだ上空の閃光に気付いてはいない。

あれが着弾するのは数秒後。そして、それまでそこに居させれば良い。

接近しつつ右手の人差し指へ力を込める。チャージされた固形エネルギーが、光の奔流として空間へ駆け出していく。

あのキャノンの射程距離ならクレイドルに誤射する事は心配しなくて良い。そして、アルビレオをここに縫い止めておく事だつてできる。

『レーザーバズーカ、充填確認。三点式が二発』

「撃たせる前に決まるさ」

左右に銃身を振りつつレーザーキャノンを撃つ。最低限の回避行動を取らせることで、着弾地点に誘導させる。充填された分を撃ち切れば、今度はパルスライフルを直撃させる。

アルビレオは攻撃特化の機体特性を持っている為、フォトンフィールドには重きを置いていない。パルスライフルの攻撃でも魔導炉に当たれば致命打となるのだ。

そして狙い通り、アルビレオは防御姿勢を見せた。何せ回避が間に合う距離ではない。そして、その隙は次の瞬間に決定的な物となる。

「……悪いな。これは最初から、一対一の戦いなんかじゃなかったんだ」

高度一万メートルのクレイドル、その直下のここから遙か上空。

具体的な高度にして五十万メートル、地球大気圏内での限界高度から放たれた閃光。俺がよく見知っている、上級種の怪異すらも一撃で撃破する最新の光線系兵装。

対怪異充填式臨界魔導光線射出兵器、ラディアントマグナム。トリスリッターの主兵装だ。

「これで退いてくれると助かるのだが」

過剰火力とすら言えるその光線は、アルビレオの左肩に直撃した。

状態としては半壊、これで退いてくれないと困るんだけど。

『……これは偵察に近い。この機体が万全である事を悟ったなら、諦める筈』

「らしいな。流石はアルビレオ、本気の場合はこっちが捕捉できないレベルか」

両翼を広げた機体は、FCSの表記がぼやけてしまう程の高速度で戦域から離脱していく。これでこの戦闘は終わりだと思いたいけど。

「ゼロ、これで良かったか？」

『これ以上は望めない程の戦果。……陽彩は最高の契約者』テスカメメンタ

「そう言ってもらえるなら嬉しいよ。しかし無傷でアルビレオを撃退、か。少し前の俺には信じられないな」

俺の契約者としての能力は実際低い。トリスリッターとの適合率はそこまで高くないし、かと言ってそれを補える技量も無い。単に勘が良いだけだ。それと幸運も味方している。

どうせなら調べてみよう。ステータスから適合率を測れる筈だ。

この機体との適合率も……ああ、あまり高いとは言えないな。端数切り上げでも67%か。

「……………ん？」

ふと、流れて機体のステータスチェックをしていた時に、何かが引っ掛かった。その直前から、もう一度一つずつ見直していく。

「……………は？」

そして、その違和感は形になった。

この機体の設計。中核と呼べる心臓部。

既存のどれとも規格の違う、縮退魔導炉が入っている。

それも、三つだ。

『陽彩？』

「ゼロ……………この機体は、何なんだ……………？」

しかもおぞましい事に、全てが直列に繋がっているしている。

アルビレオの魔導炉は単に二つ搭載しているだけ。トリスリッターのジエミニシステムは二つを繋げて稼働させている。これが現行の最新鋭技術の筈だ。

しかし、この機体は更に上を行く。三つの魔導炉を連結させるという荒業、そしてそれを当然のように制御している。

数年前に、三つ以上の魔導炉を繋げる実験がクレイドル06で行われた。その際の結果は失敗、東南地区の三割が崩壊し、大量の怪異が06に侵入した。

実はあの実験があつたからこそ俺は契約者となつたのだが、まあそれは良い。

言いたい事はただ一点。この機体は、現行最新のトーリスリッターすら凌駕する機能を隠している、という事だ。

『……それも、機密。私は陽彩の事を信じているけれど、その機体を世に出すわけにはいかない』

「そんなに大事な物なのか」

『……うん。絶対に、誰の手にも渡つてはいけない』

これ程までの技術革新を齎すもたらような機体ならば、クレイドルで共有した方が人の為になると思うのだけだ。

でも、ゼロがそう言うならきつと利点だけじゃないんだろう。どこかに落とし穴があるのは、人が作った物の定めだ。

「それなら良いか。深くは——」

『熾天使』

「——え？」

『いいえ。陽彩、ここから直接家まで送る』

「あ、ああ。解った」

今、一体ゼロは何を言ったのか……熾天使、というと……。

……セラフ？

いや、まさか。

『……………陽彩』

「ん？何かな、ゼロ」

空間転移に備えて目を閉じると、彼女は思い出したように俺の名前を呼んだ。

何の用事かと聞き返すも、暫く無言が続いた。

そのどちらからとも言えない沈黙を不意に破ると、思い切ったようにゼロは口を開いた。

『いつもありがとう』

「へ？」

平時の抑揚が薄い声ではなく、人間味のあるゼロらしくない声。

それに驚く間もなく、俺は白い光に包まれたのだった。



アルビレオとの突発的な戦闘から数日、俺は今日も契約者としての使命を果たしている。

現在の座標はクレイドル07とクレイドル06の間、輸送部隊の護衛中だ。

そもそも契約者テストメンタの仕事なんてこんな地味な事ばかり。怪異との戦いのように派手な物は、一号機から三号機が大半を片付けている。

初期の三機はそれこそ別格の戦闘能力を誇る。一号機のラプラスなんてその最たる例だ。

『トリスリッター、こちらチームリーダーだ、応答してくれ』

「ん……？こちらトリスリッター、何かありましたか？」

唐突に静寂を切り裂いた声に、俺は通信を立ち上げた。

何だろう、所属不明の機体でも見つけたのだろうか。

『ああいや、お客さんが心配性だね。少し先の方を見てきてくれないか？』

「ああ、了解です。そっちはそのままの速度でお願いしますね」

申し訳無さが混じった声音に、少し笑いつつ答える。別にそれくらいなら問題無いと言うのに。

よくある事だ。輸送部隊に誰かが乗っている場合などには特に。何も無い大空、いつでもどこから怪異が来るか解らないというのは精神的に来る物がある。

契約者や適性持ちであれば何となく解るものだけど、同乗しているのは一般人なんだろうな。

「リタ、聞いたな？」

『はいっ。装甲、展開します』

一定速度で飛ぶ為に巡航モードにしていた機体を変形、少し翼に力を込める。視界が広がるような感覚と同時、一気に輸送部隊の航空機を追い抜いていく。

「レーダー広げて。前方、広範囲に」

『……と言つても、雲一つありませんよ。今日は気持ちの良い晴れみたいです』

「だな。雲で思い出したけど、明後日は雨かもしれないってさ」

『雨、ですか？傘の準備をしなければなりませんね』

この高度一万メートルを誇るクレイドルにも、雨が降る事はある。

因みに俺の先祖が暮らしていた、地上の極東と呼ばれる地域では、毎年一定の時期に大量の雨が降っていたらしい。迷惑な事だが、よくそんな地域で生活できたものだ。

とは言え雨が降らないと水が手に入らない。一応は核融合による物質変換で賄えるらしいが、なんか違う物を消費してそうに思う。

因みに普段は雨か雲そのものを取り込んで水にしているとか。実際の所はゼロに聞けば解るはず。

『……あ、主様。北西、クレイドル05の方向から魔導機鎧の反応です』

「距離は？」

『およそ二千、軌道は交差しません』

「桜花おうかの奴かな。放っておこう」

『はい、了解しました』

でも一応は上に報告しておこう。オペレーターの仕事も減るだろうし。

「オペレーター、聞こえる？北西二千キロ、たぶんアーセナルだと思うけど、魔導機アサルトフレーム鎧が居る。記録しといて」

『……私達の仕事を奪うのは程々にしてください、トリスリッター。こちらで記録しておきます、貴機はそのまま護衛任務を続行してください』

「了解」

なんか怒られたけど俺は悪い事してない。とりあえず所定の位置に戻ろうか。

「輸送部隊、こちらトリスリッター。応答してください」

『こちらチームリーダーだ。何か発見したか？』

「いいえ、何も。そのまま安心して飛行を続けてください。少なくともこのルートの中には何も居ません」

『そいつは助かる。ありがとうな』

ま、それが仕事だから。安心して頼ってほしい。

さて、そうなる暇になる。いや、任務で暇とか言っちゃいけないだろうけど、退

屈な物は退屈だ。

せめて協同なら……とは思うけど、輸送部隊の護衛に魔導機鎧アサルトフレームを複数投入するのは過剰戦力か。なら仕方無い。

『退屈なのでしたらわたしが話し相手でも務めましょうか。提供できる話題も少ないのですが……』

俺の様子に気が付いたリタが、気を利かせて声を掛けてくれた。

折角なので、その厚意に甘える事にする。

「そうだな……あ、そうだ。リタ、今日の昼は？」

『特に決まっていませんが、何か食べたい物はありますか？』

これまでのリタの作ってきた物を思い返してみる。

そこから、また食べてみたいと思うのは……。

……全部。

いや、本当に全部美味しかったから仕方無い。今家にある物でできそうな物は……。『それならロールキャベツが良いな。頼める？』

『はい、お任せください。楽しみにしててくださいね、主様』

リタの料理は基本的に美味しい。今まで俺の口に合わないという事が無かった。

なので、実を言うと献立は何でも良い。何が出てもたぶん食べる。けど、作る側とし

ては何でも良いというのは最低の意見である。それが一番困る。

という訳で、無難な物を選別した次第だ。

「それはそうと、今何時くらい？ 任務が始まってからだいぶ経ったと思うけど」

ふと気になった事を尋ねる。現在時刻によつては昼御飯の時間がずれ込むかもしれない。

『ええと……十時過ぎですね。この調子で進むなら十一時半には終わりそうです』

それなら大丈夫そうだ。多少のアクシデントがあつても、十二時には間に合う。

「昼までには間に合うな。よし、久しぶりに桜花とアリサも誘つてご飯にするか」

『良いですね。わたしも姉さんと少し話したい事がありますし、賛成です』

因みに俺やアリサが姫様と呼ぶグレイエンプレスにはトリスリッターと同じく統制人格があるが、それ以前の機体には無い。そもそも、統制が必要な機能がある訳でもないし。

例えばアーセナルはその名の通り武器庫が如く大量の武器を所有しているが、そのインターフェースは至つて単純な物だ。契約者の桜花デスタメンタが言うには「旧世代のゲーム機みたい」だとか。寧ろ何故に旧世代のゲーム機の感触を知っているのか問い詰めたいが、まあ置いておく。

「つと、相対速度落ちてるな。合わせ——」

『トリスリッター！奇襲です、戦闘形態へ移行してください！』

「——え？」

『……っ！主様、フォトンフィールドを展開します！』

何かを感じた時にはもう遅く、俺の視界には謎の光が迫っていた。体を輸送航空機の前に滑り込ませて、その光を受け止める。

辛うじてフォトンフィールドの展開が間に合い、俺とトリスリッターへのダメージは抑えた。実質無傷だ。

「どこから！」

『南西三千キロ！怪異です！』

「人が平和を謳歌してる時に限って……！」

『装甲開きます！加速に備えて、主様！』

念の為に持っていたラディアントマグナムで応戦し、フォトンライフルを実体化させる。

牽制弾をバラ撒きつつ、輸送部隊に通信を入れる。

「輸送部隊、聞こえますか！南西三千キロから怪異による奇襲を確認しました！できる限りの速度で離脱してください！」

『なっ、何だど!?この輸送部隊は安全だと言っていただろう！それが何故こんな——』

「がっ!？」

『馬鹿野郎、通信に割り込むんじゃねえよド素人! 悪いなトリスリッター、積んでる荷物もあつてあまり速度は出せねえんだ!』

「了解、俺が全力で守ります!……リタ、行くよ!」

通信を切断、向こうは向こうで大変らしい。

漸くレーダーに映り込んできた敵影は八。上級種が二体で下級種が六だ。ここは安全を取つて最速で片付けよう。

最新の魔導機アサルトフレームの力、見せてやろうじゃないか。

『ラディアントマグナム、撃てます』

「——ッ!」

異様に重い引き金を精一杯に引き絞り、高出力の光線を銃口から弾き出す。

何もかもを喰らい尽くす勢いを保ったままの光は、そのまま上級種を一体消し飛ばした。

『撃破確認、残り一と六です』

「供給をマグナムの方に優先して、リロードは一秒で頼む」

『了解です』

エネルギーを偏らせる。その分フォトンライフルのリロードは遅れるが、元々かなり

早いから気にしない。

リロード前のライフルで存分に弾幕を張ってから、上級種に向けて右の引き金を引く。

『二体目の撃破確認、残り下級種が六です』

「纏めてやろう。マグナムの射撃設定を変更」

『照射モード、起動します』

左手からフォトンライフルを手放すと、光の粒子となつて背中に格納される。

それで空いた手を使ってラディアントマグナムをしつかりと持ち、落ち着いて狙いを付ける。

幾分か軽くなった引き金を引くと、普段よりも幾分か細い光線が撃ち出された。

それを薙ぎ払うように横へ水平移動させていき、ゆつくりと下級種を焼き尽くしていく。殲滅まで、然程時間は掛からなかった。

「……オペレーター、クレイドル02方面の索敵を。もしかしたら、増援がくるかもしれない」

『了解』

一応の確認をしておく。迷わずそうするくらいには、何だか嫌な予感がした。

手短な返事の後、少し切羽詰まったような声が聞こえた。

『そちらの予想通りです。怪異反応多数、トリスリッター単機では厳しいかと』

「……いや、単機じゃないさ」

『……?ですが、周囲に魔導機鎧アサルトフレームの反応はありません』

「これからの話だよ。一回通信を切る。観測は続けて」

『トリスリッター?待って、話を——』

悪いけど切斷。ここから彼女に繋げるには、少し手間が要るのだ。

「リタ、何か来たら教えてくれ」

『解ってます。監視を続けますね』

頼れる相棒も居る事だし、俺は安心してこちらの作業に専念できる。

さて、問題はクレイドル06の管理者が人道的な連中かどうか。せめて、受けた恩を返す程度の働きは期待しておきたいけど。

『……陽彩、なに?』

「突然悪いな、ゼロ。時間大丈夫か?」

『問題無い。……君の為ならいつだって』

「なんて?」

『何も。それで、何を?』

何か言っていたような気がしたが、空耳だろうか。ゼロはたまに小声で何かを呟くの

だが、それを聞き逃すと教えてくれたりはしない。毎度何を言っているのだろうか。

「えっと、クレイドル06に繋いでほしいんだ。できればグレイエンプレスに直接」

『急用?』

「ああ。一番近いのがあそこなんだ。駄目なら05を」

『待つて。……グレイエンプレス、中継する』

早いな。流石はゼロだ。

さて、アリスは恐らく俺に協力するだろうが、しかしそれだけでは足りない。問題は姫様の方である。

今、向こうが暇してるのは解っている。その上で、きっと姫様は俺に力を貸すのを渋る。彼女が正当に納得できる、或いは正しい理由が無いと協力は得られない。

『……こんな時間に何です、ヒイロ』

「こんにちは姫様。要件は一つだ。貴女の力を貸してほしい」

回りくどい事をしてても彼女の機嫌を損ねるだけなので、素直に単刀直入に行く。

さて、俺に彼女を説き伏せられるかな。

『ほう?理由を聞きましょう』

「現状は説明するまでも無いと思うけど、俺は今輸送部隊の護衛に付いてる。それが、一人じゃ対応できないくらいに怪異に襲われそうなんだ」

現状を簡潔に説明すれば、姫様はすぐに返事を返してくる。まだ否定的だ。

『トリスリッターの力を過小評価するのですか?』

「いいや、高めに見積もつても輸送部隊を守り切れるとは思えない。俺一人ならどうにでもできるけど、誰かを守るのは案外難しい物だから」

そもそも俺は誰かを守るのが苦手だ。クレイドルなんて大き過ぎる物なら解り易くて良いが、航空機なぞ小さい物は纏めて撃ち抜きそうで怖い。しかもかなり足が遅いのだ。回避行動が取れないなんて、できるなら戦闘空域に入れたくない。

「誰かを守る戦いは貴女の方が得意な筈だ。民草を守るのはお姫様の役目なんではない?」

『確かに。それは認めましょう。ですがそれは騎士の領分でもあるのではなくて?』

「うぐ……それは全くその通りなんだけど……」

やっぱり俺は交渉が下手らしい。でも今はそれを言い訳にしていられる場合でもない。

『守るべき者も守れずして、騎士の名は名乗れないでしょう?』

「確かにその通りだ。俺の力不足は認める。だけど姫様、頼む」

俺は力不足で、それは否めない。本当なら姫様に騎士なんて呼んでもらう資格も無い事は自覚している。

でも、今回ばかりは俺だけの問題じゃないんだ。

守るべき者、姫様がそう言った人達が居る。俺一人の名誉と引き換えなら、上等な部類だ。

「後でなら何だって埋め合わせもする。俺の為じゃなくて、あの人達の為に。……姫様の力を、貸してほしい」

『……………はあ』

返されたのは溜め息一つ。

……駄目、だったか。

『やはりヒイロは馬鹿ですね』

「えっ？」

『馬鹿だと言っているのですよ、鳥頭。わたしに二度言わせなければいけない程に脳が貧弱なのですか？』

「辛辣……………」

最近の姫様は切れ味どんどん増してる。この調子でいくといつか言葉だけで斬られそうだな。

『間抜けにも程があります。お前が言う言葉は一つで良いのですよ』

「……………？」

『非力で無力な騎士にお情けを、女王様』……復唱なさい』

何と言うか……この……。

姫様、声震えてるんだけど。恥ずかしいのなら辞めておけば良いのに。

「……非力で無力な騎士にお情けを、姫様」

でも言う。しかし意地でも女王様とは呼ばない。そんな事したら後で殺される。

……でも、そうか。そうだな。

やっぱり姫様は優しいな。

『ふふ。合格なのですよ、ヒイロ。……アリサ、ただ働きの時間です』

『うん、姫様。陽彩、今行くからね！』

これで憂いは無くなった。それに、怪異が来るまでまだ時間はある。

まずは落ち着こう。大丈夫、姫様とアリサが来てくれるなら負ける事なんてありえない。

『……陽彩』

「ゼロ？」

深呼吸を繰り返していると、不意に声が聞こえた。

リタはまだ何も言ってこない。雑談の時間くらいならあるか。

『……いいえ。力になれなくて、ごめんなさい』

「何言ってるのさ。ゼロが居なかったらアリサと姫様を呼べなかった。ここで積んでたよ」

トリスリッターの通信は母港であるクレイドル07にしか届かないし。それを中継してくれるゼロが居なかったら、助けを呼ぶ事もできなかった。

『……でも、直接の手助けは何も』

「それで良いんだよ」

直接の手助けは、と言うけど。そんな事も無いと思う。

ゼロの声は、聞いているだけでこんなにも心が安らいでいくんだから。

「今更な話だけどさ。一人くらい守られてくれる人が居ないと、騎士にも格好が付かないだろ？だから、それで良い」

『……解った。気を付けて、陽彩』

……これは勝手な予想だが。

ゼロはもしかしたら、俺やアリサを遥かに上回る戦闘能力を有しているのかもしれない。たまに見せる表情は、間違いなく戦う人間のそれだった。

そうだとすると、何故彼女が直接戦闘に出ないのか。

隠されていたあの機体を、ゼロは自分で動かさしはしなかった。俺に契約者としての役

目を果たさせる事でアルビレオを撃退させた。

つまり彼女は魔導機アサルトフレームに適性が無い、或いは何らかの理由で魔導機を稼働させる事ができない、と言う事。更に彼女はあの場に居なかつた。にも関わらず、俺と通信をしていた。ゼロの部屋は全ての通信が遮断される仕様になつているのに、だ。

そしてセラフ、熾天使という名前。零号機と呼ばれたそれを語る時の彼女の表情。

俺の予想と妄想が現実が現実準拠しているのならば。

それ即ち、彼女は――

『主様！怪異が来ます、長射程型は少なくとも十四！』

思考を中断、脳内の妄言を途絶させて意識を現実に戻す。

ゼロが何者なのか、それは確かに気になるが、かと言ってどうしても知りたいという訳ではない。究極論、彼女が人類の大敵だとか言われても俺は気にしない。

今はそんな事よりも、目の前の敵に集中するべきだ。

「団体様のご来店だな……あれくらいなら届くか」

視認できる限界近くの距離に、大量の怪異が見える。空の一角が怪異特有の作り物のような白で染められている。まるで雲のようだ。

レーダーを一部埋め尽くす程の量だが、これから俺には最強の援軍が来てくれる。多ければ多い程、姫様の活躍の場も増えるだろう。

さて、騎士らしくお膳立てはしないと。いや、露払いの方が正しいのか？

『……こちらでも確認しました。ヒイロ、合わせなさい』

「了解、姫様。火力だけなら任せて」

ラディアントマグナムを構え、フォトンライフルを実体化させる。どちらも手早くリロードを済ませておく。

そうして準備を終わらせると、視界に剣が滑り込んでくる。

『配置は済ませました。撃ちなさい、ヒイロ』

『照準はこっちで合わせるよ、陽彩。気にせず撃つて』

「ありがとう、二人共。……リタ」

『魔導炉のエネルギー、八割を腕部に供給します。移動速度が落ちます、気を付けてくださいね』

移動なんてする必要は無い。撃てば後は姫様とアリサが全て解決してくれる。

目の前には五つの剣。全て妙な方向に切っ先を向けている。

鏡のように磨かれて景色を反射する刀身に、大空とトリスリッターの姿が映っていた。

この剣は姫様の武器で、ソードサーヴァントと呼ばれている。自律行動が可能で、本来なら多数の敵を単騎で殲滅する為の兵装だ。だが刀身の材質により、光線系の攻撃を

増幅、反射できる。

つまり、そこにラディエアントマグナムを照射すれば、大量破壊兵器の完成という訳だ。『フォトンライフルの残弾はマガジン一つ分だけです。接近してくる敵には注意してください』

「解ってる。……行くぞ」

剣に照準を合わせ、かなり軽くなっている引き金を引いた。撃鉄は問題無く叩き起こされて、充填されたエネルギーは弾き出される。

照射された光の奔流が、引き寄せられるように剣に直撃する。

そして、空に幾重もの魔導光線が奔った。

第三話

大空を切り裂いて奔った、ラディアントマグナムの閃光。

姫様のソートサーヴァントの従者によつて多重に屈折すると、それは光の檻を作り出した。

触れた物を一切の容赦無く切り裂く、絶対的なライン。

剣による反射を経る毎に光は強さを増していく。そして、あの光は循環している。

もはや線ではなく面と化す程に膨大の熱量を纏い始めた光は、たかが怪異如きには破れはしない。

『そこで休んでいなさい。お前の分もわたし達が片付けましょう』

「でも姫様」

『あの檻を軽く閉じるだけで終わる話です。お前が気に病むような事は何もありません』

『よ』

「……姫様、今日はなんか優しいな」

いつも優しいのは確かだが、それでも表面的にはもつと冷たい筈だ。それなのに、今の姫様は全体的に優しい気がする。

一体どうしてかは解らないが、姫様が楽しそうで何よりだ。来る途中で何かを見つけ

たりしたのだろうか。

『……主様、姉さんはたぶん先程の会話で喜んでいるのかと』

「さっきの？……お願いした時、だよな？」

『はい。あの人は何だかんだ言つて主様の事が好きですから。頼つてもらえて嬉しいんでしよう』

「……へえ」

俄には信じ難い。あの姫様が、俺の事を好きだつて？

いいや、そんな筈が無い。だつてそれなら、姫様だつて俺に快く協力してくれる筈だ。あえて刺々しい態度を取つて、人から嫌われるような事を言う必要は無いだろう。

だから姫様はあまり俺の事を好きじゃないんだろうと思つていたんだけど。

『世の中には素直になれない人だつて居るんですよ、主様。ゼロなら解るでしょう、西暦にはそれを一言で表した表現があります』

「そうなの？」

『西暦の人はあんな人の事を「ツンデレ」と呼びます。もし気が向いたら呼んであげてください』

リタは物知りだな。西暦の言い回しなんて、俺は殆ど知らない。

どんな意味かは解らないけど、後で呼んでみよう。

『ヒイロ、余所見をしている暇があるなら前を見なさい』

「はいはい、了解ですよつと……」

怒られてしまったので別方向に向けていた意識を戻す。

銃のグリップを握る指に力を入れ直し、剣に光を当て続ける事に集中する。

剣に当たり増幅反射された光は、様々な角度に曲がりつつ怪異を的確に貫いている。

あの命中率の高さは姫様の器用さ故だろう。

それを回避して近付いてくる敵には、左手のフォトンライフルを向ける。放たれた弾丸を姫様が拾い、数倍の出力まで高めて死角から放つ。光の檻を免れた怪異も、それで沈んでいった。

『怪異、全体の四割の撃破を確認………凄い、圧倒的です』

「だから単機じゃないって言ったろ。オペレーター、向こうにもレーダーを共有して。

06の物よりも07の方が良い機材使ってるでしょ」

『はい、仰る通りです。……ですがトリスリッター、後で話があります』

「悪いけど急用が入ってる」

『任務以外は暇だと抜かしていたでしょうが……!』

さて何の事やら。俺はこのあと姫様にツンデレって言ってあげなくちゃいけないから。

「リタ、ラディアントマグナムのエネルギー容量は足りる？」

『はい、主様。フォトンライフルのリロードも十分間に合います』

マグナムのエネルギー源は魔導炉と直結している為、面倒なりロード作業は存在しない。言ってしまうえばフォトンライフルもそうなのだが、あちらは一定まで充填されるとチャージを止めてしまうのだ。

因みにラディアントマグナムにはチャージシヨットなる機能が搭載されており、エネルギーを温存しておく程に次の一射の威力が上がる。エネルギーチャージの上限が無いのはその為である。

あんなの使った事は無いが。

「なら消化試合だな。でも気は抜くなよ、リタ」

『もちろんですよ。姉さんが頑張ってるのにわたしが手を抜ける訳がないでしょう』

そういえば、ふと思ったが。

リタはいつも俺にとつて姉のような存在なのだが、彼女は魔導機鎧アサルトフレームとして考えると未妹である。特に直接データがフィードバックされているグレイエンプレス、要は姫様に對しては姉さんと呼んでいる。

だが、姫様の方はどこか妹のように思える性格をしているのだ。アリスと並んでいると仲の良い姉妹にしか見えない。まあ、人の形を見せてくれるのは稀なんだが。

『ヒイロ、出力を上げなさい。片付けます』

「ん、解った。制御は任せるよ、姫様」

さて、ずっと機体のエネルギーを右腕に集中させていた訳だが。その全てがラディアントマグナムから撃ち出されていた訳ではない。

供給されていたエネルギーの余剰分は、少しずつしかし着実に溜め込まれていたのだ。

それを、ここで一気に解き放つ。本来なら上級種の怪異ですら抵抗を許さずに一瞬で消し飛ばすような威力のラディアントマグナム。それをソードサーヴァントにより、数十倍まで出力を補強している。

クレイドルの防護バリアですら容易く穿けるであろう極光が、前方空域を包み込んだ。

『流石はトリスリッター、わたしの妹ですね。ヒイロ、感謝なさい。その子と共に在れる事を』

「……ああ、もちろん。俺には勿体無いくらいの、最高の相棒だよ」

トリスリッターは俺には過ぎた宝物だ。正直な話、俺に使いこなせているかと聞かれたらそれを肯定する事はできない。リタはきつとそうでは無いのだろうけど。

「輸送部隊、聞こえますか？無事に殲滅を終了しました。当初の予定通りに運行を再開

してください」

『ああ、了解だ。感謝する、トリスリッター。それと、グレイエンプレスにも』

『……感謝は無用です。私はただ、軽い散歩をしていただけですから』

アリスの声も、ゼロに負けず劣らず抑揚が薄い。ともすれば機械が喋っているのかとでも勘違いしてしまいそうなその声に、輸送部隊の隊長は誠実に応じた。

『それでも、礼くらは言わせてくれ。そうでなきやこつちの面子が潰れちまう』

『……難儀ですね。では、礼の言葉は受け取っておきます』

別にお礼くらいは素直に受け取っておけば良いのに。どういたしましての一言で済む話だろうし。

アリスの奴はいくら人見知りだからって、それくらいのコミュニケーションも取ろうとしないのはどうかと思う。後々苦勞する羽目になるのは彼女自身だと思ふのだが。

『そうしてくれると助かる。トリスリッター、この先も頼むぞ』

『解つてますよ。カラドリウス、後は任せておいて』

『……ん。じゃあ、また後で』

一応は人前である為、隠し名の方を使う事にする。

アサルトフレーム
魔導機鎧のパイロットである契約者は、その生命の重要さから本名を隠す事を認めら

れている。

アリサの場合はカラドリウス、太古の時代において神鳥の称号を冠していた伝説の存在だ。

因みに俺の場合は特に無い。隠すような名前でもないし、そもそも基本的にトリスリッターと呼ばれる。

俺はどうやらクレイドル07において政治的にも重要視されている為、俺が他のクレイドルから手を出された場合はゼロが本気で潰しに掛かるとか言っていた気がする。

『……陽彩。気を付けてね』

「言われなくても。そっちこそ、帰り道は気を付けて」

『お前はともわたし達と居ると隙だらけでいけません。留意なさい、ヒーロ』

「姫様は厳しいなあ……」

相も変わらず言葉の切れ味が凄まじい。人の褒められる部分は褒めてくれるが、そうでない部分は徹底的に叩いてくる。

しかし特に何のフォローも無く身を翻したグレイエンプレスを見て、俺はふと思いついた。

言ってみたい事があるんだった。

「所で姫様、一つ良い？」

『何でしょう？手短にお願ひします』

「姫様みたいな人をツンデレって言うんだって」

『……………っ！』

幾つか予想していたのとは違う反応だ。何というか、凶星を突かれた時のアリサと似ている気がする。

となると、言葉の意味は合っていたのだろうか。それとも間違っていたか。リタがそんな事して人で遊ぶとは思えないけど。

『……………誰の入れ知恵ですか……………いえ、その答えは見え透いていますね。リタ、覚悟なさい』

『さあ、何の事でしょう。主様は博識ですから、わたしも知らないような言葉を知っているんですね』

……………ええ……………？

リタさんや、ちょっと薄情なのにも程がないでしょうか……………？

『誤魔化しても無駄です。……………いえ、ヒイロの手前、騒ぎ立てる事ありませんか。アリサ、帰りましょう』

『え、あ、うん。それじゃあ、今度こそまたね、陽彩』

「……………ああ、またな」

姫様はどうやらリタの方に狙いを定めているらしい。良かった、これなら単なる姉妹

喧嘩で済む。

心なしかいつもより速く戦域を離脱していく灰色の魔導機鎧アサルトフレームを見送りながら、俺は輸送部隊に相対速度を合わせた。

「ところでリタ、ツンデレってどんな意味の言葉？」

『素直になれなくて可愛い、という意味です』

「……お前さては良い性格してるな？」

『よくご存知で。さあ、行きましよう主様。置いて行かれてしまいます』
よく言う。

……まあ、そんなリタだから好きなんだけどさ。

『因みに主様、死ぬ時は一緒です』

「え」

男に二言は無い物だが。

前言は撤回しても良いかもしれない。



白銀の魔導機鎧アサルトフレームが、空を疾走る。

それが追い掛けているのは二つの機体。怪異とよく似た姿の、瓜二つの二機。その色は白だが、作り物の白だ。

既存のどの魔導機アサルトフレームとも違う姿、違う武装を持つ二機は、人類の切り札足り得る最強戦力から無様に逃げていた。

——世界を救う第一の剣。

人々にそう呼ばれた魔導機アサルトフレーム、英雄の忘れ形見。

最初の契約者が遺した機体。

白磁の翼は、クレイドル04の空を翔けていた。

『ラプラス、回避行動を。所属不明機、尚も抵抗を続けています』

『——、っ！』

予測や直感を超越した“何か”を以てラプラスの契約者テスタメンタ、アリアスⅡヴェイン・オリアルは虚空へ身を擲つ。

するとつい直前まで彼女の存在した座標に、三本の魔導光線が放たれた。

『嘗めないでよね、これでもわたしは人類の剣なんだから——！』

御童陽彩と出生を同じくする彼女は、故郷であるクレイドル06の防衛任務に就いていた。任務自体はグレイエンプレスとの共同なのだが、互いに反対側の防衛を行っていたので今は分断されている。

通信は恐らく届くが、クレイドルの防御を手薄にするのはまずいだろう。それに何より——

『恋敵の力なんて借りなくても、わたし一人で!』

——黒鐵アリスの力を借りてしまえば、それは自身の敗北を意味する。

これは単にアリアスヴェインの独り善がりだが、同時に正解でもある。

今この状況でクレイドルから防衛戦力を引き離すのは自殺行為に等しい。圧倒的な性能を誇る所屬不明機が三機も同時に奇襲を掛けてきている以上、この二機はこちらで抑え込んでおくべきだろう。

『行くよラプラス。わたしの全てを掛けて、守ってみせる——ツ!』

『Code Lhaplace——ON』

緋く染まりゆく視界に敵を見出して、アリアスヴェインは両の瞳を限界まで見開いた。

それに反比例して小さくなっていく虹彩が、真紅の世界に自分と敵だけを映し出した。

『Buster Blaze, Over Heat』

両肩に備え付けられた後ろ向き翼が閉じられ、前方へと向けられる。翼と高出力魔導光線射出装置を束ねるこのラディアントウィングなら、連続した直線機動から即座に

射撃体勢へ移る事が可能だ。

撃ち出された光の球体は十八。その全てが所属不明機の手前で弾け飛び、多分の熱量を孕んだ迎撃弾として機能する。

『Barn Out——Stratos』

前方の爆発には目もくれず、両の腰に差してある剣の柄を引き抜く。その剣に刀身はなく、しかしてそれはラプラスを人類の剣足らしめる最強の剣である。

両手に握り締めた特殊金属の柄から、指向性を持たされたエネルギー粒子が吹き出していく。

徐々に刀身を形成する光が切っ先へ辿り着く前に、アリアスヴェインは右腕を振り翳した。

『落ちなさいっ！』

振り払われた刃の残滓が空を舞い、青白い軌跡が機体の腹を滑り落ちていく。

両断された機体は、即座にラディアントウイングによる砲撃で爆散していく。砕け散って破片を撒き散らしながら、クレイドルから遙かな地上へと落ちていく。

『ОДИН……まずは一つ』

ラディアントウイングへエネルギーを充填させると、翼として開いたままそれを爆発させる。

本来の用途からは掛け離れているが、それは通常では手に入らない加速を齎す。その速度を以てして、ラプラスの右腕は致死の斬撃を放つ機構と化す。

『次は——、っ!?!』

戦闘勘と経験則、それに未知の予感が加わる事で、アリアスヴェインは未来余地に等しい危険察知を可能とした。

そちらを見るなんて愚は犯さずに、すぐさまその場から離脱する。

次の瞬間には、その空間は喰い尽くされていた。

『ラプラス、今の攻撃の分析—データベースの重力波攻撃を調べて—』

『Yes——Master』

連続する謎の攻撃の前に、防御はせずに回避を選択するアリアスヴェイン。その選択は間違ではない。

不可視のままに空間を喰らうその攻撃の正体は重力波による時空歪曲攻撃である。

現存する技術ではその再現は不可能であり、この時点でまず敵との戦力差は歴然である。

『あの娘が逃したとは思いたくない……新手、か』

『Emergency』

『っ——!』

続いて飛ばされた魔導光線。最初に取り逃した片割れは未だ健在である。

『あつちは α 、重力波の方は β 、観測お願い!』

『了解。 α 、来ます』

冷静な、言ってしまうえば冷酷な声音のオペレーターの言葉から、アリアスヴェインは再び回避行動を取る。

ラプラスの機体性能と武装出力は七機の魔導機鎧マジカトアーマーの中でも最高クラスだが、初期の機体だけあつて防御力は殆どない。フォトンフィールドが申し分程度に展開されている程度である。

人類を守護する最強の剣とは言うが、性能面はかなりピーキーなのだ。

『 β 、攻撃体勢へ移行。 α を優先して撃破してください』

『解ってる、よ——っ!』

魔導光線を紙一重で回避すると、両手のエネルギー粒子の剣を振るう。

α と簡易的に呼称した機体をあつさり斬り裂き、彼女はそのまま直上へと飛び上がる。

座標の高速移動で重力波による時空歪曲を回避、反転すると剣を後ろに引き絞るよう構えた。

『これで、落ちて——っ!』

振り払われる空間ごと、 β と呼ばれた機体は斬り裂かれた。

何処かから現れ、クレイドル04を目標して進んでいた三つの機体。実際にはもう一機居たが、そちらはグレイエンプレスに撃破されているだろう。

戦術的な視点で考えるのなら、恐らくはクレイドル06にもあと何機かの増援が向かっているだろう。戦力の逐次投入は悪手だと言うのは初歩の初歩、これだけの戦力を保有する相手がそれだけの事を理解できていないとは思えない。

『……それでもまだ、希望的観測なんだけどね』

『ラプラス？』

『いいや何でも。どこに向かえば良い？』

『クレイドル06へ戻ってください。戦局は急速に変わりつつありますから、指揮系統を統一する事を優先します』

——急速に変わり、ね。

その眩きは心の裡に留め、アリアスヴェインはラプラスへ命じる。

主の一番の理解者でありその手足である魔導機鎧は、意を完璧に汲んで翼を広げた。

余剰エネルギーを全て消費すると、爆発的な加速でクレイドル06へ向かった。



クレイドル06、及び04襲撃事件から数日。

俺はゼロの命令によりクレイドル07の中心部、魔導炉の防衛に当たっていた。今回は新兵器のテストも兼ねている部分もあるのだが。

所属不明機、現状では暫定的に《影》ファントムと呼ばれているが、あれがいつ襲撃を仕掛けてくるか解らない。その為の防衛戦力として俺達を選ばれている。

因みに構造上の問題で怪異が現れないクレイドル01や03の魔導機アサルトフレームは、他の場所へ増援として回されている。

『そういう訳で、宜しくねっ、陽彩！』

「ああ、宜しく……オーリアルさん」

クレイドル07には、01からラプラスが回されている。

前回の襲撃時に敵の情報がある程度割り出せたようで、クレイドル05と07は襲撃の可能性が高いらしい。敵をしつかりと鹵獲ろかくしてくれた姫様には感謝の言葉もない。

向こうは歴戦のアーセナルと桜花が居る為に03から戦力が向けられたが、こちらはテストメンタ契約者としての戦歴も浅い俺とまだ戦闘データの取れていないトリスリッター。なので、最強戦力足るラプラスが差し向けられたらしい。兵器のテストの為に万全の状態を保つ、という意味合いもあるが。

俺としては、ゼロの過保護か或いはラブプラスの契約者の意向が多分に含まれているように感じる。

『そんな他人行儀な呼び方しないですよ。気軽にオーリスって呼んで？』

「いや、でも、俺達が出会ってからまだ半年も経ってないでしょ……」

『半年、ね……。いいえ、時間なんて関係無いの。わたしがどれだけ君を愛してるか、それだけが問題なんだから』

俺個人としてはこの少女の事はかなり苦手だ。

初見でいきなり「君のお嫁さんになりたい！」とか言われたら誰だってそうなると思う。

理由、動機、意図、目的、何もかもが見えない恐怖。

端的に言えば、俺はこの人が少し怖い。

「あ、そう。一方通行の愛は虚しいと思うよ……?」

『何だって良いの。全てわたしの自己満足。君が受け入れてくれなかったとしても、きつとわたしは君を愛し続けてみせるから!』

「……そっか……」

実に返答に困る。その言葉に一切の欺瞞は無く、善意と本物の愛情から来ている事が解り切っているから尚更に。

俺が好きなのはまた別の娘なんだけど……。

『因みに陽彩、クレイドルでは重婚が許されてるよ。西暦と比べて自由になったね』
 「なに、俺の心でも読んでるの?」

『旦那さまの言いたい事を解ってあげるのはお嫁さんの第一歩だから』
 「へえ……」

——アリアスⅡヴエイン・オーリアル。

ラプラスとの適合率が歴代の契約者の中でも最高であり、本人の戦闘能力も非常に高い。

また、クレイドルを守るその意思の強靱さからも高い評価を得ており、事実上の人類の切り札となっている。

しかし、全てを平等に見過ぎる癖があり、付いた二つ名は“氷剣”。氷のように凍て付いた人類の剣は、誰にも飼い馴らせないと言われている。

『だから君の理想のお嫁さんを目指して今日も頑張るよ!』
 「文章の前後がまるで繋がってないんですけど……」

とまあ、ラプラスの契約者の情報を軽く思い返してみたのは良いが。

それとこの少女がまるで結び付かない。まさかゼロが偽の情報を掴まされたとは思えないし、たぶんこの人は他人に対しては凄く無関心なんだろう。

俺以外だとアリサなんかにはとても好意的に接していたように思える。だから彼女はきつと友人と他人への態度の違いが激しい人なんだ。そう思っておく事にする。

『そうそう陽彩、わたしは何番目でも良いからね。君がわたしにとつての一番である事が重要なんだから。君の視界のどこかにわたしを置いてくれれば、それで良いんだよ』

……彼女の愛は無垢で、きつと対価を求める類の感情ではないんだろう。

だからこそ怖い。どうして俺にそんな無条件な信頼を置けるのか。

俺も知らないような俺を知り尽くされているようで、とても恐ろしい。

『だからわたしの事は片隅程度に。都合の良い女、程度に思っておいてね』

「——」
聞く、べきなのだろう。

彼女が、何を知っているのかを。

でもそれは、怖い。彼女の事が怖い以上に。

それを聞けば、俺が俺じゃなくなってしまうようで。

『……いい加減昔みたいに接してくれても良いのにな』

「——」
「え？」

『いいえ、何でもない』

今、なんと？

昔みたいにな、だつて？

——俺の、何を知っている？

「……オーリアルさん」

『だからオーリスつて……ああもう良いや。なあに？』

「出身は06だつて言つてたよね」

『うん、そうだよ。君と同じ、クレイドル06生まれ』

「……ずっと気になつてた事がある」

俺はオーリアルさんに対して、自分の個人情報は何一つ明かしていない。

それを何故、彼女は、俺と出生が同じ事を知つて、いるのだろうか。

『何かな？何でも聞いてくれて良いよ』

「どうして俺の事を知つてるんだ？」

『そりゃまあ、同じ契約者テストメンタですから』

「そうじゃない」

別に俺の事なんて調べれば解る。ラプラスの契約者テストメンタであるなら、クレイドル07のデータベースにもアクセスできるだろう。

そしてすぐに理解できる筈だ。

——五年以上前の事が何一つ解らないという事が。

『…………?』

「トリスリッターの契約者テストメンタじゃない。御童陽彩の……俺の何を知っているんだ」

『…………つ!』

ゼロでさえ調べが付かなかった、記憶を失う前の俺。

“あの日”よりも前の俺の手掛かりを、彼女なら持っているのかもしれない。

『……………そっか。そう、だよね』

「オーリアルさん?」

『ああ、そうに決まっていた。だって君は、わたしの事を忘れているんだもの』

その物言いからして、やっぱりオーリアルさんは俺の事を知っているんだ。

それも、記憶が飛ぶ前の頃から。

『きつと、そうなんじゃないかって思ってたけど……………ああ、そっか……………。陽彩は、何も覚

えてないんだね』

「えつと、その……………ごめん、オーリアルさん」

言う事が見付からず、つい謝ってしまう。

きつとそれが一番間違えた答えだと言うのに。

『ううん、良いの。気にしないで、それは仕方の無い事だから』

「でも、俺はたぶん……………」

『良いってば。律儀で面倒なのは相変わらずなのね、陽彩は』

どこか安心したようなその声音に、今度こそ何も言えなかった。

俺が喉元まで出そうになっている言葉を吐き出すのに難儀していると、ふと彼女が呟いた。

『……知らない女から変な事を言われるのは、嫌だったでしょ……?』

「えっ……?」

それは本当に唐突で。

何があつても熱情が止まらないような人だと思つていたから、少しだけ驚いた。

でも、すぐに思い直した。

あれはきつと、彼女なりの強がりだったんだろう、と。

『好き勝手に自分の想いばかり言つて、君の事を考えてなかつた。……ごめんね、陽彩』

……どうしてかは、解らない。

解らないけれど、一つだけ。

心の底から、たつた一つの感情が湧き上がってきた。

——もう、その言葉は聞きたくない。

「……誰かを愛するのは、誰かの自由だと思うよ。それに、好きになつてもらえて感謝こ

「すすれ、それを嫌がる人なんて居ない」

『……あはは。やっぱり陽彩は陽彩なんだね。また惚れ直しちやいそうだよ』
「少っだけ声に元気が戻ってきた。」

「そうだ、これで良い。この人には、無駄なくらいの元気が似合うんだから。」

「迷惑にだなんて思わないからさ。もし良ければ、今まで通りにしてほしい。ついでに昔の俺の事も教えてくれると嬉しいかな」

『うん、解った。とは言っても、陽彩は今も昔も変わっていないと思うけどね』

「記憶が無くても、人間なんてそう変わる生き物じゃないという事だろうか。」

「それなら安心する。俺は俺らしく振る舞っていて問題ないらしい。」

『わたしみたいな人間と普通に接してくれる人は陽彩くらいしか居ないよ。君さえ良ければ、優しいままで居てね』

「優しい、か?……いや、そう言ってくれるなら、そう居られるようにするよ」

『うんうんっ、陽彩は変わらないね。……ああ、良かった』

「楽しそうに笑う彼女に、ふと一つ思い出した。」

「いや、記憶が戻ったという訳ではないのだが。」

「ねえ、オーリアルさん」

『何かな、陽彩』

「オーリスって呼んでも良い？」

『…………』

はっと、息を呑むような音。

今度はきつと、間違えていない筈だ。

『…………陽彩、何度だって言ってあげるよ』

その声は震えていた。

でもそれは、慟哭から来る震えではなく。

『わたしの事は好きに呼んで。良ければ、オーリスって呼んでくれると嬉しいな』

…………ああ、それは。

その、言葉は。

俺の心の、どこかに…………。

「…………オーリス」

『うん、君のオーリスはここに居るよ』

「…………ありがとう」

『どういたしまして、陽彩』

こっちの方がしつくり来る。他人行儀な呼び方よりも、こうしている方が正しいような、そんな気がする。

まあ、そう言われたからそう思うだけなのかもしれないが。

『あのさ、陽彩——』

『怪異反応、確認しました。無駄話の時間は終わりです、ラプラス』

『——タイミング悪いなあ！行こう、陽彩っ！』

奴らのタイミングの悪さはいつもの事だが。

オーリスに返事を返しつつ、無意識に呟く。

「ああ、了解。……無駄話、ね」

『何か文句でも？』

「いいや」

その呟きを拾ったラプラスのオペレーターが、こちらにも通信を向けてくる。

別にあんたと話したかった訳じゃないんだけど。

「文句は無いよ。単にあんたとは気が合わないだろうなって思っただけ」

『陽彩！“無駄話”なんかしてる時間は無いよ！』

「解ってる。……リタ」

装甲を開いて戦闘形態へ移行する。

この数年で手慣れた動作を手早く終わらせて、俺は両手に銃を実体化させる。

『……良い性格をしていますね』

「自覚はある」

なにせリタにもよく言われるもので。

自分の性格は程々に自覚している。

『アリアスヴェインをよろしくお願いします』

「え？」

そんな事を言ってくる相手だから、その言葉は予想外に過ぎる物だった。

反射的に声を上げると、彼女は嫌味な声で言った。

『くたばれクソ野郎、と言ったのです』

「あんたも中々に良い性格してんな……」

『自覚はあります』

本当に、この人とは気が合わないらしい。

オーリスも付き合う相手は考えておいた方が良くと思うんだけど。

『陽彩、援護お願い！』

「背中はこちらに任せといて。当たるなよ？」

『もちろん！』

乱雑に撃ったラディアントマグナムの火線から逃れると、オーリスは両手にエネルギーの剣を生み出した。

人類を守る最強の刃は、怪異上級種の硬い装甲を物ともせず斬り裂いていく。

怪異の数を大雑把に測る。リーダーの反応に自分の感覚を合わせて、それをより正確に洗練させていく。

狙撃型がおよそ二十。という事は、それに追従する下級種が六十。周囲を守る上級種が六十。上級種に取り巻く下級種は百八十。

雑な足し算だが、だいたい三百以上の怪異が居るという計算になる。

『気が遠くなりそうだね……。いつもの事、だけどさ……。っ！』

「まだ三百だろ。四桁いかなければ問題無い」

『経験がお有りです？』

「クレイドル06では二千近くの相手もしたからな」

『わぁお』

どっかの無能のせいでアリスが出払っていた際に、魔導炉連結実験が執り行われたせいだな。

あの場に試験稼働中のトリスリッターが居なかつたらクレイドル06が完全に崩壊していたと考ええると、つくづく管理者達は考え無しのように思える。

ゼロは俺の配置についてはよく考えてるようだけど、さてその真意は如何に。彼女は彼女で考えている事が不明瞭だ。

「なありタ、今日は試験兵器があつた筈だけど出せるか？」

『はい、一応は格納してあります。展開には少し時間が掛かりますけど』

「じゃあ頼む。テストには丁度良い敵の数だと思ふんだ」

新兵器の構造上、左手の武装は使えなくなる。今の内にフォトンライフルへの供給は切っておき、弾幕をバラ撒いておこう。

ラプラスへの援護をしつつ、クレイドルへ近付く怪異を撃ち抜く事数十秒。

背中に翼以外の重さが乗り、機体高度が少し落ちる。

『準備できました。フォトンライフル、格納します』

「今撃ち切る……。よし、仕舞つてくれ」

『はい。……試作型簡易時空歪曲再現砲、起動開始』

伸ばされたアームが左腕を取り込み、背中の重さが滑り落ちていく。

巨大な箱のような物体が変形し、左腕全体を包んで徐々に設計された通りのフォルムを形作っていく。

『ジェミニシステム、接続します。ここから先は本当に予測不能です。気を付けて、主様』

「ああ。……ありがとう、リタ」

ラディアントマグナムの残弾は十分。魔導炉のエネルギーを全てラウムシュトウン

デへ移しても問題は無い。

機体の推力に関して各部分のジェネレーターで補えるし、ここにホバリングしているだけならばあと数分は飛べる。

『チャージ終了まで五……ん……さ……二……』

「リタ？」

『いぶ……を、あ……さま』

返事は無くとも左腕の重みから撃てる事は理解した。

なるほど、トリスリッターのエネルギーの大半を食われるからリタが喋るだけの余裕が無くなるのか。

ラウムシュトゥンデは封印しよう。

「ぶつつけ本番だけ……いや、怖気づいてなんか居られないな。オーリス、上がって！
ラウムシュトゥンデ、撃つ！」

『解った！思いつきりやつちやつて！』

視界の奥の方でラプラスが高速浮上していく。

それを見届ける前に左腕の前に突き出し、トリガーを引いた。

歪な砲台のような形をした左腕の先端から黒い球体が吐き出された。

何もかもを吸い込んでいるような真つ黒い闇。見ていると自分の意識まで吸い込ま

れそうだ。

そこそこの速度で飛ぶそれが怪異の群れに到達した瞬間に、俺はトリガーから指を離した。

黒い闇が停滞し、やがて膨張していく。

一定の大きさになると再び停止、今度は重力を発した。

それに怪異が吸い込まれていく中、ラプラスがこちらへ飛んできた。

『陽彩、あれが？』

「この前の影の武器を再現したらしい」
フアントム

『へえ……』

直径にして十メートル程だろうか、さもブラックホールのように怪異を取り込んで大きくなっていく闇は、際限など無いかのように更に成長していく。

「……リタ」

『……、はい、主様。わたしはここに居ます』

「良かった、無事だったか。……こいつは使わないようにしよう。リタに何かあったら心配だし」

『でも主様……』

リタが何かを言いかけた途端、ふと闇が動きを止めた。

怪異を吸い込むのは辞めていないが、膨張するのを止めたのだ。

『……………あれは』

「……………」

嫌な、予感が、する。

あれをあのままにしていちゃいけない。

「オーリス、防げ！来るぞ！」

『……………』

直感から何かを察知して、オーリスにも防御する事を促す。

あれが何かと説明するのは無理だが、途轍もなく危険だ。間違いなく、人の手で操れる物では無い。

闇が十分の一くらいの大きさまで小さくなる。

まるで、弾ける前に縮むようなその動き。

そして、次の瞬間に。

世界を埋め尽くすように、光が爆ぜた。

第四話

何もかもを埋め尽くした光は、爆発の直後に消え去った。

咄嗟に隣を見るが、ラプラスは無事だったようだ。恐らくはその中に居るオーリスも。

どうやらフォトンフィールドを広げておいて正解だったらしい。

「……………目がチカチカする……………。オーリス、無事か？」

『うう……………こつちも大丈夫……………ちよつと眩むけど』

どうやらあの光、単に眩しいだけでなく、ジャミングの性質も持ち合わせていたらしい。トリスリッターのリーダーなど、感知システムが軒並み全滅している。

至近距離だからラプラスとの会話は可能だったが、クレイドルへの通信は暫く途絶えたと考えて良いだろう。

『主様、今の爆発はラウムシュトゥウンデの仕様ではありません』

「それは流石に俺でも解るよ」

『そうではなく、あれは他者の介入がありました』

……………他者の介入、か。

「また04の連中か……?」

『いえ、クレイドルとは技術系統が違います。怪しいのは件の影ファントム、そもそも空間歪曲の技術は向こうから手に入った物ですから』

「トランプを仕掛けるのは容易い、と」

『そういう事です』

例の謎の機体を手に入れようとしていたクレイドル04でもないとなれば、俺には何の予想も付かない。

いや、客観的に見ればあの機体を所有していたゼロが一番怪しいのだが。俺としては、彼女を疑いたくは無い。

『……ある程度は絞り込めそう……ん?なに、ラプラス』

『Buster Blaze, Reloaded』

『……準備して事ね。陽彩、気を付けて。まだ何か来るよ』
ラプラスが警戒するような事象……と、なると。

俺には何もできない次元の話ではないのだろうか。

いや、オリス一人に戦わせるといつつもりは断じて無いが。

「……この、感じ。何だろう……あの、機体……?」

ゼロが俺を乗せた例の機体。

あれと似たような感覚を空の彼方から感じた。

その方角は……クレイドル04。

『機体の機能は依然として回復していません。主様の感覚だけが頼りです、どうかご武運を』

「大丈夫、ある程度はやれるさ」

『……不甲斐無いわたしで、ごめんなさい……』

「そうは思わないけどな。寧ろ俺の方が未熟で申し訳無いよ」

別にリタは悪くないだろうに。

悪いのは未完成の試験兵器を押し付けてきた連中であり、彼女が気に悩む事は何一つとして有りはしない。

「不毛な話は辞めにしよう。ラウムシュトゥンデ、戻しておいてくれ」

『はい。フォトンライフル、展開します』

左腕を飲み込んでいた巨大な砲塔を箱のような形に戻し、背中に背負う。重量による機動力の低下は、ラウムシュトゥンデそのものを追加の推進力として使う事で補う。

空いた左手には馴染んだフォトンライフルを持ち、しっかりとリロードさせておく。魔導炉のエネルギーはまた両腕に均等に流し、ラディアントマグナムのエネルギーは一発ずつ小分けにする。

『……怪異じゃない、この感じは……？』

「オーリス？」

『——避けて！』

「っ……！」

弾かれたように飛び退るラプラスに従い、その反対側へ向けて翼を羽撃^{はばた}させる。

ついこの瞬間、先程まで居た場所に、漆黒の風が吹き荒れた。

「——へえ。避けるだなんてやるじゃないか、新参」

その声は背後から聞こえてきた。

確かに風を追い掛けて、その方向へと銃を向けていた筈なのに。

その声は、俺達の背後から響いたのだ。

「ま、今のは単なる挨拶だけだね。だからそーやって睨むな、キミ達を落とすつもりは無

いよ」

「……お前は、誰だ」

声は女だが。

魔導機鎧ともまた違う、ワードスーツのような物に身を包んでいる。性別は外から

じゃ解らない。

色は黒。黒曜の光沢は、どこか怪異とは対になっているように見える。

「うん？ そうだなあ……名乗る名前は無い、なあんて格好良く決めてみるのも一興かな？」

言動こそ遊びが見えるが、その立ち居振る舞いに隙は無い。強者の空気を感じる。

「巫山戯てると撃つぞ」

「わあ怖い怖い。か弱い女の子にそんなモノ向けないですよ」

一応はラディアントマグナムを向けておくが、まるで当てられるとは思えない。

そう感じるまでに、俺達には実力の差が開いている。

「解った解った、素直に名乗るよ。俺は《アンリミテッド魔神》エイト序列第八位、《ザ・ハントレス暗影愚弄凶手》。個人名

として名乗るのなら、バルバトス」

アンリミテッド
魔神……？

待て、よ。その名前は、どこかで……。

「……つと、あまりお喋りもしていられないな。キミ達が言う所の……ホロウヘルス怪異だっけか？

たぶん来るよ。それもたたくさん」

「——つ、オーリス、どうする。こいつ、沈められるか？」

『君の手前、格好付けたい所だけど……良くて相討ち。勝つ事はかなり難しいよ』

「だから敵対しようとしている訳じゃないってば……」

それなら行動が矛盾している。

どこを信じようとも、こいつの言動は矛盾する。

「最初に奇襲を掛けて来た奴を信用できるとでも?」

「いや、それは……困ったな。正論過ぎて何も言えない」

こいつもしかして阿呆なんじゃなかるうか。

『陽彩、無理に落とす必要は無いよ。最悪、他の魔導機鎧アサルトフレームを呼べればそれで』

オーリスはそう言うが、こいつ——バルバトス自身がそれに反論した。

「あのでつかいの……えっと、クレイドルだっけ?あれの防衛を減らすのは良くないよ」

『——へえ?わたしとしては、貴女は幹部クラスの者に見えるけれど。それが出

張っているなら、ここに戦力を集中して各個撃破するのは愚策ではない筈よ?』

確かにそうだ。これだけの戦力を出してきたなら、それを速攻で沈めるのは決して悪

い手とは思えない。

少なくともこいつを信用するよりは、そっちの方が取りやすい手だ。

「幹部クラス、というのは間違っていないけれど……それはあまり良くないと思うなあ」

『まさか他にも来てるっての?』

「いや、来たのは俺わたし一人だけだよ。俺わたしレベルの奴」

……はっ?

人類最強のラプラスⅡオーリスを以てして引き分けが限界の奴等が、十人?

ちよつと待て、それは余りにも――

『出鱈目、と決め付けたいけれど……嘘の色は見えないか。それじゃあ貴女は何をしに来たの?』

「挨拶だつて言つてるじゃないか。まあ、俺わたしを入れて十人と言つても大半が無能だけだね」

そうだとしても。

それはつまり、このバルバトスと名乗つた奴と同じレベルの存在が複数居る事に他ならない。

少なくとも現存する人類の戦力でどうにかできる相手ではない。

「だから、とりあえずまずは話を聞いてほしいかな。もういきなり襲つたりなんかしないからさ」

オーリスと顔を見合わせて、再び考えてみる。

現状、こいつが嘘を吐く理由は無い。だから、信用してやらないという理由も無いのだが。

『信用する理由も無いんだよね……。どうする、陽彩? わたしは君に任せるよ』

「俺がお前に任せたい所なんだけど……。いや、うん。今は信じてみる。話くらいは聞いてみよう」

『解った。……バルバトス、話はここでもできる筈よね』

「流石に初対面の相手の家まで上がり込もうなんて思っっちゃいないさ。でも、できれば落ち着ける場所が良いな」

確かに俺も地に足が付かない状態では落ち着いて話もできない気がする。まあクレイドルも大地から浮いてるから何にせよ地に足は付かないのだが。

「それに……俺わたし以外にも呼ばれていない客が来たみたいだ。少し待っていて、俺わたしが片付けよう」

その場で身を翻すと、バルバトスはその手に巨大な剣のような物を取り出した。

何処からか現れたその大剣だが、それは刃物というより鈍器と言った方が正しいように思えた。

「これでキミ達からの信用を少しでも得られると良いけど」

ぼやくように呟くと、バルバトスはその大剣を両手で握り締める。

半身の構えで大剣を前に向けると、切っ先の方角には既に怪異が居た。

「……オーリス」

『様子を見よう。バルバトスが何かするつもりなら……その時はわたしがどうにかする』

決意を漲らせるオーリスの様子に、こちらでも戦闘態勢を整えておく。

ラディアントマグナムを構えて、フォトンライフルの残弾を確認する。先程リロードしたのもあり、戦闘にも耐えられるだろう。

『共倒れしてくれるならそれこそ僥倖、だけど……』

「そうはいかないと思うよ。お前の方が解ってるだろ、それは」

『……うん。陽彩、君は絶対にわたしが守るよ』

俺も男なんだけどな……。

だけど、実力差を考えるのなら俺が守ってもらおう側になるのは致し方無い。実に無念な話だが。

「さて、と。お片付けの時間だね。一分で終わらせてみせよう」

バルバトスは大剣を構えたままの姿勢で、空を一步蹴り出した。

何も無い虚空に何を以てして浮かんでいるのかは解らないが、恐らくは怪異と同様で反重力の力場でも使えるのだろう。

踏み込んだ速度を全て威力に変換するように、彼女は大剣を振り下ろす。その速度は俺には視認すら難しかった。オーリスには見えているのかもしれないが、少なくとも俺はアサルトフレーム魔導機鎧の眼を通しても見えなかった。

「ふ、っ！」

軽い声と共に再び薙ぎ払われる大剣。今度は少しだけ、それこそ軌跡だけが見えた。

銀色の剣閃は美しく、残酷なまでに俺と彼女の實力差をはつきりと映し出していた。「お気に召す事を願うんだけどね——！」

余裕を持つて大剣を振るうと、巡る大氣に巻き込まれた怪異達が吹き飛ばされていく。ご丁寧に、その中心部は正確に抉り抜かれている。

『……強い。想像以上に』

「まったくキリが無いなあ……」

オーリスの震えた声は聞こえていないらしく、バルバトスは再び大剣を半身に構えた。

三割程数を減らした怪異が、懲りもせずにもた彼女へ襲い掛かる。

「まあ、雑魚が幾ら雁首揃えようと負けたりなんかしないけれど、ね！」

複数の怪異を纏めて消し飛ばし、その慣性をも利用して次の行動へと移る。

一切の無駄なく効率的に敵を倒し続ける彼女の姿は、どこか舞い踊る天使のようにすら見えた。

その蹂躪の演舞が続く事、一分。

宣言通りに一分で全ての怪異を片付けて見せた彼女は、半身の構えを解いて大剣を消し去った。

「——つと、これで最後かな」

かと思えば、一つ取り残していたらしい。

そちらへ再度手に取った大剣を投げつけると、漸く息をついた。

『……………』

「な——」

「どうだったかな？とりあえずはクレイドルを守ったって事で、少しは信じてほしいんだけど」

その言葉は事実であり、実際の所クレイドルの方向には一度も攻撃をしていない。終始、揺り籠を背負うようにして戦っていた。

それに、あの戦い方。迷いは見えなかった。

「…………あの剣に悪意は無かったように思う。オーリス、どう？」

『同感かな。どの道、こっちには向こうに対抗するだけの力が無い。無駄に時間を掛けるだけ無意味だと思うよ』

「良かった、一先ずは話を聞いてもらえそうだね」

と、なれば。

残る問題はどこにこいつを連れて行くか、なのだが。

「良さそうな場所はある？」

『いや、無いかな。01はどこも基本的に監視されてるから』

「じゃあ07の方に行くか。他には知らないし」

『そつちは監視の目が無い場所もあるんだね』

「それなりにはな」

ゼロが放任主義なものもあるが、クレイドル07はまだ完成して間も無いという事が大きいだろう。何せ、俺が生まれてから着工されたのだから。

形になったのは大体三年前か。確か、クレイドル06で魔導炉実験があつたのと同じ年だつたと記憶している。

「それじゃ、案内しよう。少し高度を下げるけど、雲海に突っ込まないようにな」
クレイドルから少し下がると、そこは雲海が広がっている。

たまに切れ間から大地が見える事もあるのだが、今日は生憎な事に雲は水平線まで広がっている。

まあ、その事は良いとして。

背中 of 翼を開くイメージを送ると、俺の意思を汲んだトリスリッターが加速を始める。

それにバルバトスが続き、そしてラプラスが後ろから追い掛けるという構図になった。

恐らくだが、オーリスはバルバトスが何かをした瞬間に後ろから撃つつもりなのだろう。

う。

それに特に言う事は無い。そのまま俺は引き離さない程度の速度を保って、目的の場所へ向かった。



——ぼんやりとした夢が、不意に醒めた。

どうやら目覚めの時、らしい。視界の端のプラチナブロンドが、不自然に輝いた。着慣れたゴシッククロリイタの黒いドレスが、少しだけ億劫だった。

気怠い感覚に抗って、握り締めた銃のグリップをもう一度握り直す。その引き金に掛けた指は、まだ迷っているらしい。

この馬鹿げた夢を終わらせる為に。この指を引かせようと、誰かが言っている。……いいや。

誰か、なんて誤魔化すのは辞めにする。

それは嘗てかの同胞、友と呼び合った存在だろう。

「……………陽彩」

気に掛かるのは、銃口を向けた先の少年。

自分は彼に何も思う所は無かつた筈だが、いつの間にやらこうして念頭に置く程度には認識しているらしい。

だが、それも虚構には違いない。

この器に彼から注がれた愛と信頼に報えるモノは、何一つとして持ち合わせてはいない。

そんな自分が何かに対して執着する事など、万に一つも有り得ない。

そう、とだけ認識しておけば良い。

「……………ひい、ろ」

それなのに。

どうしてか、彼を裏切ろうとする自分に憤慨する意識が在る。

その背中へ向けた銃口を見て、涙を流す自分が居る。

——理解、できない。

引き金に掛けてしまった指は、引けない。

その存在は世界にとって不利益なのに。

自分程度の葛藤一つ、世界と比べるべくも無いのに。

どうして、自分は悩んでいるのだろう。

「……………ごめん、なさい……………陽彩」

静かに銃を下ろす。

今の自分には……いや。

未来永劫、自分は彼を撃てない。

この思考の中樞、魂とでも呼ぶべきその核に、一つの熱情がある限り。

「……………裏切ろうとして、ごめんさい」

自分はまだ、この熱情の名前を知らない。

苦しくて、今にも息が止まりそうな程の想い。

ふと、知識だけで実感が無く偏った思考が、恋という単語を吐き出した。

「……………いいえ」

それを正しいと感じながらも、明確に否定する。

自分が持つ事を許される感情ではない。

ずっと裏切り続けたこの魔神には、些か眩し過ぎる。

「……………そうじゃ、ない」

自分の胸に手を当てて、心にそつと蓋をする。

これで良い。自分は――

――わたしは、彼の子守唄を謡う存在であれば。

「……………ありがとう、陽彩」

一匹の怪物を受け入れてくれた、一人の少年へ。

飾らずに、一言だけ。

その声が届かなくとも。

その熱情が叶わなくとも。

きつと、彼は笑ってくれるから。

「——やあ。久しぶりだね、アンドロマリウス」

「……バルバトス」

黒髪緋眼の少女が音も無く現れる。

わたしがバルバトスと呼んだ彼女は、その手に大剣を携えていた。

「大戦以来かな、こうして人の形で会うのは。そのドレス似合ってるね」

「……陽彩が選んでくれた」

「あの子か……うん、それは良いね」

思い出すようにどこかを見ていたバルバトスだが、ふとこちらの首に大剣を宛てがってきた。

「所で。キミの選択が世界にどんな影響を与えるか、解った上での行動かい？」

「……無論。一切、承知の上。認めないと言うのなら……」

「そうは言わないよ。ただ、何も考えずに行動しているようだったら一度殴らなきゃい

けないからね」

見定めるように目を合わせてきたが、暫くすると大剣を消し去った。

実に嬉しそうな笑顔を浮かべて、彼女は言う。

「キミの選択を、俺は祝うよ。心を解さない怪物が、等身大の心を手に入れた事を」
「バルバトス……」

今、名前を変えて尚友として居てくれる数少ない相手。

それがこうして祝ってくれる事が、わたしは素直に喜ばしかった。

「これからキミは魔神アンリミテッドではなくなる。その権能は好きにすると良いけど、アンドロマリウスとしては名乗れなくなるかな」

それは覚悟の上。何にせよ、アンドロマリウスの名前は役に立たないだろうし。

何よりも、陽彩と同じ人間として生きていける事に比べれば、そんな名前は必要無い。

「……それは、統括局の判断？それとも君の考え？」

「どちらも、と言っておこう。ただ、空席を埋めるだけの余裕は無いから、戻りたい時には自由に戻るよ」

「……きつと、無いけど。解った」

この名前とはもう別れよう。

もしもこれをまた名乗る時は、一度だけ。

彼の助けになるのなら、わたしはまた魔神となろう。

人の身で居たいと思うのは、単なるわたしの我が儘だ。魔神として彼の力になれる日が来るのなら、わたしは忌憚無くアンドロマリウスの権能を振るおう。

「そういえば、今の名前は何だい？ マリーとか名乗ってるのかな？」

唐突に話の流れを変えるように尋ねてきたバルバトスに、わたしは迷う事なく答える。

陽彩がくれた、わたしの名前。誰に恥じる事も無い、わたしだけの名前。

「私は――」

アンリミテッド
《魔神》セブンス 序列七十二位、ジ・オービタル 永久死天限零。

そんな、重みの無い肩書なんかよりも。

「――わたしはゼロ。御童、零」

何よりも好きな、自分自身。



クレイドル07直下、そこから少し飛んでいくと、今は使われていない出撃ゲートがある。

ここが完成するまでの間、俺は周辺空域の怪異ホロウヘイレスの掃討を主な仕事としていた。その際に使っていたゲートがここだ。

「へえ……こんな場所があったんだね」

「01には無いのか？」

「文字通り何処も監視されてるよ」

ここからクレイドル07周辺に出る時には素早い出撃が可能なのだが、生憎ここにはカタパルトが無い。遠くへ行く時や緊急を要する任務では使えないのだ。

なので、ゲートとしての形は保っているものの、もうここに来る人間はそうそう居ない。

「息が詰まりそうな場所だなあ。よくそんな場所で生活できるな、オーリスは」

「それが当たり前だって思ってるしね。慣れだよ、慣れ」

肩を竦めて笑う銀髪の少女。

不思議な色合いをしている金色の瞳は、こちらを真っ直ぐに見詰めている。

「えーと……それで、とりあえずここで良いのかな？」

「ああ、ここなら誰にも聞かれない。まあ呼べばすぐに来る連中は居るけど」

「それくらいで良いよ。まるつきり隔離された場所じゃおちおち話もできないからね」

いきなり奇襲を掛けてきた存在だとは思えない程に穏やかな微笑みを浮かべると、こ

ちらの目にしつかりと視線を合わせる。

そうして、黒髪緋眼バブルトの少女は話を始めた。

「それじゃあ最初に、なんだけど。そっちのキミ、陽彩くん、だったよね？」

「ああ、合ってる」

「良かった。えつとね、キミの方から俺わたしの知り合いの匂いがしたんだ。時に陽彩くん、プラチナブロンドの髪で、黒いドレスを着ていて、いつも拳銃を持つてるような人、知らないかな？」

「……………？」

プラチナブロンドにドレスなら、ゼロが居るけど…………。

彼女が拳銃なんて持っている所は見た事が無い。たぶん人違いだろう。

「いや、知らない」

「……………そっか。じゃあ、良いや」

何かに納得したような、それでいて安心したような、彼女はそんな表情をしていた。

長い息を一つ吐き出すと、彼女はもう一つ尋ねてきた。

「話は変わるけど、キミ達は悪魔デーモン…………いや、怪異ホロウエイズについてどれくらい知っている？」

「……………単に敵としか」

「人類の敵。汚染された地上から生まれた、異常生命体。人に代わって今の地上に生き

ているであろう次世代の生物。これが今の人類の見解よ」

……何と言うのだろうか。何か違和感がある。

俺と話す時と、バルバトスと話す時と……何処か、口調が違うような。

まあ良いか。

「そっか、やっぱり人類の剣ともなればよく知ってるな。……ああいや、小難しい事を考えずにただ敵とだけ認識するのも悪くは無い。その方が話が早いしね」

「なんだ急にフォローなんかして」

不意にこちらを見て、生徒を諭す教師のような表情をしたかと思えば、この妙なフォロー。

バルバトスは何がしたいんだろうな。

「いや、ちよつとした好感度稼ぎ」

「今の素直な言動で少しだけ上がった」

「やったね」

「今の喜びで上がった分だけ下がった」

「ええ……?」

遊ぶの楽しいな、こいつ。

まあいつまでも遊んでいると後ろのオーリスの笑顔が少しずつ怖くなっていくので

程々にして、と。

「ま、まあ置いておくとして……。その見解はおおよそ当たっていると云って良い。今の地上を支配しているのは怪異ホロウヘイズ、もう生態系の頂点は人間じゃない」

「……で、それを聞いてどうするつもり？」

「いや別に、そこはあまり関係ないんだけど」

じゃあなんで聞いたんだよ。

と、俺が聞くまでもなく彼女は先を続ける。

「怪異ホロウヘイズについては良い。問題は、それを統括する存在についてなんだ」

「つまりは奴らを実人類に差し向けている奴って事か？」

「そう。キミは理解が早くて良いね」

怪異達に自由意志が無いのは何となく解っていた。奴らに生物的な面はあれど、どこか機械らしい面の方が押し出されているから。

そも、敵を殺す時に殺意も何も感じられない辺り、真つ当な生物ではないと思つていた。

「そいつは《魔神アンリミテッド》序列第二十九位、《奪命毒装邪帝ザ・ヴェノム》。……俺達わたしは、アスタロトと

呼んでいた」

……魔神？

「じゃあ、その親玉は……。」

「怪異ホロウヘイスを操っているのは貴女の仲間だって言うの？」

「正確には元仲間だ。今はもう、あれを仲間と呼ぶ存在は怪異以外には居ない」

「魔神というのが何なのかはよく解らないままだが、つまりバルバトス達からも離反しているのがアスタロト、なのだろうか。」

「となると今の地球は、人類、魔神、そして怪異と三勢力が入り乱れていることになる。その内の二つは元々同じ勢力なのだから何とも複雑な話だ。」

「……アスタロト、か。そいつが人類に敵対している、って事だな？」

「その通り。本来アスタロトは精々が毒を操る程度の力しか持つてなかったんだけど……いつの間にかやらの魔神を喰らってかなりの力を得ていたみたいだ」

「同類を喰らって力を得る、とは。」

「また随分とイカれた奴が相手らしいな。」

「……魔神について解らない事もあるけど、今は置いておく。で、バルバトス。それを話してわたし達に何をさせたいの？」

「簡単な事だよ。人類と魔アシリミテッド神とで、協力関係を築いてほしい」

「……お前はその為の特使だど？」

「まあそんな所かな」

同盟を持ち掛けに来て奇襲を仕掛けてくる辺り、魔神つてのはかなり武闘派な連中なのかもしれない。

いや、特別こいつが戦闘狂な可能性も無きにしも非ず、かな。

「……俺達だけで承認できる話でもないな。オーリス、管理者の耳に直接届けられるか？」

「残念ながら。こつちじゃ管理者には会うだけでも手間取るから……そつちにお願いできてる？」

「了解。ま、お前に非が追求されないようにしておくよ」

「ありがとう、陽彩」

何故言わなかった、なんて事が言われない程度の根回しはしておくとして。まあ俺じゃなくてゼロの仕事になつちやうなだけど。

しかし、この場合はどちらがおかしいのだろうか。すぐに管理者に会えてしまうクレイドル07と、契約者テストメンタであってもそうそう会えないクレイドル01。

セキュリティや暗殺の対策としては01が理に適っているのだろうけど、面倒の無さで言えば07の方が勝っているだろう。これは俺とゼロの信頼で成り立っている例外的な事でもあるが。

「えっと、それじゃあ、保留って事かな？」

「まあ、な。お前の戦闘能力についてはさつき解ったし、下手に敵対もできない。かと言つて勝手に話を受ける事もできないんだけど……」

「そこは全て管理者次第ね。人類は何時だつて面倒なルールを敷かないと安心できない生き物なのよ」

「五千年も空に飛んでおいて何一つとして成長してないんだね」

凄まじく辛辣な話だが実際にその通りでもある。クレイドルの書庫やデータベースを漁れば昔の人間の事も調べられるが、今と全く変わっていない。

いや、今が昔と変わっていないのかな。

「それを守る代表者の前でよくもまあ……」

「どうせ守りたいのは人類じゃなくて手の届く範囲の皆だし。特にわたしなんかは、陽彩さえ守れば後はあまり気にしないよ」

「お前は色々と振り切れてるから自粛しなさい」

「はーい」

同じ契約者テストメンタでも人によりけり、か。

姫様は知らんが、その契約者のアリサはクレイドル06の全員を守りたいと言つていた。桜花なんかは守れる人全てを守りたいとも。

アルビレオや魔導機アサルトフォーム鎧二号機であるシエキナーの契約者は、そもそも顔も名前も公表

されていないから置いておくとして。

アサルトフレーム
魔導機鎧三号機、ドラグーンの契約者は確か正義の味方みたいな事を宣っていたよう

な。名前は知らないし、大して強い人にも見えなかったから覚えていないんだけど。

「よし、それなら俺の^{わたし}仕事は終わりだ。今日はありがとう。陽彩くん……えっと」

「リアスヴェイン。好きに呼んで」

「なら普通に呼ぶ事にするよ。そう遠くない内に会うと思うから、忘れないでね、二人共」

「さあな」

「わたし忘れっぽいから」

「酷いなあ……」

最近は毎日が濃いから意外と呆気なく忘れるかもしれない。重要な事でもあるからたぶん忘れはしないだろうけど。

しかし、俺は五年前に一度記憶の大半を失っている。忘れっぽさは折り紙付きとも言えよう。

「そうだ。ここから真つ直ぐ帰るつもりだけど、道中の敵は片付けておくよ。安心してのんびり戻ってくれて良いからね」

「そりゃ有り難い事で」

「ご苦労さま。でも裏があるようにしか見ええない」

「わあ酷い……まあ良いや。またね」

オーリスはバルバトスの事を嫌いなんだろうか。

まあ俺も特別好意的に見ている訳でもないが。

俺達の様子は気にせず、黒い機体を展開すると、彼女はゲートから飛び立って行く。

ここの本来の使い方をしているのが人外だと言うのが、どうも俺には何かの皮肉に感じられた。

『……………反応、ロストしました。これ以上は追えません』

「ありがとう、リタ」

「行ったね。どうする、陽彩？これからすぐに戻る？」

リタが反応を追い掛けてくれたが、ほんの数秒で索敵範囲を抜けたらしい。

それを意に介せず、オーリスはこちらに尋ねる。

「俺としてはさっさと戻りたい所だけど、そっちは何か用事とかあるか？」

「特には無いよ。オペレーターが報告さえしてくれば、後は自由だから」

「管理社会なのか自由主義なのか解らないな……」

クレイドル01の仕組みや構造は未だによく解らない。これでも契約者デスタメンタになつてからの約三年、色々勉強はしてきたつもりなだけ。

オーリスに言わせればクレイドル07の放任主義な所も理解できないらしいから、結局は住んでみないと解らないんだろう。

「それじゃあ折角だしこつちを案内しようか?」

「良いの?それならお言葉に甘えさせてもらおうかな」

嬉しそうに笑う彼女を見れば、誘った甲斐もあると言うもの。ちよつとだけ気恥ずかしかつたのは内緒にしておこう。

ここからクレイドル07に入るには一度外へ飛んでから現在のゲートへ向かう方が早いのだが、そんな堂々とラプラスを入れてしまえば恐らく騒ぎになる。人類の剣は人気者であるからして。

その為、少しばかり面倒だがこのゲートから直接内部へ入る形を取る。ゼロには先に連絡を入れておいて、報告はオペレーターを通さず直接行く事にする。

「ここからだ……そうだな。行く途中に俺の家があるから、そこで一旦待つてもらおう。報告が終わったら拾いに行くから、それから07を案内するよ」
「うん、解った。つまり待ち合わせからのデートって事だね」

「お前さては何も解ってないな?」

別にそれでも構わないけど……。

何だろう、それだと何かよく解らない敗北感を感じる。

「デートならもうちよつとお洒落したいけど……いいえ、素で勝負するのも大事だよ。よし、行こう！」

「……はあ。リタ、近所でオーリスが喜びそうな店でも探しといてくれる？」

『了解です。……主様が連れて行けばどこでも喜びそうですけど』

「それ言ったらお終いだから」

リタはそう言うが、本当にそう思えるくらい、彼女は俺に対して好意的だ。

一体、過去の俺はオーリスに対して何をやらかしたのだろうか。そこから辺も含めて聞くべきだろうか。

まあ、今は良い。楽しそうな彼女を見ているとこつちまで楽しくなってくるんだから、それが答えみたいな物だろう。

「ほら、早く来ないと置いて行っちゃおうよ！」

「待ってよ、置いてくなくて」

呼び方一つでこうまで意識が変わる物かと、自分の軽さに驚きつつ。

それで良いとも思っている自分に、それはそうかと納得する。

どうにもしつくり来る銀色に、俺は軽く手を乗せてみた。

きよとんとしてこつちを見た金色の瞳が、揺蕩うように揺れている。

何でもない、と返してから手を離してまた歩き出す。迷いなく、最短経路を通って

く。

さて、ゼロにはどう報告しようかな。

第五話

視界を彩る三つの色彩。

銀、黒、銀。一つ目と三つ目は似ているようで少し違う色合い。

そして、二つの銀色はその間で火花を散らしている。

「えっと……なんか、来るタイミング間違えたみたい？」

「いや、桜花は悪くない。悪いのは阿呆とアリサだと思うよ」

「……私だつてこんなのと会いたくて来た訳じゃない」

「気のせいかな、なんかわたしだけ扱い酷くない？」

左から順に、オーリス、桜花、アリサ。俺と合わせて四人で丸いテーブルを囲んでい

る。

なぜクレイドル防衛戦力の半分程が俺の自宅に集合しているのか、俺にはよく解らない。
い。

というか今思うと契約者^{テストメンタ}って女の子多くないか……？普通に考えて、戦うのは男の役目だと思うんだけどな。

「ま、まあそっちの戦いからは私は身を引くとして……。陽彩、最近の調子はどう？」

「悪くはないけど。そっちこそどうなんだよ、忙しいみたいだけど」

いつぞや、昼食に誘った時は結局来てくれなかった。いや別に来なかったからどうするって訳でもないけど。

俺が契約者テストメンタになった頃と比べると、桜花も随分と忙しくなったように思える。

「まあまあ忙しいけど、別に契約者テストメンタとしての仕事じゃないよ。遊びに行く友達が増えたっただけ」

「へえ……友達か。良かったな」

「うん。あまりこっち来れなくてごめんね?」

「良いよ別に、来たい時に来てくれれば」

友達、友達か。

俺がそう呼べる存在って、殆ど居ないような……。

いやまあ、記憶が飛んでから二年で契約者テストメンタになって、それから三年間ずっと戦い続けているんだし。仕方無いと言えばそれまで、なんだけど。

「ねえ陽彩、そっちの娘を紹介してくれないかな? アリサは知ってるけど、他の契約者テストメンタはよく知らなくて」

桜花と話していると、アリサとの言い合いを終わらせたらしいオーリスが尋ねてくる。

俺も人の事言えないけど、こいつが殆どの人間との付き合いが無いに等しいのを忘れていた。

「あ、そうだったか。えっと、こっちは桜花。アーセナルの契約者だ」テストメンタ

「深咲桜花、十六歳です。クレイドル05で頑張ってます。自己紹介としてはそれくらいかな?」

「オウカ、桜花、ね。覚えた。わたしはアリアスⅡヴェイン・オーリアル。オーリスでも何でも好きに呼んで」

「それじゃあよろしくね、オーリスさん」

……アリスの時とは随分と違う。それも露骨に。

「……そういう所気に入らない」

「わたしは君の事が気に入らないけどね」

なんでこいつらは人の家まで来て言葉の殴り合いなんかしてるんだろうか。

「あはは……人気だね、陽彩は」

「オーリスはともかくアリスの方はよく解らないんだよなあ。一体何を張り合ってるのか」

「……駄目だこりゃ」

桜花が何かを言ったようだが、それを確かめる気力も無い。

経験則上、これは暫く放っておく事で解消されると知っているので、俺は気配を消して台所へ向かう。

本来ならお茶を淹れるのはリタの方が上手なのだが、生憎と彼女は今ゼロと一緒に居る。正確には、トリスリッターのメンテナンスだ。

なので今日は俺が淹れる事になる。味に関しては保証できないが、まあ大丈夫だろう。

「ほれ、紅茶。ミルクと砂糖は面倒だから自分で入れて」

「ありがとう。気が利くね」

「……頂きます」

「ん、美味しい」

さて、今日はどうしてこいつらがここに集まっているのか、だけど。

前々から実験されていた無人駆動式の魔導機鎧アサルトプレムが、今日から試験的に実戦投入されるらしいのだ。確か名前は魔導機装兵リフレクスマーベスとか言ったか。

それのお陰で契約者テストメンタにも休みが取れるようになったので、こうして馴染みの顔触れが全て揃った訳だ。

「あ、そうだ。陽彩に渡したい物があつたんだ」

「渡したい物……？オーリスが渡してくる時点で嫌な予感しかないけど」

「なんかどんどん辛辣になるね……。渡したいのはこれだよ」

そう言うと、オーリスは鞆から一つの袋を取り出した。

どうやらその袋も手製の物らしく、市販品に比べると少し粗さが目立ち、何よりも暖かさを感じた。

「はい、どうぞ。開けてみて。片手間に作った物だから、あまり期待はできないんだけどね」

「ん……。これ、お守りか？」

袋に入っていたのは赤い布。紐が結ばれていて、表には文字が刺繍されている。

この時分に漢字なんて見るとは思わなかった。えつと……。長寿祈願、か。

「これ手書きか？」

「そうだよ。漢字って難しいんだね」

「寧ろよく書けたなお前……」

裏面には何も書いてなかった。とは言え気持ちも籠っている事がよく解る。

随分と綺麗な物を作ってくれちゃって。どうお礼してくれようか。

そんな事を考えていると、アリサが不意に呟いた。

「……………お守り、か」

「アリサ？」

「……………ううん」

何か思う所でもあつたのかと思うが、本人は否定するばかり。それなら、深くは突っ掛からなくて良いか。

「変なの。……………いや、いつもか」

「……………やっぱりあなた嫌い」

「ふふ、わたしも君の事嫌い」

この二人の争い、今日は嫌に長引くな。何かあつたのかそれとも単に機嫌でも悪いのか。

かと思えばオーリスは楽しそうだし、アリサも特別嫌そうな顔はしていない。こいつら発言と様子が一致してないんだけど。

「……………陽彩は陽彩で苦労してるみたいだね」

「桜花程じゃないと思うけど。まあ、俺も楽しいから大丈夫だよ」

「そっか。そう言い切れるなら、私の心配は要らないかもね」

金と緋の瞳が火花を散らすように視線を絡ませる中で、俺と桜花は小さく笑い合っていた。

何だかんだ言いつつ、この二人も仲が悪い訳じゃない。単にいつも張り合ってるだけで、互いに険悪な空気にはならないし。

何と言うか、お互いの事を理解した上で喧嘩してるような、そんな感じがする。

「それにしても、よく飽きないね。そろそろネタ切れする頃だと思っただけだ」

「さて、どうだか。ああ見えて気が合ってるみたいだから、向こうずっと続くのかもな」

「……否定できないのが怖いね。それに——お？」

話の途中で、インターホンの音が聞こえた。

お客さんだろうか。いや、宅配とかかな。

「ちよつと見てくる。その二人が暴れないように見てて」

「はいよー」

「……私そんな事しないもん」

「そう思われてたなら心外だなあ」

何やらぼやく二人は無視して、俺は玄関へ向かう。

さて、変な人じゃなければ良いけど。

玄関の電子ロックを手早く解除して、ドアを開ける。

その先に居たのは、見慣れたプラチナブロンドの少女だった。

「……陽彩、遅い」

「ゼロ？なんでまたこんな所に。それにリタも、お帰り」

「ただいまです、主様。機体の方は何ともありませんでした」

「そりや良かった。えっと、ゼロはどうしたの？」

リタが帰ってくるのはまあ、時間的にも解る話だけど。

ゼロが俺の家まで来る事は珍しい。何かあつたんだらうか。

「議会の方から呼び出し。ラウムシュトウンデと、バルバトスについて」

「ああ、そういう。少し待ってて、今客が来てるんだ」

「……客？」

「三人程な」

首を傾けて尋ねてくるゼロに答えつつ、俺は二人を家に上げる。

ドアを閉めて、一応ロックも掛けておく。誰かに入られたら堪ったもんじゃないし。

……と、思ったけど。この家に居る戦力を考えるとそこらの侵入者じゃ太刀打ちできないか。

「……アリアスヴェイン」

「うん、来てるよ。よく解ったな」

「……よくも」

「え？」

「いいえ」

なんか今不穏な声が聞こえたような……。

いや、置いておくでしょう。議会からの呼び出しならさっさと行かないといけないし。

家を空ける事に関してはまあ、アリサも居るから大丈夫だと思いたいけど。

「準備してくる。何か持ってた方が良い物ってある?」

「特には。暇を潰せる物はあつた方が良い」

それなら本でも持っていこうか。まだ読んでない新刊が幾つかあつた筈だ。

議会はいつも無駄な話が多いから、話を聞き流しつつ視界の端で電子書籍を読むくらいはできる。ただ、今日は俺も話を向けられる可能性があるので、期待は程々にしておこう。

「陽彩、どうだった?」

「リタが帰ってきた。それと、少し出掛ける事になった。留守番頼んで良いか?」

俺の家には取られて困るような物も無いが、誰かに入られたりすると薄気味悪い。暇ならここに居てくれると嬉しいんだけど。

「私は良いよ。アリサ、どうする?」

「……構わない。どうせ暇だから」

「オーリスさんは?」

「良ければわたしもここに居るよ。まあ、アリサがどう思うかは知らないけどね」

「……あなたとは違って、そこまで器は狭くない。好きにすれば」
「そりやどうも。じゃあわたしもお留守番するよ」

早速不安を煽られるような遣り取りが見えた気もしたが、今は任せておく。たぶん何も起こらないだろうし。

「それじゃ任せるよ。ちよつと荷造りしてくる」

元氣よく返事を返したのが二名、こくりと頷いたのが一名。

それに見送られて自分の部屋に行き、軽く荷物を用意してから着替える。部屋着から外出用のきつちりした服装へ。

それだけだとこの季節はちよつと肌寒いので、黒い上着を羽織る事にする。これで良
いだろう。

「お、格好いいね。陽彩もやればできる訳だ」

「よく言う。まるでいつもだらしないみたいない方するな」

「否定はできないでしょ？ねえ、アリサ」

「……普段は、まあ」

酷いなあ、アリサは。

隣でからからと笑っているオーリスはもつと酷いけど。

「ふふ。まあ、決める時は決めてくれるからね、陽彩は。行ってらっしゃい、気を付けて

ね？」

「……行つてらっしゃい、か。」

そんな家族みたいな台詞、久しく聞いていなかった。

出掛ける時は大半がリタと一緒にだから、家に残る人というのは早々居なかった。

だから、見送ってくれる人なんて。ましてや、こうして笑顔で送り出してくれる人なんて。

不覚にも、数秒程度呆けてしまった。

「……行つてくる。夕方までには戻るから、どうせなら晩飯も食べてくと良いよ」

「今日は気前良いじゃん、陽彩」

今日は、とはなんだ。いつもそこそこ気前が良い方だと思うぞ、俺は。

「久しぶりの大人数での食事ですね。それなら少し買い出しに行きましょう」

「……手伝うよ、リタさん。姫様も行きたがってるし」

「姉さんが、ですか？ 珍しいですね」

どうやらリタも出掛けるらしい。それにアリスも同行するようだし、結局残るのはオーリスと桜花の二人か。

「つと、そろそろ行かないとな。また後で」

四人からの見送りを受けて、俺は玄関に向かう。

ゼロはそこで待つていたらしいが、心なしか不満そうな顔をしていた。

「お待たせ。行こうか？」

「荷物は」

「ちゃんと準備したよ」

「……なら、良い」

外へ出てドアを閉めて、鍵も掛けておく。合鍵に関しては解る所に置いてあるので、恐らく問題は無い。リタも居るし。

「……それと、陽彩」

「うん？」

家を出て少し歩いた所で、ゼロは唐突に振り向いて、こちらに目線を合わせた。

「……その服、格好良い」

かと思えばいきなりそんな事を言うてくるんだから、言葉も詰まる。

だつて好きな人から格好良いなんて言われたら誰だつて照れるだろうから。

「あ、えつと……ありがとう、かな」

「……」

どうやらゼロの方も照れていたようで、いつもより顔が紅潮していた。

恥ずかしいなら辞めておけよ、という気持ちと、それでも言うてくれる事が嬉しい、と

いう気持ちちが半分ずつ。

心の中で転がり続ける感情が、むず痒いように温かいようによく解らなかつた。



実に退屈で堪らない、同じ話題がひたすらに繰り返される議会。

そんな盛大に時間を無駄遣いする大人にはなりたくないな、なんて思いながら俺は帰り道を一人で歩いていた。

ゼロは少し用事があるらしく、先程別れた。議会の会場となる場所から彼女の家まではそこまでの距離は無く、また俺の帰り道とも被るので送ってきた所だ。

「はぁ……」

無意識の内に漏れ出た溜め息は、さて何の為の物だったか。

議会の無意味さへの嘆きか、はたまた密かに楽しみにしていたゼロとの会話が殆ど無かつた事か。

出掛けの一言のせいでゼロはずっと喋ってくれなかつた。そんなに恥ずかしかつたのだろうか、等と考えてみるものの残念だった物は残念でしかないのだ。

「……………ん？」

気分を変えようと俯き気味だった顔を上げてみると、そこには見慣れた銀髪が見えた。

オーリスが迎えに来てくれたのかと思つて近付こうとしたが、その途中で別人だと気が付いた。

あいつにしては違和感がある。両手足が黒いのだ。

あれは手袋や靴下ではなく、義肢の類いに見える。

変な勘違いをしたのも、疲れているせいだろう。

八つ当たり気味に議会の連中に恨み言を送りつつ、俺はその人の横を通り抜けようとした。

そして、透き通るような声音に引き留められるのだった。

「……あの。少しお時間よろしいでしょうか？」

予想通りと言うべきか、その声はオーリスに似ていた。

とは言え、似ているのはあくまで声だけ。喋り方も特徴も、何もかもが違う。やはり別人だ。

「俺、ですか？」

「はい。えっと、道に迷つてしまつて」

「あまり力にならないかもしれませんが」

道に迷った割には困っているようには見えないが。

目の前で見ればよく解る。オーリスはここまで無表情じゃない。それに瞳の色も似通っているが、輝きが違う。あっちの方はもつと眩しいくらいに煌いていたが、こちらは月光を思わせるように静かな光を湛えている。

「いえ。元はと言えば迷ってしまった私が悪いのですから……」

「そうですか。……目的地はどこでしょうか。近所だと良いんですけど」

あまり続けるとこの人は自虐しちゃうんだろうな、と思つて話題を変える。

兎にも角にも目的地が解らないと案内も何も無いし。

「二番地区の外れの方です。一つぽつんと、大きな家があると聞いたのですけど」

「……二番地区か……」

おかしいな、既にそれでどこか特定できるぞ。

二番地区、外れ、二人で住むには大きな家……いや、まあ、まだ解らないけど——

「そこには契約者テスタメンタの方が生活しているという噂を聞きました。ご存知ありませんか？」

——はいアウト。

その契約者テスタメンタ俺だから。

「……えつと」

さてどうしてくれようか。

とりあえず今は考えてる姿勢で時間稼ぎができるけど、この人はたぶんすぐに特定して家まで来るだろう。その時に面倒だろうな、と思いつつもここで打ち明けるのも何となく気まずい気がする。

「……難しい、ですね」

「そうですか。……仲がよろしくないのでしょうか？」

「いや、仲の問題は無いと思いますけど」

俺は俺自身と折り合いつけてるから、たぶん問題は無い筈。

……そうだよな？俺って俺の事そこまで嫌いじゃないよね？

「ただ、そこなあ……」

「立地の問題でしょうか？多少の悪路なら何とかかなりますが」

「いや、しっかり舗装されてます。ただそこね、たぶん俺の家なんですよ」

まあ良いや。

この人は悪人には見えないし。少なくとも、契約者^{デスタメンタ}としての俺を利用しようとしているように見えない。

それに今はうちに人類最高戦力が居るし、とりあえずはどうにかなるだろ。オーリスは俺の危険を謎の勘で察知したりするしな。

「…………え？」

「クレイドル07で普通の家に住んでる契約者テスタメンタは俺しか居ません。他の適正持ちは全員一箇所に押し込まれてますから」

「では、あなたが……」

ちよつとばかり気恥ずかしいけど、自己紹介といこう。

「俺は陽彩、御童陽彩です。貴女が何をしに来たのかは知りませんが、俺で良ければ家まで案内しますよ」

まあ、今日はかなり騒がしい家だけど。

「そう、でしたか」

「今日は特別騒がしいんで、急ぎでなければまた今度にしてもらえると嬉しいんですけどね」

「……私にはあまり時間が無いので。できれば、今日訪ねたかったんです」

時間が無い、か。切羽詰まった表情にはまるで見えないが、何か外せない用事でもあるのだろうか。

「でも、あなたと解れば家まで出向く必要は無い。一つだけ、聞かせてほしいのです」

「はあ。俺に答えられる事なら、答えますけど」

何だろう。そもそもこの人が何者かも解っていない現状、何を尋ねられるのかはまる

で予想できないけど。

「……いえ、その前に名乗りくらい上げなければいけませんね。私は……」

別に構わないけど、なんて言う暇も無く彼女はそのまま続けてしまった。

あまり人の話を聞かない人なんだろうか。

「アルティエールオールレア・カーライル。それが私の名前です」

「カーライルさん、ですか」

最近の名前の長い人とよく会う気がする。

……いや、気のせいかな。

「さて、それでは。御童陽彩、あなたは契約者^{テスタメンタ}として戦っている。その上で、一つ問いた

い

「はい」

「あなたは、何の為に戦っているのですか？」

「……何の、為に……？」

俺の戦う理由、という事だろうか。

それは……いや、どこから話したものかな。

「細かく話すとかかなり時間掛かりますけど……まあ、そうですね。最初は流されるままに戦ってました」

「……」

「でも何時からか、俺が帰る度に無事を喜んでくれる人が居たんです。その人の笑顔を見る為に、そしてクレイドル07の誰かの笑顔を守る為に。……俺の戦う理由としては、そんな所です」

かなり端折ったせいでよく解らなくなったが、概ねこんな感じである。

つまりよく解らないままに戦っているのだ。

「……そう、ですか」

「はい、そうです」

するとカーライルさんは、見間違いかと思う程に小さく、微笑みを浮かべていた。

ともすれば見失ってしまいそうな、雪の結晶のような儚さ。それをこちらへ向けて、彼女は優しく歌うように述べた。

「人の笑顔の為に。そう戦える人は、きっと優しいんでしょうね」

「たまに言われますけど、あまり自覚無いんですよね。たぶん優しい人間なんかじゃありませんよ、俺は」

「いいえ。過ぎた謙遜は美德ではなく嫌味にしかならないと覚えておいてくださいね」

「あ、はい」

なんか注意されてしまった。

「えっと、お気に召しましたかね？」

「ええ、十分です。……オリジナルをお願いします。彼女は他人には冷酷な人ですが、身内には甘過ぎる。極端な人間なんです。あなたが、彼女の指標になってあげてください」

「は、え、オリジナル？」

「それでは、私はこれで」

そうまで言われるような人間は、俺は一人しか知らない。

あの言い方からして、きつとオーリスと何か関係がある人なんだろう。

でもそれはどうでも良い。後であいつに聞けば解る話だから。

「ちよっと、待ってください。こっちからも一つだけ、良いですか？」

「……？はい、何でしょう」

今の足運びだけでも解るけど、この人かなりおかしい。

隙が無さ過ぎる。まるで、常に何かを警戒しているような。

「カーライルさんも、戦ったりするんですか？」

「……人手が足りない時には」

その一言で、俺に対する視線の鋭さが変わる。

戦闘能力に勘付いた事を看破された、という事だろう。

「あ、いや、単に気になっただけで、別に深い意味は無いんですけど」

「そうですか?……ああ、それと。クレイドル02に行く事があれば、私の名前を出すの良いでしょう。用事が無ければ軽く持て成しでもします」

視線の険しさを和らげると、小さな微笑みに乗せてそう言つて、カーライルさんは今度こそ身を翻して立ち去つた。

後ろ向きに軽く手を振つた様は凄まじくクールで似合つていた。

その様子が、どうにも頭に焼き付いて離れなかつた。



その日の夜、桜花が帰つた後にオーリスに聞いてみた。

因みにアリサは俺の部屋で寝ている。ベッド取られたんだけどどうしようかね。

「んー……アルトつて個人でこっちに来る程、人に興味持つ娘だったかなあ?」

「やっぱり他人の事はどうでも良いタイプなのか?」

「そこはわたしに似て、ね。ほら、クローンだから」

そもそもオーリスも言つてしまえば真つ当な人間とはとても言えないが。初代ラプラステスタメンタの契約者であるアルトリウスのクローン体、その成功作という。

聞いてもいないのにいきなり重い身の上話するから心臓に悪いんだよなこいつ……。

「わたしは研究所が言うには成功作、アルトは失敗作らしいね」

「と言うと？」

「えつとね、優性遺伝と劣性遺伝って解る？」

「だいたい理解した」

つまりはアルトリウスの特性が出たのがオーリスで、そうじゃなかったのがカーライルさんなんだろう。

人としてという意味ではなく、その実験そのもので見た場合、確かに失敗なんだろうな。

あまり気分が良い呼び方ではないけど。

「でもまあ、射撃に関しては化け物よあの娘。地球の裏側まで狙撃できるから」

「は？」

「たぶん他の星まで届く銃なんか持たせれば、この銀河系纏めて射程圏内だろうね」

「は？」

地球の裏側って射線通らないのにどうやって……いやそうか、重力で弾道曲げるのか。

なんかそんな感じの迫撃砲を昔見た気がする。命中率はまあ、言わないでおこう。

そんなでもって、そこまでの狙撃能力を持つ個人兵器となると、もう魔導機鎧アサルトフレームくらいしか思い付かない。他に個人で動かせるような超長距離狙撃兵器は知らない。

「まあ察してるとは思うけど、アルトも契約者テストメンタだよ。機体はシエキナー、公式序列は二位」

「……滅茶苦茶雲の上の存在なんだけど」

「その理論で行くとわたしはどれだけ高い所に居るのかな？」

「一周回って地底だよお前は」

「ひどーい」

因みに俺は底辺である。公式序列七位だから。

「……でも、シエキナーの契約者テストメンタって公表されてなかったよな？」

「そうね。クレイドル02の意向で非公開って事になってるね」

「つまり秘蔵っ子って事だろ？こっち堂々と歩き回って大丈夫なのかな……」

「問題無いと思うよ。あの娘、個人戦闘力は最強だから。剣を持っててもわたし勝てないもん」

「へえ……」

また一人化け物との面識が増えてしまった。この調子で契約者テストメンタ全員と知り合いになれるのだろうか。

えっと、一番機ラプラスの契約者はここに居る阿呆で。

二番機シエキナーの契約者はカーライルさん。

三番機ドラグーンはどうでも良い。

四番機アルビレオは謎が多過ぎるから置いておく。

五番機アーセナルの契約者は桜花、友達と言つていい。

六番機は言わずもがな姫様、アリサとも仲は良いと言えるだろう。

……あれ、殆ど制覇してね？

個人的に好きじゃないドラグーンの契約者はまあ良いとして。

後はアルビレオだけか。あの人一度戦つたのに一言も喋らなかつたからな……。

まあ良いや。

「しっかし、唐突にどうしたんだろうね。アルト、普段は誰にも靡かないような娘なんだけど。……陽彩に向けて笑つたんでしょ？」

「見間違ひじゃなければ。あと、戦う理由がどうか言つてた」

「……なるほどね、そういう事か。まだ拘つてたんだね」

まだ、という事は昔からそういう事を気にする人だったんだろうか。

「アルトはわたしと同じアルトリウスのクローンだけど、本来のスペックを發揮できてないんだ。それに対してわたしはアルトリウスの再来だの人類の剣だの言われてるか

ら、一度戦う氣力を失ってね」

「お前他人の事情とかを勝手に言うのはどうかと思うぞ」

「本人は気にしていないから大丈夫。で、わたしなりに励ましてみたんだけど……変な方向に立ち直ったらしくて。何の為に作られたのか、何の為に戦うのか、って。そんな事ばかりを気に掛けるようになったんだ」

それこいつのせいじゃ……いや、環境のせいでもあるのか。

しかしまあ、それで戦う理由を聞いてきた訳か。

「……なあ、オーリス」

「ん？」

「何の為に戦っているかって考えた事あるか？」

「……んー」

少し考える素振りを見せるが、首を軽く横に振った。

そして俺の予想通り、或いは期待通りの答えを教えてくれた。

「そんな難しい事は考えてないよ。単に放っておけば危ないから怪異ホロウヘイスを殺してるだけで。陽彩はアルトになんて答えたの？」

「守りたいモノを守る為」

「……そっか。変わらないね、君は」

もしかして、昔にもこんな事を聞いたのだろうか。

何にせよ、俺は今も昔も変わらないらしい。オーリスはいつもそう言ってくれろ。

自然体の俺を肯定してくれるのは、きっと俺が間違っていないからだと思う。ならば、漠然と感じたこの不安も杞憂なんだろう。

とは言え、記憶が抜け落ちている事に対するどうしようもない乾きみたいな感情は、まだ無くなりそうにもない。

「さて、それじゃあ小難しい話は終わり。一緒に寝ましょ、陽彩？」

「寝るのは賛成だけど自然な流れで同衾を誘うのは辞めろ」

「えー。……だめ？」

甘えるような上目遣いでこちらを見遣る阿呆オーリスに対して、躊躇が一切無い即答で返す。

「駄目です」

「なんで？」

「まだ恋人でも何でも関係なのにそういう事するのは良くないだろ」

これは非の打ち所の無い正論だろう。

そう高を括って油断していたら、思わぬ点を突かれてしまった。

「……まだ？」

「——あつ」

「まだ、なんだ……?」

悪戯つぼく輝いた瞳は僅かに濡れた色を見せ、その白い肌は熱に浮かされたように上気していた。

銀髪金眼の美少女の、不思議な魅力を孕んだ笑顔が真つ直ぐに俺を見て――

――いや、待て。落ち着け。

俺は一体何を観察しているんだ。

「そ、それに、昔の事を覚えてない状態のままじゃ、なんか騙してるみたいだし……」

「……ふふ。そうだね。陽彩はそう言っついても逃げるんだもんね」

完全に読まれてる。流石は自称将来の嫁……。

押されっぱなしなのも何となく面白くないが、彼女に勝てるとも思えない。

「うん。やつぱり一緒に寝よう?」

「お前これまでの話の流れ解ってる?」

「解ってるよ。そういう事じゃなくて、単に同じベッドで。どうせ他に場所は無いし、良いでしょ?」

邪気の無い朗らかな笑顔に、恐らく他意は無いのだろう。

仕方無い。忘れてしまった負い目もある事だし、それくらいはしてあげるべきか。

何を考えようとも緊張する事には変わりはないけど。

「実を言うとりタのベッドがあるからお前をそつちに寝かす事もできる」

「……そつちで陽彩が寝て、陽彩のベッドでわたしとアリサが寝れば良いんじゃないの？」

「明日の朝に戦争が起きるだろ」

「それもそつか」

それで納得して良いのかあ……。

「やっぱり三人で寝るのが一番だね。アリサは退かして、と」

「扱い雑だなお前……」

「寝たら起きないタイプだしね、この娘は。ほら陽彩、おいで？」

「俺を真ん中にするな」

ベッドの端に腰掛けた姿勢のオーリスを転がして真ん中に配置、その手前に自分が入る事にする。

アリサと俺でオーリスを挟む形になって、漸く事態は落ち着いたように見えた。

「……これも悪くないね。陽彩、こつち向いて？」

「なんだよ」

外側を向いていた体をひっくり返すと、目の前に金色の瞳が迫っていた。

反射的に身を竦めると、彼女の手が俺の頬に伸びてきた。

ひんやりとした心地の良い体温が、俺の視線を否応なしに釘付けにする。

「……………」

「オーリス？」

「——んっ」

ふと顔を近付けてきたと思うと、首の後ろに両手が回された。

そのまま動けずに居る俺に笑い掛けて、彼女はそつと頬に口づけをした。

「えっ、待つ……な、何、して」

「今はこれで我慢しておくね？それじゃ、おやすみなさい」

頭がぼうつとする。

思考が上手く纏まらない。

とりあえずおやすみと言われたなら寝なきやいけないだろう。

なんて、反対側へ体を向けて、少し冷静になると。

こんな状態で眠れる訳ないだろ、等という正論が今更のように飛んできた。

最初から、向こうのペースに乗せられっぱなしだったという事だ。



——勢いに乗せられたからって何をやってるんだろうわたしは。こんなはしたない女の子じゃ、陽彩に嫌われちゃうのに……。

ついそんな自責の念に駆られる程度には、さつきまでの自分が暴走していた事を自覚していた。

だっておかしい。昔はキスどころか手が触れただけでも心臓が跳ねて何もできなくなっていたのに。

そこまで考えて、ああそうだと思い出す。

今はこうして一緒に居てくれるけど、陽彩とはそもそも五年ぶりに会えたのだ。

これまで会えなかった分、甘えたかったり甘えてほしかったり色々な気持ちが溢れ気味だったりする。

……それに、今の陽彩は記憶を失っている。今の内に既成事実の一つでも作れば、臆病なわたしでもきつと陽彩と恋人にだって……。

「……………」

考えてから随分と突飛な思考だと思ひ直す。

それは駄目だ。あくまでわたしが陽彩を好きなのであって、陽彩がわたしを好きな訳じゃない。

いや、嫌われてはいないと思うけれど。

陽彩が好きなのは、きつと……。

……いや。それを考えるのは良くない。

これは封じておくべき事で、わたしは知らないように振る舞って居れば良い。

都合の良い女、その程度に思ってもらえれば、それで良いから。

陽彩は優しいから、きつとわたしを傍に置いてくれる。

それに甘えるようで悪いけれど。

五年も待たされたんだ。

少しくらいは、許してほしい。

そうは思いつつも、飛び跳ねる心臓の鼓動は一向に落ち着かない。

こっちがリードしてるつもりだったのに、まだまだわたしも大人からは程遠いらしい。

その日はまるで眠れなかったのに、アリスは普通に起きてきていたのが、どうしてかとても気に入らなかつたのだった。



案の定二人して寝不足になったのは言うまでもない。

「主様？ちよつと眠そうですね。寝付けなかつたんですか？」

「……や……少し夢見が悪くて」

「そうですか」

「ごめん……ちよつと休ませて」

「アルトお……わたしもう駄目だよお……」

「今度は何をやらかしたんですか、オリジナル」

「……陽彩と一緒に寝ちやった」

「今からクレイドル07を落とします」

「待つてアルトっ！早まらないで!？」

第六話

あの日からまともにオーリスと目も合わせられずに、そのまま数日が経過した。

翌日だかその次の日だけに偶然^{でくわ}出会ったカーライルさんが異様に殺意の籠もった眼をしていたのを今も覚えている。それを見て慌てるオーリスの姿も。

まあそれは良いとして……いや、良くないんだけど。契約者^{テストメンタ}としての役目を果たすのに支障が出れば、それは全然良くない事なんだけど。

一旦その話は置いておくとしよう。

今朝方、俺はゼロからの要請でクレイドル07周辺空域の警戒及び防衛に出撃した。嫌な予感という信憑性がまるで無い根拠を信じて、一応ラウムシユトウンデも持つてきた。

その結果——

『主様、前方に四機、依然として健在です！』

「一向に減らないな……というか、バルバトスは何をしてるんだよ」

——総勢三十六機の影^{ファントム}に追い回される羽目になった。

先手として放った重力波攻撃でその三割程は撃墜したのだが、それを警戒されたのか

まるで接近してくれなくなつた。

「影はできるだけ魔^{アンリミテッド}神がどうにかするとか言つてたくせに……」

『きつと彼女達にも事情があるんでしよう。……第二波、来ます！』

ラディアントマグナムを撃つても回避され、フォトンライフルでは火力不足。まともにダメージを出せるのがラウムシュトゥンデのみという状況であり、そしてそれを完全に対策されている。

あのブラックホールみたいな弾丸、強いけど遅くて使えない。目標地点まで到達するのに数秒を要し、更に重力を発するまではそれもまた時間が掛かる。

影^{フアントム}達はそれをよく知悉している。こいつは役に立たない———というか、トリースリッターの武装そのものが対策されているような。そんな気さえする。

「……ん？」

『主様？』

「ああ、いや……」

何か、閃いた。

武装が対策されている。というのには、当然俺の戦いを見てきたから。

影^{フアントム}が知っているトリースリッターの武装。対策できるのはそれに限られる。

だとしたら。

俺が使わない武器。

たった一つ、緊急時用の奥の手。

——なんだ、まだやれるじゃないか。

「リタ、武器を全部戻して」

『それは……はい、了解しました。確かに、他の手段があるとは思えませんが』

ラウムシウトウンデはブースター部分を残して格納、ラディアントマグナムとフォトンライフルは粒子と化して背中に仕舞う。

そして、機体の両前腕部の装甲が展開する。

開いた装甲から迫り出した棒状の物体を掴むと、それを一気に引き抜く。

それは「柄」だった。

鏢があり、引き金のような部位を持っている。

握り締めると、特殊合金の刀身が伸びる。強度は魔導機鎧アサルトフレームの装甲よりは期待できないが、少なくとも怪異ホロヘイブの攻撃くらいは防げる代物だ。

「残りは八か。全部斬り殺せるか？」

『主様ならきつと。次の接近に合わせてこちらも行きましょう』

「了解、ナビゲートよろしく」

剣を構えた所で前方の四機がこちらへ接近、それに合わせて背中の翼に力を込める。

遠距離にはもう四機の影ファントムが重火器らしきものを用意している。先程からあの後方支援のお陰で隙を突けなかったが、至近距離での格闘戦なら援護射撃もし難いだろう。誤射してくれると嬉しいが。

『欲を出してはいけませんよ？主様はアリアスのように剣を振るえる訳ではありませんから』

「解ってるよ。一機ずつ、丁寧にな」

間合いに入り込んだ先頭の一機へ剣を振り下ろし、縦に両断する。

やっぱりオーリスのようにはいかない、か。

解っては居た事だけど、あいつかなり凄かったんだな。こうして近接格闘戦を実際にやってみて、あの華麗なまでの剣舞がどれ程凄まじい物であったのか漸く解った。

「……………」

もう一つ狙いを定め、今度は装甲の繋ぎ目を狙って突き込む。

しかしこれはこれで難しく、少しズレた位置に切っ先は突き立った。

「……………俺には向いてないな、こりゃ」

それを引き抜いて横一文字に斬り払うと、半ばまで寸断された影ファントムを下へ蹴り飛ばす。地上まで落ちてくれれば良い。

「あと六……………」

『射撃、来ます。ガトリングとレーザータイプがそれぞれ二つずつです』

「はいよつ、と」

こちらを誘うように距離を離す二機の影ファントムに合わせて、後方から二種類の砲撃が飛んでくる。

あれに釣られていれば今頃蜂の巣だったんだろう。

もしラプラスであれば、あの弾幕すら斬り拓いてみせたんだろうな。

弾幕の射線上から逃れ、左手にラディアントマグナムを展開。それを照射しつつ薙ぎ払うように手首を回す。

怪異ホロウヘイズとは比べ物にならない装甲強度を持つ影ファントムには、照射モードの攻撃ではさしてダ

メージにはならない。

だが、こうして牽制程度には役に立つ——

「っ……っ？」

——突如感じた違和感を元に、俺は突進しようとしていた体を留める。

この感覚……あの機体。

魔神アンリミテッドの気配だ。

『記録にある反応……バルバトスです。援軍と見て良いでしょうね』

「……遅いな」

『まあ、あまり辛辣にならないであげてください。本人は大急ぎで来ているみたいですよ。』

リタがそう言った直後、視界を黒い疾風が横切っていた。

その軌道上に居た二機の^{フロントム}前衛影が爆ぜ、次いで瞬く間に後方の四機も殲滅された。

やはり圧倒的だ。これが魔^{アンリミテッド}神、バルバトスの力。

「……つと、こんにちは陽彩くん。ごめんね、世話掛けて」

「まったくだよ、バルバトス。何してたんだお前？」

爆発の残滓から目を逸らすと、バルバトスは俺の目の前で静止した。ブースターも無いのにこの速度、更にあの制動力。^{アンリミテッド}魔神は一体どんな原理で飛んでいるんだろうか。

それから俺を真っ直ぐにその視界に収めると、申し訳無さそうな声を出した。

そんな彼女に、つい悪態を付くような言葉遣いになってしまふ。だって本人が言った事を守ってくれないし。

「あの連中、他の所にも出てたからさ。とりあえずアリアスⅡヴェインは放置して良いと思っただけけど、あのアルビノの娘は危なかったんだ」

「……アリサが？」

アルビノと言うと他に思い付かない。とは言え、アリサがそう簡単に追い詰められるとも思えなかったが。

「ごめん、名前までは解らないんだ。えっと、灰色の機体だったよ」

「姫様なら大丈夫だと思うけど……」

ほぼ確定だ。灰色と称されるカラーリングの魔導機鎧アサルトフレームはグレイエンプレスしかありえない。

アリスの方に行っていたなら遅れるのも仕方無いか。八つ当たりもこれくらいにしておこう。

「でもごめんね、後回しにしちゃって。陽彩くんならきつと大丈夫だと信じられたからさ」

「……狡いやつ」

「何とでも言えば良いよ。他でもない本心なんだから」

……卑怯な。

そういう事言われたら、八つ当たりして悪かったなって思ってしまう。この罪悪感も読んだ上での言動なんだろうか。

もしそうなら、こいつかなりの策士だけど……。

「ところで陽彩くん、今日は時間あるかな?」

「はあ? 予定は特に無いけど……」

「そっか、良かった。じゃあクレイドルの管理者に伝言を頼めるかな」

はて、伝言と来たか。

しかしゼロに伝えるべき事ってなんだろう、何か重要な事なのかな？

「アスタロトはもう動き出している。アリアスⅡヴェイン……ラプラスは墮ちた。そう伝えて」

バルバトスがそう言った瞬間に、血の気が引いていくのが解った。

頭が真っ白になっていく。

それはこの言葉の衝撃だけではなく。

すぐそこに、計り知れない程の殺意を放つ存在が居る。

「……………は？」

「——早く。クレイドルに戻って、陽彩くん」

俺に背中を向けると、バルバトスは大剣を引き抜くようにその手に顕した。

それを半身の姿勢で構えると、はつきりとした殺意を放ち始める。

唐突に過ぎる展開は俺を置き去りにしようとするが、俺はこれでも契約者テストメンタの一人だ。

相手が例えラプラスを上回る存在であつても、少しくらいは手伝える事が——。

「俺も戦える。足は引つ張らない筈だ」

「だとしても。……いいや、はつきり言おう。今の貴方キミは決して弱くはない。だけど、今はまだ」

次の瞬間に、バルバトスは大剣を振るう。

その軌道はまるで視認できず、この前の怪異ホロウヘイヌとの戦闘では全く本気を出していなかった事が伺える。

「……まだ、貴方キミに勝ち目は無いんだ。アスタロトは、今の貴方キミで立ち向かえる相手じゃない」

たった一度の剣閃で四つの何らかの攻撃を弾き飛ばしたバルバトスは、そのまま大剣を構えに戻す。

「——行け、御童陽彩。今の貴方キミに……きみにできる事を、成せ」

「……………ごめん、バルバトス。借りは絶対に返す」

「良いさ。これは元々俺達わたしの喧嘩だ。それに人類を巻き込んだのはアスタロト。貴方キミも俺わたしも魔神も人類も、みんな被害者でしかない」

「だとしても。……オーリスは、無事なんだな？」

「心配しないで。きつと生きてるから」

そうだと祈るが。

一先ずここはバルバトスに任せておこう。

……正直に言おう。怖気づいた。

あれでは俺は足手纏い……いや、そうですらない。道端の小石のように、意識さえも

されないだろう。

バルバトスとの実力の乖離はそこまでのレベルなのだ。あの一閃のみで俺にそれを見せた彼女は、実際化け物と称して良い程に強い。

「リタ、ゼロに報告！バルバトスに預けて俺は戦域を離脱する！」

『了解です、主様。……思い詰めないでくださいね』

ただひたすらに祈りつつ。

俺は、後ろで響いた高らかな金属音を聞いて。

振り向かないように必死に、翼へ力を込め続けた。



漆黒の全身鎧、アサルトフレーム魔導機鎧に似たその姿は、どこか生物のような印象を受ける。

その右手に携えた大剣は、切っ先が微かにも震えない。それは彼女の實力の高さを示すのと同時に、決まりきった覚悟の硬さを示していた。

「……姿を見せなよ、アスタロト」

「まあ、バレてしまっていたのね。それなら仕方無いわ」

可憐な少女のような声。

その持ち主は、バルバトスの目の前に現れた。

金の髪は肩まで伸び、紫の瞳は虚ろに世界を映し込む。

二対の翼を背中に広げ、生身のままに彼女は空を踏み締めていた。

「……気持ち悪いな、それ。一体どれだけ「喰って」きた？」

「さて、数えていない事は解らないわ。えっと、なんて言ったかしら……」

人差し指を唇に当てて考え込む仕草を見ると、彼女はすぐに思い至ったらしい。

邪気の無い純粋な笑顔に乗せて、答えを投げ放つ。

「そう、これよ。バルバトス、貴女は今までに食したパンの枚数を覚えているの？」

「……生憎と俺は和食派なんだ。確か、三十二万六千と二十七、だったかな」

「……あら、おかしいわ。その答えはちよつと予想外ね」

何という事は無い、今のバルバトスはアンドロマリウスを継いで最強の存在として魔神を統括しているのだ。

その座に着いたものには、世界を監視する能力を与えられる。監視できる範囲に限界は無く、それは過去すらも容易に見る事ができる。

例えどんなに馬鹿らしい事であっても、現在のバルバトスに対して隠し事という物は成り立たない。

だから、あの少年が恐怖を覚えていた事も、手に取るように解る。解ってしまう。

——怖がらせたこと、謝らないとね……。

内心で一つ反省すると、彼女は大剣を握り締めた手に更なる力を込めていく。

魔神を魔神足らしめるその力。

嘗ての人類が「魔力」と呼んだ、世界を塗り替える力。

「もうお話の時間は終わり？寂しいわ、これでも昔の仲間のように」

「それは全ての生きとし生ける者への侮辱と捉えて良いのかな？」

「辛辣ねえ……」

大剣が光を帯びる。

運命という名の、存在の器を形に成した物。バルバトスのそれは、並の生物では対処できる領域には無く。

「じゃ、少しだけ本気を出すわ。精々足掻いて頂戴ね？」

同時に、それと互角に戦う事が可能なアスタロトの強さを証明している。

——勝率は五分。長期戦ともなれば、あの毒は強い。

刹那の隙に、バルバトスは思考を走らせる。

それはとても、勝つ為の戦略を練っているとは言えないが。

—— そうなった場合、わたしが生き延びる可能性は限りなく零に近い、けど……。

研ぎ澄ませた刃は、最早鈍りはしない。

その太刀筋に迷いは無く、大剣はその重量感とは裏腹に鋭く大気を裂いた。

—— “確率論に、ゼロは無い”……この世界には、何だつて有り得るんだから。

親友^{ゼロ}の言葉に背を押され、第八の魔神は虚空を翔ける。

その先に死線のみが待ち構えていたとしても、彼女は止まらない。

退いた先にも進んだ先にも、どの道バルバトスには敗北か死の二択である。それならば、せめて前に。

一歩でも、前に。

その決意が、大剣をまた一つ加速させた。



クレイドルに戻り、直ぐ様ゼロにバルバトスからの伝言を伝える。

そして、恐らくはバルバトスがアスタロトと交戦している事も。

すると彼女は俺に一言だけ残してから、脇目も振らずに駆け出していった。

行き先は解らないが、それよりもオーリスが気に掛かった。ゼロが言い残した事も含めて、俺はすぐにクレイドル01へ向けてトリスリッターを翔び立たせた。

「……リタ、ラプラスの反応は見えるか？」

『はい。向こうです。それからもう一つ。ラウムシュトウンデの加速力ならば、クレイドルの防護バリアを擦り抜ける事も可能です』

「なんだ、これも役に立つんだな」

視界の先に余りにも巨大な飛行建造物が見えてきた所で、俺は背中に新たな重みを受ける。

それが後ろへ向けて焰を吐き出せば、機体は凄まじい加速を以て景色を置き去りにしていく。

そのままバリアを抜け、俺はラプラスの反応目掛けて更なる加速を試みる。

機体のリミッターが何やら騒がしいが黙らせ、速度を殺さずに装甲を解除する。

アサルトフレーム
 魔導機鎧が粒子と化して消えていく光景は最早見慣れたもので、それを横目に俺は生身で駆けていく。

この先は——— 出撃ゲートに併設された、医療施設だ。

「……ここは部外者の立ち入りは禁じられています。直ちに立ち去らなければ、あなたは———」

感情という物を感じられない受付の女の言葉を遮り、こちらの素性と要件を叩き付ける。

「部外者じゃない！俺はトリスリッターの契約者だ！ラプラスは、その契約者はどこに居る！」
テストメンタ

「……契約者の方で在りましたか。これはとんだご無礼を———」
 そんな事はどうでも良い。

「良いから言え！オーリスはどこに居る!?!」

「アリアスIIヴェイン様でしたら最奥のナノマシンベッドに」

そこまで聞けば十分だ、もうこの女に用は無。

最奥、と言ったが。ナノマシンベッドとなるとそれなりの設備が必要になる。つまりは、この施設の中心部にある可能性が高い。

そして先程確認した構内図からして、間違いなくオーリスはこっちに———俺の行

く先に居る。

『主様、ラプラスの反応、近付いています。先の角を曲がり、進んでから右手の部屋です』
「解った、ありがとうリタ」

手短かに礼を言つてから、俺はまた急ぎ足でリタの示す方向へ進む。
時間にして、五分も掛からなかつただろう。

俺は、とある一室の前に辿り着いた。

『……間違いありません。彼女はここに居ます』

「……無事だと、良いけど」

軽く切れた息を整えてから、俺はその部屋のドアをノックする。

すると、オーリスじゃない女性の声が返ってきた。

「はい、どうぞ入ってください」

「その声……カーライルさん？」

どうして……と、思ったが。

よく考えてみればおかしい事じゃない。本人が言うには、姉妹のような関係らしいのだから。

「……見舞いですか？随分と慌ただしいですね、御童陽彩」

「ちよつと用事があつたもんで。オーリスは？」

世間話も挟まずに尋ねると、カーライルさんは無言で視線を俺から逸らした。

その先を見遣ると、カプセルとベッドを融合させたような物に液体が満たされ、その中で一人の少女が眠りに就いていた。

「……外傷は特に見当たりませんでした。ただ、機体の負荷が高過ぎた」

「後遺症は？」

「それはまだ何とも言えませんね。あの女……アスタロト、と名乗りましたか。それと交戦してからずっと気を失っています」

「……なんでそんなに細かく知っているんだろう。もしかして一緒に戦っていたんだろうか。」

「予想通り、と言いましょうか。私はオリジナルの後方支援に当たっていました。……でも、私は何もできなかった」

「……アスタロトは、そんな化け物だったんですか？」

あのオーリスが、何もできないままでやられたとは思いたくない。

「……でも、あの時のバルバトスの殺意。彼女にあそこまで本気を出させるような存在となると、俺達にどうにかできる事には思えないのも、また事実だった。」

「オリジナルは善戦しました。ですがあれは、生物の範囲には収まっていない。……同じ人外だから解ります。あれは他者を喰らって生きる獣。命を強さに変換する、生粋の

化け物です」

「……そう、ですか。……でも、俺は貴女が人外には見えませんけどね」

クローンだろうが何だろうが、カーライルさんもまた一人の人間だ。アスタロトとは違う。

だつて、そうでなきやあんなに悔しそうな表情はできないだろうから。

「……僕の身の上話など、興味は無いでしょう。……いいえ。私はオリジナルとは違います、聞かれてもいない事を話す程、社交的じゃない」

「いつか聞かせてもらえると嬉しいですけど。……何にせよ、オーリスが無事で良かったです。いつ頃起きるとかは解りますか？」

「……恐らくは今日中にでも。このまま待つていれば、そう遠くない内には」
となれば俺はここで待つていたい、けれど。

それだとカーライルさんにも迷惑かもしれないな。それなら俺は、そこら辺で時間も潰そうか。

「……御童陽彩」

「はい、何ですか？……あと陽彩で良いですよ」

わざわざフルネームで呼んでいるのを見ると、なんだか言い辛そうに見える。

それもあつて意見すると、彼女は素直に頷いてくれた。

「ならそのように。……一人には慣れていますが、私とて孤独に待つ事は退屈に感じます」

「……えっと」

もしかするとこの人は、俺が思うよりもずっと優しい人なのか。

そんな俺の予想は、呆れたような視線と共にため息を零した彼女自身が裏付けてくれた。

「鈍い人ですね。話相手になれと言っているのです」

「……カーライルさん」

やっぱり、優しい人だ。そういう所はオーリスに少し似ている。

アルトリウスに似ているのかは、解らないけど。

「どうせならアルティエと呼んでください。家名に当たる名前は、あまり好きじゃない」

「それじゃあ……アルティエさん、と」

「それから敬語も。畏まられるのは苦手ですから」

そうは言うが、彼女はその態度を崩そうとしない。

とはいえ自然体に見えるから、アルティエさんにとつての普通がこれなのかも。

「……私のは癖です。特に害も無いので、直すつもりはありませんが」

「はあ……育ちが良いんですかね？」

話相手になれと言われたから、月並みでも答えを返さないといけないだろう。そんな風に考えた俺に、何気無く放たれた言の葉は、余りにも予想外だった。

「いえ、環境は劣悪でした。でも、兵器は殊勝でないと困るでしょう?」

「……兵器、つて……」

「……こちらは悪い癖ですね。オリジナルから移されてしまったようです」

やっぱり姉妹なんだろう。アルティエさんは寡黙に見えたが、意外と喋ってくれる。

「ここまで来たからには身の上話っていうものにも興味が湧く。一応、聞いてみようか。」

「……アルティエさんは、オーリスと同じだったよな。アルトリウスのクローン……」

「ええ、私は失敗作ですが。クローンと言っても試験管から生まれてきた訳ではないのですよ?」

「人工受精か何か?」

「殆ど正解です。……まあ、人の胎から生まれた訳でもないのですけれど」

クレイドル01って結構黒い実験とかしてるよな……。

魔導機鎧アサルトフレームに代わる戦力として生体兵器を作っているって噂もあるし、アルトリウスのクローンはその一環なのかもしれない。

そんな俺の考えを見透かしたように、アルティエさんは目を細めた。

「……この付近に、一つ研究所があります。できるだけ、近寄らないように」

「オーリスが起きたらすぐに帰るつもりだから大丈夫だよ」

「なら、良いのですが。……誰にも起動できなかつた第七の機体、トリスリッターを起動させた人間……陽彩、あなたには計り知れない程の利用価値がある。不用意に01を彷徨わない事です」

薄ら寒い話だ。確かに俺は現状ではトリスリッターを唯一起動させる事のできる契約者^{テストメンタ}ではあるが。

俺が居なくてもトリスリッターは戦える。その為のリタであり、その為の疑似人格採用試験機なのだから。

だから、俺に付随する価値はそこまでではないだろうと高を括っている。もうしばらく探せば、俺以外にもきつと見つかるだろうし。

「……自分を過小評価するのはあなたの悪い癖と言えます。私が見た限りではありますが、あなたは決して弱い人間ではない。……私と違って、あなたはあなた一人しか居ないのですから」

「代えが効かないのはアルティエさんも同じだよ。寧ろシエキナーを使いこなしているんだから、希少価値の話ならそっちの方が上だと思う」

「それは……いえ、これはあまり意味の無い問答でしたね」

向こうは折れてくれる様子はない。かと言ってこちらも曲げるつもりは無いけど……。

意味も無く意地の張り合いなんかしていても仕方無いな。

話題が切れてしまい、気まずい沈黙が数分程続いた。

それを破つたのはこの部屋の主、他ならないアリアスⅡヴエインその人だった。

「……やあ、陽彩。アルトも、珍しくお見舞いに来てくれたんだ」

ナノマシンベッドに満たされていた液体が排出され、カプセルのようになっていた天井部分が開かれる。

ゆっくりと外された拘束具を蹴り飛ばすと、オーリスは勢い良く身を起こした。

元気そうで良いが、先程まで水中に居たせいで着ている服が肌にびったり張り付いている。つまり大変目に優しくない。

「ちよつと不甲斐ないところ見せたね、アルト。次はきつともう少し上手くやるよ」

「……なら良いのですが。不調は無いようでしたら安心しました」

アルティエさんの言った通り、確かに外傷の類は無い。後遺症も無さそうだし、俺も一安心だ。

「私は特にオリジナルに用事があった訳でもないのです、後は好きにどうぞ、陽彩。何かあれば呼んでください」

「あれ、もう行っちゃおうの?……恥ずかしがり屋さんだね、アルトは」

足早に立ち去ろうとしたアルティエさんが足を止める。半分だけ振り向き、オーリスへ睨み付けるような視線を送っている。

「……何がですか」

「気付かないとでも思った? 陽彩の事、随分と気に入ったんだね」

……何か、嫌な予感がする。

そのままこいつに話をさせれば、アルティエさんとの間に決定的な溝ができてしまうような。

「……あなたはいつも、そうやって……!」

「オーリス、病み上がりだろ? 無理しないで寝てろ」

彼女の声を遮って吐き出した声は、自分で思うよりもずっと冷たかった。

震えた金色の瞳が、恐る恐るこちらを見遣る。その髪に手を置いて、またベッドに横にさせる。

「アルティエさん、今日はありがとう。話せて楽しかった」

「……………そうですか」

こちらに向けていた視線を前に戻して、アルティエさんは病室のドアへと歩みを再開した。

病人や怪我人にも開けやすいように設計されている引き戸が、軽い音を立てて開かれた。

「陽彩」

「ん？」

「……いえ。君と話せて、僕も楽しかったです。ありがとう、とは、こういう時に使う言葉なのでしょうね」

全く思っても見なかった言葉の連続に何も言えないでいると、彼女はそのまま外へ歩いていった。

義足の硬質な足音が離れていき、角を曲がったらしく聞こえなくなった。

「……意匠返し、か」

「オーリス？」

「いや、何でもないよ。わたしも考え無しの愚か者だね。今の言葉がアルトにとつてどんな意味を持つのか、考えてなかった」

やっぱり、あの流れは良くない物だったんだろう。落ち着けばそういう事にも気が配れるクセに、さては起き抜けに見舞いが来てたのが嬉しくて何も考えてなかったなこいつ。

「ごめん陽彩、君が止めてくれなかったらわたし、またあの娘と喧嘩してた」

「喧嘩で済めば良いけどな。……こんな時間か。病室にあまり長居するもんでもないな」

「結構長い時間寝てたんだね、わたし。体が鈍らないか心配だな」

特に荷物らしい物も無いが、一応忘れ物を確認。

「このまま行つて問題無さそうだな。」

「俺も帰るよ。じゃあな、オーリス」

「うん、またね陽彩。来てくれて嬉しかった」

「そりゃ良かった。折角だからゆっくり休めよ」

俺の言葉に頷くと、彼女はまたベッドに身を委ねた。

随分と寝心地が良さそうだな、なんて考えてから、俺は病室を出た。

『……もつと話したい事があったんじゃないですか、主様?』

施設の出口へ向かつて歩く俺に、リタが問い掛けてくる。

「いや、今は良い。アスタロトについても、バルバトスにまた会った時にでも聞けば」

『なら良いんですけどね。主様は自分の要望を抑え込む事がありますから』

囁るように彼女は笑うが、果たしてその言葉の真偽は如何に。

俺は自分の望みを抑えるどころか、その望みすらもよく解らない人間だから。

「そうか?俺は結構、欲望には正直な人間だと思ふよ?」

『それなら、そういう事にしておきましょう』

リタとはずっと一緒に居るが、いつまで経っても勝てそうにない。

少なくとも、こうして話している時には、先手を取られっぱなしだ。

『……誰か居ますね。義肢が四つ……アルティエでしょうか』

「さつき帰ったと思っただけだ。忘れ物でもしたのかな」

確かに、廊下の先に人影が見える。髪は銀色だと辛うじて判別できるが、流石に瞳の色までは解らない。

それに、全体的な背格好が違う。義足を変えれば背の高さは誤魔化せるだろうが、そんな事をして彼女に益があるとは思えない。

『……違う。四つなんかじゃない、あれはもつと全身に……！』

「リタ？」

『主様、あれはわたし達の知己ではありません。全身が造られている……まるで、何かの制御をさせる為に設計されたような……』

そういえば、昔ゼロに聞いた覚えがある。

何かのアニメだか漫画だか見たんだと思うが、人をアサルトフレーム魔導機鎧と直接繋げる事は可能なのかという疑問をぶつけた記憶がある。

答えは肯定だった。人体接続型有機デバイス、とかいう設計思想そのものはあり、そ

れを利用した機体は、作り物の肉体でも生身のように稼働させる事ができるとか何か。

『こつちに向かつて歩いてきます。できるだけ刺激しないように、素通りしましょう』
「賛成。ちよつとお近付きになりたくない」

互いに通路の端に居る為、ぶつかるような心配は無いが。

それでも、何というか、言い知れない不気味さのような物を感じていた。

「……ねえ」

背中越しに掛けられた声に、足を止める。

擦れ違つて一安心かと思えば、まだ少し早いらしい。

振り向くと、そこにはオーリスやアルティエさんによく似た少女が居た。背は少し低いから、並べればきつと妹のように見えるんだろう。

「……御童陽彩っていうのは、あなた？」

「……そうだけど」

どうして皆して俺の名前を知っているのか。しかも一方的に。

クレイドル07ならそれも解らないでもないんだが、生憎とここはクレイドル01。俺を知っている人間なんて数える程も居ない筈だ。

「ふうん……？」

「えっと、何か用事？」

「……いいえ、少し気になっただけ」

左手をポケットに突っ込むと、そこから何かを取り出した。

それが小さく折り畳んだ紙だと気付く前に、彼女はそれを投げ渡してきた。

慌てて受け止めると、少しだけ端が折れた。

「……わたしはアーガナ。アーガナⅡディーヴァ・レイリッター。きつと必要無いだろうけど、解りやすい武力が欲しかったら頼ってね、トリスリッターさん」

「なんで、それを……」

「……少しくらいは調べるよ。姉さんが世話になってるみたいだし」

彼女は——アーガナは、再び進行方向へ向くと、何事もなかったかのように歩き始めた。これ以上の会話はしないつもりらしい。

とはいえこちらはまだ聞きたい事がある。次いつ話せるか解らない相手に、勝手に行かれたら困るんだが。

「待てよ。随分と忙しそうだな？」

「……わたしにはあまり自由な時間が無いから。邪魔しないで」

「そう言うな、幾つか聞かせてくれ」

その銀色の髪……そして、特徴的な金色の瞳。きつとアーガナもまた、オーリスやア

ルティエさんの関係者だ。

「お前はオーリスと……アリアスⅡヴエインとどういう関係なんだ？」

「それを言う必要は？」

少しだけ振り返って睨み付けてくる様は、アルティエさんのそれとよく似ていた。

「いいや。単に俺が気になっただけだ」

「……あの人はわたしの姉。生い立ちは知ってる筈だから、それで察して」

予想通りという事で良いのだろう。彼女はオーリス達と同じくアルトリウスのクローンであり、恐らくは魔導機鎧アサルトフレームに合わせた調整がされている。リタが何か言っていたのはそれだろう。

「やっぱりか……。それと、他には同じ境遇の人は居るのか？」

「居ない。三番……わたしで最後」

「そっか……。ありがとう。それだけ聞ければ良い」

他には居ない、か。

打ち止めとなった理由は複数考えられるが、別に俺がそれを気にしていても仕方無いだろう。

気になった事は他にそんな境遇の人間が居るのかどうか、その一点。

「引き留めて悪かった。じゃあな、アーガナ」

今度は俺が身を翻し、その場を後にする。

受け取った紙を開いて見ると、中には何かの番号が記されていた。予想だが、アーガナへの連絡先だろう。こちらが取れる手段は向こうの予測の範囲内の筈、つまりは俺が所有している携帯端末からこの番号を使えば連絡が取れると考えて問題は無いだろう。

どうしてこんな物を渡してきたのか……そんな予想は後でもできる。

今はとりあえず戻る事を考えて、俺はクレイドル01のゲートへ向かった。

第七話

何も無い空。

邪魔をする物の無い場所で、二つの大きな力がぶつかり続けていた。

当然そうすれば周囲は消し飛ぶが、幸いにも周辺には雲しか無かった。

その為、ここでは厚い雲海が晴れ、地表を見渡せるようになっていた。

その景色は実に壮観で、どんな人間であつても目にすれば感動の息が漏れること間違いない無し、だった。

生憎と、そこに居たのはどちらも人間ではなかった。

「意外、ね。ここまで耐えてくれるとは思わなかったわ」

「よく言う……手を抜いたくせに」

「だって貴女を殺したくないもの。でも、この称賛には嘘は無いわ。幾ら私が加減したとは言え、生きているだなんてちよつと予想外」

ひしゃげておかしな方向へ捻れ曲がった左腕を無理矢理戻し、バルバトスは大剣を構え直す。

既に満身創痍の様相を呈していたが、彼女はまだ止まるつもりは無いらしい。死に体

でも、瀕死の体を駆つてもアスタロトの喉笛を食い千切ろうとする意思が見える。

「まだやるの?」

「ああ、まだ。お前の首を搔つ捌くまでは、俺は止まるに止まらないんでね」

「物騒ねえ……。それに、意味も無いわ。貴女の力じや私の守りを突き破れない。まさかここにアンドロマリウスが来るとも思えないし、貴女は詰みよ」

至極当然の事実を言つてのけたアスタロトに、耐えきれないようにバルバトスは笑う。

「……はは」

「何がおかしいの?」

何もおかしい事などない。ただ、自分が思つたよりも恵まれた存在だったと今更ながらに思つただけの事。

「いや、何さ。フラグつて知ってるかい?」

「旗のこと?」

「まあそうなんだけど、俺が言つてるのはちよつと違くてね」

遠くに懐かしい光が見えた事を確かめてから、彼女はそつと握り締めた大剣に魔力を注ぐ。そもそも、全力で叩き付けないと当たりすらしなのだから、実力の差とは残酷だ。

かつて御童陽彩がバルバトスに感じた絶望にも似た感情を、今は彼女が感じている。

「フラグつてのは、それから起こる特定の状況を引き起こす言動や行動の事だ」

「……つまりお約束のトリガー……つてこと？」

「概ねそれで正しいと思うよ」

十分にアスタロトに届き得るまで強度を確保してから、空を踏み締める足に意識を向けた。

まだ翔べる。まだ剣を振るえる。

それならば、まだ止まらない。

「つまりは——」

「玉砕なら辞めておきなさい」

冷やかな視線を無視して、バルバトスは虚空を蹴り飛ばす。

急激な加速に景色が弾け飛び、音速を超えた証に乾いた音が響く。

それにすら反応してみせたアスタロトの長剣が、バルバトスの首を落とすように動き始める。

「——チェックメイトの宣言は既に為されたんだよ、アスタロト」

そして、彼方より放たれた一条の光が、アスタロトの背中に突き刺さった。

「……?!? 私の防御を抜いた……まさかっ」

慌てて振り向こうとする彼女に、バルバトスの大剣が十分な驚異となって襲い掛かる。

身動きすらも抑制された状態で、彼女は長剣によってそれを受け止めた。

「来たって言うの？アンドロマリウスが、たかが魔神一匹の為に……！」

「魔神一人、ではなく」

突如目の前に現れた白磁の装甲に面食らう隙もなく、そのままアスタロトは吹き飛ばされた。

その先で再び熾天使の猛攻に晒され、彼女の二対の翼の一枚が犠牲になる。

「たった一人の友達の為に」

白亜の天使がその手に携えたのは、ラディアントバズーカと呼ばれる魔導光線を吐き出す兵器だ。

だが、セラフの性能に合わせて破格の調整が施されており、その威力は一射でクレイドルの防護バリアを貫く程。アスタロトの展開した守護程度なら片手間にも貫ける。

「やあ、世話を掛けるね、ゼロ」

「自覚があるなら先に頼って。わたしは君の為であれば助力は惜しまない」

「そりゃ悪かった。迷惑かな、と思ってるね」

「……昔から変わらない。ばか」

「酷いなあ」

互いを理解している遣り取りを済ませると、セラフは左手の超兵器を粒子化して、その代わりに右手に一つの剣を取り出す。

「アスタロトにあれば勿体無い。これで片を付ける」

「……大層な自信ね、アンドロマリウス。五十の魔神を喰らった私に、最強を退いた貴女が太刀打ちできると？」

「勘違いをしている、アスタロト。それに気に食わない事も幾つか」

剣を振り払うような動作で構えると、視認限界を超えた速度でそれを振るう。

明らかに剣の間合い等ではない。ないが、アスタロトは全力で回避運動に移った。

すると、直前まで彼女が居た場所を中心に、歪んだ三日月型の斬撃が発生した。

青白いエネルギーの塊が虚空を斬り裂くと、そこには大気は愚か何も残ってはいなかった。

「まず、アンドロマリウスは既に居ない。ここに居るのは御童零、ただのゼロだ」

追加で斬撃を発生させれば、アスタロトはその翼を全力で傾けて回避する。そのまま狙った場所へ誘導するのは容易い。

「そして、アスタロト。お前が喰らったと言う魔神の力は、お前には使いこなせない」

正確には、魔神を取り込んだは良いが、内部で殺しきれていないからその力を引き出

せない、というのが正しい。しかし律儀にそれを教えてやる必要もなければ、ここで逃がす理由も無い。彼女は絶えず斬撃を放つてアスタロトを追い立てる。

如何に相手にならないとは言つても、怪異等ホロウヘイヌという存在を以てして人類に攻撃を仕掛けてきた時点で、アスタロトはゼロの敵だ。セラフの銃口が今まで彼女に突き付けられなかったのは、単純にその行方を掴めなかったのが大きい。

「言わせておけば散々に……っ！なら受けてみなさい、私が奪つてきた力を！」
翼のように開かれた無数の剣がゼロに向けて放たれる。

しかしそれは隣に控えていたバルバトスによって一つとして残らずに叩き落とされ、更に斬撃により反撃を受ける。

しかし翼をもう一枚盾にする事でそれを受け止め、彼女は嘲笑う。

「捕まえた」

そして、固定した斬撃から雷撃を逆流させる。

剣を軽く振つてそれを無効化したゼロだが、その判断は誤りだった事をすぐに悟つた。

「見せてあげるわ、アンドロマリウス。私が貴女憧れに追い付く為に背負つた物を」

——それは、星の加護を受けた光。

かつてはゼロを後押ししていた力が、今はどういふ事かアスタロトの背中を押してい

る。

斬撃を通じてゼロとの間に繋がりを作ったアスタロトは、その光によって自分を守りながら距離を潰していく。

「……バルバトス、下がって。今の君じゃ相手にならない」

「傷を貰ったのが痛いな……ごめん、ゼロ。力になれなくて」

「……良い。友達の敵討ちという、正当な理由が生まれる」

少しズレた答えを返しながら、ゼロは剣の柄頭を押し込む。

鈍色の刃から光が溢れ、刀身の延長を形成していく。

「真つ向勝負で私に勝てると思つて？ これでも私は、五十機の魔神の出力を持っているのよ……」

「関係は無い。わたしの力は、敵の力量に応じて開放される……」

一歩踏み出すような動きのあと、ゼロとアスタロトは互いの剣をぶつけていた。

刃物というよりも鈍器のような扱いに刀身が悲鳴を挙げるが、そんな事は知ったこつちやないとも言わんばかりに斬撃の応酬は続く。

「応じて、ねえ……っ！ 手を抜く言い訳にしては格好が付き過ぎやしなにかしら？……」

油断が過ぎるわ、アンドロマリウス！」

「……油断？」

振り抜かれた長剣に即席のレーザーブレードを叩き付けて、彼女は小さく笑う。

その意味を計り知る前に、アスタロトは直感のみに従って全力で後ろに退がっていく。

「いいや、断じて違う。……これは、余裕と言うもの」

「くっ……最強の座を譲っても、貴女自身が弱くなった訳じゃない、か……」

「そもそもわたしとは格が違う……諦めて、アスタロト」

「——諦める？私か？」

怯えと恐れから腰が引けていたアスタロトが、その一言で弾かれるように顔を上げる。

その紫の瞳には、一色ではない虹色の輝きが宿っていた。

「……認められないわ、そんなこと。私は、今度こそ貴女を……!」

バルバトスの真似事か、長剣に魔力を纏わせていく。

存在の器、運命の形。そう呼ばれる魔力というエネルギーは、基本的に持ち主の命の大きさに比例して強力になっていく。

そして、五十を超える魔神を取り込み、少なくともその魔力の総量だけは自身の物にしているアスタロトは、その一点においてゼロと——アンドロマリウスと比肩する。

「貴女という、私の憧れを超える——！」

ゼロの視界から消えるように移動すると、背後を取ってそのまま長剣を突き立てる。一瞬とはいえ圧倒された彼女の中に、驚愕は無かった。

「……思えば、聞いた事は無かった」

長剣の一撃を受け流して、レーザーブレードの刃を首筋に当てる。

手を引けばいつでもアスタロトを殺せる状況下で、未だにゼロは迷いを見せていた。

「結局、お前は……君は……どうしてわたし達を、裏切ったのか」

行き先を見失った長剣の刀身を空いた左手で握り締め、彼女は問う。

「ずっと聞きたくても聞けなかった、アスタロトの答えを。」

左の掌から血潮が流れるのも意に介さずに、彼女は更に力を込めた。

「……裏切ってなんか、ない。私は最初から、貴女達を味方だなんて思った事はないもの」

「嘘が下手なのは変わっていない、アスタロト。……その癖は直した方が良い」

「……やり辛いわ、貴女は」

逸らした視線を戻して、アスタロトはゼロの瞳を真っ直ぐに見る。

それに答えるように、セラフの外装が解除された。

「なっ……ゼロ、何して——」

「バルバトス、その傷を治す手立ては魔神側には無い。クレイドルに向かつて」
「え？でも、アスタロトは……」

「わたしもすぐに行く」

「……………解った」

アサルトフレーム
魔導機鎧と同じように、粒子と化して空気に溶けるように消えていく白亜の機体。

それを見送る事は無く、バルバトスはその戦域を離脱していった。

手負いの状態でアスタロトに対してできる事も無ければ、ゼロの言葉に従わない理由もまた、無い。

「……………良いの?」

「君はそもそも、わたしを殺す気が無い。それは最初から解っている」

「その見透かしたような目、苦手好きよ」

諦めたように笑うアスタロトに、ゼロは懐かしさのような物を感じた。

魔神として生きていた頃は、よく決闘の真似事らしき物を挑まれていた。その度に返り討ちになると、彼女はこんな顔を見せていたのだ。

「……………答え合わせをしよう、アスタロト」

その郷愁を振り払い、彼女は再び問う。

今度は、確信を以てして。

「あの日……セラフを襲うアルビレオという名目でわたしと陽彩を襲撃したのは、マルコシアスに化けた君だ」

「断定してるじゃない……それに、あの子は貴女が巻き込んだんでしよう?」

「……さあ」

アスタロトが襲つたのはクレイドルに安置されていたセラフの外装のみであり、それを勝手に迎撃したのはゼロだ。

更に言えば、陽彩はそれに巻き込まれた形である。

だがそれを全て置いておき、ゼロは次の問いを投げ掛けた。

「露骨に視線を逸らさないでよ、アンドロマリウス」

「二つ目。アリアスⅡヴェインを落としたのは君ではなく、君を騙つたベリアル」

「……そつちもお見通し、か。ついでに言えば、あの悪魔モドキ……影ファントムだったかしら?」

あれもベリアルの仕業よ」

わざわざゼロの解る形に直しているあたり、アスタロトからは優しさが抜け切れていない。

そういう所が「詰めが甘い」と言われるのだと、ゼロは指摘できなかつたが。

「それなら、何故君はこの段階で陽彩に仕掛けてきた。君を騙るベリアルと同時に動けば、どちらかが偽物である事は看破される」

「そもそも私、あれと協力してる訳でも無いから。向こうの計画を滅茶苦茶にしてやれば万々歳、ついでに私は貴女に挑んだだけ」

意外にぼろぼろと情報を落とす彼女に、自身の翼を漸く広げたゼロが怪訝そうな表情を見せる。

そんな自分の憧れに、アスタロトは幾分か儂い笑顔を浮かべた。

「解つてはいた事だけど、私の事は信じてもらえないのね。でも私、嘘は一つも……」
「君の発言は全てが真実だと解っている。でもだからこそ、それ故に解らない」

首筋から離れたレーザーブレードの刀身を消し去って、元の剣に戻す。

そもそもこれは実験中のギミックを乗せた試作品であり、本来ならトリスリッターに搭載してテストさせるつもりのも物だった。それを格納庫から引き摺り出して無理矢理に実戦に転用したが、あまり良い結果は得られなかったと言える。

「君がわたしの味方をする理由。ベリアルについても、ファントム影についても。内情を漏らすような発言をする意図が読めない」

「……貴女はいつも物事を論理的に考え過ぎなのよ。憧れの人の役に立ちたいと思つて、悪い？」

ゆつくりと手放された長剣を粒子に返して、アスタロトは笑う。

今度は儂さを感じさせる物ではなく、花が開くような綺麗な笑みだった。

「……君は……解らない。わたしには、何も」

「解らなくつても良いのよ。ただ、そういう物なんだって思ってくれば。……つと、お話の時間はもうお終いか。楽しかったわ、貴女との時間」

再生した翼を広げて、ゆっくりと距離を離していく。

名残惜しさを振り払うように暫し瞑目すると、もうそこに後ろ髪を引かれた少女の姿は無かった。

「幾つか忠告よ、アンドロマリウス」

「……忠告？」

「ええ。ベリアルが最初に落とそうとしているのは二番よ。精々全力で守る事ね」

「……君はこれからどうするつもり？」

「さあ、ね。私の役目は終わったもの」

マルコシアスの名を騙りセラフを襲う事で、早期に魔神への警戒心を持たせる。

統括局へ脅しを掛け、特使という形でバルバトスを送り出し、人類と魔神のコンタクトを取らせる。

フアントム

影を予定よりも早くに出撃させ、ラウムシユトウンデという新たな可能性を芽吹かせる。

ベリアルによってラプラスを退けさせ、陽彩に戦いへの意欲を呼び覚まさせる。

更に同時に襲撃を仕掛け、人類と面識のある魔神を引き摺り出して自身の存在と驚異を知らしめる。

——それだけ済ませれば、後はアンドロマリウスがベリアルへの対策を取る。

最後にバルバトスを引つ張り出したつもりが、ゼロ本人が出て来たのは完全に予想外だったが。それはそれで、アスタロトとしては望外なのだった。

「怪ホロウヘイス異に關しては既に私の手を離れた。もうあの子達は、止まる事はない。……無責任かもしれないけれどね」

「……ああ。本当に、相も変わらない無責任な奴」

「酷いわね、貴女は。昔はもうちよつと地に足付けて真面目に生きてたわ」

魔神としての権能が強引に融合された結果、本人の意思を無視して無作為に生命を産み落とした。

アスタロトはその胎盤を無慈悲に斬り落とし、完膚無きまでに破壊したつもりだった。

しかし、母に見捨てられた子の執念は余りにも深く、原理不明の再起動を果たして今も尚、造り物の白を生み出し続けている。

そんな現状を知る由もない人類は、ひたすらに戦い続ける。

全ての悪意の源が、アスタロトただ一人であるという致命的な勘違いをしたまま。

「さ、話の時間は終わりよ。また会いましょう、今度は戦場じゃない何処かで」

「……アスタロト」

「何かしら？」

翼を羽撃かせて大空の向こうへ飛び立とうとしたアスタロトを、ゼロは呼び止める。

アントロマリウス

魔神として、彼女への最後の通告。

「まだ君の罪は残っている。……償うまで、死ぬ事は許さない。また私の前から姿を消すのであれば……」

そこで一度言葉を切ると、セラフの外装を再展開し、左手にラディアントバズーカを構えた。

「今度は途中で辞めたりしない。……君を、殺す」

歪んだ決意を感じさせる声音で言い切って、ゼロは身を翻す。

そのまま飛び去っていく彼女に、アスタロトはそつと手を伸ばした。

届かない星に願いを託すように、少女はそつと眩きを零す。

「私の罪はきつと雪げない。でも、貴女なら……」

消えていく白亜に向けた掌を引つ込める。

それ以上は高望みという物だ。

「……できるなら、貴女の大切なモノを……私も、一緒に、守りたかった」

今度こそ翼は役目を果たし、アスタロトの姿は消えていく。

第二の揺り籠。ベリアルがラプラスを襲撃したついでに向かった、クレイドル02へ。



損傷、というよりも、半壊と言った方が正しいような有様の機体を見て、思わず声を漏らす。

「随分と手酷くやられたな、ラプラス？」

トリスリッターやグレイエンプレスとは違って、ラプラスに統制の役割を持つ人格は無い。そもそも剣を振る事しか考えていない機体が、何を統制すると言うのか。

「ああ、ここに居ましたか。陽彩さん、許可の方は降りました？」

「管理者は構わないと言っていましたよ。トリスリッター自身も否は無いと」
格納庫に入ってきた男性の声に返事を返しつつ、俺はそちらへ向き直る。

彼はクレイドル01の抱える技術者であり、ラプラスの設計者の子孫、らしい。
「契約者^{テストメンタ}」本人の是非についてはどうなんでしょうかね？」

「俺自身も別に嫌だとは思いませんよ。……大事に使ってくれば、それで」

「そうですか」

最後の方は機体に向けて喋っていたので、どうやら彼には聞こえなかったみたいだ。

ラプラスの周囲に展開された用途不明の機器群を弄りながら、彼は半ば独り言のように言った。

「それにしても僥倖でしたよ。ラプラスの修復に当たって、トリスリッターの予備パーツを使わせてもらえるなんて」

「これはクレイドル07からの技術供与の意味もあります。政治的な価値に関しては俺達の管轄外ですけど」

「全くその通りです。ま、上の方々が義理堅い事を祈っておきますよ」
だと良いが。

さて、あまり長居もしてられないけど……まだ時間はあるな。オーリスに挨拶していく程度なら何とかなる。

「んじゃあ、俺はそろそろ次の仕事もあるんで」

「忙しいんですね、契約者テストメンタの人は。ああそうだ、お嬢に声の一つでも掛けてやってください。前回の出撃から、少し落ち込んでるみたいなので」

「そのつもりですよ。そっちも仕事頑張ってください」

適当に返して、俺は格納庫を出る。

もうあそこに用事は無いし、挨拶も終わらせたらくレイドル02に向かわないといけない。運ぶ物がまだ残ってる。

『主様、二つ報告があります』

「嬉しい奴からお願いしようか」

暫く施設内を歩いていると、聞き慣れた電子音が頭の中に響いた。

オーリスに与えられている住居まではまだ移動に時間が掛かる。リタと少し話すくらいなら余裕があるだろう。

『ゼロからの連絡です。バルバトスを始めとした何人かの魔神がこちらの戦力として動くようです』

「……動くって事は、前提として、動かなきゃいけない事態が起きてるって訳か」

嫌な推測を裏付けるように、リタが続きを言う。

『その通りです。説明が難しいのですが……アスタロトの名を騙っていた存在が、クレイドル02を襲撃しようとしています。そしてアスタロト自身は、今回の襲撃とは関係無いとも』

「——こっちの戦力として動く魔神の中に、アスタロトも入ってる？」

『……っ。はい、バルバトス、アスタロト、ベリト、アンドロマリウスの四人、との事です』

ベリトとアンドロマリウスについては正体不明だが、バルバトスは顔も割れているので、彼女については置いておくとして。

アスタロトの真意が見えない。名を騙っていた存在、とやらに利用されていたのか。それとも心変わりでも起こして寝返ったのか。

前者ならば善性を期待できるかもしれないが、後者だとかなり不安だ。

「バルバトスが言っていた事からして、アンドロマリウスはたぶん……いや、良い」
その正体は、存外容易く推測できる。

魔神達はどうやら、旧時代の遺物である神話から名前を取っているらしい。七十二柱の悪魔、或いはゲーティアの悪魔。そう名付けられたとある書物には、現状知っている全ての魔神の名前が乗っていた。

故に、知りもしない筈の情報を知っていた事と、バルバトスがゼロを探していた事、そして彼女自身が語った過去のお伽噺。

よく吟味すれば彼女が何者なのかは理解できる事からして、俺は自分自身の発言を撤回した。

「ベリトってのは？」

『同じ魔神、だとしか言いませんでした。それ以上の情報は自分の目で見てほしい、と』
「いつものゼロか」

彼女は人に先入観を持たせる事を嫌う。己の目で見た事のみが真実だと、俺に教えてくれていた。

『報告はそれだけです。主様、どうしましょう?』

「ゼロからの依頼を勝手に蹴る訳にもいかない。先んじて俺が02に向かえるようにしたのには勿論理由があるんだろうし、さっさと行くよ」

『一声くらいは掛けてあげたらどうです?』

「……」

リタが言うのはオーリスの事だろう。

だけどもあ、悩んでいる時間も勿体無いな。

「悩ましいけど、考えるだけ無駄だな。通り道だし、寄つてく」

『なら心配はありませんね。トーリスリッター、いつでも出せるようにしておきます』

機体に関しては心配無し。リタに任せておけば不安は無い。

そういうえばアサルトフレーム魔導機鎧関連で思い出したが、ラプラスの修復はどれだけ掛かるのだろうか。

別に彼女が来なければどうこう、とは言わないが。

いつでも安心して前衛を預けられる存在というのは、居なくなつた時にこうも不安を掻き立てるんだと思つた。

「つと、通り過ぎる所だったな」

『考え過ぎは良くないですよ、主様』

その通りだな、と共感しつつ俺は備え付けられたインターホンを押す。

施設内に部屋を分けられている様子は、アパートとかマンションとかそういう物と思いきこさせる。

「オーリス、居るか？」

『陽彩っ？ちよつと待ってて！』

物音が聞こえたあと、ドアがそこそこの速度で開けられた。

外開きだったら即死だった。

「いらっしやい、陽彩。遊びに来てくれたの？」

「いや、少し通ったから挨拶に。あまり時間無いんだけど」

「時間が無い中でも合間を縫って会いに来てくれたんだねっ！」

「お前の都合の良い頭、ちよつとだけ羨ましいよ」

オーリスの頭お花畑フィルターはたまに欲しくなる。

さて、玄関先での世間話も、今日はたったの数分だけでタイムリミットが来る。

友人との会話なんて言う楽しい事は、時間が早く感じるというだけに考えていたが。

名残惜しく感じながらも、俺は出撃用のゲートに向かう事にした。

「もう時間なの？ほんとに忙しいんだね」

「今日は特に。それじゃ、行ってくるから」

手を軽く振って目的地へ体を向けると、背中から柔らかい物がぶつかってくる感触がした。

言わずもがな、人体の暖かき。平常より少しだけ早い鼓動が、彼女の内心を伝えてくるようだった。

「気を付けて、ね。わたし達の仕事に危険じゃない日なんて無いけど、何だか嫌な予感があるの」

「……お前の勘はよく当たるからな。了解、精々気を付けておくよ」

ゆっくりと離された両手の感覚を心に刻み、紐で結んだお守りに意識を向ける。

人類最強の女の子が作ってくれたお守りともなれば、彼女自身が感じた嫌な予感からも守ってくれるだろう。

クレイドル01のゲートから飛び立ち、02へ辿り着くまでは、俺はそう思っていた。

第八話

クレイドル02へと向かった俺を最初に迎えたのは、意外な事にアルティエさんだった。

わざわざ出迎えたりしないだろうと思っただが、よくよく考えてみると、初対面の時に来るなら歓迎すると言われていたのを思い出した。

「それで、運び屋紛いの仕事ですか？」

「ここに来るついでに。中身は俺も知らされてないから、きつと政治的な意味合いが強い物だと思うよ」

「……後で聞いてみましょう」

俺がアルティエさんに連れられて向かっているのは、彼女の自室だ。

出撃ゲートから繋がっている居住区の最上階に位置するその部屋まで、徒歩でだいた半数分掛かる。

機体の特性から基本的に一度出撃すれば長時間は戦場に居る上、緊急的な戦闘という局面が少ない為に、そんな位置に住んでいるのだとか。

本人が言うには移動が辛くて大変らしいが。

「それにしても、魔^{アンリミテッド}神ですか」

「眉唾もの、かな？」

「それは、まあ。当然でしょう」

「だよなあ。バルバトスはこっちに来なかつたらしいから信じろとは言えないけど、あいつらみんな化け物だよ」

単機で恐らくは人類の戦力の過半に対応できるというバルバトス、それと同格の存在が少なくとも十は居る。

更に、魔神達が悪魔の名前の数だけ居るといふのなら、最大で七十二もの魔神が存在する事になる。

アスタロトが多少喰つたらしいが、それでもその情報は驚異でしかない。

「いいえ。オリジナルの言葉を疑う訳では、無いのですが。……陽彩が怖気付いてしまいう程の存在というのが、私には解らない」

「アルティエさんは俺を買い被り過ぎだよ。貴女が思っているよりも、俺はずっと弱い人間だ」

「そうでしょうか？」

本心から疑問に思っているような表情を見せるアルティエさんに、俺は諦観から溜め息を零す。

きつと何を言っても、他人の言葉で軽々しく持論を引っくり返す人じゃない。それはよく解っているし、頑固ではあるけどそういう一面も彼女の持つ一つの側面だ。

「着きましたね。特に変わった所も無いと思いますが、寛いでいってください」

そう言ったアルティエさんに通されたのは、小綺麗でさっぱりとした部屋だった。

女の子らしい部屋かと聞かれれば首を傾げるが、男の大雑把な部屋ではない事は確かだ。あまり生活感が無いのも気になるが、シエキナーの特性を考えるとあまり帰ってくる時間が無いのかもしれない。

「出撃予定時間までは余裕がありますし、できる事ありません。焦燥するだけ無駄ですよ、陽彩」

「人の内心を当たり前のように読まないでもらえるかな……」

「今の君は解り易いんです。それだけ何かに怯えて焦っている事は自覚した方が良い」

アルティエさんの言葉に違和感を感じたが、結局それが何なのかは解らず終いだっ

た。そんな俺を適当な椅子に座らせると、彼女は手際良く紅茶を淹れて持ってきてくれた。

両手に持ったカップの片方をこちらへ差し出すと、そのまま俺の隣へ腰掛けた。

随分と距離が近い。オーリス譲りなんだろうか、この遠慮の無さは。

「ありがとう、ちよつと落ち着いてみる」

「そうですか。……味の保証はしません。他人に振る舞う機会は無かったので」

地味に話の脈略が繋がらない辺りも似ている。

とは言え、彼女の淹れてくれた紅茶は美味しかった。ここは似ていないらしい。

……あいつ、料理はできるのに、飲み物を自分で作るのが致命的に下手なんだよな

……。

「いや、美味しい。自信持って良いと思う」

「だと良いのですが。君は世辞が上手ですからね」

少し呆れたような表情でそう言ったアルティエさんに、俺の中で形にならなかった違

和感が漸く姿を見せた。

彼女の二人称が変わっている。親しげな呼び方をするから、変に感じたんだ。

「……あつ」

「どうかしましたか?」

「あ、何でもないよ。ちよつとした違和感の正体に気が付いただけ」

まあ、別に何か問題があった訳でも無いし、俺からは言わないという事にしておこう。

どうやら自覚も無いらしいし、距離の取り方が独特な人の接し方はよく知っている。

そこに聞いただけはあの阿呆に感謝しても良いかもしれない。

「違和感、ですか……？今日の僕はどこがおかしかったでしょうか」

「また一つ。おかしいってよりも、それが貴女の素顔なんだと思うよ。気にしないで、アルティエさん」

普段は仮面を被っているような人の素顔を見れるのは、案外楽しかったりする。それが彼女のような掴めない人であれば尚更に。

誰も知らない側面を独占できる気がするというのは、思いの外大きな優越感をくれる物だ。

そう思いつつ紅茶の無くなったカップを置いた俺に、彼女は首を傾げていた。

「素顔、ですか。久しぶりに言われました、そんな事」

「そう？交友関係よく知らないけど、オーリスなんかは土足で人の内心に踏み込んできたりしない？」

「オリジナルの事をよく解っていますね。でも……彼女にはよく、私は何かを演じているようだと言われます」

「……そりや、そうだろうね」

無意識だから質タチが悪いと言うべきか、それとも気付かないで居られる事を幸運だと言うべきか。

俺からすれば厄介でしかない。人の機微には疎い人間だから、あまり演じられると困

る。

「やはり解る物なのですか？僕は意識した事は無かったのですが……」

「……」

——違うな、これは。

演技ではなくて、使い分けだ。

擬似的な人格の交代、複数の精神の入れ替わり。

何がそうさせているのかは解らないけど、これはちよつと異常だ。

切り替わりの速度が速すぎる。それ以前に、状況が特殊に過ぎる。

そんな考え事をしていた俺に、怪訝そうな顔をしたアルティエさんが尋ねてくる。

「どうしたんですか、陽彩？」

「あ、えつと……」

どうしよう、貴女の異常な所について考えてましたとか言う訳にはいかないし……。

「ほら、アルティエさんの手足つて義肢だったからさ。どういう仕組みなんだろうなつて」

自分でも苦しいけど、言い訳は他に思い付かない。

でも彼女は純真だからきつと誤魔化されてくれる筈。

……誤魔化されてください。

「この御時世、義肢なんてそう珍しい物でも無いでしょう。確かに僕のは特別製ですが、君が気に掛ける程の特異性は無い筈です」

「そこまで機械らしい見た目してる義肢は珍しいけどね……。魔導機鎧アサルトフレームに乗る時もそれ付けてるの？」

「いいえ、その時はまた別の物を。これは電気信号に反応して動いてくれますが、内部に神経が通っている訳ではありませんから」

魔導機鎧アサルトフレームの操縦に関しては、やっぱりそれ専用の物があるらしい。

機体の操作の際にはまず、機体側が契約者の体表から脳波や電気信号等を読み取って、そこから一番近い動きが可能な動作パターンを組み合わせて実際に駆動させる。

なので素人が乗るときこちない動きになったりするし、タイムラグが発生する。オーリス程に適合率が高い人間が相当に熟達しても、機体を生身と同じように動かす事は不可能に近い。

……人と機械を一体化させればそれも不可能ではないのだから、つくづく科学は恐ろしい。

関係の無い方向へ逸れていく思考に歯止めを掛けられずに居ると、何かを思い出したような表情のアルティエさんが言葉を発した。

「そう言えば、まだ平時用の方でしたね。陽彩、付け替えを手伝ってくれますか？」

「良いけど」

つい答えてから、具体的に何をするのか全く解らない事を思い出す。

それはすぐに教えてくれるだろうと置いておき、立ち上がって別の部屋に向かうアルテイエさんに付いていく。

「二人で行うには少し面倒なので。いつもは僕がやっているのですが」

「それ見るからに重そうだけど、大丈夫なの？」

「意外と何とかなる物ですよ。見た目程重くはありませんし」

さて、どうだか。

彼女が異様に力強いのは大体予想できる。生身でアサルトフレーム魔導機鎧用の武器持ち運んでたし。

問題は、それが義肢由来の物なのか、それとも本人の持ち得る物なのか。たぶん後者だろうと思っているが、ここで引く訳にもいかない。

「では陽彩、これを外してください」

「えつと……」

壁際に備え付けられたベッドに腰を下ろすや否や、彼女はさつさと義足を両方共外してしまった。恐ろしい手際、歴史を感じる手慣れ方だ。

ただ、俺は義手の外し方なんて知らない。それはアルテイエさんにも解っているらしく、口頭で説明してくれた。

袖を軽く捲くると金属部品が腕を覆っている境目があり、その付近のベルトや留め具を順番に外せば良いらしい。

「見て解る通りの順番ですが」

「何となく解る。……これで良いかな？」

無事に外れた左腕を指示された場所に置いて、右腕も同じように外す。

これで四肢全てが一時的に失われた訳だが、本人は特に何も感じていないらしい。

……左腕の切断面、何の刃物で切り落とせばあんな風になるのか。引き千切った物を誤魔化すように無理矢理切ったような……。

「陽彩？」

「あ、いや、次はどうすれば良い？」

「そちらに戦闘用の物が入っています。運べそうですか？」

「重さ考えたらたぶんどうか……はい」

言われた通りに義肢を運んで、まずは右腕から繋げる。

手順に関しては先程の物と同じ、逆からなぞるように行えば良い訳だ。

「……そういえばさ、アルティエさん」

「はい？」

「今こうして俺が義手を持つてる間、貴女は俺に抵抗できない訳で……俺が好き放題で

きるって状況なんだけど、そこら辺どう思う？」

留め具を全て繋げてベルトを締める。きつくないだろうか。もしそうだったら言うてほしいが。

俺の言葉に目を瞬かせていたアルティエさんは、小さく笑ってから答えた。

「おかしな事を聞きますね、陽彩は。こんな不具の女に劣情を催す程、君は道を外した人ではないでしょう」

「いや、そこまで外道ではないけどさ。……アルティエさん、美人だから」

「……そうなのでしょうか？」

左腕も同じ程度の強さでベルトを締めて、左の義足を取ってから屈む。

こつちも付け方は同じだ。さつき見てたから解る。

「確かにオリジナルは見目麗しいと言つても良いでしょうから、似たような顔をしている僕も見てくれは悪くないでしょうし……。君の道具としてくらいなら、役目を果たせるのでしょいかね？」

「道具って……」

もう片方の義足を手に取る前に、俺はアルティエさんの頭に軽く手を乗せた。銀色の髪を優しく梳いてから、すぐに作業に戻る。

今の特に意味は無いけど、何となくオーリスと同じようにした。

「あまりそういう事言わないでくれ。少なくとも俺は、アルティエさんの事はただの女の子として見てるから」

「……そうですか。時に、陽彩」

右足もしつかり繋がった事を確認して、俺は立ち上がる。

そうして見えたアルティエさんの表情は、何かに迷うようなものだった。

「……僕を女の子と呼んでくれるなら。それは、君にとつて魅力的な女の子、ですか？」

「ああ、そう思うよ。じゃなきゃわざわざこんな事手伝ったりしないから」

見た目の話じゃない事は解っている。

それならさつき、彼女自身が答えを出したんだから。

「……………そうですか」

「俺は嫌いな人はとことん嫌うタイプの人間だからさ。アルティエさんにそう接しなくて済んで良かった」

「……解り辛い人ですね、陽彩は」

「そうかな？」

少なくとも貴女に言われる程では無いと思う、とは言わずに。

俺は右手を差し伸ばして、彼女をベッドから立たせる。

そろそろ時間的にもゆっくりしていられないし、魔神連中を放っておくのは駄目な予

感がある。

よく解らないけど、バルバトスとアスタロトを同じ空間に置いておくのはとても危険な事だと俺は思う。

あの時目にした殺意とそれに対する彼女の切羽詰まった雰囲気から、そう思っているのだろうか。

「シエキナーとは違うゲートから出る事になるだろうけど、途中までは同じ道だし一緒に行こう」

「……はい。では、僕が案内しましょう」

道は覚えてる、とは言わなかった。

そこまで無粋な真似はできないし、少し楽しそうな彼女の邪魔をするのは憚られる。

「陽彩」

「ん？」

部屋の出口前で止まると、彼女は俺の名前を呼んだ。

それから振り返ると、こちらの目をまっすぐにみつけてくる。

右の金色の瞳と、左の銀色の瞳が、鋭利な刃物のような冷たい光沢を帯びている。

人としての暖かさが抜けてしまったような色味のそれは、彼女の不器用さを表しているようだった。

「今日はありがとうございます」

「……何かしたっけ？」

よく見れば、頬に赤が差している。

その紅潮を隠そうともせず、彼女は薄く笑った。

「はい。とても……とても、嬉しかったですよ？」

「そっか……なら、どういたしまして」

何がアルティエさんの喜びに繋がったのかいまいち解らないが、喜んでくれた事は嬉しい。

今度こそ部屋を出て、二人で施設内を移動していく。

その間の会話は少なかったが、その沈黙はどこか心地の良い物だった。



暫く歩くと、見慣れたプラチナブロンドが見えた。

その隣には黒い髪の少女、近くには中性的な容姿の青年が居て、それらは一様に金髪の少女へ視線を向けていた。

何やら言い合いらしき事をしていたようだが、俺とアルティエさんが近付くとすぐに

辞めた。

何を言っていたのか少し気になったけど置いておく。

「お待たせ、ゼロにバルバトス。そっちは？」

「……陽彩。こっちはベリト、向こうがアスタロト」

「へえ……」

早速邂逅である。

そして、アスタロトという時点で先程の言い合いの内容が何となく解ってしまった。

バルバトス、見るからに彼女と相性悪そうだし。

「ご紹介に与りました、とても言おうか。オレはベリト、序列と継名は省略しておく」

「私はアスタロト。まあ、特に細かい説明は要らないでしょうね。貴方達の敵よ」

ともすれば戦場よりも酷い殺意の応酬。

呼応して俺も戦闘に意識を引っ張られそうになるが、何とか耐える。

ここでトリスリッターを展開するのは流石にまずい。

「言う通り、説明は受けてるよ、魔^{アブリミテッド}神さん。同族喰いのイカれ野郎と、バルバトスの盟

友って認識で良かったかな？」

「言うわね、数合わせ。度胸と威勢は悪くないわ」

意外にもアスタロトは嬉しそうに笑っている。もしかして気でも狂っているんだろ

うか。

しかし、紫色の瞳か。

……どうしてこんなにも、懐かしく思うんだろう。

「……バルバトス、オレは連携に関して不安しか感じないんだが」

「大丈夫だよ、ベリト。最初っから連携する気なんて無いから」

「お前もか……」

懐かしさに起因する意識の乖離から引き戻された俺の目の前に、その紫色の瞳が迫っていた。

「――」

「何だよ？」

「――天童蒼騎。てんどうそうき聞き覚えは？」

「……無いけど」

「そう」

手を伸ばせば触れられるような距離で、彼女は俺の目を覗き込んでいた。

それが何を意味するのか語る事は無く、すぐに数歩下がっていった。

「……忘れて。過去を断ち切れなかった女の妄執と戯言よ」

「はあ……」

「気を付けて陽彩くん、アスタロトは毒の使い手、手の届く距離は危険だから」

「貴女は警戒し過ぎよバルバトス。流石に私もアンドロマリウスの秘蔵っ子にまでは手を出さないわ」

何だったんだろうかと思える間もなく、頭に白い靄が掛かったような違和感を覚えた。

俺が気にしていた事そのものが何だったのか解らないままに、話は進んでいく。

「……顔合わせは終わった？」

「一通りはこれでね。互いの親睦はまあ、どうせこれっきりの付き合いになるだろうし」「だろいな。オレも人間に深入りするつもりは無い。アスタロトの二の舞にはなりたくないしな」

「……何よ」

「何でもないさ」

意味有り気な会話をされても困る。

それは何の情報も無い時にされると、単に話の要点が掴めないだけになる。

「……ゼロ、質問良いか？」

「時間は少ない」

「なら絞る。えっと、ベリアルに対する戦力として出された四人、これは魔神側の出せる

最高戦力って認識で良いのか？」

「……それ以外は足手纏いだから」

「なるほど。それで十分って認識なのか」

「統括局は出し惜しみする癖がある」

「解った、ありがとうゼロ」

つまりは、ベリアルを完全に見下している訳だな、その統括局とやらは。

アスタロトやバルバトスの戦闘能力に関しては疑うつもりはないが、ベリトに関して
はまったくの未知数。アンドロマリウスに至ってはそもそも戦闘手段が使えるのかと
いう心配もある。

問題は無いのだろうか、熾天使としての力を振るっても。

それを考えるのは俺の仕事ではないが、好きな人を心配するのは当たり前前感情だと
思う。

「……動いた。陽彩、出るよ」

不意にゼロが顔を上げた。

それを合図に、空気が張り詰めた物になっていく。

「時間か。アルティエさん、ゲートはさっきの所を使って良いんだよな？」

「それで構いません。私は向こうから出ます。基本は後方支援に徹する事になります

……いえ。気を付けてください、陽彩」

「了解。そつちもね」

クレイドル02に来る時にも使ったゲートへ向かおうとすると、後ろから抱き締められる感触があつた。

その腕は魔導機鎧アサルトフレームの装甲と同じ黒い金属で構成されていて、誰の物なのかはすぐに解つた。

そしてこの構図は、奇しくも彼女の姉と同じ物。

「君は無理をする癖があると聞きました。オリジナルの言葉は八割程度しか信用できませんが、今回は信じておく事にします」

「……アルティエさん？」

首に回された手が、細い紐で結ばれたペンダントを握る。

いつの間にか俺の首に掛けられたそれは、お守りの類の物だろう。

「無事に戻ってきてくださいね。まだ話し足りない事は残っているのですから」

「……ああ、解つてる」

離されたペンダントを握り締めると、そこに残る熱を感じられた。

ゆつくりと俺を離れた黒い腕は、そのまま俺の背中を押した。

それに逆らわず、少し先を歩いていく四人に置いていかれないように歩みを早める。

「ふうん……?そういう関係なの、貴方達?」

「は?」

「私にだけ妙に当たり強いわね……」

正直言つて優しくする理由も必要も感じられない。

それに、何というか、彼女に対してはこうしていた方が “それらしい” と感じられる。瞳に感じた懐かしさも含めて、いよいよ無視できる領域ではない。

ないが、それでも今は置いておく。

アスタロトの性格を考えれば、きつとその内自分から話すだろうから。

「ま、良いわ。解り易くてやり易い。いざって時に盾にしても罪悪感とか感じなくなるしね」

「思つてたよりも人が良いな。てつきり罪悪感なんて知らないもんだとばかり」

「基本的にはね。でも、巻き込んだ相手には流石に気を遣つたりはするわ」

……意外ではない、とか言つたら嘘になる。

でも、そういう人なんだろうとどこか勝手に思つていた。

不思議な話だが、アスタロトがどんな人物でどんな性格なのか、こうして話していると解る気がする。

「貴方にはその必要も無さそうだけどね」

「イカれた奴に気を遣われてもな……」

「この性悪」

「ああ、呼んだ？」

俺は悪口の類には滅法強い。何せ、それに対して何も感じないタイプの人間なんだ。

更に言えば、アスタロトは本心から言っている訳じゃない。流れのままに憎まれ口を叩いているだけで、そもそもそういう言葉を人に向ける事に慣れていないように見える。

要は俺が舌戦で負ける相手じゃないって事。

「……性格悪い」

「百も承知だよ」

何を今更、と言っておこう。

「貴方、絶対に友達少ないでしょ」

「そうだよ」

「……このっ」

気にした事も無かった。

「……ううー」

「終わりか？可愛いもんだな、アスタロト」

「…………このバカ！」

言葉に詰まったらそれか。何と言うべきか。

人を貶した事が無いんだろうな。

流し目でこちらを見ていた彼女だが、遂にこちらへ振り向いて俺の方を掴んできた。でも痛みは感じないように結構優しい掴み方だ。悪辣な魔神とは何だったのか。

「知ってる」

「もつとき、無いワケ？ 私に対する恨みつらみとか、そういうの！」

「無いけど」

なんで俺が恨まなきやいけないんですかね……。

「…………はあ…………？」

「俺が何かされた覚えも無いし」

「貴方を戦いに巻き込んだのは、間接的にはいえ私なのよ？ 正気？」

「つて事は、ゼロに会わせてくれたのもお前つて訳だ。それなら感謝しないとな」

「…………ばつかみみたい」

随分と可愛らしい罵倒だ。

というかそろそろ手を離してほしい。

「ほら、行こう。ベリアルとやらが来るんだろ？ お前の名前を騙った奴がさ」

「……それがどうしたのよ」

「いや、別に。俺は昔っから自分って物がよく解らなくてさ」

両肩に置かれた手をゆっくりと退けて、今度は俺が彼女の肩に触れる。

向こうを振り向かせて背中を押せば、渋々と言った感じで歩き出した。

「だから、他人になりすまして暴れる奴、大嫌いなんだ」

「……呆れて物も言えないわ。本当に狂っているのは貴方の方じゃないの？」

「とどうと？」

軽く溜め息を吐くと、彼女は小さく首を振った。

「私みたいな悪人に肩入れして最後に後悔するのは貴方自身だつて言ってるのよ」

「さて、どうか。お前が悪人かどうかは知らないけど、俺が後悔するのかどうかは俺自身が決める事だよ」

俺よりも幾分か小さなその背中を押しつつ、先に行った三人を追い掛ける。

ゲートの位置はゼロが知っている。だから俺達を置いて先行しても問題は無いんだろう。

今は好都合と言える。アスタロトと二人きりで話せるような機会は早々無いだろうから。

「……お人好しとも違うわね。一周回って恐ろしいわ、貴方は」

「それは初めて言われた。人畜無害そうってよく言われるんだけどな」

「ええ、そうね。貴方はきつと、人を傷付ける側の人間じゃない。でも私からすれば、優しい人っていうのは怖い。また信じちゃいそうだね」

魔神は大概とんでもなく長い時間を過ごしてきている。バルバトスに聞いた話ではあるが、数回の代替わりを起こしている者を除けば、大半が五千年近く生きていらしい。

だからこそクレイドルが空に上がる前の話も知っているんだらうけど。

しかし、それだけの時間を過ごしているだけあって、アスタロトも何か事情がありそう。それに踏み込むべきではないと流石に解っているが。

「……もしかしたらアンドロマリウスは、それすら見越していたのかもしれないけれど」

「——あ、そうだアスタロト。俺五年前より昔の事覚えてないから」

「……え？」

何やら呟いていたがその内容については気にしない事にする。俺の記憶に無い部分だが、そういう時は放っておけば良いと言っていた。

さて、言っておかなければ機会を失ってしまうだろうと記憶の事を告げたは良いが。どうやらそれは、彼女にとってには軽くない衝撃を伴っていたようだ。

いつかのオーリスと同じような反応をすると、その懐かしさと呼び起こす瞳をこちら

へ向けてくる。

「五年……つて、まさか」

「それ以前の記憶が無いんだ。自分自身に関しては特に。この名前はゼロがくれた物だし、今の俺は昔の俺とは別人に近い。……お前の眼に感じる懐かしさが何なのか、俺には解らない」

「……そっか」

少しだけ寂しそうな色を見せると、紫色の瞳は再び前に向けられた。

その表情は窺い知れないが、きつと彼女らしくない顔をしているんだろうと意識の何処かが言った。

「最近はずいぶん思い出せそうだったりするんだけどさ。どうにも進展が無くて。……アスタロト、協力してくれるか？」

「……私に助力を求めるなんて、いよいよ八方塞がりらしいわね。良いわ、私を選んだその慧眼に免じて、このアスタロト様が診てあげる」

きつといつもの不敵な笑みを浮かべているんだろうと容易に推測できる声音で、彼女は宣った。

視界の端の歪みを指で拭って、俺も笑顔を作る。

そう、これで良い。いつそ腹が立つくらいな元氣と無邪気な笑顔こそ、彼女に似合う

んだから。

……俺はちゃんと笑えているだろうか。

「でもまずは目の前の事ね。ベリアルを退けてから。今回で殺しきれるとは思っていないけど……まあ、遠くない内に機会は巡ってくるわ。その時は貴方も戦えるようになってね?」

「お前の背中を預かれるくらいには頑張るよ」

「ふふ、数合わせじゃなくなる事を期待してるわ、陽彩」

嫌味たっぷりの声で俺の名前を呼ぶが、たぶん何も考えてないんだろう。

少しずつ悪人を模した仮面が剥がれ落ちていくアスタロトに苦笑しながらも、漸くゲートまで辿り着いた。

やけに長い道のりののように感じたのは、緊張のせいだろうか。

「……遅い」

「悪いなゼロ、アスタロトがぐずるから」

「ちよつ、何平然と嘘ついてんのよ!泣いてたのは貴方の方でしょ、陽彩!」

「さてな」

ずつと押していた背中から手を離すと、少しだけ不満そうな顔をしたゼロが律儀に待っていた。

ベリトとバルバトスの姿は見えない。ゲートの形跡から、恐らく既に空へ上がったんだらう。

いつまでもこうしては居られない。俺達もさっさと行かないとな。

「……先に行く」

「了解、あまり飛ばさないでくれよ」

「善処はする」

ゼロは迷いの無い足取りでカタパルトまで向かうと、白亜の機体に身を包んで足を乗せた。

「アスタロト、お前はあれ使えるか？」

足元の板の推力で弾き飛ばされていったセラフを見送り、俺は目線を隣へ向ける。

「んー……生身なのよね、私。使えなくも無いけれど、私はそのまま行くわ。貴方は先に行つて」

「解つた。来てくれ、トリスリッター」

打てば響くような、と言うのだろうか。

凄まじい反応速度で黒い装甲が瞬間的に展開される。

どうやら相棒は妙に気合が入っているらしい。リタがちゃんと統制できると良いんだけど……。

先程のゼロと同じように強烈な加速と共に空へ打ち上げられ、俺は足の付かない揺り籠の外へと投げ出される。

空は慣れた物だ。地面よりも安心する。

落ち着いて翼を広げて、背中に背負ったラウムシユトウンデの加速を受ける。

先行したバルバトス達に合流する頃には、後ろから飛んできたアスタロトに追い付かれていた。

一人だけ生身でファンタジーしてるんだけど何なんですかねこいつ。

「これで揃った。私が出せる戦力の全て」

「それに数えられている事を光栄に思うべきか……ペリアルは？」

「アサルトフレーム魔導機鎧のレーダーにはたぶん映らない。私の技術不足」

「いや、教えてくれれば良いよ。リタが追い掛けてくれる」

そう言うと、ゼロは空の一角を指差してくれる。

「反応自体は私達と同じ。リタ、追える？」

『……見つけました。対象、ロック……来ます！』

——それは直感とも違う、言うなれば生存本能。

俺は無意識の内に体を捻り、その場を離脱した。

そして、つい直前まで俺が居た場所を、光の束が通り抜けていった。

「この距離で狙撃……っ!?」

「アスタロト、右!」

ゼロの指示通りにアスタロトは長剣を右へ振るう。

すると次の瞬間、示し合わせたようにそこへ短剣が飛来した。

反対側はバルバトスが同じように迎撃、ペリトは前方へ突っ込んでいく。

俺はその全てを意識の外へ置き、静かにラディアントマグナムを構える。

「リタ、俺に届く攻撃だけ警告を。他は正直見てる余裕が無い」

『解ってます。選別及び識別終了、いつも通りに狙って撃ってください、主様』

相変わらず重い引き金を引けば、空の彼方へ魔導光線が駆けていく。

それを見届ける事なく、俺は視界に浮かんだレティクルを睨む。

「避けた」

『反撃来ます、回避を!』

ほんの僅かに身を振り、最低限の動きで向こうの砲撃を回避する。

ペリアルルの攻撃は現状で三種類。

光の束、恐らくは魔導光線と思われる超長距離狙撃砲。

光の砲弾、凝縮された固形エネルギー弾体と推測。

そして両側からブーメランのような軌道で飛来した短剣。フォルムに見覚えがある

が無視。

近接戦でのポテンシャルは未知数、だがバルバトスと同レベルと推定しておく。

遠距離戦闘については現状の通り化け物。狙撃に関してはアルティエさんが迎撃できるとは思えないが、砲弾は回避するしかない。リタの警告を聞き逃せば俺は死ぬ。

『追撃確認つ、シエキナーからの援護砲撃も来ます！』

「なら動かない。アルティエさんは外しはしない」

予想通りに俺に迫った光の砲弾は、同種に思われる狙撃により撃墜された。

同時に四つの光線が空を薙ぎ、ベリアルが急速にそこを離れた。

「狙撃は避けた。つまりあれは危険だと判断した」

ラディアントマグナムを両手で持って暫く射撃、格闘戦へ移ったベリトを見て一度銃口を下ろす。

あの速度には反応できない。誤射は怖いし、今は様子を見つつ距離を詰めよう。

「陽彩、よく聞いて。ベリアルの特性は特殊よ、最悪精神的に潰される事も覚悟しなさい」

「了解、注意する」

アスタロトは何処からか現れた怪異ホロスライクをゼロと共に殲滅している。あの撃破スピードでなければ対応できない数なんて、どこから調達したのか。

思考を断ち切って左腕にラウムシュトウンデを展開し、翼を更に広げる。

これが役に立つとは思えないが、フォトンライフルよりかは火力になりそうだ。

『ラウムシュトウンデは聞いているの通りです、主様。改修点は連射性能と弾速、一発の威力は下がっていますが、取り回しは圧倒的に改善されています』

「聞いている。試し撃ちといきますか……！」

視界の先に左腕を真っ直ぐ伸ばして、意識のトリガーを引く。

黒い球体が収縮すると、勢い良く吐き出された。

「ベリト、巻き込まれんなよ」

「せめて撃つ前に言っておしかったがな……！」

高速で離脱するベリトを追い掛けて、ベリアルが予定通りの位置に移動していく。

そして、そこへ黒い球体が突き刺さった。

強力な重力波によって時空を捻じ曲げて、内部を滅茶苦茶に歪ませる一撃。

それを六発。これで損傷が無ければ俺は戦力にはなれないが、どうだか。

「——痛いなあ。痛い、最っ高に」

可憐な少女の声。

ベリアルの反応があったそこには、一人の少女が存在した。

アスタロトと同じように、生身だ。その背中には何やら翼らしき物が広げられている。

羽毛を全て抜いた骨だけの翼、というのが一番近いだろうか。あれで推力が生まれるのかは解らないが、もう魔神を相手に物理法則を語る方が馬鹿らしい。

「君が例の新人かあ。これが初の顔合わせ、って事になるのかな」

向こうからの攻撃は一度止み、ベリトも突撃する様子は見えない。

後ろのゼロとアスタロトは解らないが、バルバトスはこちらへ合流した。

「自己紹介が遅れたね。私はベリアル、序列と継名は剥奪されたけど、細かい事は置いておくでしょう」

漸く見えたその姿は、どこかアスタロトに似ているような気がした。

そればかりかゼロに似ている場所もあり、よく解らない。

「アスタロトは向こうか。一度手を休ませれば来てくれるかな」

「させるんでも?」

「ベリトは黙っていてくれるかな。私、個人的に君の事嫌いなんだ」

嫌悪感を通り過ぎて殺意すら込められた声。

ベリトは肩を竦めてそれを受け流し、後方からは更に二つの反応。ゼロとアスタロトが合流した。

「やつと揃ったね。君の顔が見たかったんだよ、アスタロト」

「私は見たくもなかったけどね」

「そう辛辣にならないでくれよ、今日の為にずっと頑張ってきたんだからさ」

ベリアルベリアルの左腕は巨大な剣の形をした物体に接続されている。

それは当然の如く魔神の気配を纏っているのだが……それに、複数の気配を感じる。

言うなれば、アスタロトと同じような。

「これ、何か解る？」

「悪趣味な事ね。私が切り離れた『私』でしょう？」

「そう。君の愛毒を孕んだこれは、私の身体には適合しなかった。だからこうして繋げて

るだけで一苦労だよ」

拒絶反応のような物だろうか。

ベリアルが中々に頭がおかしいという事は何となく理解した。

「寧ろよく生きていると称えてあげるわ。その理屈は吐くのかしら？」

「いや、特には無いよ。強いて言うなら君への愛さ」

「……気持ち悪い」

本気で嫌悪しているのか、アスタロトの顔にはいつもの悪戯っぽい色は無い。

「ただ、まあ、何と言うべきか。これは君の切り落とした外部の胎盤、そして私の体内を

通して子宮に直結している。私は常に君の愛を全身に流しているんだけど」

「そのまま死ぬば良いのに」

一体どこから突っ込めば良いのか解らないので放置する。

「君の愛を常に子宮で受け止め続けている私は、今も君に犯されていると言つて良い。これはもう実質的な性交と言つても過言じゃないんじゃないかな？」

「貴女つて私達と同じ言語使つてる？」

なんかもう追い付かない。

「……アスタロト。俺が言えた事じゃないけど、付き合う友達は考えた方が良いと思うよ」

「返す言葉も無いわ……。五千年前の私を殴り飛ばしたい所よ」

五千年前は友達だったのか、あれと。

こいつもこいつで少し頭がおかしいのかもしれないな……。

「まあ良いか。君に犯されているのは紛う事なき事実だし、邪魔者を皆殺しにした後に君をじっくりと犯す時間はある。滅びゆく世界は逃げないし、一緒に退魔的に過ごそうじゃないか、アスタロト」

「今の誘い文句で誰が乗るのかしらね」

「少なくとも私は乗るね」

「それは世界に一人しか居ないと知りなさい。……そして——」

携えた長剣に、目に見えない力場のような物を纏わせていく。

あれが何なのかは解らないが、バルバトスが言っていた魔力とやらなんだろうか。あれを引き合いに出されると俺には何もできなくなるんだけど。

「——覚悟なさい、ベリアル！」

視界から消え去ったアスタロトは、次の瞬間にはベリアルと高速格闘戦に移行していた。

その速度は最早異次元とでも言うべき代物、部外者に何かできる状況じゃない。

この場での格付けは何となく解っているが、その一番上に居るのは間違い無くゼロとアスタロトだ。

そして、そのアスタロトに拮抗できる実力をもつベリアルが全力で迎撃すれば、俺とバルバトス及びベリトにできることは無い。

ゼロでさえ無理に飛び込めば危険なんだろう、様子を見る事に決めたらしい。

「暇なのはいけないね、君達にも玩具を分け与えよう」と

その言葉と共に飛来した短剣を回避、ふと後ろを見ると大量の怪異ホロウヘイズがこちらへ向かってきていた。

あれを逃してクレイドル02に被害を出す訳にはいかない。影ファントムも見えるし、ベリア

ルはアスタロトに任せるしか無いな。

「アルティエさん、そこからベリアルを狙える？」

『……射線が通りません。アスタロトごと撃てと言うのならそれでも僕は構いませんが』

「いや、それならこつちを手伝ってほしい。あの怪異ホロウヘイブ、殲滅するよ」

『了解しました』

視認できる限界の距離を遥かに超えた長距離から、四つの光線が放たれる。

怪異ホロウヘイブの一大群の一角を切り崩したそれに続き、俺もラディアントマグナムを撃つ。

集団の中心へ向けてラウムシユトウンデを数発撃つておき、そのまま殲滅に移る。

これを片付けるまで、アスタロトが無事で居るだろうか。

そう考えた俺は、首に紐で提げていたお守りに柄でもなく祈っていた。

祈りは神に向けた物か、はたまた悪魔にでも向けた物か。

そのどちらにせよ、俺の祈りは――。

第九話

翼に魔力を流し、それを風に変換する事で莫大な加速を得る。

それができるのはお互い様。つまり、私もベリアルも、機動力に関しては互角。

「その程度かい？五千年で衰えたんじゃないか、アスタロト」

「どうでしょうね？それは自分で確かめると良いわ」

腕と直結された、元は私の一部だった歪な大剣。

あの毒は私自身の物だから、特に警戒は要らない。

問題は質量そのもの。仮にも魔神の一部、それも大量に同族を食らってきた私の物となれば、見た目の遙か数百倍の重さはある。

速度が乗った大質量の物理的な衝撃というのは、純粹に強い。下手に魔力が通っているから防壁を展開しても突き破られるし。

「所でベリアル」

「何かな」

「その重し、外してあげましょうか？」

「——っ!？」

斬り結ぶ度に少しずつ毒を流していた甲斐もあつて、ベリアルベリアルの翼は腐り落ちていく。

昔の私の毒を耐えられたからと言って、今の私の毒に耐えられるとも限らない。慢心が過ぎるのは昔から変わらない、か。

「まさかここまで本気だなんてね」

「そりゃ本気にもなるわ。私自身の蹴りも付けなきやいけないし、バエルと蒼騎の仇討ちよ。全力で殺すわ」

五千年前。

クレイドルの最初の一つが空に上がる時の話。

七十二の全てが健在だったあの頃に、ベリアルは最初の罪を犯した。

即ち、ラプラスの初代テストメントの契約者の殺害未遂。

そして、魔神の大多数を率いて世界各地で人類への殺戮を始めた。

怪異が現れたのは私の責任でもあるけど……あれを利用したのは他ならない魔神達。

あの残骸から怪異を作り出せるプラントを生み出して、それを地球そのものに植え付けて……地上はもう、お終いだ。

「はは、泣かせるねえ。君が見捨てた男の仇討ちだなんて、実に最高じゃないか！」

「黙りなさい。あんまり喋ると舌噛むわよ」

この現状に終止符を打つ為に、私は序列二十九位を捨てた。奪命毒装邪帝の継名も捨てた。女神なんていけ好かない奴と契約して、星そのものの加護だつて得た。

それを使つて私が食らつた魔神は全て、ベリアルに賛同してきた連中だ。当然、それで私が正当化されるとも言えないが。

五十一。今までに殺した同族はそれだけ。まだ七匹、残っている。

「君がバエルを信用したから！私は天童蒼騎を死に至らしめる事ができた！全て君のお陰だ《正義の味方》！今度もまた、御童陽彩という役者を使つて同じ演劇を見せてくれるんだらう？」

「……」

……そう。

私が、バエルの傍に居れば。

自惚れじゃない。私ならベリアルを殺せた。

そうすれば、蒼騎はきつと生きていた。

それなら、アルトリアスが死ぬ事も無かつた。

罪を背負っているのは私も奴も同じ。

受け止め方は絶対に違うが。

「友達だと、ずっと思っていた」

「……なんだい、今更説得かい？」

「一番の理解者だつて、信じていた」

思い出も捨てる。できない事はない。

何せ私は、名前も自分も何もかもを捨て去った《アスタロト》なのだから。

「だから、悪いのは私。最後まで気が付けなかった、私自身」

「……へえ？」

「——行くよ、バエル。待たせちゃったけど………五千年越しのリベンジマッチと行こう」

敢えて口調は彼のように。

私の中に眠っているのは二人の魔神。

第一位のバエルと、第六十六位のキマリス。

どっちも長らく反応が無かったけど、ベリアルを見つけてからはやけに騒がしくなつた。

バエルなんて放つておいても私を乗っ取つて戦つたんじゃないかってくらい。

……ああ、そうね。それはしないわね、貴女。

「面白いな、実に面白い！一度ならず二度までも、大切な物を守れなかったバエルが！三度目の正直とでも言いたいのか！」

「——何とでも言いなさい。わたしはもう、何者でもない。貴様を殺す為だけの、劍でしかないのだから」

持っていた劍に雷が宿る。

全身へ青白い雷霆が響いていく。

金色の『最強』が、私を作り変えていく。

「ちよつと無理ある少し不安が残るけど……来なさい、キマリス！」

空いている左手に、巨大な機械槍が姿を現す。

私の体はバエルに貸す。全ての魔力はキマリスに預ける。

さあ、敵を殺して。

わたし私達の、最初で最後の敵を。

「一つの器に三つの光……君は歪んでいるよ」

「当たり前……この程度も耐えられないようでは、貴様を殺せない……っ！」

両手に武器がある事のアドバンテージ。

向こうが一つしか獲物を持っていない事も相まって、戦略差は圧倒的。

なのに。

一步。

押しが、足りない。

「さあ、それなら見せてくれ、その力を！不条理も理不尽も殺し尽くせるのなら、私を！」
 「——力を貸して、蒼騎^{マスタ}。私が勝つ^{わたし}為に……貴方^{あなた}の勝利の為に！」

こんな時にはいつも、彼が助けてくれていた。

不慣れた戦い方で、見ていて怖くなるような人だったのに。

私やバエルが危なくなると、自分の危険を顧みずに戦いに身を投じて。

今なら解る。彼が、どれだけ強い人間だったのか。

「死んだ人間は何もできやしない！今も昔も、何も変わりはない！」

「さあ、それはどうかしら^{どうでしょう}？私も^{わたし}、わたしも、いつだって奇跡^{運命}を手繰り寄せて来た。これまでも、きつとこれからも！」

剣と槍、そのリーチの違う二種類の武器は、振るだけではまともに戦う事すらもできない。
 だけど、それを扱い切れると言うのなら。

間合いに囚われない、常に翻弄し続ける戦い方ができる。

「くっ……！」

「二対一なら互角だった！二対一でなら優勢だった！なら——三対一^{わたしたち}なら、勝てる！」

ベリアル^{ベリアル}の武装は腕だけ。翼も落とした以上、機動力はこつちが上。

このまま殺す。何かさせる前に、わたしの手で。

「……………ふいふ」

「殺しなさい、アスタロト
殺すわ、バエル！」

機械槍キマリスの穂先が、ベリアルを貫いた。

内部から放たれた魔導光線によって確実なダメージを与えつつ、剣を振り上げる。

振り下ろした雷撃は、確かにベリアルを斬り裂いた。

「ははっ……………あはははははっ！」

「何よ……………まだ何かあるって言うの？」

「いいや、何も！何もない！私は終わりだ！」

不気味なので腕を片方斬り落としておく。

「容赦ないなあ。まあ、どの道私はここで死ぬんだけどね」

「なら良いじゃない。そのまま消えてくれると助かる——」

「そして——」

腕と接続された剣も斬り落としてやろうと構えた所で、唐突に魔神の気配が増えた。

……………七つだ。

「これから君もまた、死ぬ！」

同時に、後方から魔力の塊が飛んでくる。

凄まじい質量、それを暴発しないように抑え込みつつ、弾丸に成形している。

こんな荒業をできるのは、私を知る限り一人しか居ない。

「アンドロマリウス……?」

『アスタロト、一旦下がって。事態が変わった、クレイドルに戻る』

「了解……ベリアルは」

『放っておいて』

魔力に弾き飛ばされたベリアルには目もくれず、不完全な融合状態を解除して私は揺り籠へ向かう。

「世界を巡る戦いはもう始まった。私が居なくともそれは止まらない。既に幾つものシステムは動いている。後は、君達の役割だ」

それだけ言うと、ベリアルは分厚い雲海へ消えていく。

地上に落ちれば即死、どこかで拾われても死ぬだろう。

それよりも、速くクレイドルに向かわないと。

私の予想が正しければ……きつと、事態は一刻を争う物だ。



白昼夢、と言うのだろうか。

雷霆を纏って戦うアスタロトを見て、俺は何かを見た。

そして思い出した。俺が何者か。

御童陽彩が誰なのか、天童蒼騎が誰なのか。

記憶に不完全な部分が多いけど……まあ、何となく解る。

『お久しぶりですね、マスター』

『俺は天童蒼騎貴女の契約者じゃないよ、バエル』

白い世界、肉体から切り離された意識の世界で、一人の少女が俺を見ていた。

『だとしても。同じ記憶と同じ思考、その人格も魂も何もかも等しいのなら、それは同

一人物と呼んでも差し支えは無いでしょう？』

「そこから先は哲学だね。議論する時間は無いから辞めておこう」

十五年前、俺はこの時代に来た。生まれ直した、と言っても良い。

途中から記憶が飛んだ理由は解らないし、どうして死んだ筈の人間がここに居るのかも解らない。

そもそも、俺が天童蒼騎自身なのかも解らない。記憶を引き継いだ赤の他人と言われた方が受け容れ易い。

「それで、ここは？外はどうなってるんだ？」

『ここは貴方の意識の中枢。外では時間は止まっていると考えてください』

「じゃあ安心か」

気を失っている、とかは無きそうだな。

『マスターはきつと理由を問うでしょう。なのでわたしはこう答えます。貴方に聞きたい事があつたから、と』

「……懐かしいな、その話し方」

『貴方はあくまで御童陽彩として生きたいのでしょうか？』

「うん」

『ですが、相手によつてはそれを認めないと言うかもしれない。覚えておいてください、貴方がかつて天童蒼騎であつた事を』

「……解つてる」

今はまだ混乱で、二つの記憶が別々にある。

い。だけど俺はただの人間だ。そんな器用な事、アスタロトじゃあるまいしできる筈もない。

いつか二つは一つになって、俺はその時に御童陽彩でも天童蒼騎でもない、どちらでもある人間になる。

その時に、俺が俺で居られるか。

『ラプラスはどうなりましたか?』

「五千年間受け継がれてるよ。この前ちよつと手酷くやられたけど」

『契約者が無能と言う訳でもないのでしょうか?』

「アルトリアスさんのクローンだよ」

『なるほど』

相変わらず感情の薄い。

何とも言えない懐かしさに揺られていられるのは、あと幾ばくか。

『……聞くまでも無い事でしたね』

「ん?」

『いいえ。しかしロストセイバー、ですか。皮肉な物です』

何の話だ。今度は記憶についてじゃない。

流れからしてラプラス……?」

『また会いましょう、マスター。その時には、昔話でもしましょう』

「いやまだ聞きたい事が……って」

マイペースな所も変わってない。

身を翻してそのまま何処かへ去っていくバエルを見送って、俺は一つ息を吐く。

まだまだ整理は付いていないが。

とにかく、混乱を落ち着けなきゃいけないな。

『……バエルのマスター』

「うわっ!？」

落ち着こうとした矢先にこれだよ……。

「キマリス？」

『久しぶり』

後ろを向けば、さつきとは違う少女が居た。

青い髪に、やる気の無さそうな顔付き。間違いない、キマリスだ。

「感動の再会なんて間柄でもないだろ、俺達は」

『そう。一つだけ』

彼女は俺と直接の関わり合いもあまり無い。

単に、アルトリアスさんの契約相手だっただけで。

それが、俺に何の用だろう。

『私のマスターから伝言』

「アルトリアスさんから？」

『ずっと愛してる。例えばどれだけ離れても、必ず会いに行く……だそう。恥ずかしい。伝える側の気持ちも考えてほしい』

「あの人そういう事恥ずかしがらずに言うからなあ……」

羞恥心の薄い人だったと記憶している。

最期はどうなったのか解らないが、恐らくは歴史にあった通り、誰かの墓に寄り掛かって、眠るように終えたんだろう。

……その墓、今からでも取り壊してくれないかな……。

「もしかしてだけどさ」

『ん』

「あの人、自力で転生とかできるの？」

『やろうと思えば』

「……」

これは全力で逃げるしかない。

「じゃあ、そろそろ戻らないと」

『逃げる……まあ、良い』

そう言うのと、彼女も背を向けて何処かへ歩いていく。

しかしその途中で止まり、こちらへ向き直った。

『アスタロトは今も昔も、純粹で変わらない。……正義の味方、支えてあげて』

「解ってるよ」

『無念は託す。成すべきと思つた事を、君の思うがままに』

今度こそ彼女は、この空間から立ち去つた。

これでここには俺一人、か。

……さつさと行こう。

バエルとも話したい事は残っているし、アルトリアスさんへの謝罪とアスタロトへの説教もある。

まずは、戻らないと。



臨時の司令部となつたクレイドル02。

ここには、俺とアルティエさんとアリサ、合計で三人の契約者テスタメンタが居る。本来なら桜花も呼ばれる筈だったが、連絡が取れないとの事。作戦にはアルビレオも参加するので、これで四つ。

魔神の方はゼロ、バルバトス、アスタロト。バエルとキマリスはカウントするべきか否か。

ペリトは統括局とやらに報告へ向かつた。もしかしたら援軍が見込めるかもしれないな

いとの事。

アンドロマリウスについて色々と思つたのに、その時間も無くなつてしまつたのだから残念だ。

「まず、今回の概要」

とりあえず仕切つているのはゼロ。クレイドルの管理者の一人であるから契約者テストメンタからは反論も無く、魔神達からも反対意見は無かつた。

「ベリアルに賛同した魔神の生き残り七人が、それぞれの軍勢を率いてクレイドルを強襲しようとしている。狙われているのは太平洋上と極東上空を巡回しているクレイドル07」

よりにもよつてそこか。

どこだろうとやる事は変わらないが。

「クレイドル防衛戦力の兼ね合いもあるから、出せる契約者テストメンタはここに居る全員とアリアスヴェインのみ。三号機ドラグーンは正直言つて戦力にはなれない」

オーリスも機体の修復が間に合うかどうか。それに、桜花も気に掛かる。

「魔神からはアスタロトとバルバトス、ベリト。そしてアンドロマリウス。援軍は期待しない方がよい」

この場に七人、そしてオーリスを含めて八人となる。

無人駆動の魔導機鎧アサルトフレームである魔導機装兵リフレクスアームズを含めたとしても、数字上では戦力には不安が残るが。

「ベリアルベリアルの性質を考えると、アーセナルは最悪の場合を想定しておくに越した事はな
い」

「……桜花桜花が死んでるって事？」

「いいえ」

あまり想像したくないその可能性を挙げると、ゼロは否定した。

じゃあ、何だと言うのか。

「敵としてクレイドルクレイドルを襲撃するかもしれない。ベリアルベリアルが死んだか解らない以上、その可能性は取り除けない」

「……あそこで完全に消すべきだった。また、私は……」

「アスタロトアスタロト。君を下がらせたのは他でもない私。ベリアルベリアルを撃破するよりも先に、この現状を把握する方が重要だった」

「解ってるわよ、そんな事」

吐き捨てるように言うと、アスタロトアスタロトは軽く俯いた。別に誰も責めはしない。彼女を責め立てるのは彼女だけだ。

……正義感ってのは難儀だ。無ければまずいが、あつても厄介だなんて。

「……予想では襲撃は三日から四日後。ラプラスの修復も間に合うし、指揮系統の統一もできる。足を引つ張る者はここには居ない、負ける勝負じゃない」

「ここ以外には居るでしょう、足手纏いが」

「居る。でも、無視はできる。最悪黙らせれば良い」

「過激ねえ……他に戦力として見込めるのは居ないんでしょう？」

「居ない。私の知る限りでは」

戦力……そういえば、何か忘れてるような。

何だったか、解り易い武力を……。

——あ。

「陽彩？」

「いや……何でもないよ、ゼロ。続けて」

「解った」

期待させるのも悪いし、ここは黙っておこう。

後で連絡入れないと。番号は登録済みで向こうから連絡が来た事もあるので、繋がる

事は解っている。

「これからリフレックスアームズ魔導機装兵の防衛ラインを広げて襲撃を警戒する。アルティエ以外はクレイ

ドル07に移動していつでも出撃できるようにする。アルティエはシエキナーの性能

を活かしてここから狙撃を。良い？」

「了解です。ですが、質問が」

「なに」

「他の地点を襲撃される危険性は？」

「無い。……とは言い切れないけど、無いと考えている」

ベリアルベリアルの性格上、自分で言つた事を曲げたりしない。

つまり、大きな戦いになるような事が起きるのは確実。

七人の魔神の位置と、それが襲撃できる位置を考えると、クレイドル07が一番可能性が高い。次点で01か。

だから、02にシエキナーを配置して狙撃させるのは悪い采配じゃない。

「それに、その為にシエキナーを後方に配置する。他の場所へ何かあれば、頼りになるのはアルティエと魔導機装兵リフレクスタームズだけ」

「……なるほど」

大まかな方針は決定され、そこで一度話は終わる。

どうやらゼロはすぐにでも07へ向かって魔導機装兵の調整に移りたいらしいので、俺もそれに着いていきたい。

が、近所まで来たのでオーリスの所に行つておきたいとも思う。という訳で、クレイ

ドル01を経由して07に戻ろう。

「……ねえ、陽彩」

「アリサ？」

「何か……変わった？」

「……さあ、どうだろう」

人の機敏に一番敏感なのはアリサだった。

彼女は二度目に記憶を失った直後から親交があるから、尚更かもしれない。

「例えば、記憶とか」

「お前エスパーか何かか」

「大当たり。でも、どうして？」

「なんでかな。アスタロトを見てたら、なんか急に」

「へえ……」

そこは俺にも解らないけど。

アスタロトの中に居たバエルを見て、記憶が刺激されたんだろうなって思っている。

それだとオーリスを見た時点で思い出しそうだけど……初見の時のあいつ怖かったから仕方無い。

「これで全部思い出した事になる。ちょっとあやふやな所も残ってるけど、元来記憶つ

てそういう物だし」

「……まあ、陽彩にとつて良い変化なんだろうね。良かったよ」

「良い変化、なのかな」

「そうでしょ？ 君に欠けていた物が、これで漸く元に戻った。アリアスヴェインの方が有利になったけど……私は幼馴染だからね。君が誰であろうとも、傍に居るよ」

今ならアリスが想っている事も理解できる。

だからこそ、その言葉の重みは桁違いだ。

「迷惑じゃなければ、これからも一緒にね。……さ、アリアスヴェインの所に行つてあげて。私は先にクレイドル07に行つてるよ」

「ああ……アリス、ありがとう」

いつか、俺の答えを出さないといけない。

いつまでも気付かないフリはできないし、この戦いが一段落したら少し考えるところ。

……いや、これは死亡フラグって奴かな？

『……ヒイロ』

「え？」

『女の子をいつまでも待たせるのではありませんよ。お前は既に、幾つもの想いを取り

零しているのですから』

「……解ってるよ、姫様。それじゃ、行ってくる」

話を切り上げ、クレイドル01方面の出撃ゲートに向かう。

既にゼロとアスタロト、バルバトス達はクレイドル07へ飛び去った。

アリサも恐らくはすぐに行くんだろうし、俺は少し遅れる形になる。

「……やはりここに来ましたね」

「アルティエさん？」

「何が為に行くのかは敢えて聞きません。代わりに、一つだけ」

金と銀の瞳が、俺を真っ直ぐに射抜く。

後ろに控えた魔導機鎧アサルトフレームが、右手に携えた砲身をこちらに向けていた。

……遠隔操作。あの義肢は、機体と繋がっている。

「君はアスタロトやベリアルルの戦いを見て、記憶を取り戻した。それがどのような影響を齎すのかは、今は誰にも解りませんが……君は、誰が相手だろうと戦う覚悟はありますか？」

「……ある、とは言えないな」

少し考えるが、俺にはできない。

そんな覚悟を決められる程に精神が強いのなら、今まで苦労はしてこなかっただろ

う。

「さつきも桜花の話が出たけど、もしも仮にあいつが敵として現れたら。俺はきつと、あいつを撃てない」

「……」

「撃たないで済むようにどうすれば良いのか、最後まで考え続けると思う」

俺の意思をしつかりと言葉にして、捻りもなく伝える。

すると彼女は、シエキナーの構えていた砲身を音も無く下ろした。

「意外だとは言いませんが。甘い人です」

「自覚はしてるよ。ずっとこんな感じだから」

「……君はそれで良い。歪んだ覚悟を抱くのは、僕一人で十分なのだから」

何を試されたのかはよく解らないが、彼女なりの判定基準があつて、俺はそれに認められた、らしい。

表情の変化が解りにくいアルティエさんが笑っているんだから、それは確かだろう。

「オ리지ナルをよろしくお願いします。寂しがり屋ですから、もし良かったら連れて来てあげてください」

「解った。じゃあ、行ってくるよ」

ゲートの手前まで進むと、呼び掛ける前に機体が展開される。相変わらず人の事をよ

く解っている相棒だ。

「陽彩」

「ん？なに、アルティエさん」

「アーガナはクレイドル01の第二区画、第六研究所に居ます。行き方はオリジナルが知っているでしょう」

「……なんで？」

「見れば解ります。僕はあの子に嫌われていますが、君の言葉なら聞くでしょう。外に連れ出してあげてください」

どうして看破されたのかまるで解らないが、その情報は活用させてもらおうとしよう。

まずはオーリスの所へ。話は全てそれからだ。

ゲートから飛び立って、ブースターを全て起動。

そして俺は、クレイドル01へ進路を取った。



ラプラスと同じ、白銀の装甲を持つアサルトフレーム魔導機鎧。

四脚に六本腕という異形のその機体は、この時代ではシエキナーと呼ばれている。

魔神を元に生み出された原初の魔導機鎧アサルトフレームム、ラプラス。その発展系となる機体から五年の時を掛けて改修を繰り返された、七つの中でも特に歪な機体である。

「……陽彩はもう、着いた頃でしょうか」

二本の腕に背中から展開された四本の腕を合わせて、三本ずつの腕を使って二つのスナイパーキャノンを保持。それをクレイドル07の方へ向けつつ、契約者のアルティエテストメンタは小さく呟いた。

四本の足は折り畳まれ、人で言う膝関節が地面に突き立てられている。二倍の数の足がある事でシエキナーは通常の機体のそれよりも遥かに優れた安定性を持ち、複数の腕によつて砲身を支えられた狙撃砲はどれだけ離れた地点からでも敵を穿つ。

それこそ、地球の裏側だろうと。

ラディアントマグナムの光線、その四十倍の出力を持つ光の弾丸は、減衰を極限まで抑えられた狙撃特化型の代物。射程距離はアルティエの視界そのものだ。

「ゼロ……貴女は……どうして」

そして、アルティエの眼は特別製である。

その銀色の左眼は、本来はアリアスと同じく金の虹彩を持っていた。彼女はそれを生体兵器に作り変える事で、人間の限界を超えた視力を得ている。

脳への負荷を考慮して最大連続使用時間は十二時間までとなっているが、その際に発

揮される視力や「先読み」の力は平常時の彼女を凌駕する。

「……貴女が一言、陽彩に伝えていれば……彼はアルトリアスなんて過去の遺物に囚われることは無かった。陽彩の望み通り、貴女は結ばれる事ができた。それなのに……」
 いつの間にかクレイドルの地面よりも落ち着くようになっていたシエキナーの中で、彼女は一度ゆつくりと深呼吸する。

「……僕は認めない。天童蒼騎など、神話の置き土産に、陽彩を奪われるなんて……」
 瞳を閉じて、左眼の機能を開放する。

距離にして一万キロメートル程度離れたその場所へ、彼女は意識を集中させていく。

「ああ……ごめんなさい、アルトリアス。僕のもう一人のオリジナルと言って良い貴女に、僕は……」

手足と機体の境目が解らなくなりつつある中、閉じた瞳をそっと開く。

アルティエは、その六本の腕で携えた二つの砲身が、自分自身の体の延長に接続された事をしつかりと認識した。

「——こんなにも大きな、憎しみと嫉妬を抱いている——」
 人機一体。

アリアスⅡヴェイン・オーリアルですら不可能な領域に、彼女は平然と辿り着く。
 機体と一体になる程に、人間の体との差異は違和感となって現れる。魔導機鎧は

契約者の肉体そのものとすら言え、だからこそ機体は須らく人型であるべきなのだ。
テストメンタ

その中で異形の機体を好んで扱うアルティエは異端と言つて良い。

四肢全てが義肢である感覚に加え、自分の体とは別に複数の手足が存在するその状態。
テストメンタ

六本の腕と四本の足を自在に操る彼女は、歴代の契約者に比べても圧倒的に狂つている。

理性と冷徹で、狂気と熱情を覆い隠す者。

それが彼女――。

――アルティエ＝オルレア・カーライルという少女である。

「――狙撃テストを開始。弾着観測、お願いします」

『……了解。外すとは思わないけど』

「こんな状況は僕だつて初めてなんです。付き合わせてごめんなさい、アリサ」

『別に構わないよ。どうせ私はやる事も無いしね』

クレイドル07、その周辺空域には、既に平常時を超える密度の怪異ホロウヘイムが存在している。
 る。

アスタロトの話では地上に多数のプラントがあり、それが怪異達を生み出し続けているとの事だったが。

あの量はそれを考えても多すぎる。

「第一射、いきます」

二つの砲口から放たれた魔導光弾が、一万キロメートルの長距離を刹那に翔け抜ける。

そして、白い影を数十、一気に地上へ叩き落とした。

『……着弾。馬鹿げてるよ、その眼』

「これくらいしなければ、オリジナルには勝てませんから」

『そう……それは人の勝手、と言いたいけど』

「はい？」

『陽彩はきつと悲しむよ。そういう事言う』

「……そう、でしょうね」

着弾と同時に大規模な爆発を起こしたその弾丸は、今も尚黒い煙を吹き出している。

それが晴れた時には、先程までよりも更に多い怪異が蠢いていた。

『私も少し働く必要があるかな。アルティエ、合わせてね』

「了解です。そちらは好きに動いてください。僕は遠くの物から始末します」

冷却機関から上がる水蒸気を見送りながら、彼女は二つの砲を横に置いた。

シエキナーは本来、複数の腕を用いて多数の火器を扱う近距離戦闘用の機体だった。

その為、武装の格納領域にそこまでの余裕は無い。

この二つの大型スナイパーキヤノンはシエキナー本来の武装ではなく、それ故にそのまま置いておくしかない。

「行きますよ、シエキナー。いつも通りです」

人間と同じ位置に存在する両腕には、リロードが長い代わりに高い精度と火力を誇るスタンダードなスナイパーライフル。

背中に展開する四本の追加腕には、連射性の代償に一発の火力を落とした弾幕形成用の物。

一瞬で展開された武装を握り、先程までと同じようにクレイドル07の方へ向ける。合計で六つの火器によって散乱するレティクル。視界はかなり情報過多になりつつあるが、彼女は落ち着いて機体の機能を落とす。

まずは銃身の冷却状態。クールタイムなど覚えているのだから、これは要らない。それから機体の状況。向こうから狙撃されるような距離ではない為、今回はこれもシャットダウン。

そんな調子でセッティングを進めつつ、アルティエは六発の弾丸を順番に撃ち出していく。

リロードのタイミングに合わせた一定間隔の射撃によって絶えず強力な弾幕を展開

しつつ、合間に放たれる貫通力の高い弾丸が的確に上級種を屠っていく。

グレイエンプレスは多数殲滅に向いた機体だが、戦闘序盤では瞬間火力が足りない。長時間継続戦闘ともなれば右に出る者は居ないが、今はまだ戦端が開かれたばかり。ここは上級種を受け持つ事で負担を減らすのが先決だろう。

程なくして、アルティエの放った弾丸を数回反射する事で火力を確保したグレイエンプレスにより、その怪異集団は殲滅された。

そしてこの戦闘から、地球上の全ての怪異が、距離や数に関係無くクレイドル07へ向かっている事が発覚したのだった。

第十話

クレイドル01に着くと、すぐにオーリスが迎えに来た。

アルティエさんから話の大半を聞いていたようで、現状についてかなり把握できているらしい。

そんな彼女に連れられて向かった先は、格納庫。現在修復中のラプラスが待つ場所だ。

「あ……そういえば、オーリス」

「んー？」

「思い出したよ、全部」

「……そっか」

少しでも構造を覚え始めた施設内を歩きつつ、俺は彼女に記憶の事を話した。

それと、俺自身が何者なのか。信じてもらえるかはともかくとしても、誰かに話したい気分だった。

こうして悩んでいる俺を、今の俺を、覚えていてほしかったのかもしれない。

「記憶が戻ったなら……約束、ちゃんと思い出してくれな？」

「どれの事か解らないけど、大半は」

「じゃあ今度こそ、わたしの旦那さんになってね」

「……」

さて、どう返すべきか。

少なくとも御童陽彩は、記憶を失うよりも前に、彼女に……アリアスヴェインという少女に、淡い初恋のような気持ちを向けていた。

それを忘却して、ゼロに出会って、彼女にまた恋をして。

俺は何回、初恋を経験すれば良いんだか。

「まだ難しいんだけど……いや。全部終わらせてから、ゆっくり考えさせてほしい。俺は……今の俺は、誰を好きなのか、解らないんだ」

「だろうね。解つてて言ったの。でも、そうね……」

俺を先導する為に少し前を歩いていた彼女が、くるりと反転してこちらを向く。

後ろ向きに歩きながら、無邪気に微笑んで指を二本立てる。

「わたしは二番目って所かな、今の君の中で。……ご先祖様……アルトリウスの事、どう思ってる？」

「どうって……昔好きだった人、か？」

「今はどうなのさ」

「解ってたらそれを答えるって」

「それもそっか」

何かに納得したように頷くと、また前を向いた。

もう格納庫だ。ラプラスはどうなってるんだろうか。

「着いたね。かなり様変わりしてるから、驚かないですよ？」

「そりや楽しみだな」

トリスリッターとラプラスは、基礎フレームが似ている。

どちらも同じ零号機、セラフという機体をベースに開発されているから当たり前なのだが。

それを差し引いても、前と全く同じという訳にはいかない。

どれだけの変化があったのかかと思いつつも、俺は格納庫へ足を踏み入れた。

まずは白銀の装甲を探すが、どこにも見当たらない。

あの何にも染まらない白、見失うとは思えないが。

「こつちだよ」

オーリスが指で示した方を見ると、そこには魔導機マジルトフレーム鎧らしき物が存在した。

俺の愛機、トリスリッターと似た黒い装甲。その洗練されたフォルムは、どうにもラプラスとは結び付かないが。

「ね、様変わりしたでしょ？」

「……これが？」

「そう、ラプラス。開発部で便宜上付けられたコードネームは『ロストセイバー』」

ロストセイバー……これがバエルの言っていた事か。

なるほど、確かに皮肉が効いている。

ベリアルに剣を折られ、再び立ち上がった少女の翼、その名前がロストセイバー失われし剣、とは。

「汚名返上の機会はアスタロトに取られたみたいだけど、これから名譽挽回してくから」

「……それはどうだろうな。ベリアルがあれで死んだとは、どうにも思えないけど……」

「それは勘？それとも経験？」

「どっちも、かな」

「なら信じておこよ」

生まれ変わったラプラスを見上げながら、彼女は笑った。

少し陰りのある笑みは、いつも俺以外に向けていた昔の笑顔だ。何もかもを敵視していたあの頃の、彼女らしい笑い方。

今の底抜けの明るさみたいな物も側面の一つなんだろうが、この冷酷な感じの方が見慣れている。少し前までは違和感を感じたかもしれないが。

「……そうだ。お前に頼みがあるんだった」

「頼み事？良いよ、何でも言つて」

幾ばくかの病みを感じさせる雰囲気霧散させると、彼女はこちらへ向いた。

第六研究所とやらがどこにあるかは解らないが、この情勢だ。急ぐに越した事は無いだろう。

「第六研究所つて所に行きたい。道は知つてるだろ」

「……あそこに何の用事？」

唐突に目付きが変わつた。やっぱり予想通りか。

たぶん、そこも真つ当な研究を行っている場所じゃないんだろう。

「アーガナに、お前やアルテイエさんの妹に用事がある。頼める？」

「良いけど……力を貸してくれるとは思えないよ。時間の無駄になる。それでも行くなら、案内するよ」

「解つてる。無理は承知だし、本題は他にもう一つある」

単純に顔を見たいだけだ。ここまで来たなら、たまには通話越しの会話だけじゃなくて実際に会つて話をしたい。

アーガナは気難しいが、良い友人だと言えるんだから。

「……仕方無いなあ。六研リッけんの事は深く詮索しない事。それだけ約束して」

「そんなつもりは無いよ。アーガナに会えれば良い」

「たぶんあそこに居るから大丈夫。それじゃあ行くか」

ラプラスを回収、魔導機鎧アサルトプレムの機能である質量変換によって持ち運びができるようになってから、彼女は迷いの無い足取りで格納庫を後にする。

クレイドル01の街の風景は、かつての日本という国の住宅街に似ている。

違う所を挙げるとすれば、建物の高さか。どれも基本的に普通のマンション程度の高さで収まっており、高層タワーのような構造の物は少ない。

暫く歩いた先、他と何ら変わらないような見た目の建物の手前で、オーリスは漸く足を止めた。

ここから一人で帰れと言われても無理だな。少し歩き過ぎた。

「ここだよ。クレイドル01の第六研究所。通称六研リッけん」

「……ここにアーガナが?」

「ここまで近付くと解る。あの子はここに居るよ」

話も程々に、建物へ入っていく。

外観こそ普通だったが、内部はかなり異質なように見えた。

傷も埃も一つとして無い白い壁や床。それは掃除が行き届いているというよりも、人の出入りそのものが無いような……。

「……なあ、ここに本当に人が居るのか?」

「心配になるのも解るけどね。……アーガナ、出て来なよ。もう良いでしょ?」

何度か階段を降りて廊下を歩いていく内に心配になり、俺は静寂が堪らずオーリスに話し掛けた。

すると彼女は何も無い空間を眺めて、そこへ語り掛けるように——いや、何かに語り掛けた。

「——そうだね、もう良い。久しぶりだね、姉さん」

通路の曲がり角、その影から現れた、銀髪の少女。

オーリスやアルティエさんよりも、元になっているアルトリアスさんに近い容姿の彼女。

今の俺としては少し複雑な気分だが、まあ別に接し方が変わる訳でもない。

寧ろ幼い頃のアルトリアスさんを見られたような気がして、これはこれで良いかもしれない。

「陽彩お兄ちゃん、直接会うのはあれ以来だね。来てくれて嬉しいよ。どうしたの?」

「久しぶりにお前の顔が見たくて。それに、ちよつと用事があつてな。あと、アルティエさんにも言われたから」

「……アルティエ姉さんか」

……嫌われている反応じゃないな。ただ、単純に仲の良い姉妹のような反応でもな

い。

家庭事情が複雑過ぎるのも問題だ。俺がどうにかできる話じゃないが。

「ゆつくりしてく？それとも急ぎの用事？」

「急ぎだな。……端的に言おうか。お前の力を借りたい、アーガナ」

「……でのんびりとして居られる時間も無い。彼女があくまで拒絶するなら、俺は引き下がってクレイドル07に向かう。」

「別にそれは構わない。わたしとあの子は戦う為に居るから。……でも、その」

「うん」

「……言っても、怒らない？」

「一体どんな爆弾を抱え込んでいるのか。」

「まあ、大した物じゃなさそうだけど。」

「理不尽には怒らないつもりだよ。言ってみてくれ」

「……呼び方」

「もしかして名前の事か。」

「アーガナって名前、好きじゃないから。お兄ちゃんに呼び方、考えてほしいの」

「んー……すぐって言われても思い付かないな。考えとくって事で良い？」

「ん。それで良い」

人の呼び方、ね。

今まで名前そのまま、或いは相手に指定された通りに呼んできたから、そういうのを考えるのはあまり得意じゃない。

だからと言って適当に済ませるつもりもないけど。

「……意外ね」

「なに、姉さん。何か文句？」

「いや、ちよつと不思議だなんて。あなたほんとにアーガナ？」

「アーガナ⇨ディーヴァ・レイリッター。他の誰でも無いわたしだって、あなたはよく知ってる筈」

「……そういえば。」

他のクローンはそれぞれの名字を名乗っているが、アーガナだけはレイリッターの名前を継いでいる。

オーリスは自分がアルトリアスさんではない事を表明しているだけで、アルティエさんはそれに倣っている。

それなら、アーガナは何を思っただけでレイリッターを名乗るのだろうか。

「気を悪くしたなら謝るよ、アーガナ。それじゃ行きましょ、どうせ時間は無いんだし」

「……先に行つて。準備に時間が掛かる」

「ガルディーヴァ、出せるの?」

「勿論。お兄ちゃん、すぐに行くから。待っててね」

「解った、待ってるよ。オーリス、行こう」

アサルトフレームネクスト
神装魔導機鎧一号機、ガルディーヴァ。

それが、第六研究所が試験的に開発し、アーガナに貸与している機体の名前だ。

オーリス曰く、「性能だけなら既存機体よりも上」との事。実際の戦闘能力は確かめようが無いが、俺よりは戦力になるだろう。

「……まさかあんなに物分りが良いなんてね」

「手の掛かる妹なのか?」

「や、寧ろ不気味なくらい手が掛からないよ。わたしとアルトのデータがフィードバックされてるとは思えないくらいにね」

「姉を反面教師にしたんだろ」

「どうだか……」

否定はしないのか……。

「何にせよ、これで少しは戦力も増強できた。アーガナはともかく、ガルディーヴァが居るのは心強い」

何だかんだと言っても、妹を信頼してるらしい。

アルティエさんに向ける物と同質の感情を見受けられる。姉妹愛と劣等感がないまぜになった歪な思いだ。

「……なあ、オーリス。アーガナの事、どう思ってる?」

「いつだって核心を突いてくるよね、君は」

第六研究所を出て、出撃ゲートのある管制施設へ向かう。

その道すがら、彼女に気になった事を聞いてみる事にした。

「よくできた妹だよ、あの子は。わたしとアルトの失敗を元に作られた、クレイドル01の最高傑作。本当の意味での、英雄アルトリウスの再来。……ラプラスを使うべきは、アーガナなんだよ」

「再来、ねえ」

毎度の如く、それを基準にしている。

この場に居ない人間と比較した所で、何も見えてきたりはしない。

「本当の所がどうかは解らないと前置きするけど。アーガナは、そういう所は正直な奴だと思うよ」

「……と言うと?」

「お前がラプラスに相応しくないと、自分の方が上手く扱える……そう本気で思ったら、なりふり構わず奪いに来る。四百九十六代目の英雄の座を、な」

そうしないって事は、少なくともそうするだけの理由が無いって事。

アーガナは理由及び動機が揃って、それを行うに値する状況が整えば、それを躊躇う事はしない。今までの会話からそれは掴めている。

だから、彼女が何もしないという事は、少なくとも現状を認めている事になる。

「今のお前は、誰よりもラプラスに相応しいって事だよ。俺の所感だけだな」

「……わたしが……」

こいつがそんな悩みを抱えてるとは思わなかったが。

どれだけ人間離れしていようと、超然的な人物だろうと。

所詮は人間、万能なんかにはなれない。

アルティエさんはそういう意味では人間らしい。できる事とできない事の境界線がくつきりしてて、解り易い。

でもこの阿呆は人間らしさが足りない。何せ、大概の事はやろうと思えば実現できる可能性を持っている。その異常性とも言える才能が、彼女を等身大の人間に見えなくしているんだろう。

「信じられないって言うなら、そうだな……」

人の心を利用する言葉はあまり好きじゃないが、まあ仕方無い。

いつも人の心を弄んでくれている仕返しという事にしておこう。

「お前の将来の婿を信じな」

弾かれたように顔を上げる。

解り易い驚愕が張り付けられたその表情に、何故か笑いがこみ上げてくる。

そんな俺に、彼女は不満そうに腰に手をやるのだった。

「ずるいよ、それは。わたしの専売特権なのに」

「悪いな。やられっぱなしは性に合わないんだ」

「……まあ、良いよ。それじゃあ、そうだね」

一つ息を吐くと、いつもの底抜けの明るい笑顔を見せた。

“オーリス”を演じる彼女の笑顔ではなく。

“アリアスⅡヴェイン・オーリアル”という一人の少女の、とびっきりの笑顔だった。

「世界で一番信用ならなくて、大嫌いな奴だけど」

やけに弾んだ声音で。

言葉の内容に合わない嬉しそうな顔で。

その胸に手を当てると、どこかで見えた仕草で。

高らかに歌うように、彼女は言うのだった。

「君の将来のお嫁さんを、信じてあげるよ」

咲き誇る花を揺らすように、風が吹いた。

白いロングスカートの裾をはためかせて、銀の前髪を風に揺らして。その奥で煌めく金の瞳が、左側だけ宝石のような緋色に染まっていた。



緑色の魔導機鎧。
アサルトフレーム

その傍らに佇むのは、黒髪黒目の少女。

「桜花ちゃん、行ける？」

「

それは良かった。じゃ、行こうか」

耳元に直接囁かれるような声音で尋ねられるも、彼女は特に反応を見せなかった。

それでも声の主は一つ頷き、満足そうに笑った。

「アーセナル」

名前を呼ばれると、機体はその姿を消した。

手元に残った緑色のペンダントを見遣るも、何を思うでもなく彼女は——深崎桜

花は、空へと視線を向けた。

「

人間としての機能の大半を封じられ、アサルトフレームム魔導機鎧を動かす為の外付け装置として運用されている彼女に、もう感情は無い。

無い、筈だ。

「——ああ」

久しく使つていかなかった声帯が震え、声らしき物を出力した。

「——空……きれい——」

一瞬だけ芽生えた何かの揺らぎを大きな力で抑え付けられ、彼女の意識が黒く塗り潰されていく。

「その空をこれから君が壊すんだ。楽しそうだろうか？」

「——」

「……もう壊れちゃったかな。アスタロトみたいに頑丈じゃない事、忘れてたよ」

桜花の瞳には、その黒よりも暗い色の紋章が刻み付けられている。

精巧に見えないように偽装されたそれは、彼女の脳へとあるイメージを送り込む為の物。

これを使つてベリアルは桜花に限界まで苦しみを与えた後、精神が壊れる程の快楽を叩き込んだ。

その影響は著しく、もう彼女にかつての面影は無い。

「いやあ、陽彩くんには悪い事したなあ。もう使い物にならないもん、桜花ちゃん。言いなりにはなるからそれはそれで使いようがあるかな？」

瞳の奥の紋章に暗い光を湛えて、桜花は歩き出す。

クレイドル04の直下、荒廃した大地を。

「——時間だ。終わりを始めよう。桜花ちゃん、解つてるね？」

「——」
「御童陽彩を殺す。君を見捨てた裏切り者を殺す。……これは君の復讐だ」

「——ひいろ？」

心に響くその名前を呼んで、不思議そうな顔をしながらも。

桜花は、ベリアルに続いてどこかへ消えていった。



クレイドル07、二番地区のとある大きな家。

二人で住むには大きく、せつかく広いのならいつかゼロと共に暮らしたいとも思っていた我が家。

そこには今、俺とリタ以外に、客が来ていた。

「ここに来るのは久しぶり。こんな状況だけど……嬉しい」

俺の家にゼロが居る。

夢見た風景の実現……ではあるのだが。

「何だつて私まで連れてくる事ないでしょうに、アンドロマリウス」

『喜ばしいとは思っているでしょう、アスタロト』

「そりやそうだけどさ」

なんか余計なのが居るんだよなあ……。

「でもバエル、良かったの？ 陽彩の所に戻らなくて」

『今のマスターには負担が大き過ぎます。ただでさえアサルトフレーム魔導機鎧の稼働に魔力の大半を削がれている中、わたしの実体化を維持する余裕は無いでしょう』

他の魔神とは違い、バエルは自分で魔力の補填ができない。それは寧ろ、彼女達の在り方としては正しいのだが。

本来は人間が魔力を補う事でその対価に能力を与え、力を貸す。それが魔神……いや、ロストバレット魔弾の存在意義。

人を必要としなくなり、魔弾としての限界を超えたからこそ、アスタロトやゼロはアシリミネッド魔神なのだ。

「……私の負担は度外視するのね」

『わたし一人程度で音を上げお前ではないでしょう?』

「信頼が痛いわ」

まあ実際はそれくらいの余裕はあるが。

恐らく俺に気を遣っているんだろう。まだ御童陽彩で居たいと思う俺に。

もう少しだけそれに甘えよう。

さて、俺達がこうして家でのんびりとしている中、他のメンバーは交代での見回りに行っている。

今の担当はアルビレオとバルバトスだったか。オーリスの出番は明日の午前から、アーガナの方は午後からだ。

「……陽彩」

「ん?」

「君は、怒ってない?」

不意に尋ねてきたゼロに、首を傾げる。

俺が何を怒ると言うのか。

「私は君が記憶を取り戻さないように、意図的に邪魔をしてきた。記憶の無い君は私にとつて都合が良かったから」

……なるほど、その事か。

「君がこの土壇場で苦しんでいるのは、私のせい。私が最初から君を天童蒼騎に戻していれば……」

「あまり気にするなよ、ゼロ。俺を御童陽彩にしてくれて、戦う力をくれたのはお前だ」
五千年前から変わらないな、アンドロマリウス。

お前は……ずっと、変わらない。

「それに。俺の記憶が戻らないようにしていたなら、一つ疑問が残る」

「……疑問？」

「お前は俺に、昔話として五千年前の話をしてくれた。原初の英雄アルトリウスや、アサルトフレーム魔導機鎧の礎になった零号機セラフ。思い出す機会は幾らでもあったんだ。それを思い出せなかったのは、俺が悪い」

ヒントは与えてくれた。

それを使わずに……いや、使おうとしなかったのは俺だ。

記憶が戻る事が怖くて、踏み出せなかった。

そのままが良いと妥協していたのは、俺自身の弱さだ。

「君は厳しい。全部私のせいにしてくれれば、わたしも気が楽だった」

「その性格はどうにかした方が良いでしょう、アンドロマリウス。……いや、セラフって呼ばうか？」

「……ゼロで良い」

かつてはアルトリアさんの妹であった、とある少女。

生まれ付き契約者であった彼女は、生誕と同時に七十二発目の魔弾であるアンドロマリウスと契約、融合した。

それがセラファイⅡアンジエ・レイリッター。アルトリアレム 魔導機鎧一番機、ラプラスの開発に携わった一人だ。

「やっぱり君には勝てそうにない。今も昔も、これからも」

「そりゃ、義妹に負ける訳にもいかないしな」

「ふふっ……ああ、変わらないね」

珍しく声を上げて笑うと、ゼロは少しでも距離を縮めた。

隣に感じる熱が心地良い。傍に居てくれるだけで、こんなにも安心する。

「そんな君が好きだよ、陽彩。ずっと、ね」

「ゼロ……っ？」

「迷ってる所に追い打ちを掛けるようで悪いけれど、わたしは諦めたくない。アリサは良いとしても、アリアスヴェインの奴にだけは譲れないから」

姉のクローン、思う所はあるんだろうなあ。

そんな事を思わず考えて止まるくらい、頭が働いてくれなかった。

「目の前で見せられる側の気分にもなってみなさいよ……バエル、出るわよ」

『気分はどうですか、負け犬』

「叩き潰すわよ貴女」

何やら会話しながら部屋を出ていく二人。外へ向かったらしいが、もうすぐ晩御飯だから早く帰ってきてほしい。

「今日はわたしがご飯を作るよ」

「良いの？」

「任せて。いつものお礼だから」

らしくない、と言うべきか。

どこか違和感を感じる、人間らしい笑い方。

でも、それは。

ずっと昔に見た、セラフィの――。

無粋だな、これは。

俺は素直に好意を受け取ろう。

そして、自分の想いに素直になれば良い。

伝えてくれた気持ちに、真っ直ぐ返すくらいなら、俺にもできるから。

「――なあ、ゼロ」

「ん？」

「俺は、さ。これから混ざって元に戻れなくなるから、その後は解らないんだけど」

御童陽彩と天童蒼騎の両者が混ざれば、それが誰になるのかは解らない。

もしかしたら別段何も変わらないのかもしれないし、何かが致命的に変化するかもしれない。

だけど、この想いだけは。

きつと変わらずに、持っていたいから。

「好きだよ、ゼロ。俺は、お前が好きなんだ」

「……そっか」

「何があっても忘れたくないからさ。それに、今の内に、恥ずかしい事は言い切っておこうと思って」

言える事は全部言っておかないと。

テストメンタ
契約者はいつ言いたかった事を言えなくなるか解らない。

ただでさえ俺は忘れっぽいんだ、覚えている内に伝えなきゃな。

「……ありがとう」

「え？」

「何でもない。ご飯の準備をする。アスタロトを呼んできて」

「解った」

何を呟いたんだろう。

今回は全く聞き取れなかった。

まあ、良いか。

明日に備えて、食事は摂っておかないと。

それは魔神も同じだ。折角居るんだから、仲間外れにする事もない。

久しぶりに、大人数での食事だ。

ゼロと一緒に食卓を囲むのは、いつ以来だろう。

そんな二重の意味での楽しみが、少しばかり俺を戦いから遠ざけてくれた。



午前中、オーリスとベリトが見回りに行っている間、トリスリッターはゼロに預けていた。

最後に向けて調整をしたいとの事だったので、任せておいたのだが。

「……様変わりしたな、相棒？」

セラフの外装、その一部を流用して作り上げた新規武装。

元の色に合わせて黒く塗られたそれは、明らかなる変化としてトリスリッターの姿に違和感を与えていた。

「セラフを元にした強化外装と、増大した重量に対応した推進力の強化。極め付けは特殊システム『キャバルリイ』。まだ排熱機関が不安定だから陽彩には少し辛いかもしれない」

「ラプラスがベースになってるんだっけ？」

「そう。姉様とアリアスヴェインだけが起動させた、感情変換システム。人の心を直接エネルギーに転換する、危険な物。使い所を見誤らないで、陽彩」

「そこはこいつに任せる事にするよ」

戦闘に関する機微を感じ取る能力は、俺やリタよりもトリスリッターの方が優れている。

意思無き機械に頼るのもおかしな話だが、機体自身が使うべきだと判断した時が最優のタイミングだ。いつも以上に相棒の声に耳を傾けておかないとな。

「……なら、良い。トリスリッター、陽彩を守って」

見慣れぬ銃器を二つ構えた愛機は、光に溶けるようにして消えた。

その残滓を見送ってから、俺は格納庫の外へ視線を向ける。

「ゼロ。ベリアルが来るのは、今日か明日って言ったよな」

「うん。どちらとは断言できないけど……恐らく、明日」

彼女の勘は信頼できる。こと魔神に関する事だ、外しはしないだろう。

「今日は備える日。決戦前の、最後の余暇。……陽彩、やり残した事は、無い？」

「今はな。伝えたい事も伝えたいし、心残りは無い。全力で事に当たるよ」

「……なら、良い。わたしからは、一つだけ」

格納庫から出て出撃用のゲートに向かう俺に、ゼロは言葉を投げ掛ける。

「君が誰であろうと、わたしには関係無い。君はわたしに恋をくれた男の子。わたしが好きになったのは、『天童蒼騎』でも『御童陽彩』でもなくて、君だけ」

……名前には囚われるな、か。

人の内面こそを捉えろと、そう教えたのは、俺とアルトリアスさんだったな。

ああ、それを言われたら仕方無い。

悩みなんか、捨て置かないとな。

「……じゃあ、わたしは家に居る。アーガナによろしく」

「ああ、行ってくる」

今度こそゲートへ向かう。

足取りはいつもより軽く、気負いも無く。

最高と言って良いその調子で、俺は空へ飛び出した。



透き通るように晴れ渡る蒼穹を見遣り、流れる雲を眺めて時間を潰す。

それにすら飽きが来たのは、何分前だったか。

『らしくもないですね、アスタロト。お前がマスターの言う事を素直に聞くとは。戦力の温存は理に適っているとは言え、正しいというだけで従う程に愛嬌があったとは思いませんでした』

「自覚はしてる。私自身もちよつと意外よ」

『では、何故？ 以前のお前なら、時間潰しに怪異掃討にでも出掛けていたでしょうに』
「そのやる気すらも無いのよ、今は」

ぼんやりと空の彼方に思いを馳せながら、バエルの質問に答える。

ああ、それですら億劫だ。今の私はノイローゼ気味なのだ、少し放っておいてほしい。
『……大方、罪の意識に苛まれているのでしょうか。お前らしい傲慢です』

「相変わらず言葉が鋭いわね、貴女。何でもかんでも斬り裂いてたら、陽彩に捨てられるわよっ。」

『斬る相手は心得ていますよ。それに、わたし程度の言葉で滅入るような可愛げのある

お前ではないでしょう』

「……さあね」

その信頼は嬉しい物だけだ。

かと言って、冷めた心に火を灯すかと言われると、微妙な所だ。

『思いの外、深刻なようですね。無様なものです、同胞を五十も殺しておいて、今更』
「解つてはいるんだけどね。友達を止められないで、恩人を殺されて……五千年も掛けてマツチポンプした挙げ句、また恩人に苦勞を強いる。何やってんだか、私は」

軽くため息を吐いておく。

幸せが逃げると、陽彩は言うんだらうけど。

その程度で逃げる幸せは、とうの昔に逃げ切つたのだらう。

『……馬鹿者』

「知ってる」

『痴れ者、恥を知りなさい』

「十分過ぎる程に知ってる」

いつもの罵声に力が無い。

バエルらしくもない、と言っておこうか。

『どうしてお前はそこまで愚かなのです。形の無い虚妄の正義に囚われ、喪わなくて良

い物を捨て去り、終には必要の無い物まで背負つて——』

「今の私はやる気ないけどね。私の正義を馬鹿にするなら、私ごとでも殺すわ、バエル」

『——自分の涙に気付けない正義の味方なんて、居て堪るモノですか』

そこで漸く、私は彼女の声音が震えている事に気付いた。

どうして貴女が泣くのか。貴女には、何も辛い事なんて無い筈なのに。

「……そうは言つてもね。正義を翳して善性を気取つても、振るわれた悪意が帳消しになる訳じゃない。別の何かに肩代わりされるだけ。誰かが流すかもしれない涙を預かれるなら、正義の味方にだって意義はある」

『それが愚かだと言っているのです。傷付く事を躊躇わない強さ、他人の涙の為に戦える正しさ、自分の名誉すら投げ捨てて汚名を被る事を厭わない自己犠牲………大いに結構です、正義の味方。ですがお前は、前提からして崩れている』

そんな事は五千年前に言つてほしかった。

今更止まらない。止まりたいとは思えない。

正義を御旗に同胞を殺したこの腕は、まだ命を喰らおうとしているのだから。

『それはお前の“正義”なのですか？』

「……………」

『誰かの為に。ええ、実に美しく、素晴らしい事です。それが借り物でしかないという事

を除けば』

バエルはどこまで見抜いているんだろう。

私の弱さと、忘れてきた本当の目的を。

『誰かの為に何かを成す、それはお前の心から生み出した願いではない。所詮は借り物、死人の夢の残骸に縋っているだけ。わたしの知るアスタロトは、そんな殊勝な者ではなかった。悪辣で邪悪で、それでも善に憧れる、無垢で純粹な少女だった』

「……少女なんて年じゃなかったと思うけどね、今も昔も」

『物の例えです、受け流しなさい』

まあ、私が最低の存在だった事は誰の目に見ても明らか。

正しい事が解らなくて、誰にも教えてもらえなくて、だから自分なりに“良い事”をしようとした。

……それをすぐに諦めてほっぽり出して、最終的には自分が楽しい事に逃げて人を傷付ける、そんな奴だ。

あの頃のベリアルは、私にとって最高の親友だった。

とりあえず手を引いて何かをさせてくれて、その結果に関わらず笑ってくれた。褒めてくれた。

友達が笑ってくれるから、これはきつと良い事なんだと。

私は余りにも、愚かに過ぎた。

『仇討ちなどらしくもない。そもそもお前にとって、マスターは単なる七十億分の一でしか無いでしょう』

「それでも無いわ。あれはあれで、私の淡い初恋だったのよ」

『……えっ?』

「夢破れたり、だけどね」

私がアルトリアスやらアンドロマリウスに勝てる訳も無く。

というかあの姉妹なんで揃いも揃ってあんなに強敵なのよ。そのどちらにも好かれるなんておかしいわ、陽彩は。

「仇を討つ理由はあるわ。屑は屑なりの矜持を持ち合わせているものよ」

『……初耳でした。そういう事は早く言いなさい、アスタロト。応援でも何でもしたものを』

「ん?」

『聞き流しなさい、戯言です』

おかしい、精神的に繋げて会話してる筈なのに聞き取れなかった。

……私も耄碌したかな。

『まあ、良いです。……そんな善悪の区別が付かない小娘が、たった一度犯した過ちを、

いつまでも責めるのは非生産的に過ぎます。お前はもう少し、諦めというものを学びなさい』

「子供はいつか大人になった時に自分を振り返るのよ。反省もできない能無しになった覚えは無いからね。そもそも小娘なんて年でも無かったと思うけど」

『だから比喩だと言っているのですよ阿呆』

辛辣う……。

いつも通りでやり易い事この上ないけど。

「じゃあ何、全部諦めろっての？私ともう少しだけ上手くやれば、陽彩もアルトリアスも救われたかもしれないなかった可能性を」

『……だから傲慢だと言うのです、アスタロト。視野狭窄は治っていないようですね』

傲慢強欲、承知の上だ。

それに、その可能性だって捨てた物じゃない。

ベリアルに回収されたあの胎盤、あれを取り戻せば私は時間遡行だってできるかもしれない。

時間の能力を持つ魔神なんて片手で足りないくらいには殺した。その力は、あそこにある。

そして、陽彩の力。

バエルと契約した、天童蒼騎の能力は。

有り得べからざる今を実現する、過去への帰還。

何人にも再現できないその力、私が少しでも扱えれば。

今度こそ私は、未来を変えられるのに。

——それを、諦めろと言うのか、貴女は。

『それは現在の世界の否定、遍く全ての否定になる。マスターとアルトリアスの覚悟を以てして空へ飛び上がった揺り籠、ここで開花した全ての可能性。誰かの期待を受けて、また誰かの目標と成り得た希望の花達を、お前は否定するのですか』

「こんな物、私が欲しかった希望じゃない。誰かを踏み台にして得られる物なんて、私は受け取れないわ」

『これは異な事を。それは先程、お前自身が肯定した正義の形です』

……それは。

「そう、だけど……」

『矛盾こそが生命の本質、そこは見逃すとしましよう。ですがアスタロト、今を認められない以上に、お前はこの世界を認めている』

「そんなこと——」

『有り得ない、ですか？ならばお前は何故、マスターを“陽彩”と呼ぶのです？』

「……………」

『五千年の時を経て変生した彼を受け入れた事が、お前の今の受け止め方の答え合わせになりましょう。あの名前は、アンドロマリウス——御童零が授けたものなれば』

そう、だ。

でも私は、ゼロをアンドロマリウスと……。

『セラフィを頑なにアンドロマリウスと呼ぶのは、お前の純粋な憧憬でしょう？ 魔神を続ける最強に相応しいと、相応しく在れと願うからこそ、お前は彼女をそう呼んでいる』

……ああ。

それは、そうね。

『お前が否定したい過去は、マスターの死でもなければ、アルトリアスの悲劇でもない。お前の存在そのものでしょう』

「人の心に土足で踏み入るの、得意よね」

『アルトリアスのクローンと同一視されては困ります。そうしなければ伝わらない物を、こうして伝えているだけです』

アリアスは……まあ、何というか。

不器用なのよね、彼女。色々。

「……貴女の読み通りよ、バエル。私は過去から私を消す事で、私が抱えたこの罪から逃げたかった。正義なんてどうでも良いのよ、それはただの言い訳だもの」

『あまり自分を見縊らない事です。お前が居なければ、全ての事柄が変わる』

「そうね。私の代わりに、もつと良い人が——」

『何もかも好転しません。悪化するでしょうね、あの惨状が』

あれ以上何が起こると言うのか。

それに、誰であろうと私よりは適任の筈だ。

陽彩の隣に一時でも居られた僥倖、その榮譽は。

『他の魔弾に真つ当な者は居ません。マスターを真に案じ、寄り添えたのは、一重にお前がお前だったから』

「まるで貴女は寄り添わなかったような事を」

『ええ。わたしはあくまで、剣ですから』

おかしな事を言う。

誰よりも彼の傍に居たのは、他ならない貴女だろうに。

『お前でなければマスターは戦い続ける選択をしなかった。或いは、わたしも』

「バエル……」

『勘違いはしないでください。都合の良い盾が居なければ、剣を振りづらいというだけ』

の事です』

その照れ隠しで、一体何を隠せるというのか。

素直じゃないのは相変わらず。可愛い所も変わってない。

『良いですか、アスタロト。お前の否定は、お前と関わった全ての否定となり得る。……お前は、わたしを否定しますか？』

「それこそ有り得ないわ。いつも大切な人を守ってくれたのは、貴女だった」

『お前に正義を教えてくれた、わたしのマスターを否定しますか？』

「同じく、よ。誰が否定しようとも、私は絶対に陽彩の味方をする。五千年前から変わらぬにね」

前言は撤回しよう。

私を諭すなんて、バエルも変わったものね。

『この揺り籠に住まう全ての生命を。お前は、否定しますか？』

「……いいえ。私も焼きが回ったわ。憧れた夢を自分から閉ざすなんて、ね」
ベリアルとまた戦って、過去と向き合って。

その程度で挫けそうになるなんて、私もまだまだ未熟なのかもね。

「私、弱気になってた。初心忘れるべからず、よね」

『……過去の遺恨は正しく使いなさい。引き摺られるようでは、それは亡霊と変わりま

せん』

「解ってる。ありがとう、バエル。持つべき者はやっぱり友達ね」

『誰がいつ友になつたと?』

「辛辣う……」

いつもの切れ味だ。ああ、安心する。

『調子が戻ったのなら立ちなさい、親友。おろかも 退屈なのはわたしやキマリスも同じなのです、手始めにクレイドルを案内しなさい』

「私だって知らない所の方が多いわ。いつか陽彩にエスコートしてもらおうと思ってたんだから」

『……そうですか。なら、家に戻りましょう』

「あら、良いの?」

『気が変わりました。今日は明日に備えて休みましょう』

……お優しい事だ。

私の乙女みたいな願望を尊重してくれるなんて。

「ねえ、バエル」

『なんですか?』

「……ううん、何でもない」

『変ですわね。……今に始まった事ではありませんか』

この口の悪さはどうにかならないのか。

まあ、それも含めて好きなんだけどき。

「勝ちましようね、絶対に」

『ええ』

まずは帰つてのんびりとしよう。

それから、アンドロマリウスと話をしよう。

何から話せば良いのか解らないけど、まずは陽彩の事でも聞いてみよう。

それから、思い出話や昔の事、いっぱい話そう。

言いたい事や聞きたい事、五千年分はあるんだから。

……だから。

その前に、この涙は拭いておこう。

『……アスタロト』

「なに、キマリス。珍しいわね、貴女から話し掛けてくるなんて」

『……いや。好きに生きて好きに死ね。地獄の果てまでなら、付き合う』

「相変わらず男前ね。それはアルトリアスにとっておきなさい。私はもう、十分よ。地獄に道連れにする相手は決まってるの」

『……?』

「一人しか居ないでしょ、察しなさい」

『……ああ』

昼食から時間も経って、女子会なんかをするには丁度良い時間。
お茶でも飲みながら、たくさん話さなきやね。

第十一話

予定通りであれば、ベリアル達がクレイドルを襲撃するであろう日。

その始まりは、いつも通りに穏やかな物だった。

少し早く起きて、屋根に登って空を見上げた俺は、そんな事を考えていた。

思えば、色々な事があった。

その全てが五千年前から続くベリアルの計画だと考えると、変な感慨に囚われそうになる。

そもそも、彼女がこうして来なければ、俺は天童蒼騎を思い出す事もなく、御童陽彩として生を終えたのだろう。

特にやる事は変わらないとは言っても、記憶の喪失感はきつと俺の中に違和感や疼きとなつて残り続ける。

それを解消できたのは、僥倖だと言つておこうか。

「朝、早いね。おはよう、陽彩」

「おはよう、アスタロト。……何かあった？」

「少し思い出したのよ。昔をね」

音も無く、翼を広げた少女が隣に降り立った。

憑き物がさつぱり落ちたような、爽やかな笑顔だ。見た目相応で、正直な事を言うところ可愛いと思つた。

何に感化されたんだか。アスタロトに魅力なんか感じていたら人間として色々とお終いな気がする。

「ちよつと私は行く所あるから。朝御飯までには帰ってくるから、忘れないでよね？」
「用事ならさつさと済ませておけよ、昨日までは時間あつたんだからさ」

「そうなんだけどね。連絡取れたのが今朝だったのよ」

「ふうん……？まあ良いか。時間までに戻らないとオーリスが全部食うかもしれないから早めにな」

「それは勘弁ね……」

すぐに終わる用事らしい。特に心配する事もないから、そのまま送り出す事にすると、その前に。

衝動的に、俺は彼女を呼び止めていた。

「なあ、アスタロト」

「ん？」

「……あー、その……」

「何よ、煮え切らないわね」

少しだけ迷う。

自分でも、何を聞きたかったのか解らないままに声を掛けてしまった。もう少し考える事を覚えろと言ひ聞かせたい。

「……ベリアルはさ。今はともかくとしても、あの頃は友達だったんだろ？」

「貴方が心配する事はないけど？」

「それは解つてる。悩みなんか無さそうな顔してるから」

「……微妙に褒められた気がしないわね、それ」

褒めた訳でも貶した訳でもないが。

何にせよ、俺の聞きたい事はそこではない。

「俺は……」

「……良い、陽彩。貴方の迷いは、悪い物じゃないの」

何もかも見透かされたような、そんな笑顔。

どこか姉のような表情は、ゼロを彷彿とさせる。

「友達を撃てるか、なんて、できる方がおかしいのよ」

「でもお前は」

「私だって怖い。でもね。……それ以上に、正さなきやいけないの、あいつは」

俺の頭に手を乗せながら、彼女は慈しむような声音で語る。

「そして私自身も。これはベリアルルの罰でもあつて、私の罰でもあるから。友達なんだからさ、せめて殴れる内に殴っておかないと」

「……アスタロト」

「なあに？」

「辛いなの？」

「そりゃ辛いわ」

その割には、どこか清々しい顔をしているが。

きつと自分の行いが正しいと確信しているんだろう。

キマリスの言つた通り。

正義の味方は、変わっていない。

「辛いけど、ね。境遇を嘆くのが許されるのは被害者だけよ。私は自業自得みたいな物なんだから、ちゃんと自分で片付けないとね」

「……強いな、お前は」

「そう？ そう言つてくれるなら、もつと頑張れるわ」

今も昔も俺に親は居なかつた。

一度目は事故。

二度目はそもそも居るのかどうかも解らない。

それでも、と思う。

こんな姉が居たなら、きつと楽しかったろうな、と。

「……ま、嬉しい事言ってくれたし、お姉ちゃんとして少しは労ってあげないとね」

「……」

「今日はやけに素直ね、陽彩」

アスタロトは楽しそうに、優しい手付きで俺の頭を撫でる。

いつもなら子供扱いに反発していただろうが、今はどうしてかそんな気分にもならなかった。

「……あのさ」

「うん」

「ベリアルと刺し違えたりしたら、俺は怒るよ。子供の痲癩よりも酷い怒り方する」

「私も随分と愛された物ね。貴方はもつと薄情な人だと思つてたけど？」

「俺だつて最低限の情はある」

「……そういう事にしてあげる」

少しだけ、手付きから遠慮が無くなった。

顔を背けてしまったのでその表情は見えない。

「それに、まだ言いたい事が残ってる。勝ち逃げも許さないからな」

「はいはい、解ってるわよ。アンドロマリウスにも言われたしね」

「……なら、良い。用事は？」

「ちよつと歌聞いてくるだけだから、別に急ぎつて訳でもないけど。ま、そろそろ行つてくる」

歌……？

なんでこのタイミングで、そんな事を……。

「また朝御飯の時にね。他のみんな、起こしてあげて」

「ああ……また後で」

結局、考えても解らない。

それなら戻ってきた時にでも聞くとしよう。

そう考えて、俺は屋根から降りた。



何も無い草原。

そこに、ぼつんと一つ存在する大木。

いつしか人類が世界樹と呼んだそれは、ある少女から生まれたアカシックレコードの一つ。

地球の事であれば全ての叡智がそこにある。

何処にでも在り、何処にも無い場所。

世界の何処かに在る、という事を除き、一切の座標情報が存在しない地点。守り人と墓参りに来た友人以外に、ここに辿り着ける者は居ない。

『L a ——— a ———』

不意に、歌が紡がれた。

美しい旋律と、それに見合う声音。

世界樹に捧げられた鎮魂歌は、一切の生命が存在しない草原へ響いていく。

「……相変わらず綺麗な歌ね、フェネクス」

世界樹の麓。

歌が一周した辺りで、そこに一人の少女が現れた。

「少し遅くなつたわ。ごめんなさい、ユグドラシル」

白い花を持ち、目を閉じて祈る。

変わり果てた親友の姿に、雫が流れた。

「——誰にも救えない存在に、今も尚祈りは捧げられる。素敵^{詩的}ね、アスタロト」

「もう歌は良いの?」

「あれは自己満足。ユグドラシルの魂は、今は眠りに就いている。貴女のお陰よ」

「それは良かった。苦勞してお土産探してきた甲斐もあったわ」

手向けの花を置き、その隣に腰掛けて、大樹に寄り掛かる。

白い花卉を挟んで、反対側にもう一人の少女が腰を下ろした。

いつの間にかそこに居た、世界樹に寄り添う少女の名はフェネクス。アスタロトの数少ない友人にして、たった一人の永遠の存在者。

「やっぱり誰も来ないのね、ここは」

「……女神ユグドラシルは世界にとつて不利益な存在。因果律の外側に辿り着いてしまった時点で、それは世界から切り離すべきモノよ」

「だとしても、さ。昔の友達なんだから、墓参りくらいはしても良いと思うのよ、私は」
それすらも嫌がって彼女を無かった事にしようとするから、アスタロトは神という物を嫌っている。

それをよく知っているフェネクスは特に何も言わず、空へ視線を向けた。

「……不利益、と言えば」

「ん?」

「御童陽彩と言うべきか、天童蒼騎の成れの果てと言うべきか」

「……彼がどうしたの？」

「あの少年もまた、ただの人間に許されてはいけな所まで来ている。アンドロマリウスが何故手を下さないのか解らない程度には」

「ああ……そういう事ね」

覚えのある疑問に、しかし彼女は答えを持ち合わせていない。

確証の無い推測でも良いのならと前置きしてから、アスタロトは語る。

「絆されたつてだけよ、お互いに」

「……わたしには覚えの無い感覚だから、よく解らない」

「貴女はそもそもそういう機能が無いしね」

「……でも、一つだけ」

空に向けていた瞳をアスタロトに向けて、ぼんやりとした視線に確かな光を灯して、フエネクスは言う。

「あの人形が、恋を知れたのなら。それはきつと、詩的素敵な事ね」

「……そうね。きつと、そう」

フエネクス独特の特徴的な言い回しで、彼女なりの祝福を口にする。

彼女は自分が永遠者であるから恋を知れない。

しかし、その事で他人を妬む事も無く、友人の成長を喜ぶ事ができる。本人は否定す

るだろうが、間違い無くそれは聖人の振る舞いだ。

「でも、長居してて良いの？」

「そもそもここは時間から切り離されてるでしょ。折角来れたんだから、もう少し居るわ」

「……良いなら、居てほしいけど」

確かな光は薄ぼんやりと掻き消え、いつもの何を考えているのか解らない表情に戻る。

「ああ、ユグドラシル、わたし怖い。こんな良い友人が居て、わたしもそろそろ死んでしまうのではなくて？」

「それで死ねたら苦労はしないでしょうに……」

苦笑いを隠さずに突っ込みを入れるが、意に介さずフェネクスは笑う。

大樹はただ、見守るのみ。

親友達の、変わらない笑顔を。

「……ねえ、アスタロト」

「んー？」

「纏まって時間が取れたら、あの子を紹介してほしいの」

「……陽彩を？」

予測から聞き返したアスタロトに、彼女は無表情なまま小さく頷いた。

「死を一度は超越した人間。ロストバレット 魔弾でもなければ魔神アンリミテッドでもない存在になつてしまったわたしとは違う。人間のままだに、彼は生命を取り戻した」

「確かに、そういう意味では貴女と同類か」

未だ原因不明とは言えど、御童陽彩と名乗る天童蒼騎の残骸は、確かに人の形を保つて二度目の生命を得た。

その代償に五千年の時間と幾つかの記憶を失つてはいるものの、明確な変化は無い。彼は彼として、そのまま生まれ直してきた。

そこに、どう在つても死を得られない存在が目を付ける。

アカシックレコード「世界樹に無い、本来であれば世界にある筈のない人間。居るだけで因果を歪めていくのに、ユグドラシルは彼を認めている」

「……優しいからね、ユグは」

「彼のその現象を、逆転させたい」

アスタロトのぼやきを意図的に無視して、フェネクスは続ける。

悲願の成就、その可能性を前にして、彼女の瞳には不可視の狂気が浮かんでいる。

「死にたいのね、フェネクスは」

「もう、良いの。人類の営みを見る義理は果たしたのよ。ソロモンは恨んでも恨みきれ

ないけれど……これで、全て帳消しにできるかもしれない」

「馬鹿正直に人を眺めてる必要も無いと思うけどね？ 最初の主は異世界に逃げたし、咎める奴も居ない筈よ」

「……ユグドラシルとの約束を反故にするのはわたし自身が許せない」

「不器用ねえ……私が言えた義理でもないけれど」

世界樹にそつと寄り掛かり、フェネクスは長く息を吐く。

熱を吐き出すような深呼吸が終わると、彼女は平常通りの自我の薄い顔に戻っていた。

一連の会話を物静かに見守っていた世界樹が、ふとその枝を擦れさせた。

「ユグドラシル？」

「……何を言いたいの、ユグ？」

これ見よがしに枝を揺らして、女神と化した一人の少女の成れの果ては何かを伝えようとする。

物言わぬ筈の植物となって尚も、彼女は献身的だった。

「……ええ、いや、そうね。そろそろ行かないと、決意が鈍りそうよ」

「アスタロト……ユグドラシルは何を？」

「のんびりするのもいい加減にしろ、だってさ」

勢い良く立ち上がって、軽く背を伸ばす。

休息の時間は十分に取れた。

心も落ち着いたし、体は元より万全だ。

後は、かつての友人を正すのみ。

「いつものんびりしてたユグに言われちゃ仕方無いわ。行ってくる、フェネクス」

「……もうわたしは、誰かに置いていかれるのは嫌よ」

「解つてる。貴女を一人にはしないわ」

「今までそう言った人は全員死んだけれど」

「不吉な事言わないでよ」

彼女流の激励と心配を受けて、アスタロトは翼を開く。

それに魔力を込めて推力を得ると、少しの溜めを経てから一気に空へ翔け上がる。

それを見送ったフェネクスが、世界樹に体を預けて目を閉じる。

その体が少しずつ取り込まれていくのを感じながら、彼女は祈る。

「必ず勝つて帰りなさい、アスタロト」

目を開き、空を見据える。

そこにはもう、アスタロトの姿は無かった。

「それが、責任と言う物よ」

自分に余計な期待を抱かせた存在に、恨めしそうな感情を込めながら。永遠の存在者は、真摯に祈りを捧げていた。



“何か”が来た。

俺がそれを感じると、ゼロが反応を見せるのは同時だった。

すぐに戦力全てが結集し、クレイドル07を守る、ひいては人類を守る戦いへの準備を始めた。

そんな中、俺は出撃ゲートのすぐ近くの物陰で、何をすることもなくぼんやりと自分の手を眺めていた。

最初は、訳も解らないままにバエルと契約して、戦いと向き合った。

次は、自分の意思で戦場に赴いて、アルトリアスさんの力になろうとした。

最期は柄でもなく決死の覚悟という奴を抱いて、揺り籠の礎となる事を良しとした。

そして、今。

俺は、再び決戦と呼べるであろう戦いへ身を投じようとしている。

「……………ねえ、陽彩」

視界の端に、アルビノの少女が映り込む。

グレイエンプレスの精神負荷と、トラウマに起因する重度のストレス。それらによって後天的に色素を失った彼女は、それでも俺からすれば強く眩しく見えた。

「こんな所に居たんだね。探すの、苦労したよ」

「……アリサ」

言葉が続かない。

どうして、こんな所まで来てしまったんだ。

「君が何かを悩んでる事と、怖がつてる事は解る。それでも、敢えて私は言うよ」

アリサは逃げる時間すらもくれない。

いつもは誰よりも優しく思っていた彼女の、その優しさが今の俺には辛い。

「君が来てくれないければ、私はきつと戦えない」

……ああ、解る。

アリサの言葉は、優しい嘘だ。

「私はアリサとは違う。君をここに残して行くなんて事はできない。……君が近くに居ないと、私は何もできないんだ」

「……俺は、ヤ」

もう戦いから逃げられる立場じゃない。

その事は理解している。

「戦うのは、怖くないんだ。だけど、ベリアルとまた会ったら……俺は、今度こそ『混ぜる』気がして」

「大丈夫……だつて言つても、仕方無いよね。自分が変わっていくこと……それも、自分では抑えられないもの。それは、とても怖いから」

そうは言うけど、アリサは耐えた。

綺麗な黒髪が色素の無い白髪へ変わりゆくことも。

黒水晶のような瞳が、真紅に染まっていくことも。

見た目に限らず精神面すらも、グレイエンプレスは書き換える。

それすらも耐えて黒鐵アリサで在り続けた彼女は、だからこそ今もこうして俺の前に居る。

「私にも乗り越えられた。君が手伝つてくれたから。今度は、私が君の手を引く番だよ」
すつかり色の抜けた手を差し出して、彼女は言う。

「君を私が覚えてる。アリアスもゼロも、何ならアスタロトやバルバトスも。姫様やりだつてそう。君が君でなくなる前に、私達が君を取り戻してみせるから」

二人きりだからか、珍しくアリサがよく喋る。

それとも、俺が何も言えないからか。

「私を信じて、陽彩。陳腐な言い方だけど、君を守らせてほしいんだ」

「……アリサ」

「うん」

「俺が変わっても、変わらずに見ててくれる？」

浅ましい俺の最後の確認。

それに対して、彼女はしつかりと頷いてくれた。

「もちろん。どんな君だって大好きだよ、陽彩」

好意それを言葉にされた。

逃げられなくなった。

——いいや。

逃げるつもりなんて端から無いだろ、御童陽彩。

自分の頬をそこそこの威力で叩く。

跡が付かない程度にと思っただが、乾いた音は存外響いた。

「ひ、陽彩……？」

「ありがとう、アリサ。お陰で怖くなくなった。行こう、そろそろゼロが呼び出す時間だろ」

「……そうだね。行こうか」

いつも通りを心掛けて笑ってみると、アリサは笑顔を見せてくれた。

ゲートのすぐ近くに管制室もある。ここから少し移動すれば集合には間に合う。

俺は魔神の反応は未だに把握できていない。魔弾であればバエルやキマリスの要領で何となく解るが。

それは置いておくとして。

ベリアルの放つ魔力や殺意は他とは別格だ。それを検知する能力が無い俺にも第六感として理解できる程度には。

つまり、クレイドルに接近された段階で俺はそれを感じ取れる。迎撃のタイミングを間違える事は無い、筈だ。

問題は桜花。ゼロを通じて連絡を取ろうとしたが、完全に無反応。家にも戻っていないと言うし、やはり捕まってしまったのか。

それにしてもクレイドル05の連中があまり気に掛けていないのが気になる。他に予備戦力があるのか、それとも桜花が絶対に戻ると確信しているのか。

恐らく後者は有り得ない。奴らがそんなに殊勝な人間だとはとても思えない。

少しずつ膨れ上がる不安を押し殺しながら、俺はアリサと共に管制室へ向かった。



こちらの戦力の殆どは既にクレイドル07に集合している。アーガナを除けば全員だ。

アサルトフレーム
魔導機鎧を駆る契約者は三人、ゼロの作った外装を纏う魔神は二人。ついでに生身で飛べる例外が一人。

それが管制室に居るメンバー。残りはクレイドル02に待機しているアルティエさん、未だ詳細不明のアルビレオの契約者にアーガナ、そしてベリト。

また、無人駆動の魔導機装兵が多数。これらはクレイドルの防衛を務めると同時に、敵対勢力への攪乱要員としての使命も果たす。

それらによって怪ホロウヘイズ異とベリアル達七人を足止めし、その間に魔導機鎧とこちらの魔神で一人ずつ撃破する流れとなる。

後はアーガナが合流次第、作戦を固めてベリアルの行動に合わせて出撃、なのだが。
「……ああ。見てると吐き気がする」

「嫌われたものね」

「斬って良い？」

「今は駄目よ。後でなら付き合うわ」

オーリスの奴がアスタロトを見た瞬間に空気を変えた。

ベリアルが扮していたアスタロトによって一度落とされている為、確かにそれは理解できるが。

まさかこのタイミングで発露するとは思っていなかった。完全に不覚だ。

「……なら、我慢する」

「聞き分けが良いのね。アンドロマリウス、私と彼女は別の場所に振り分けてくれる？」
「流石に今を見せられて近くに配置する程愚かじやないつもり。アリアスヴェイン、陽彩と離れるかもしれないけど良い？」

アスタロトの言葉を受けたゼロの確認に、オーリスは肩を竦めて答える。

「そこまで子供じやないよわたしは。それに、陽彩は任せて良いんでしょ？」

「……まあ、ね」

流し目をアスタロトに送ってから、彼女は逆に問い掛ける。

「で。キャバルリイは？」

「一応は形にした。テストも終わっていない試作品を実戦に投入するのは技術者としては本意だけれど、きつと力になる」

「……だと、良いんだけどね」

キャバルリイについては既に説明を受けている。

一時的に機体と魔導炉のリミッターを廃し、装甲を変形させる事で高機動高火力状態

に移行するシステム。

問題は、魔導炉の出力も跳ね上がる為に、装甲が赤熱化する程の熱量が吐き出される事。長時間そのまま居れば俺の方が焼け死ぬ。

俺には扱いきれないと踏んでいるので、発動も制御もトリスリッター自身に任せている。

因みにリタはキャバルリイとは距離を置いている。同じゼロから生み出されたシステム同士なのに、波長がまるで合わないとか何とか。

含みがあるような微妙な笑顔のオーリスに、アリスが首を傾げた。

「キャバルリイ?」

「トリスリッターの二つ目のシステム。機体の独自稼働と統制を主眼に置いたリタとは違って、暴走状態を意図的に引き起こす為の外部負荷装置。……だったよな、ゼロ?」
「概ねその通り。システム・トリスリッター……リタは、機体を契約者無しで動かす為テストメンタの人格。キャバルリイは敢えて負荷を掛ける事で魔導炉のリミッターを解除させるもの」

強制的に火事場の馬鹿力を出させるような物だとリタが言っていた。つまり、機体の方にも無視できない程度の負荷が掛かるんだろう。

ゼロの説明を聞いてそんな事を考えつつ、俺は再び言いようの無い不安に駆られてい

た。

「……姫様もそろそろ新しい物が欲しいよね」

『わたしは現状に満足しています。強欲は罪ですよ、アリサ』

「そうなんだけどさ」

グレイエンプレスは特異な戦闘スタイルからして、他の機体の武装が転用できない。トリスリッターのフォトンライフルは規格が同じだから辛うじて流用できる程度で、アルティエさんの狙撃を反射したりしているのはアリサ自身の技量による物が大きい。

まあ、姫様は他の色物が必要無い程度には心強い存在なのだが。

「考えておく。気が向いたらグレイエンプレスの武装にも手を付ける」

「良いよそんな、ゼロはトリスリッターに専念しなきゃでしょ?」

気を遣わせたとアリサが恐縮しているが、ゼロのあの表情は気を遣ったと言うよりも個人的な興味の方が強いような……。

「否定はできない、けどクレイドル06の連中がどんな仕事をしているのかも気になる。また今度、という事で」

「……解った。ありがとう、ゼロ」

いつも通りの平坦な声で、彼女はそう続けた。事ある毎に気に掛けているので、やはりアリサの事も大事に思っているのだろう。

それから暫く歓談していると、クレイドル組のいつも通りの光景を眺めていたアスタロトが、不意に弾かれたように視線を上げた。

ついで、はつきりと感じられる魔力。

遂に来了。この一連の騒動の、恐らく最後を飾るであろう戦い。

湧き上がる恐怖を一度抑え込んでから、深呼吸を挟む。

大丈夫、皆が居る。自分を見失う可能性が一番高いのは自分自身だ。俺さえしつかりすれば、皆は大丈夫なんだから。

荒れる心拍数を落ち着ける間に、全員の意識が戦闘に移行する。

覚悟は決めた。

揺らぐ前に、全てを片付けるだけ。

「大まかには作戦通り。ただ……アスタロト、陽彩。もしかしたら、強制的に分断されるかもしれない。気を付けて」

「了解。陽彩は私が守るわ」

「分断……ラウムか。そういうえば、敵は解ってるのか？」

「一応はね。ただ、能力の方は殆ど未知数だから、下手に先入観を与えたくないの」

「魔弾の時とは訳が違うって事か。解った」

敵を強制的に分断する程の空間干渉能力なんてラウムくらいしか居ないので、それは特定できる。

他は一芸に秀でた者が居れば解るが、それをアテにし過ぎて裏をかかれるのも良くない。

とりあえず、前情報は無しにしておこう。

「それじゃあ、出撃準備を。アルビレオとベリトはこっちで呼び戻すから、アーガナはお願い」

「ああ、さっきのですぐに来る筈だ」

一応端末から連絡を入れておく。

そうして準備を進め、ゲート前に移動する。

トーリスリッターはキャバल्ली用の外部冷却装置を含めて更に増加装甲を増やしている為、カタパルトは使用できない。

なので、俺とアスタロトは別口から出る事になる。

『ガルディーヴァの反応、確認しました。既に敵の先遣隊と戦闘を開始しています』

「気が早い事で……アスタロト、行くよ」

「ええ……バエル、キマリス、終わらせましょう」

彼女が両手に長剣と機械槍を取り出すのを横目に、俺は生身のまま虚空に躍り出る。

浮遊感の直後に、身が竦むような降下。

即座にトーリスリッターを展開して、背中の翼を全開まで開いた。

「……こっわ」

『いつその事クレイドルの端から直接出た方が良かったかもしれないね』

「防護バリアを突き破れる程加速する距離がなあ……」

不意に口を衝いて出た言葉をリタが拾う。

恐怖はそれで抑えられた。やっぱり、彼女には随分と助けられている。

「先に行ってるわ。それだと足が遅いんでしょう?」

「悪いな、すぐ追い付くから」

「貴方が来る前に一匹は沈めとくわ」

軽口を叩くと、アスタロトは一気に加速してすぐに見えなくなった。

羨ましい。あの、本物の翼は。

俺も彼女のように、自力で空を飛べたなら。

きつと、自由に戦えたんだろうな。

『……わたしは所詮、作られた人格でしかないのです、主様が何を考えているのか、わたしには解りませんが』

それに対する言葉を俺が出す前に、彼女はその続きを紡いだ。

『わたしは主様の翼です。思うがままに、お使いくださいな』
 「……はあ」

一つ、大きく息を吐く。

それからゆつくりと吸い込んで、目を閉じる。

僅かな震えを、無理が無いように抑え込む。

「行くうか、リタ。いつも通りに、無傷で帰ろう」

『——はいっ、主様！』

首から提げた紐には、二つのお守りが繋がられている。

一つは漢字で想いを刻み込まれた物。

もう一つは宝石を内包した金属製のペンダント。

俺を守ってくれる、たった一つの大切なもの。

その存在と、この縁よすがによって結び付けられた大事な人達を思い起こしながら、俺は自分の翼にそつと力を込めた。

向かうはクレイドル07から二百キロ、太平洋上空。

地上の被害は度外視できる。それは、ベリアルベリアルの粹な計らいという物なのだろうか。そんな益体も無い事を考えながら、生まれ変わった両手の愛銃を強く握り直した。

第十二話

太平洋上空。

大気汚染による分厚い雲海の上に、三つの影が舞っていた。

一つは機械の全身鎧。

もう二つは高濃度の魔力を纏った、生身の肉体だ。

「世界とか魔神とか正義とか……正直言っても良いけど。これは陽彩お兄ちゃん
の為。わたしを求めてくれた人の為に、ガルディーヴァ、力を貸して」

猛禽のようなツインアイが光を漏らす。

戦線は未だ優位。弾幕は途切れたが、向こうの攻撃は全て防いでいる。

ガルディーヴァと名付けられた、現状において唯一無二の神装魔導機鎧。アサルトフレーム・ネクスト トーリス

リッターとラプラスの戦闘データより形作られた、現行最高峰の機体。

それを駆るアーガナと、相対するのは二人の魔神。

『アーガナ、無事だとは思うけど形式上聞くよ。大丈夫？』

「まだ余裕はあるよ、姉さん。これって殺しても良いの？」

『さあ……名前は何んて？』

「アガレスだとかヴァサゴだとか」

『知らない。ベリアルじゃなきゃ好きにして良いよ』

「了解。じゃあ、殺すね」

時折隙間を縫うようにして飛ばされるシエキナーの援護狙撃に手を取られ、二人は上手く攻めきれない。

それを活用して、アーガナは現在に至るまで敵を完封。

右手に持った複合兵装 “イグニス” を用いた多彩な攻撃と、ガルディーヴァの持つ高い機動性を噛み合わせ、常に壁のように弾幕を形成している。

「……もう暖まったよね。行こうか」

愛機に語り掛けると、アーガナは大きく息を吐きながら目を閉じる。

それを開いた頃には、彼女の顔付きは変わっていた。

『AGNIS DEVICE・UNITE HOLD』

《A》

《G》

《N》

《I》

視界の中央に赤い紋章が輝くと、アーガナの左の瞳が緋色に煌めいた。瞳と同じ色の光が装甲から溢れ出て、それはまるで炎を思わせるような振る舞いを見せる。

「……咏え、謠え、謳え………！」

右腕全体を覆うような形状のイグニスは、三つの兵器からなる。

四門のガトリングキャノン、二連装レーザーバズーカ、そして六研りっけんの傑作、超高出力レーザーブレード。

それに加えてリフレクターシールドを展開する事で、武装を一括に纏めながら汎用性を高めている。

その異形の右腕が、全ての砲口を前方へ向けた。

「歌え、ガルディーヴァ——！！」

高らかなマシンボイスと共にイグニスが炎を吐き出す。

絶え間ない弾幕の中に一定間隔で放たれる高火力の弾丸。

敵の片方——アガレスと名乗った女を狙い、アーガナは距離を詰めていく。

レーザーブレードの間合いに持ち込めば後は確実に勝負が終わる。

ガルディーヴァの機動力を以てすれば、それはそこまで達成し難い話ではない。

「——来たな、こちらに」

「は？」

「時間切れ、というだけの話だ」

二メートルを超える刀身を持つレーザーブレードをさらりと受け流し、アガレスは実体の無い影からできた斧のような物で切り返してくる。

どういう原理か、それは物理的な現象をすり抜ける。

そしてアーガナの目にはつきりと視認できるが、ガルディーヴアの目にはまるで映らない。

アスタロトやゼロの纏う空気に似ているな、となんとなくは感じているものの、その正体までは辿り着いていない。

「……違う」

似てはいるが同じ物ではない、と認識する。

その斧が今度は弓矢のような形に変化したからだ。

知己の魔神連中は己の武装の形を変える事はできない。それを形作る魔力は、持ち主の「力」というイメージを元にして現れる力場そのものであるからして。

「なら、殺せる」

一度アスタロトを見て心に深く刻まれた一つの見識。

自分では魔神という存在には敵わない、という事。

それは彼女の揺らが無い「正義」とかいいう正直狂つてるとしか思えない信念から来る強さを見てのものであり、魔神だからという訳ではない。

見たところアガレスはその手の異常者ではないらしい。
ならば殺せる。

「もう十全だ。この場で見るべきものは見た。それ即ち——」

「堕ちなさい……っ！」

「——我らの勝利だ、アガレス」

そこで漸く、アーガナは思い至る。

ずっと、ヴァサゴの存在が希薄になっていった事に。

考えてみればおかしい。こんな近距离に居ながらヴァサゴは何もしなかった。その状態をおかしいとすら思わなかった。

この感覚は、バルバトスに似ている。彼女が獲物を狩る時の、世界と一体になっているような気配の消し方。

「……か、ふっ……っ？」

気が付けば、背中から何かを突き立てられていた。

それがヴァサゴの武器であると理解する前に、目の前からアガレスの弓矢が放たれ

た。

無防備に影の矢を受けたガルディーヴァの胸部装甲から、炎が溢れる。

「幸先は悪くない。前哨戦だが、この結末は上等だろう」

「ああ。アムドウキアスも喜ぶだろうさ」

どちらがどちらに話しかけているのか、アーガナには理解できなかった。

それはまるで、同じ人物が自問自答をしているようだ。

拭えない気持ちの悪さに顔を顰めながら、力を失っていく末端に意識を向ける。

どうやら脊髄は無傷らしい。

臓器はそもそも一纏めにされて下の方に集まっているので、ダメージを受けたのは

空っぽの胴体部分だけ。

だがそれでも、出血が大きい。

更に、アスタロトとは別種の毒のようなもの。何の異常も無いのに、少しずつ意識を

削り取られていく。

明滅する視界の端に、彗星が疾走るのが見えた。

「間に合っては……無さそうね」

彗星は魔神の片割れに勢いのまま斬撃を浴びせると、そのまま反転してもう片方へ何

かを飛ばした。

意識の片隅でそれがアスタロトである事を認識して、アーガナは感覚の抜けた右腕でイグニスを持ち上げる。

「よく知らない相手ではあるけれど、陽彩の妹分よ。守る理由は、それで十分よね」

展開されたイグニスの弾幕でアガレスを封じている間に、アスタロトはヴァサゴを仕留めたらしい。

魔神特有の特異な気配が消えていく。

「アーガナ、だったわね。まだ平気？」

「……ん」

「なら良いわ。もう少し耐えてね」

弾幕を維持していれば、アガレスはこちらへ反撃してくる。

弓矢を再び食らってしまったえば今度こそ致命打であろう、とは解っていたが、その心配は無かった。

何せ、既にアスタロトが最大速度まで加速していたのだから。

「……裏切り者か」

「よく言う。人を散々利用してから棄てておいて、どうしてそんなセリフが吐けるのか。わたしには理解できないわ」

弓矢を素早く斧に戻すと、アガレスはアスタロトの攻撃を既すんでの所で受け止めた。どうやらアスタロトの長剣と不定形の斧は同質らしい、とアーガナは記憶して弾幕を止めた。

「まあ、理解する前に沈んでもらうけど。アモンの所に送ってあげるわ。精々恋人同士仲良くしなさいな、あの世でね」

斧を弾き上げると、がら空きの胴体へ一閃。

斬撃の鋭さ、威力は、人類最強の氷剣にも劣らない。

「……やはりお前だったか」

「あら、淡泊ね？」

「……さて、な」

斧を維持できなくなったようで、アガレスの手から影が失われた。

腹の大きな斬撃痕に手を添えながら、彼女は体の端から光に消える。

その粒子は重力に引かれ、地上へと向かっていく。

「終わりだとは思うなよ。私は幾らでも、地獄の底から這い上がってやる」

「その度に突き落としてあげる。良いから死になさい」

トドメと言わんばかりに、大振りな斬撃。

今度こそ消滅したアガレスを見送ってから、アスタロトはアーガナの方へと視線を向

けた。

「大丈夫？ 手当はできるけど……もしかして、死んでも戦いたい人だったりする？」

「……そこまで壊れてないつもりだけど。治せるならお願いしたい」

「解った。陽彩達に任せて一回退がりましょうか」

それに頷き、ガルディーヴァへと最後の命令を下す。

薄暗い視界の中で見えたのは、黒い重装甲の見覚えの無い機体が、凄まじい速度でこちらへ向かっている光景だった。



現在のトリスリッターは、前までと比べてかなり様変わりしている。

ラディアントマグナムは過剰威力の代わりに取り回しを改善され、ラウムシュトゥンデも大型だが銃器と呼べるサイズまで小型化された。

腕部装甲内には小型のレーザーブレード発振機、背中に懸架するのはブレードランチャーという新規武装が六つ、それとセラフの装備であるラディアントバズーカが二つ。

腰の両側には短銃身の二連装レーザーガン、増大した重量に対応して大出力の追加

ブースターも装備されている。

直列魔導炉があればこれだけの武装や推進機もエネルギーを賄えるが、念の為に各部に独立型のジエネレーターも増設されている。

魔導機アサルトフレームの構造上、いくら人型に近いとはいえ、これだけやると軽く飛ぶだけでも違和を感じる。肉体との差異がそのまま俺への負荷になるのであるからして。一応、追加装甲と装備は順次格納展開しつつ使い分ければ負荷は減るが、俺はそこまで器用じゃない。

というか頭が痛い。割れそう。感覚的にはもう割れてる。

六本腕と四脚で自在に動き回るアルティエさんは凄いのだろうと再確認した。

『陽彩、もし辛かったら制御をキャバルリイに任せれば良い。稼働限界まではそれで何とかできる』

「死にそうになったら考える。それより、アーガナは？」

『アスタロトが当たってる。特に何も無ければ快復する』

「……なら、良いか」

戦端はもう開かれている。

アーガナとアスタロトがシエキナーの援護を受けて、既に二騎の魔神を落としている。

あと五騎。ベリアルと桜花を含めたとしたら、倒さなければいけない数は七。

こちらの数を考えれば分の悪い勝負じゃない。魔導機装兵リフレクスアームズも居るし、心配事は特に無い。

強いて言えば俺の頭が無事かどうか。

「……ゼロ」

『なに?』

「いや。無事に帰ろう。お前も、俺も」

『……解ってる』

先の話をするとう鬼が笑うと聞く。

鬼と笑い合うのもそれはそれでなんか楽しそうだが、今は遠慮しておこう。

反応が見えてきた。今の俺には魔力が確認できる。

トリスリッターの凄まじい負荷で擬似的にリミッターが外れでもしたのか、瀕死の時と同じくらいに集中力を発揮できている。

見えるのは……やはり、七つ。

予想に違わず、桜花は向こうに付いていて、ベリアルもまだ生きています。

そして、戦闘はもう始まっている。

アリサが全体に対して攻撃を仕掛け、バルバトスとベリトが攪乱を担う。

オーリスとアルビレオが各個撃破に向かっていたので、作戦通りに一騎ずつ落とすつもりなんだろう。

ゼロは何をしているのかと思えば、視認できなかった。

セラフの機動力はキャバルリイ起動時のトリスリッターや、リミットブレイク状態のラプラスよりも高い。今の俺の目でも追いつけない。

「……行け」

『ブレードランチャー、射出します』

いつまでも見ていないで、戦闘に参加する。

俺の声を聞き届けたトリスリッターが背中の中荷を一つ減らし、六つの機械剣が飛翔する。

自立して火力支援を行う兵器の一つ、分類で言えばグレイエンプレス姫様のソードサーヴァントに近い。

これは突撃による物理的な斬撃だけでなく、エネルギーで形成した刀身をそのまま飛ばすという離れ業もやってのける。

基本的にはリタが誘導してくれるが、俺のイメージを送り込めばそちらを優先して動いてくれる。

『主様、アーセナルを確認しました』

「単独？」

『ベリアルがついています』

「……ブレードランチャー、向こうに回して」

『了解です』

纏めて叩き落とせるような技量は俺には無い。

だが、リタの手伝いもあればベリアルを抑えておく事程度はできる。

その間に桜花に問い質す。

魔神に与したその真意を。

「トリスリッター、これより戦線に参加します。アーセナル及びベリアル両名はこちらで対処するから、こっちに任せて。特にラプラスな」

『なんで名指し!? わたしだって空気くらいは読めるよっ!』

桜花さえどうにかしたらベリアルはどうにでもしてくれて良いから。

それまでどうか、オーリスにはそのままそちらで暴れていてほしい。

「リモート武装の制御は任せるよ、リタ。バズーカなんて撃った経験ないしな」

『はい。セラフからフィードバックされた情報で、バズーカ兵器の扱いは一通り確認しています。主に牽制としてになります。全力で補助させていただきます』

ブレードランチャーが六本ともベリアルへ向かった事を確認し、俺は深緑の魔導機鎧アサルトフレーム

へと加速する。

距離を詰める間にアーセナルはこちらを視認したらしく、その豊富な火器を向けてくる。

射線を躲しつつこちらの射程に収め、まずは通信を開く。個人回線で十分だろう。

「桜花！聞こえてるなら返事してくれ！お前なんだろ!？」

『第二射来ます、回避を！』

再び奔る光線を回避、また距離を縮める。

触れられる位置まで行けば確実に勝ち、だが桜花の技量が衰えていないのならそれはかなり難しい。

彼女は普段はおちやらけては居るが、あれで公式序列四位だ。地味にアルビレオよりも上である。つまり状況次第では真正面からアリサと姫様を撃墜しかねない実力者であるということ。

平時なら俺には万に一つも勝ち目は無い……が、今は隙がある。そこを突ければ俺の勝ち。

できなければ……まあ、オーリスに勝ちを譲るだけの事だ。

『……………』

「ん？」

『……………』

駄目だ、ただでさえ声が小さくて聞き取れないのに、それに加えて酷いノイズが走っている。

ベリアルルのやつ、アーセナルに何をしたのか。

「リタ、音声解析。なんて言ってるか聞き取れない？」

『二度目は主様の名前を呼んだようです。二度目は不明瞭ですが……彼女にしては、どこか声が平坦なような……』

「平坦……？」

桜花はもつとハキハキと喋る女の子だ。あんな風にノイズが酷くても、あの芯の通った声なら俺には聞き取れる。

なのに、さつきは……。

「危な……考え事は後回しにしないと。先にベリアルを撃つよ」

『はい、主様』

気付けば目の前に光線が複数迫っていた。

それを慌てて避けると、アーセナルまでの距離が開いてしまった。この距離は桜花の間合いだ。さつきと調節しないと。

しかし、不気味だ。

ベリアルはどうして、何もしない？

「……不思議でしょ、私なんて動かないのか」

「……っ」

「凶星つてやつだよね？」

こいつは確かに人の心を読むのが上手かったな。

慌てるな、それだけ解り易くなる。

「ま、そう警戒しないでよ。実を言うと私はもう何もできなくてね。桜花ちゃんの調整で力を使い果たしちゃって」

「……桜花に何をした」

「いや、別に？ちよつと楽しい事を教えてあげただけだよ？」

「……そうか」

ラディアントマグナムを発射。

退路を塞ぐようにラウムシユトウンデを撃つ。

それに合わせるように、ラディアントバズーカの砲撃がベリアルへ向かった。

爆風を斬り払うように、魔力が荒れ狂い始める。

「割と容赦無いよね君も。もしかして戻ってきてる？」

「さあな。俺が天童蒼騎なのか御童陽彩なのかは俺にも解らない。ただ、一つ言えるの

は——」

ブレードランチャーが六方向から刀身を射出、更に角度を変えて突撃。腰のレーザーガンが俺の意思を介さず射角を合わせ、細い光を吐き出す。

「——お前を撃つのに、そんな事は関係無い」

ラディアントマグナムを再度照準、射撃。

手を休めたら何をするか解らない。

「相変わらず殺意が高いね、他の事が眼中に無いと見える」

このまま、沈めてやる。

五千年前の仇討ちだ。あいつらの……いや。

装甲から漏れ出す赤い光に、俺は正気を取り戻す。

「落ち着け、トリスリッター」

キャバルリイは魔導炉のリミッターを強制的に解除するシステム。

感情を食らうのは、魔導炉の方だ。

その制限が外れる……つまり、俺の精神全てをエネルギーに変換し、機体を限界まで駆動させる。

まだそれは早い。俺を殺すのもう少し後にしてくれ、相棒。

「俺は契約者だ。クレイドルを守る正義の味方じゃなきゃいけない。……アスタロト

じゃないけどさ」

「呼んだ？」

「呼んでないけど来てくれてありがとう」

ブレードランチャーと戯れていたベリアルに、金色の彗星が激突する。

紫色の魔力を纏う剣を携えた彼女は、紛れも無く正義の味方だった。

「……お前は人の心を力にする為に居るんだ。使い時を見誤るなよ」

赤い光が消えていき、俺の中で何かが強制的に燃やされるような違和感が消えた。

冷静に戦況を見直す。アスタロトが戻った事でこちらの優勢が確定した、か。

このまま押し切る。ベリアルは生かしてはおけないし、どの道アスタロトが殺すだろ

うし。

問題は桜花だ。最悪、精神的に致命傷を受けているかもしれない。もしどうしようも

無かったら……。

「……だから落ち着けと」

視界の端にちらつく光を抑え込んで、ラディアントマグナムを構え直す。

今のベリアルは相当に弱体化している。この五千年で何があったのかは解らないが、

今なら問題無く倒せる。

「さて、ベリアルは貰うわ。陽彩はあの子を救ってあげて」

「……間に合うのか、あれ？」

俺の不安の発露、その発言にアスタロトは肩を竦める。

そして、あっさりと答えてくれた。

「ええ。情緒は不安定になるかもだけど、記憶も人格も無事に助けられるわ。ま、わたしがどうとでもしたげるわよ」

「頼もしいな、お前ほんとにアスタロトか？」

「もしかしたら偽物かもね」

からりと笑うと、彼女はベリアルの方へと飛翔した。

向こうは任せよう。俺は桜花と向き合わなきやいけない。

助かる事は保証済み。今は、彼女を無傷で無力化する方向で頑張ろう。

「……桜花、聞こえてるんなら声を聞かせてくれよ。何だって良い、お前だって解るような事を……っ！」

『……………』

こちらへ砲火が向かうと同時に、またノイズが走る。

つまり、通信回線は開かれている訳だが。

桜花の声は、まだ聞こえない。

『主様、対話は無駄です。今はまず無力化を優先してください』

「解ってるけど……!」

『それとも、主様。我が儘の為に彼女を犠牲にしますか?』

「……………」

どうしてそう、リタは不器用なんだか。

もうちよつと言葉を選んでほしいんだけどな。

「リタ、帰ったらゆっくり話す事がある」

『幾らでもお付き合いますよ』

「じゃあ——行くよ、トリスリッター!」

《Ch》

《Va》

e
v
e
r
s
a
l
S
h
i
f
t

《L》

《R

》R

y

全身の装甲から真紅の閃光が迸る。

時間制限を設けよう。桜花を止めるのに、一分も使わない。

ブースターの出力が上がっている。魔導炉のエネルギーがそのまま速度に変換され

るのだから、それも当たり前か。

一瞬で距離を詰めて、こちらの戦闘距離へ。

背中サブアームがラディアントバズーカを挿んで前方へ向け、砲撃開始。

同時にラウムシユトウンデを撃ち放って退路を塞ぎ、ラディアントマグナムを直撃させる。

フォトンフィールドで減衰される事を考えても、かなりのダメージを与えられる筈だ。

爆炎を晴らしてアーセナルが距離を離す。

こちらへ巨大なレーザーキャノンに向けて、引き金を引いた。

『——っ！』

ノイズが走る。

閃光が弾け飛び、装甲から漏れる光が強くなる。

「リター！」

『残りおよそ二十四秒』

「避けてる時間は無いか……！」

腕の装甲を展開、発振したレーザーブレードで光を切り裂く。

俺には実体のある剣よりもこれの方が良い。性に合っている、と言う奴か。

『腕部装甲、剥離開始。排熱に異常が発生しています。一旦退避して体勢を立て直して

ください』

「キャバルリイの再冷却時間は？」

『……二分です』

「このまま行くよ——」

地味に腕が火傷している気もするけど無視。

このまま桜花を止めに行く。少し荒くなるけど許してくれる筈だ。……たぶん。

「——桜花、聞こえてんのか知らないけど聞いてくれ！」

光の柱を切り抜けて、その先に待つ弾丸達をフォトンフィールドで無理矢理潜り抜けていく。

腕が熱い、が、それを誤魔化していける。

キャバルリイは精神を燃やし尽くす。その精神負荷を受け入れる事で、機体の性能を限界以上に高める。

このままだと排熱が不完全で腕がイカれるかもしれないが、まあ桜花を取り戻す対価としたら安い物だ。どうせ俺は一回死んでいるのだし。

『……』

「お前に何があったのかは後で聞く——」

『……い、ろ……』

アーセナルが動きを止める。

キャバルリイ活動限界、残り十三秒。

ここを絶対に逃がすな。俺が桜花を助け出す、最後の機会なんだろうから。

『……たす、けて……っ』

「——帰ってきてくれ、桜花っ！」

至近距離からブレードランチャーによる拘束。

これなら逃しはしない。ここで止める。

《Ch i》

《V a》

『S

System Down』

《L》

《R y》

視界がブラックアウトする。

意識が消える前に右腕が何かを掴む。

火傷に加えて、精神負荷のせいで感覚は消えているのに。

ああ、俺はこの感触を知っている。

女の子の手は、俺のそれよりもずっと。

暖かくて、柔らかいんだった。



黒い魔導機鎧トリスリッターが堕ちていく。

その様を見ても、何故かわたしの心は波立たずにいた。

『——アリアスっ！前線維持はアルビレオに任せてトリスリッターを！』
「……………いいえ」

目の前を阻む魔神の何れかを斬り裂いて、眼を閉じる。

どうしてかは解らない。

いつもよりも、頭が冴えている。

「陽彩は絶対に帰ってくる。攻撃を続けて」

『でも！』

「アリス」

『…………恨むよ、アリアス』

視界の外から迫る攻撃を、目を閉じたまま斬り落とす。

それが何だったのか把握する前に、次の動作へ移る。

「ゼロ、システム・トリスリッターは搭乗者が気絶した時にこそ真価を發揮する。違う？」

『寸分違わず当たり。でも……本当にアリアスヴェイン？』

「さあてね。わたしにも解らない。今のわたしは誰なのか」

落とした魔神の名前はラウムと言うらしい。

わたしの知らない名前だ。

誰かの思考が紛れ込んでいる。

アルトリウス
英雄か。

「わたしの中から出ていけ——」

わたしの名前はアリアス。

アリアスⅡヴェイン・オーリアル。

陽彩だけの、オーリスだ。

「——アルトリウス・レイリッター……っ！」

その名前はわたしにとって忌み名ではない。

でも、陽彩にとって……天童蒼騎にとってはきつと、大切な名前なんだろう。

そうと解つていても。

わたしの中に土足で入って来られたら追い出すしかない。

「ご先祖さまには引っ込んでいて欲しい。

「これは、わたしの戦いだ……!」

両手の剣を強く握り締める。

壊れる程に力を込めると、それに呼応して刀身が煌めく。

光を増していく複合大剣。

刃からレーザーブレードを発振するロストセイバーの劔が、魔神を一匹喰らい尽くした。

「——アルト!」

『はい、オリジナル』

「一応陽彩を見ていて!わたしはこつちを全力で片付ける!」

『了解です。……人の心が残っていたようで安心しました』

「みんなしてわたしの事何だと思ってるの!?!」

実に心外な話だ。わたしはこれでも正常な方だと思っている。

恋に関してはまあ、甘んじて異常者の烙印も受け入れよう。ちよつと行き過ぎている感じなのは自分でも解っている。

だけど、この状況ですべき事を見失う程に狂っているつもりもない。

「ラプラス!」

『Code Lhaplace——ON』

残りの魔神はあと僅か。

フォルネウス、ヴィーネ、オリアス、アムドウキアス。

見える影は三つで、もう一つはバルバトスが追い立てているらしい。じきに撃破されるだろう。

と、なると。

「全力で行くよ！天眼、開いて！」

《HEAVENLY EYES》《OVER HEAT》

最速でこいつらを叩き落とすのが、今の最適解だ。

設計上の活動限界は三分半。 فقط。

魔導炉のエネルギー源は感情。それは、一度燃やせば全てが燃え尽きるように作られている、が。

わたしの熱情を、その程度の焔で燃やし切れると思うな。
この想いは——五千年の悠久よりもずっと強いからだから。
世界も人類も魔神も正義も、全て等しくどうでも良い。

わたしは剣、氷の剣。

陽彩の為の——決して融けない氷。

大切な人の為に、わたし自身のために。

今度こそ、わたしは——

——何もかも、斬り裂いてみせる。

第十三話

ふと、浮遊感が消えた。

気付けば俺は、何処とも知れない草原に立っていた。

「……陽彩」

「桜花？」

右手に握っていた感覚が、しつかりと熱を伝えてくる。

——生きている。俺も、桜花も。

「無事だった……訳ないか。ごめん、桜花。遅くなって」

「……私はずっと、君が私を見捨てたものだと思いこんでた」

桜花は俺と同じ黒い瞳を真っ直ぐに向けて、何かと葛藤するように声を絞り出した。

「君は、助けに、来てくれた……そうだよ、ね？」

「ああ。ペリアルルの所に居るって知ってから、心配だった」

「……ひい、ろ」

桜花が胸に飛び込んでくる。

反射的に抱き留めてから、どうしたものかと悩む。

「……怖かった。ずっと、私が少しずつ消えていくような感じがして」
「今なら解るよ、俺にも。自分が消えていく怖さが」

桜花の体は、見た目よりもずっと華奢だ。

アーセナルを駆る実力者としての側面よりも、ただのか弱い女の子でしかない彼女の方が、俺はよく知っている。

だからこそ、こうしてあやすように背中を撫でる事にも、特に躊躇いや違和感はない。無い、が。

「私は……私は、私で居られる？君の友達で、居られてる？」

「お前はお前のままでよ、桜花。俺の大事な友達だ」

痛ましい。

細い肢体が震えている。

……助け出したんだ。守りきれないと、な。

「……手を貸そうかと思いましたが……余計なお世話だったのね」

草原に、もう一人新たに人影が現れる。女性、のようだ。

初めは何故か輪郭がぼんやりとしていたが、やがてしっかりと視認できた。

陽光に煌めく金色の髪は、アスタロトのそれと似ている。

瞳には光が渦巻いているようで、色がはつきりとは判別できない。虹彩の色は金、瞳

孔の色は黒に見える。

「はじめまして、御童陽彩」

見た目の雰囲気そのままの穏やかな声。

彼女はゆつたりとした動作でこちらに近寄ってくる。

「わたしはフェネクス。短い付き合いだろうけど、よろしく」

「……なんで俺の名前を？」

「アスタロトから聞いているわ」

桜花を優しく離して、フェネクスと名乗った少女へ向き直る。

確か悪魔の石柱、序列は三十七だったか。

原典は不死鳥、命を終える度に死に絶えて燃え尽き、灰の中から蘇る神鳥。

「なるほど。俺達をここに呼んだのは貴女か？」

「いいえ、違うわ。ただ、こちらに少し近付いていたから招待しただけで」

もしかしてここは地上の何処かなのか。

フェネクスもまた魔神の一人なら、或いは有り得る話かもしれない。

「でも、予想外のお客さんまで来てしまったわ。本当はあなた一人だけを呼んで、すぐに

済ませるつもりだったのに」

「俺に何か用事でも？」

「ええ。わたしにとつては、とても大切なこと。だけど、あなたからすればきつと身に覚えの無いこと。だから、今は良い。無礼の償い代わりに、その娘の傷を癒やすわ」

フェネクスは桜花に掌を向けて、どこかぼんやりとした瞳をゆつくりと開いた。

その美しい色彩に目を奪われている間に、彼女は穏やかな魔力の渦を束ねて光と成した。

「少し耐えて、すぐに片付けるから」

言葉通りに手早くそれを桜花へ放つと、魔力は柔らかく広がった膜のような挙動を見せた。

桜花本人には見えていないのだろうが、光のカーテンに包まれているようで神々しく見える。

「……終わりよ。倦怠感はもう残っていない？」

「あ……は、はい。ありがとうございます」

「礼は良い。それより、御童陽彩。ベリアルを退けた後で良いから、わたしの所に来てくれる？」

「それは構わないけど……どうやって来れば良い？」

「アスタロトに言えばいつでも来れる。暇がある時にでも来てくれると嬉しいわ」

やっぱりアスタロトと友達だったりするんだろうか。

ベリアルの事も知っているとすると、最近も交友がある相手だろう。

「いきなり呼び寄せてしまつてごめんなさいね。わたしには何もできないけれど、せめて応援しているわ。……それじゃあ、頑張つて」

特に何を聞く事もできずに、空間から弾き出される。

咄嗟に桜花の手を掴んで、俺達はそのまま空へと落ちていった。

「御童陽彩。あなたの物語を見守っている人が居る事を、忘れないでね」

物寂しそうな、それでいて満足げな表情。

それが妙に心に引つ掛かり――。

いつかのアスタロトみたいだな、なんて感想を懐いた。



風を斬る音。

それに伴つてレーザーブレードの振動音が響き、二人目の魔神が撃破された。奇妙、と言うのだろうか。

何と言うのか――斬つたという感触がしない。

まるで虚像と戦っているような、そんな空虚な手応え。

「フォルネウス、撃破した。そっち二つ、どう？」

『オリアスとヴィーネも落とした。後はバルバトス達の方のアムドウキアスだけ』

「随分と上手く行ってるのね」

「ここまで来ると不思議な話だ。」

あれだけ苦戦したベリアルと、同格の筈の五人。

それが何故、こうまで呆気なく落ちたのか。

わたし達の成長、と安易に認められないのは、単にわたしが捻くれているのかな。

『早く陽彩を探しに行くよ。ゼロ、良いよね？』

『うん。地上まで落ちる前に再起動は間に合う筈だけど……いや、まずは行こう。アリ

サとオリアスは一緒に来て。アルビレオはここで待機』

どうやらアルビレオだけでなく他の魔神もここに待機させるらしい。何に警戒して

いるのか。

わたしには言わなくても良いけど、アリサとは長い付き合い合いというのだから、彼女に

は教えてあげても良いのに。心配性が悪化したらどうするのか。

『反応はずっと捉えてる。アーセナルと一緒に雲海の真下に居るみたい』

『……雲海を突き破る。アリサ、グレイエンプレス、わたしの射撃を反射して』

『ん、姫様いくよ！』

『言われずとも』

この局面でわざわざわたしまで出しゃばる必要は無いはず。とりあえず見守っておこう。

天眼を閉じて、機体の冷却を進める。今の内に冷やしておかないと、最悪動けなくなる。

程なくして、ラプラスの冷却が終わる。それと同時に、セラフの腕に保持されたラディアントバズーカが火を吐いた。

グレイエンプレスから放たれた無数の剣達が一枚の鏡のように隊列を成して、その砲火を受け止める。

ゆっくりと回すように連続で反射させ、人の腕程度の太さでしかなかった光の束を、人体を遙かに上回る大きさにまで膨れ上がらせた。

『狙いは一箇所……姫様、合わせて』

『——避けなさい、ヒイロ』

鏡が閉じる。

一つだけ開けられた隙間から、光の柱が飛び出る。

雲海へ突き立ったそれは、大量の水蒸気を上げながら雲を溶かしていく。

膨大な熱量はそれでも消費しきれず、大地にまで届いた。

「……随分と豪勢ね」

鏡が閉じる直前。

何らかの高エネルギー反応が二つ、雲海の下で急速に移動していたのをラプラスが確認している。

あれは恐らくトリスリッターとアーセナルだろう。

「巻き込まれてないと良いけれど」

両手の剣を握り直して、一足先に雲海の下へ向かう。

まだ大気が熱い。フォトンフィールドが無ければ肺が焼けて死んでいるであろう程に。

これではトリスリッターは耐えられない。ただでさえキャバルリーのせいで機体の排熱機関がおかしくなっているのに。

……軽く払おうか。熱気も、雲も。

「ラプラス、もう少し頑張つて。まだ隠し玉を出し切れてないでしょ」

『System∥Lost∥savior』

紅く染まった視界に、なお紅く映り込む文字。

この機体の真の力はこの先に在る。

剣士セイバーではなく、救世者セイヴァーたれ、と。

もう居ない救世者アルトリアスをわたしの中に見たのか、それともラプラスにそれを見出したのか。

まあ、わたしとしてはどうでも良いけど。

「――神話を此処に」

起動コードはうろ覚えだけどなんとでもなるだろう。

さて、わたしのオリジナルことごと先祖様……アルトリアス・レイリッターの生きていた時代。

西暦と呼ばれるその年代には、廃れていたとはいえ魔術という物がまだ存在していたらしい。

魔神達の扱う超常の力を、一部とはいえ人間が使っていた。

つまるところ、人間にだって魔神と同じ事ができる。

ラプラス・ロストセイバーは、魔術を人為的に再現できる。

設計にはゼロが大きく関わっているが、基礎はわたし。

わたし自身の中に在る彼アルトリアス女の記憶から色々と知識を引つ張り出し、どうにか形にした。

これはその一つ。

ご先祖様の記憶にあつた一振りの魔劍。

神話より生み出された、最新の神話を担うもの。

「斬り払え——バルムンク幻星戮劍」

二本一対の劍を接続し、一本の大劍に変形させる。

源流は竜殺しの魔劍。

ニーベルングに謳われる英雄ジークフリートの財宝。

北歐神話におけるグラムに相当する、らしい。北歐神話はよく知らないけど。

アルトのシエキナーに搭載されているシステムも北歐神話関連だった気がする。

鏢に魔導炉が搭載されているこの劍を二本接続する事で、瞬間的にセラフ以上の出力を確保。チャージしたエネルギーを圧縮した後^に全方位へ放出する。

そのままではただの爆発になるけれど、この劍を通せばわたしでも魔術を行使できる。

その爆発に風の概念を付与して外側への斥力を発生させ、更に現象そのものを魔術と成して魔神にすら届き得る一撃へと昇華させている。

残っていた熱を吹き飛ばし、ついだに水蒸気も一気に晴らす。魔導光線の残り火も纏めて一掃すれば、少しは見晴らしも良くなった。

陽彩ならわたしを見つけてくれる。あとはゆっくり降りるだけで良い。

「……お疲れ様、ラプラス」

太陽の光が差し込む雲海の合間を通り抜けていき、高度を少しずつ下げる。

つい先程でできたばかりの大地のクレーターが見えた所で、遠くに黒い影が見えた。早く拾いに行こう。

『……ん?』

『ゼロ、どうしたの?』

『いや……アリアス、待って! 陽彩じゃない!』

——機体を加速させる。

黒い影がこちらへ接近してくる。

それが何かを撃ってきた事を脳が認識する前に、意識が途切れた。



目を開く。

「ここは何処だろう。」

地面がひび割れている。何だか、空気が乾いている。

「陽彩、ここ地上みたい。見覚えがある」

「来た事あるの？」

「一回ね」

なんで地上に……や、そういえば一度墜落したとか何とか言ってたな。

思えば、その時にベリアルと会ったのかもな。

「じゃあさつきと戻らないとな。オーリスが怖い」

「怖い？ 拾いに来てくれるんじゃないの？」

「他の女の子と二人だと怖い」

「なるほど」

そういう所にも理解があるから桜花とは接しやすい。

と、言う訳で一刻も早く戦線復帰しなければいけないのだが。

「……アーセナル、来ないな」

「トリスリッター？……駄目だ、こつちも寝てる」

何故か機体がスリープしている。これがフェネクスのせいだったらアスタロトを恨

むことにして、だ。

感じる魔力が変質している。

七つあったのが一つに……いや、二つが溶け込んでいる、のか？

少なくとも四つは無事に撃破されたい。アスタロトのものと思われる魔力に、新たな色が付け足されている。

ベリアルは……どこだ。アスタロトの中にも居ないし、まさか逃げたか？

でも、逃げたとしても長くは保たないだろうな。

「^{アサルトフレーム}魔導機鎧が無ければ私達もただの人間だからね。……陽彩、呼んだら来てくれる頼もしい助っ人とか居ない？」

「いや、流石にそんな都合の良いのは——居たわ」

「居るのかあ……」

問題は声が届くのかどうか、だけど。

……魔力ってどうやって捻り出すんだっけな。

「——ふう」

軽く息を吐いて、余計な思考を外へ吐き出す。

さて、誰を呼ぼうか。誰を呼んでも来そうだけど。

……そうだな。俺の築いた絆に賭けてみようか。

「来てくれ、バエル」

もう俺の右手に祈紋トリガは無いけれど。

第一の魔弾天童書騎、その契約者として生きていた記憶は此処御童陽彩に在る。

だから、彼女がこんな俺にまだ忠誠を誓ってくれているのなら。きつと、応えてくれる筈だ——。

「……………」

「陽彩？」

「……………主を揶揄うのはどうかと思うぞ」

『勘は鈍っていないようです。安心しました』

声だけは聞こえる。姿は見えないのは……………アスタロトの中から抜け出してきたんだろう。

再契約すればすぐにでも実体化できるだろうし、機体の方も何とかできるだろう。魔導炉の原理は魔弾や祈紋トリガに通ずるものがあるし。

「えつと……………そちらは？」

『魔弾ロストバレット・序列第一位オリジン——わたしはバエル。桜花、でした。よろしくお願ひします』

「俺の時とはえらい違いだな」

『それはそうですね。愚鈍で蒙昧なマスターと、聡明で優秀なご友人とあれば、対応も変わるというものです』

「お前ほんとに俺に対して辛辣だよな」

その辛辣さが俺への信頼の裏返しだと、最期の最後に知る事ができた。

だからこそ俺は、こうしてまた彼女と共に戦おうとしている。

「まあ、良いか。バエル、魔導炉に火を入れてほしい。俺達じゃ細かい調整はできないんだ」

『解りました。多少手荒くなりますが、再起動くらいはできるでしょう』

トリスリッターの本体は俺の体内にある。魔導機鎧マジレットフレームの武装や装甲は、それを展開したり格納したりしているだけで、核となるコアは契約者の体に直接封じられている。

流石に人体の内部に魔力的に干渉するような真似は魔術師見習いを最期まで卒業する事の無かった俺には不可能である。自分ならともかく、桜花の中を弄れるような技術は無い。

しかしバエルはロストバレット、存在そのものに魔力が関わっているような存在だ。人間よりも遥かに緻密な魔力制御が可能だろう。

『時に、マスター。一つ聞いても良いでしょうか』

「ん、何かな？」

俺の背中に手を当てた金髪の少女が、いつも通りに平坦な声音で尋ねてくる。

桜花は所在無さげな視線を地平線に向けているが、悲しいくらいに何も無い。今の地

上には、ごく限られた生命しか存在していない。

……ユグドラシルは健在なのだろうか。地上と一緒に焼き払われたりしていないだろうか。

そもその座標を悟らせない彼女ではあるが、世界丸ごと破壊されてしまえば位置の秘匿は意味を失う。無事だと良いんだが。

『マスターはなぜ、わたしを選んだのです。アンドロマリウスでもアスタロトでも、或いはバルバトスでも。魔^{アンリミテッド}神になる決意を持ってなかったわたしではなく、彼女達の方がきつと力になれるでしょう』

「らしくないな、バエル。汐らしいのは似合わないぞ?」

バエルは決意を持たないから魔神にならなかつたのではなく、強い意志の力を以て覚醒を自ら封じていた。

見れば解る。バエルの内部には自前で魔力を精製する器官が存在する。活動停止状態だが、つい最近生まれたものには見えない。

いつでも次の段階へ踏み入れられる自分を押し留めていたのは、彼女自身の覚悟だ。

『茶化さないで真面目に答えてください。どうしてまた、わたしを選んだと言うのです』

「……さあ、な。でも言えるのは……」

背中当てられていた手が離れる。

トリスリッターの鼓動を感じる。キャバルリイによつて破損した装甲も、修復は終わっているのだろう。

「俺の相棒はトリスリッターだけど。俺の剣は、バエルしか居ないんだと思うよ」
『……』

「桜花の方も頼んで良いか？俺は一足先に空に上がる」

『了解です、マスター。すぐに追いつきますので、少しの時間を頂きます』

装甲展開、全身の状態を確認する。

次に武装を順次展開。ラディアントマグナム、ラウムシュトゥンデ、共に正常。冷却機関に異常無し。キャバルリイ再使用、即刻可能。

「システムトリスリッター、起動。起きろリタ、行くぞ」

視界に光が灯る。

駆動音が響き渡るに連れて、聞き慣れた機械音声が流れた。

『メインシステム、通常モードで起動します。システムトリスリッター、正常な起動を確認しました』

文字列が一瞬で流れていき、視界の端に消えていく。

それを見届ける前に、相棒が目を覚ます。

『主様、おはようございます。申し訳ありません、記憶領域が一時的に機体から切り離さ

れていました』

「おはようリタ。変な所は無い？」

『問題ありません。戦闘行為、再開できます』

「よし。桜花、俺は先に行く。頃合いを見て来てくれ」

「解った。気を付けてね、陽彩。すぐにそっち向かうから」

背中の翼を広げる。魔力の流れっていくイメージがはつきりと感じ取れる。

規則正しく並べた回路に雷を通すような、そんな情景。

魔導炉が順調に稼働し始めた。機体が一気に温まる。

『メインシステム、戦闘モード！上がります、主様！』

「戦線復帰、それとゼロ達が戦ってる相手を捕捉して。たぶんだけど、あれが最後の敵になる」

あの感覚を知っている。

五千年前、クレイドル防衛戦の最終決戦の折に現れた“ウラヌス”という魔神。残った二騎がアガレスとヴァサゴだとしたら、あれはあの時の焼き直しだ。

俺を殺した直接的な相手。因縁に決着を付ける時が来た。

『ターゲット、ロック。彼我の距離、一万二千。戦闘空域の高度が上がっています。気温が低下するので、先程よりもキャバルリイが長く展開できるかと』

「それは良いな。そのまま宇宙まで行ってくれたら戦いやすそう」

『流石に宇宙空間での戦闘は想定されていません』

リタは俺の軽口にちゃんと対応してくれる。

緊張を適度に解し、意識を上手く調整すれば、後はもうひと頑張りするだけ。

あの時の、一人でクレイドルを守った時とは違う。

相手は同じ、自分も同じ。ただし、心強い味方が居る。

オーリス、アルティエさん、アルビレオ、桜花、アリサ。

バエル、バルバトス、アスタロト、ベリト、キマリス。

そして、ゼロ。

負けるとは思えない。俺一人でも何とか抑え切れたんだからな。

『見えてきましたよ、主様』

「……オーリスが居ない」

『え？』

「ラプラスの反応、拾ってくれ」

『——暫定戦闘空域に確認できず。これは……っ』

戦場の感覚のズレ。それを消去法で割り出せば、何が居ないのかはすぐに解る。

剣も極光も見える。たまに奔る細い線も。

だが、あの影が見えない。

誰よりも疾く、鋭く、剣のように戦場を翔ける彼女が居ない。

人類最強の「氷剣」が不在とは、どういう事か。

『ラプラス、地上です！ 損傷は軽微……ですが、契約者の生体反応が確認できません！』

「……………アーセナルに通信」

息を吸う。一つ考える。

息を吐く。言葉を纏める。

「桜花、聞こえる？」

『うん、どうしたの陽彩？』

「そこから近い所にラプラスの反応がある筈だから探してみて。見ついたらそっちに行つてほしい」

俺が直接行くよりも桜花に行つてもらう方が速い。それに、彼女のアーセナルには医療用の設備も搭載されている。トリスリッターには戦闘機能しかないのです、どの道俺が行つても意味は無い。

『ラプラスの？ 解つた、少し待って……………見つけた。そこに行けば良いんだね？』

「お願い。できるだけ早く」

『オーリスさんの事はこっちに任せて』

安心はできないが、桜花なら大丈夫だろうと心配を押し込める。

一度忘れて、戦場へ意識を戻す。

「オーリスと俺を抜いて……桜花も抜くと八人か。数は……合わないな」

『後方に複数の反応確認。識別は、えっと……ベリトとバルバトスです』

「前衛抑えられるのアスタロトとゼロだけかよ……」

道理で戦闘が長引いている訳だ。

あの魔力、二つが一つになっているような違和感。

五千年前と同じだ。アガレスとヴァサゴ、また妙な事を仕出かしやがった。

アスタロトを見ればよく解るが、魔神というのは互いを取り込んで喰らう事のできる

存在だ。

トリガー 祈紋という半永久に稼働する魔力資源を最大まで活性、十全に活用する事で魔神は人

智の及ばぬような力を発揮する。

アサルトフレーム 魔導機鎧で言う所のコアにあたるそれを相手ごと取り込んでしまえば、出力は単純計

算で二倍だ。

「前と同じだと考えると……若干心許無いな。キャバルリイ、まだいける？」

『機体には問題ありません。でも、主様は万全じゃありませんから。気を付けてください

いね』

戦場となつている空域に辿り着く。

「どうやら高度が上がり続けているのは向こうの思惑らしい。宇宙にまで出て戦えるのは魔神のみ、現状の魔神の戦力ではあれを倒せない。」

星の外から惑星ごと叩き斬られてしまえばこちらには成す術が無い。大気圏内で仕留める。

「トリスリッター、テストメンタ契約者・御童陽彩！戦線に復帰します！」

『陽彩っ？だめ、下がって！ウラヌスはあの時……っ』

「解ってるよゼロ！だからこそ、俺が仕留めなきゃいけないっ！」

高度を合わせ、一気に加速。

そして接敵直前に、魂に焰を灯す。

「——キャバルライ！」

『残存継戦時間、十二分。五分で落としますよ、主様！』

見つけた敵は、生物的な装甲を纏っていた。

五千年前から変わらない見た目。俺を殺した、ウラヌスだった。

『Reversal Shift』
《Ry》

《L》

閃光が走る。

一筋の流星となつて、ウラヌスにファーストコンタクト。

『ぐっ!?!』

「悪いが先を急ぐんでね!最短で討たせてもらおう!」

左手で装甲を握り締め、ラディアントマグナムを密着させたまま射撃。

しかし表面の防御膜が固すぎる。これだと威力が通らない。

『天童——蒼騎イ!』

「そいつは既に死んだよ!他ならないお前のせいだな!」

『また、ワタシの邪魔をするのかア!』

機体から吐き出される赤い炎が、ウラヌスを包み込んでいく。

今はこれが何なのか見える。魔導炉から生み出された魔力の波動、熱量を内包した力場そのものだ。

そして、見える以上は操れる。少なくとも、契約者である俺にとってはそういうものだ。

『煩わしい……!』

「これなら通るだろうよ、リタ!」

その炎を取り込んだラディアントマグナムから、先程よりも強い光が放たれる。

魔導炉から直接エネルギーを取り込んだそれは、ウラヌスの堅牢な鎧も穿つ。

『この、程度でッ!』

「終わるだなんて思っちゃいないっ!」

立て続けに撃ち込んで動きを封じ、貫いた穴に左手を突っ込む。

あまり気分の良いものではないが——そのまま、中身を引きずり出す。

飛び散る臓腑にはなるべく視線を向けず、空いた左手にレーザーブレードを展開。剥

き出しの魔導炉に光の刃を押し付ける。

『オ、オオオオッ!』

「そのまま落ちろ!」

『死ぬぬ……アモンの仇を滅ぼすまでは!』

「仇討ちなんざらしくないだろうが!」

加速が途切れる。

雑念だ。キャバルリイが、熱意以外の何かを拾った。

左手が弾かれると共にレーザーブレードが叩き落とされ、地上へと姿を消し去る。あ

れは諦めた方が良いな。

「ゼロー！」

『解ってる』

追撃の前に割り込ませた蹴りで姿勢を崩し、後方へ吹き飛ばす。

勿論その先には、ラディアントバズーカをフルチャージで構えたセラフが待っている。

『――』

『消えてもらおう、ウラヌス』

直ぐ様射線から下がり、キャバルリイを一度落ち着かせる。

如何に気温が低いといっても、オーバーヒートすればどうしようもない。そもそもそんな温度になれば俺が焼け死ぬという問題がある。

熱の管理は難しいが、放置もできない。

『アンドロマリウスとして――アンジエとして、御童零として。君への手向けだ』

直径にして二メートルは超えるであろう、極白の光の柱。

トリスリッターを掠めていくのは、ウラヌスの纏う装甲の破片。

『――アア、アアアアアアアアアアアアアアアア！』

呻きとも叫びとも悲鳴ともとれるような、その声。

断末魔の叫びだと信じて、ラディアントマグナムの冷却を開始する。

「蒼騎！」

懐かしい呼び方に、意識より速く体が反応する。

最初に感じるのは、脇腹の熱さ。知っている、斬られた痛みだ。

「が——っ！」

「下がりなさいっ！」

俺とウラヌスの間に割って入るのは、黒い長剣。

紫の紋様が走るそれは、間違いなくアスタロトのものだ。

でも、今のアスタロトには、バエルが居ない。

キマリスだつて最高峰の魔弾だが、同格が一人抜けた穴を埋められるかどうか。

いいや、それよりも。

「リター！」

『駄目です主様！命ごと燃え尽きるつもりですか!?』

「良いから全部吐き出せ！キャバルリイ！再起動っ！」

魂に再び熱意を点火、冷ました機体を強引に加熱する。

脳の奥で何かの弾ける音がする。

煩い、集中ができない。

「陽彩、無事よね？」

「無事な訳あるかよ」

長剣越しにアスタロトの両腕が深く切り刻まれていく。

鎧が既に破壊され、半身は焼け落ちているにも関わらず、ウラヌスは未だに暴れるつもりだ。

「なら良いわ。押しなさい」

「馬鹿か。馬鹿だったな」

キマリスを内包したアスタロトと互角なら、俺如きが全力を出したところで追い付けはしない。

ならば、もう一押しするだけの事。

『祈紋承認。契約を履行します』

「——バエル！」

ラディアントマグナムを投げ捨て、両手に現れる金の剣を受け止める。

黒い長剣が押し留める刃を避け、回り込んでから一撃。

『甘いッ！』

焼け落ちた骸から吹き出した炎のような魔力がそれを抑え込み、トリスリッターが止まる。

キャバルリイを再加熱。今度は途中で止めたりしない。
焼き切れても、押し通す。

「押し切つてやる——！」

停止しかけたシステムが復帰、翼がもう一度開く。

剣を握り締め、更にもう一撃。

『ワタシは——まだ——！』

「貴女の信念なんぞ知った事じゃない。私は今度こそ、大切な人を守り切るのよ！」

『——お前だけでも！』

ウラヌスの放った、黒い魔力。

闇そのものにすら見えるそれは、アスタロトに真っ直ぐ撃ち出された。

その射出の瞬間だけ、隙ができる。剣が手放され、今なら一撃を叩き込める。

しかしそれだと、アスタロトはあの闇に飲み込まれるのだろう。

選べ。

生かすか、殺すか。

俺は——ああ、決まってたな。

命を賭してまで隙を作ったのなら、アスタロトには謝らなきやいけない。

それを見逃すのは、できそうになかった。

闇が迫る。

息を呑む声と、勝鬨に挟まれて、視界が潰える。

何か、大きなものが焼け落ちた。

記憶が巡る。

巡る世界の中に、何かが足りない。

あつた筈のそれが、黒く染められていく。

解らない、思い出せない、それがなんであつたのか。

——さんは、確か……………。

それって、誰だっけ？

第十四話——エピローグ

ずっと昔の話だ。

俺はそれをひたすらに追い続けていた。

それを守ろうとして、守られて。

助けようとして、助けられて。

それでも、きっと何かできるだろうと、戦い続けて。

西暦の最果てに、俺は揺り籠を守る事ができた。

俺の俺たる原動力。

生き方を教えてくれた人。

そんな人の名前は——。

『——そーきくん!』

かちり、と。

意識の狭間で、二つの魂が噛み合う。

大丈夫、俺は俺。

天童蒼騎で御童陽彩だ。

だから、そんな声を出さないで——

「——アルトリアスさん」

『違う、陽彩!ごめん、なんか間違えた!』

左の剣でウラヌスを押し留める。

剣の使い方、やっと思いついた。

一度死にかけないと十分に剣も振れないなんて、俺はどれだけ鈍いんだか。

「……キマリス、頼めるか?」

『承知。アスタロト、世話になった』

「今更ね。行きなさい、キマリス」

彼女にはオーリスの下に居てもらおう。

アルトリアスさんのクローンなのだから、適性はあるだろう。

さて。

俺はずっと、焼べる薪を間違えていた。

負の感情は一過性だ。

怒りは悠久の時間が鎮め、憎しみは復讐を終えれば燃え尽きる。

しかし。

どれだけの刻を経ても衰えず、何があろうと消えたりしない。

そんな感情が、ここにある。

《Ch i》

e v e r s a l S h i f t : O v e r D r i v e 』

《V a》

《R y》

《L》

『R

この焔はきつと、燃え尽きない。

「オーリス、いける?」

『まだ戦える。ラプラスも限界だけど、死に損ないくらいなら抑えてみせるよ。なるべく急ぐから』

「よし。アスタロトはゼロの所に行ってくれ」

「良いの? 確かに足手まといかもしれないけど……」

「二人共心配なんだよ。ゼロだつてかなり無理してたみたいだし」

本来の紫色の魔力が翼に宿り、アスタロトは身を翻す。

バエルもキマリスも出て行ってしまった以上、彼女はもう戦えない。

死に体の体を三人分の魔力で無理矢理に動かし続けていたのだから、これ以上戦わせる訳にはいかない。

「アリサ、聞こえる?」

『聞こえてるよ』

「クレイドルに戻つて。ベリアルルの企みがやつと解つた。アルティエさんには見えてるだろうから、一緒に帰る場所を守ってほしい」

『……………解つた。バルバトス、借りてくよ』

一度五千年前の事を思い出してから、やつと気が付いた。

ベリアルルはそもそも、あの時から準備を進めていた。

たかだか怪異^{ホロヘイブス}程度の戦力で満足するような性格じゃないんだ、あいつは。アリサとアルティエエさんだけで大丈夫かどうかは、ちよつと解らない。難しいところだ。

せめてバルバトスが万全なら、無双ゲームのように蹴散らしてくれるのだろうか。

『余所見とは……嘗めた真似を！』

「悪いが油断はしてない」

ずっと自由に使っていた右の剣で、振り下ろされる大剣を受け止める。

赤い炎の残滓を乗せれば、黒い魔力にだって対抗できた。

『時間切れのようだな』

「どうだろうな。俺はまだ生きているぞ」

『五千年前の焼き直しだ。もう一度殺してやる！』

蒼い焰が機体から立ち昇る。

確かに熱いし、身を焦がすような熱量を感じる。

だがこれは、俺を直接焼いている訳ではない。

当然だ。無理矢理に燃やされた感情ではなく、これは俺自身の持ち合わせた心意の発露だ。

俺が抱えた感情で、俺自身が焼かれる事は無い。

「バエル、桜花は？」

『無事ですが、戦闘に耐えられる程ではないので待機させています。マスターの中は相変わらず居心地の悪い、殴って良いですか？』

「お前ほんと変わらないな……」

ウラヌスを蹴り飛ばし、剣を投げつける。

「五千年前のリベンジだ。今度は殺してやる」

突き刺さったそれを更に蹴り込んで、魔導炉に直接ダメージを与える。

『野蛮な戦い方を……』

「嫌いじゃないだろ？」

『あなたはわたしを何だと思っているのです』

「だってお前割とがさつじゃん」

『殴りますよ』

深く刺さった剣を抉るように引き抜き、追撃の構え。

しかし脇腹が再び痛みを発し、動きが止まる。

『マスター！』

「止ま、るな……！」

ブースターから炎を吐き出して強制的に回避。

痛みは悪化したか、致命傷は避けた。

更なる追撃を前にして、ウラヌスに影が覆い被さる。

互いに動きが止まった世界で、その影の主だけは飛翔を止めなかった。

『アリアスⅡヴェイン・レイリッター！戦線に復帰します！』

光を束ねた実体剣が、ウラヌスの背中に勢い良く突き刺さる。

血飛沫の中から現れた切っ先には、黒く光る心臓——魔導炉があり。

刀身を滑り落ちていくと、やがてそれは地上へと姿を消した。

『あ、あ——』

『今度こそ終わり。五千年よ、復讐劇は存分に楽しんだでしょう？』

「……………終わった、か」

焼け落ちた半身が、徐々に消えていく。

世界に溶け込むように、光に同化するように。

夕陽が、その光景を静かに映し出していた。

『こんな……………これが、ワタシの最後か』

「トドメが必要か？」

「は……………愉快な話だ。こうまで完膚なきに仕留められるとは』

『不気味なやつ、さっさと消えなさい』

「混ざっているぞ、小娘。精々気を付ける事だ、レイリッターの亡霊……」

不敵に笑い、ウラヌスは黒い魔力の剣を手放した。

「ワタシは……仇を討ちたかっただけなのにな。ベリアルに付き合ひ、人間の敵で居るうちに、どうしてこんなにも汚れてしまったのか」

「良心に訴えかける相手を間違えてるんだよ、お前は。そもそもの話だ。仇討ちは、自分でやるものだろう」

「そうか……そう……だった、な……」。

——馬鹿、だなあ……わたし……」

粒子と化して、ウラヌスが消える。

今度こそ、終わりなのだろうか。

魔弾は代替わりするものだったが……魔神がどうなのかは、俺も知らない。ゼロならば、知っているだろうか。

ふと、痛みを思い出した。

脇腹、左腕、両足、そして心臓。

「なあ、オーリス」

『うん』

「俺ってさ、左腕火傷して、脇腹斬られて、最後の攻防で両足も駄目になってるんだよね」

『……うん?』

「クレイドルまでよろしく」

『陽彩っ!?! ああもう、締まらないなあ!』

《Ch i》

《V a》

『S』

System Down: Burst End』

《R y》

《L》



起きろ、鼓動を止めるな。

抜け殻 一步手前のこんな体でも、まだ果たすべき事が残っている。

だからまだ死ぬな、正義アスダの味方ロボ。

「……律儀なものだね、君も」

「最初の友達を特別扱いして悪い?」

「冥利に尽きるさ。どうせ特別なら、最後の一日を一緒に過ごしてくれても良かったと

思うんだけどね」

「貴女の悪趣味、五千年前から大嫌いよ」

長剣を持ち上げた手が震えている。

もう体を維持するだけで精一杯なのに、更にここへ新たな魔導炉を取り込んだらどうなる事か。

でも、やらねばならない。

陽彩はその前提で、私を戦力に数えたのだから。

「遺言、付き合ってくれるかい？」

「五分までよ」

一つ、長い息を吐いた。

五千年の旅の終わり。

潰えた目論見の残骸を前にして、彼女は何を思うのだろう。

「最後の足掻きまでもが呆気なく潰されたのは、正直言つて想定外だった」

「だって陽彩、蒼騎よ？ 貴女の思惑くらい、見通しているわ」

「……君のその神聖視は辞めた方が良くかもしれないね」

珍しく苦笑するベリアル。

自覚はあるが、まさかこいつに言われるとは思わなかった。

視界に映るクレイドルは無事だ。

周辺空域には何も無いが、つい先程までは大量の怪異と新種の生体兵器が大量に存在した。

己の生命を引き換えにそれらを殲滅したのはベリトとバルバトス。二人は既に消滅した。

次代の二席は、どうなる事やら。

「ねえ、アスタロト」

「何よ」

「もしも私達が逆だったら、蒼騎を守るのは私だったのかな」

「……さて、ね」

考える必要のない事、考える意味のない事。

そういう事を考えるのは、大の苦手なのが。

「でも、ベリアルみたいに変態が、陽彩に受け入れられるのかしら？」

「好きな人の前でくらい、可愛い私で居るさ。現にそうだったろ？」

「ひよつとしてもうそこまでイカれてるの？」

「まさか、冗談だよ」

夕陽が沈む。

どれだけの間、この世界で戦っていたのだろうか。

八千年もの悠久の時間は、一個の生命として戦い抜くには、少しばかり長過ぎたのかもしれない。

「怪異の生産プラントは地上に封印されている。まだ起動していない所もあるけど、直に全部稼働する。そして、私が居なくても悪を担う存在は何処かに生まれる」

「解っているわ」

「ねえ、アスタロト」

もう一度、問い掛けられる。

今度のそれは、答えを求める問いではなかった。

「私ね、ずっと正義に憧れてたんだ」

「……そう」

「だから、正義の味方を真っ直ぐに目指せる君が、私には眩しかった」

ずっと知っていた事だった。

だけど。

「私、臆病だからさ。こんな奴が正義の味方になんてなれるのかって、悩む度に引つ張られて。気が付いたら、自分でも止まれなくなってた」

「……」

「もし……もしも、だよ。私に、次があるのなら。もう一度を願う事が、許されるのなら」
初めて、その涙が溢れる所を見た。

「今度こそ、私は正しい事をできるかな」

祈りを込めて、剣を持ち上げる。

手はもう震えなかった。後はただ、全てを込めるだけ。

「ねえ、アスタロト。ずっと、言いたかった事があるんだ」

きつとそれが最後の言葉。

私はそれを聞く為に、ずっと戦い続けてきた。

「ありがとう」

黒い長剣が、夕陽を浴びて金色に輝いている。

刃に映るその光景を、私は絶対に忘れない。



そうしてベリアルは斃れ、クレイドルに迫っていた危機は退けられた。めでたしめで

たし、と。

え？解りづらい？

そんな事言われてもな……俺寝てたし。

いや、確かに当事者だけどさあ。

そんなに気になるならアルティエさんかアリサにでも聞いてくれ。最後の戦いで活躍したのはあの二人だからさ。

アスタロトは……暫く寝かせてやれ。ずっと走り続けてたんだ。

そういえば、お前の傷は良いのか？

アーガナだって、結構深手を負ってたと思うんだけど。

……そうか。なら良かった。

アスタロトには礼を言っとけよ。

そろそろ時間か。行かないと。

ベリアルが居なくなっても、一日も放置すれば怪異はまた出てくる。まだ休めそうにないな。

ああ、それと。

お前の呼び方な。

アーガナが嫌なら、アグニって呼ぼうと思うんだけど、それで良いか？
じゃあ、これからはそういう事で。

遅刻するとゼロに怒られるからな、行ってくるよ。



クレイドル04及び06襲撃事件に端を発した一連の戦闘は、暫定的にクレイドル07攻防戦と名付けられる事になった。

魔神の存在が世の明るみに出る直接の原因となった事で、俗称は魔神戦線。空に住まう全ての人々に、この戦いは瞬く間に広まっていった。

あの戦いに対する反応は複数。

揺り籠を守った契約者デスタメンタや魔神への称賛、感謝を送る者。

魔神という危険な存在を秘匿していたクレイドル管理者への批判。

そして、それらを置いて怪異を討滅すべきという、いつも通りの意見。

ずっと考え込んでいた俺に、ベッドの上のアスタロトが首を傾げる。

「陽彩?」

「……何でもない。それより、お前はどうかなんだ? 傷の方、少しは良くなった?」
 「回復はしてるわ。ベリアルの中にあつた物も、一度は私が持っていた物だしね」

空歴4996年。揺り籠が空に打ち上げられてから、もうすぐで五千年。

西暦の終わりからそれだけの時間が過ぎたのに、人は変わらずに地球で生きている。
 アスタロトの座るベッドに突つ伏して、ゼロが寝ている。

「ここ最近はずつと戦い詰めだった。元より長時間の戦闘ができないゼロにとっては、地獄に等しい時間だったのだろう。」

それでも無理を通して頑張ってくれたのだから、今はゆつくりと寝かせてやりたい。

「陽彩、私ね。やる事終わらせたら、全部どうでも良くなっちゃったの」

「あまりふざけた事抜かすと殴るぞ」

「仕方無いじゃない。明確な悪が居なければ、正義を示す事はできない。悪ベリアルが消えた
 今、正義わたしが倒すべき相手は居ないのよ」

「……戦う為に生まれた訳じゃないだろ、お前は」

空虚なアメジストの瞳が、虚空を見つめている。

その気持ちも、解らないでもないけど。

「それにさ、アスタロト。お姉ちゃんなんだろ? だったら、最後まで弟の面倒は見えていけ

よ」

「……………ふふ。そうね……………そうだったかしら。だったら……………まだ、死ねないか」

アスタロトとは思えない程、穏やかな瞳。

いつも凜としていた彼女らしくない。

いや、これこそが彼女の本来の表情なのだろうか。

「……………そんな顔を見るのは久しぶり」

「起こしちゃった？」

「最初から起きていた」

少し眠そうな顔で、プラチナブロンドの少女が起き上がる。

「少し、席を外す」

「良いのか？」

「アスタロトの無事が確認できたのならそれで良い」

言うや否や、さっさと寝室から出て行ってしまふ。

……………どうしてだろう。目を覚ましてから、ゼロが冷たくなった気がする。

「……………拗ねてるのね、あの人。可愛い所もあるんだ」

「拗ねてる？ゼロが？」

「ええ。だって、やっと振り向いてくれた人が、昔の恋人の名前なんか呼んでたら、寂し

いものでしょう?」

昔の……というと、アルトリアスさん、か?

いや、でも、ゼロは………。

そうか。ゼロはアンドロマリウス、セラフィなんだ。

ずっと失念していた。

好きだと思っているのは俺だけじゃなかったって事を。

「馬鹿だなあ俺。ちよつと話してくる」

「ふふ、行つてらっしゃい。後で改めて、お話聞かせてね」

微笑んだアスタロトに見送られ、寝室を出る。

行きがけに扉を閉めて、廊下を見渡す。

クレイドル07は俺の家だ。どこまで行つても、必ず追いついてみせる。

「バエル、手伝つてくれ。まだ遠くまで行つてないと思うんだけど……」

『目の前の光も見失いましたか? わたしが居なくともすぐに見えるでしょう』

この魔弾まるで言う事聞かないんだけど。

キマリスと交換してくれないかなあ。

ぼやきは心の裡に閉じ込めて、廊下を走り出す。

何となく、だが。

アンジェだと思えば、どっちに行つたかは予想がつく。
一分ほど走つて、建物の外へ出る。

そのまま裏手に回り、影になっている中庭に入る。

「やつぱり居た、ゼロ。ちよつと話に付き合つてくれ」

「……陽彩」

「嫌だつて言つても捕まえるけどな」

プラチナブロンドの髪を風に靡かせて、彼女はそこに佇んでいた。

陽の光が当たらないここでは、その金も輝きが陰つていた。

「えつと、さ。色々、複雑なんだけど……何から話そうか」

「なら、私から一つ」

昏い金の瞳が、こちらを真つ直ぐに見据える。

姉妹なだけあつてそつくりな顔付きだ。

でもそう言つと、彼女は恐らくまた拗ねるのだろう。

「姉様に勝てないのは知つている。だから、わたしは二番でも……構わなくはないけど、
良い。でもだからこそ、わたしを見るなら、ちゃんと見て」

「……ごめん。何言つても言い訳になつちゃうな」

過去に縋るのは、悪い癖なんだろうか。

それでも、ゼロを見ると思い出してしまふ。

幸せな記憶を象徴する、大切な一人なんだから。

「俺、未練がましい人間だからさ。きっと、アルトリアスさんの事を忘れたりはできないと思うんだ」

「……ん」

「だけど」

それでも、と言えるのは、それだけ成長したのだろうか。

或いは、単に強欲になったというだけの話なのか。

「今は、お前が一番だよ。ちゃんとゼロだけを見るから、それで許してくれ」

「……嘘つき。浮気性のくせに」

「手厳しいな……」

小さく、本当に小さな笑みを浮かべて、ゼロはそつと空を見上げた。

五千年前と変わらない、抜けるような青空。

あの先の宇宙が、昔よりは近くなった筈なのだが。

今もまるで、星には手が届きそうにない。

「別に、わたしだけなんて我が儘は言わない。アリアスも、アリサも、もしかしたらアスタロトも。目移りしたって良い。君の世界にわたしが居れば、わたしはそれで良いよ」

彼女に釣られて空に視線を移すと、その瞬間にゼロの姿が消えた。

慌てて周囲を見渡すと、真上にセラフの姿があった。

純白の熾天使は、最早一切の武装は持っていない。

ただ己が主を空に飛び立たせるための翼のみを携えて、彼女はそこに毅然と立っている。

『私はアンドロマリウス。』

そしてわたしは御童零。

最後の魔弾にして、世界の均衡装置。

最初の魔神で、地球の意思の代行者。

でも、今は——』

呼応するように、俺の背中に翼が現れる。

金色のそれは、左側だけが赤く染まっている。

誰かさん、未だに俺を助けてくれるらしい。

『——君の、パートナーだ』

差し伸べられた手を掴むと、ゆっくりと体が持ち上げられていく。

あの日掴んだ流れ星。

バエルの名を冠する奇跡を手にしたあの日から、俺はずっと戦い続けた。

契約者として、一人の人間として。
テストメンタ

何も解らないままに戦場に巻き込まれ、それでもアルトリアスさんの力になりたくて。

そうして守った揺り籠で、俺はまた生まれ直した。

今ここで俺は再び、奇跡に手を伸ばしている。

『わたしで良ければ一緒にいこう、陽彩』

「今度は……今度こそ、死ぬまで一緒だ、ゼロ」

情景が蘇る。

ずっと昔に見た、光。

夜空を翔ける金の騎士が、世界を守る夢。

どうだったかな、天童蒼騎。

御童陽彩は、夢に見たような存在になれたかな。

ああ、きつと。

今の俺は、思い描いた幸せを掴んでる。

俺の願った、他でもない俺になれた。

そう確信し、自分の翼で羽ばたく。

今は剣は要らない。

ただこの翼で虚空を翔ける、それだけで良い。



魔神戦線終結から一週間。

生存した全員の怪我が完治したので、祝勝会を開く事に。

未だに契約者^{テストメンタ}不明のアルビレオを除き、あの戦いを生き延びたみんなでクレイドル07に集合した。

「という訳で、珍しくもこれだけのメンバーが集まったの宴会です。普段は話さない相手とも話してみたりして、是非親交を深めていってくれ」

なんで俺が音頭を取る必要があるんですか。

不満は飲み込むとして、開幕の挨拶を終える。

集まったのは、契約者組^{テストメンタ}のほぼ全員と、あの戦闘に参加した魔弾と魔神。

因みにバルバトスはしれっとアスタロトの中に居る。お前死んだんじゃなかったのか。

「お待たせー！遅刻したけど、アーガナもちゃんと連れて来たよ！」

「姉さん、離して。もう歩ける」

オーリスに抱えられてアグニが到着したので、これで揃った事になる。改めて乾杯して、俺はそそくさと端に逃げる。

視線が怖いのが何人か居るので、同じく端に居たアスタロトの下へ。

「……アンドロマリウスじゃなくて良いの？」

「今のお前が一番怖くない」

「そうかしら」

正直オーリスやゼロに比べればアスタロトなんて全然可愛いと思う。

あの苛烈さが向かうのは敵だけだし、彼女が俺の敵になるとは思えないし。

「じゃ、乾杯」

「なんだ、それ？洒落た色してるけど」

「カクテルよ。飲みたい？」

「遠慮する」

グラスを合わせて、小さく鈴のように音を鳴らす。

「酔うなよ？」

「既に酔ってるから平気よ」

「安牌が地雷だった」

「気が抜けている証拠ですよ、陽彩。如何にアスタロトが腑抜けているからといって、魔

神を相手に油断してはいけません」

「アルティエさんどこから出てきたの？」

アスタロトとは反対側から突き出されたカップとかち合わせ、再び小さく鈴を鳴らす。

いつもは黒いその義肢^{うで}が、今はとても人間らしいものだった。

「義肢とは思えないくらい精巧だね、それ」

「ゼロは優秀ですから。暇潰しに少しずつ作っていたようです」

「急造品って訳じゃなかったのか」

カップの中身、紅茶と思われるそれを飲み干すと、アルティエさんは長い息を吐く。

あの戦いで一番負担を強いたのはたぶん彼女だ。シエキナーはただでさえ、戦闘時の負荷が大きいことから。

「アスタロト」

「なに？」

「オリジナルから伝言です。今のあなたは斬ろうとは思わないし、斬れそうにない。だから、勝ちを預けておく、との事です」

「……自分で伝えろと言うに」

「素直じゃないですから、オリジナルは」

何の為の祝勝会だと思つてゐるのやら。

まあ、オーリスらしいと言えばそうなんだけど。

「そういえば陽彩、怪我はもう良いのですか？」

「大丈夫だよ。軽い火傷と切り傷だったから、すぐ治つた。アスタロトも居たからね」
「そうですか」

「何が軽い火傷なもんですか。骨まで焼けてたでしょうが」

「原型残つてたら軽傷なんだよ」

「五千年前とは違ふのよ？」

バエルも居たし何とかなると思つてた。

今は反省している。

「アルティエさんの方は？」

「僕は特に何も、少し疲れた程度です。オリジナルのように頭を撫でて労う事を所望します」

「もしかして酔つてる？」

「少しだけブランデーを貰つてきました」

「駄目みたいですね……」

この人は酔つたら訳の解らない事を言い出す、と。

クローンだからか知らないが、大元と同じ性質なんだな。

「とうかアルコール大丈夫なの、年齢的に」

「僕は十八ですよ？」

「えっ」

「冗談です。たぶん同い年ですよ」

真顔で天然入るとどうしようもないからどうにかしてくれ。

そう思っていると、救世主が現れた。

「陽彩お兄ちゃん、姉さん借りてくね」

「アーガナ？待ってください、時間はまだ……」

「一周するまで待機。次はアリサお姉ちゃんの番だよ」

一体何を以てして定められた何の順番なんだ……？

「そういう訳で、交代だよ、アルティエさん」

「……アリサ相手では無理も言えませんね。オリジナルだったなら……」

アルティエさんはそろそろ姉を丁寧に扱ってやってくれ。

「それじゃ、次の相手は私が務めるね」

「……何だかそういうお店みたいね」

「変な事言うのは辞めろよアスタロト」

本当に変な気分になつたらどうする。

「とは言つても、改まって話す事も無いんだけどね。とりあえず、陽彩が無事で良かったよ」

「……直前にさ。ちよつと、迷惑掛けた」

「良いよ、今更」

控えめに差し出された小さなグラスの縁に、優しく自分のグラスを当てる。

アリサは果物系のジュースを飲んでいられるらしい。

漸く普通の飲み物を飲んでいられる相手が居た。

「そういうえば、あの時にも言つたけど、ちゃんと言葉にしておくね」

一旦グラスを置いて、話に耳を傾ける。

できるだけゼロの方は見ないように。

「陽彩、好きだよ。君が私を好きになるかは解らないけど、誰よりも君を好きになる自信はある」

「……アリサ、その」

「解つてるよ。無理を言つてるのは知つてる。だけど、知つていてほしいんだ。君の事をとつても愛してる女の子が居るって事を」

「いや………テストメント契約者同士はさ、互いに束縛が多いと思うんだ。オーリスはまあ、なんか

自由だけど」

本当になんであいつはあんなに自由奔放なんだろうな。

「俺もお前も、まだ戦わないといけないからさ。だから、お前と向き合うのはそれからにしたい。せめて、真剣に向き合いたいから」

「……………」

ゼロにはあんな事も言ったけど。

テストタメンタ
契約者つてのは、制約も多いし、死の危険がある仕事だ。

いつ死ぬか解らないのに、共に生きるなんて無責任に過ぎると俺は思う。

だから、全部終わらせてから。

「優しいね。別に、私の言葉なんて無視しても良かったのに」

「こんなんでも幼馴染だろ、俺達は。無視なんてできるか」

「そうだったね。最近、ずっと遠い所に行つてるような気がして……陽彩がちやんと戻ってきてくれて、良かった」

心配を掛けたのは変わらない。

それは、取り繕えないからな。

「よし、言い切った。アリアス、次」

「はーい、正妻の登場だよー」

「は？」

「なんかわたしだけ当たり強くない……？」

落差が酷すぎる。チェンジで。

アルトリアさん

「にしてもお前、左目赤くなるといよいよあの^{アルトリアさん}人に似てきたな」

「そう？」

ウインクと共に突き出されたグラスを打ち鳴らし、通過儀礼と成す。

「ま、大本のオリジナルだからね。似てるのも当然でしょ」

「……クローンだつて事、何か思った事は無いのか？」

「別に。わたしはわたし、アリアスⅡヴエイン・オーリアルだから。レイリッターなんて

名乗っても良いけど、どうせならそれはアーガナに譲るよ」

「……そっか」

「だから陽彩、こんなに器の広いわたしを、君の物語のメインヒロインに据えても良いん

だよ？」

「せめて文脈を繋げろ」

メインヒロインはゼロなんだよなあ……。

「あ、それからアスタロト」

「聞いた」

「そ。なら、良い」

「当分は預かっておくわ。しがらみが無くなった時、本気の貴女と戦わせてね」

「……勿論」

不敵に笑うと、オーリスはグラスを一気に傾ける。

中身が何だったのかは解らないが、たぶんハーブティー辺りだろう。あいつが飲める洒落た物なんてそれくらいだ。

「後は二周目にね。桜花、代わるよ」

「はいな、オーリスさん。という訳で少しだけ付き合つてね、陽彩」

「……回転寿司」

「おいアスタロト」

言つてはいけない。

思つたとしても口にはいけない事もあるのだ。

「まず、助けてくれてありがとう、陽彩。こうやってまたクレイドルに戻れて、本当に感謝してる」

「あまり早く行けなくてごめん。無事で良かった」

四度目、グラスをまた鳴らす。

桜花は何を飲んでいるのだろう。色合いからしてミルクが入つてそうだが。

「それにしても女の子ばかりだね。息詰まらない？」

「言われると緊張する」

「じゃ言わない」

「……性別が偏るのは魔導炉の……いえ、テストメンタ契約者の性質ね。適性の出現には一定の波がある。今回はたまたま、そういうタイミングだったただけよ」

「じゃあこのエロゲみたいな展開の後は乙女ゲーになるの？」

「さあね」

桜花にまで言われるなんて思ってもいなかった。

実はクレイドルに生まれてから、未だにラプラスの整備士くと家の近所で遊んでる

子供以外の男と話した事がない。

テストメンタ契約者だからって引いた目で見てるのはどうなのだろうか。

「ま、そうなる頃には私は君共々お役御免だろうけど。それまで、元気にやっつこうか」

「もう墜落すんなよ？」

「寧ろ初めての操縦でいきなり戦闘できた陽彩がおかしいんだよなあ……」

切羽詰まったら人間誰だって限界は超えられる。

まあアリサが来なかつたら俺も墜落してたんだろうけど。

「うーん、ネタ切れです。何かある？」

「特には。桜花とは割とよく話してるしな」

「遠いのに結構会う事多いもんね。別に話したい事はいつでも話せるし……アーガナちゃん、交代ね」

「ん。アンカーはわたし、アグニが務めます」

「やっぱり回転……」

「アスタロト」

酒が入ると余計な事ばかり言うようになるのかこいつ。

普段が有能なだけに駄目さ加減が目立つ。

何と残念な姉なのか。

「そもそも前哨戦で時間稼ぎだけして寝落ちしてたのでちよつと気まずい」

「いや、ヴァサゴの本気を先に引き出してたから、アスタロトが十分に対処できたんだろ。アグニが居なかったらもつと苦戦してた」

「……私もそこそこ瀕死だったからね。ウラヌスを抑えるだけの力を残してヴァサゴとアガレスを相手取るのはたぶん無理よ」

直前にゼロに喧嘩吹っ掛けてたからいけないんだと思うんだけど。

バルバトスが勘違いしてたのもあるけど、そこでもう少し会話を試みるべきだったと

思う。

「役に立てた？」

「勿論。お前を呼んで正解だったよ」

「………だったら、一安心かな」

少しの逡巡を挟んでから差し出されるグラスに、そつと乾杯。

三姉妹の中では一番大本に近いアグニだが、控えめな所も強く受け継いでしまったの
だろうか。

「それからアスタロト姉さん。改めて、ありがとう」

「律儀な所、ちゃんと継いでるのね。どういたしまして、アーガナ」

アルトリアスさんを彷彿とさせる微笑みを残して、アグニは姉達の所へ帰っていく。

折角三人とも一堂に介したんだ。いつもできない長話なんかしてみても、罰は当たらないだろうさ。

さて、これで残すはゼロのみなのだが。

彼女はとも、こちらに来るつもりは無さそうだ。

アスタロトには悪いが、あちらに移らせてもらおう。

なんか三姉妹とかアリサとかは女子会みたいな雰囲気になってるし。

「ゼロ………ああ、バエルも居たのか」

「居てはいけませんか？」

「姿が見えなかったからさ。どこ行ったのかと思って」

もうバエルとの契約が形而上の物でしかない以上、彼女の気配を辿るのは難しい。

ゼロとアスタロトの魔神としての存在が大きすぎるから、紛れようと思ってしまえばもう見つけられなくなってしまう。

「……わたしはキマリスの所に居るとしましょう。アスタロトも捕まえておきます」

「一緒に居れば良いのに」

「昔話は済みましたから」

姿を消すと、机に置いてあったグラスが一つ消える。

器用なものだ。しかし、どこから魔力を調達しているのやら。

「ゼロ、隣良いかな」

「……座れば」

腰を下ろすと、真つ赤なワインが注がれたグラスを突き出される。

他のみんなと比べてぶつきらぼうな態度に苦笑しつつ、最後の乾杯。

「わたしは最後なんだ」

「好きな物は後にとっておく主義でね」

「詭弁。でも、今は騙されておく」

「いつにも増して辛辣だな？」

「これのせい」

セラフィの頃から、ゼロが飲酒している所を見た事がなかった。

そもそもアルコール大丈夫なんだろうか。既に酔ってそうなんだが、アスタロトよりも解りやすい時点で色々と駄目な気がする。

「アスタロトに付き合うんじゃないかな」

「あいつ混ぜ物飲んでるから度数が違うだろうに」

「……狡い」

「というか宴会前に飲むな」

「だってアスタロトが」

「お前止めなきやいけない方だろ」

珍しく拗ねたような表情をしている。

基本的に表情が動かないゼロだが、酒が入れば少しは素直になるらしい。

「あいつら何か企んでるみたいだけど、お前は参加しなくて良かったの？」

「……あんな事言った手前、恥ずかしい」

「お前にも羞恥心とかあるのな」

「君がそれを言うか」

血のような液体を煽り、ゆっくりと息を吐く。

ワインならいつか飲んだ記憶があるが、そんなに美味しい物だっただろうか。

そもそも俺は、アルコールの入った飲み物が苦手なかもしれない。

「……陽彩」

「ん？」

「わたし、もう戦えないかもしれない」

ぼんやりとした金色の瞳が、どこか虚空を見つめている。

毅然とした態度が見えないのは、酒のせいだけではないのだろう。

「あの時、アンドロマリウスの力が消えていくのを感じた。ウラヌスに持っていかれた、

という訳でもなさそうだけど……」

「丁度良いだろ、セラフィ。五千年の節目でさ」

「……」

彼女にとっては文字通り、半身を喪うような感覚なのだろう。

生まれてからずっと自分の中にあつた魔弾の力、それが失われていくというのは。

とはいえ、魔弾としての契約証明はゼロの体内にある。彼女が何を考えてセラフィの内部で沈黙を保っていたのかは解らないが、再契約は不可能ではない筈だ。

まあ、何にせよ。

アンドロマリウスには、お疲れ様と言ってやらないとな。

「……もう、君の役には立てない」

「俺が何の為に戦っているか、トリスリッターに初めて乗った時に言った筈だけど」
「でも」

「それに、戦うだけがお前の取り柄じゃないだろ。俺に名前をくれたのはゼロなんだからさ」

俺が生きる導しるべになつてくれたのは、他ならないゼロだ。

御童陽彩として俺が今も生きているのは、彼女が居たからだと言ひ切れる。

ふと、反対方向に目を向ける。

オーリス、アルティエさん、桜花、アリサ。

そしてバエル、キマリスにアスタロト。

時代も超えて、俺の大切な人達がここに居る。

ゼロが居なかつたのならば、俺はきつとこの光景を見る事は無かつた。

「今まで通りだよ。今回がおかしかったただけだ。本来お前は、前線に出ちやいけない人間なんだからな」

俯いているゼロに向き直つて、その金髪を梳かすように撫でる。

「それにさ。お前の方がずっと年上になつちやつたけど、やっぱり俺は義兄あになんだよ」

「……狡い人だ、あなたは」

「自覚してるよ」

アスタロトの気持ちだが、ほんの少しだけ解った気がする。

守らなきゃいけない存在が、どれだけ心の支えになるのか。

心がそのまま熱量に変わるキャバルリイの性質上、それは俺にとって一番の武器になる。

「だからさ、ゼロ。俺に守られていてほしいんだ」

「……陽彩のくせに、兄様みたいな事を」

静かに笑う様子は、ゼロでもアンドロマリウスでもなく、セラフィの姿を幻視させた。

どれだけの時間が経っても、人間そうそう変わりはない。俺の義妹はずっとそこで待っていたんだろう。

「バルバトス」

「はいな、お嬢様。どうしたんだい？」

“親友”ではなくセラフィを呼んでいるという事は、もう魔神としてのアンドロマリウスは完全に停止しているのか。

……いや、それはアスタロトに聞いた方が早いか。魔神の命を受け止めているのはあいつだからな。

「統括権を、正式に移譲する。陽彩と一緒に世界樹に向かって、情報の更新を」

「……でも、俺はもう死んでるよ？」

「だから、二階級特進」

「なるほど。これまでの俺は一兵卒ですらなかった訳だ」

「なんで俺まで……いや、フェネクスに呼ばれていたか。どの道あそこに向かわないとな。」

ユグドラシル、元気してるかな。

「じゃあ、俺はアスタロトについていく形になるのかな。癪だけど、了解したよ」

「ん。それから陽彩、バエルと再契約してあげて。彼女はまだ、君の力になる事を望んでる」

「……それは本人と相談するよ」

五千年前の最終決戦で、バエルとの契約は一度解かれている。

確かに作戦の一環であり、俺も彼女も納得した上での行動だったが、今は少しだけ後悔している。

「形見が無くても気にするような性格じゃないでしょ、貴方もあの人も」

「さて、どうだかな。あれで割とロマンチストだぞ、バエルは」

「ふうん。最強の魔剣とすら呼ばれた人が、ねえ」

イメージなんかよりもよっぽど人間らしいのは、たぶん魔弾も魔神も同じだ。

バエルに始まりアンドロマリウスに終わる、七十二の奇跡。

例え五千年の時が過ぎようと、本質は変わっちゃいない。

「さて。アリアスと話を付けてくる」

「うん？何かあったっけ」

「どちらが一番に相応しいかはここで決める」

こいつ酔ってるな。

とんでもない酔い方してるな。

……まあ、良いか。

オーリスには悪いが、それはそれで平和な感じがして良い。

自身の姉の鏡写しの少女を捕まえて外に向かったゼロを眺めながら、俺は年甲斐もな

くそんな事を思った。



空歴4996年、九月。

クレイドルを騒がせた一連の事態は収束し、平和で平穏な日常へと俺達は帰還した。

とはいえ怪異ホロウハイスは未だに存在する。契約者テスタメンタの仕事が無くなった訳じゃない。

それと、これは俺の個人的な話だが。

守るべき者が、あまりにも増えた。

いや、そうだったと思ひ出ただけかもしれないが。

どちらにせよ、俺はまだ剣を置けない。

戦い続ける理由がある。

青空を背景に、ペンを走らせる。

文才なんてものは無いが、誰に見せるものでもないんだから、構いやしない。

「あ、こんな所に居た。何書いてるの、そーきくん」

「何でもないよ、アルトリアスき——え？」

ペンを挟んで手帳を置き、顔を上げる。

アンバランスに伸ばした前髪で片目を隠したオーリスが、楽しそうに笑っていた。

「なんだお前か。びっくりさせんでくれ」

「みんな面白いくらい引っ掛かるね。そんなに似てるのかなあ？」

髪を弄りながら不思議そうにしている彼女を見て、溜め息を一つ。

その小さな動作一つ一つですらそっくりなんだから、やっぱりクローンなんだなと実感する。

「で、何しに来たんだ？」

「ゼロが呼んでる。あと、アスタロトも」

そういえば、彼女との決着は付けたんだろうか。

しづみが無くなって正義の味方を辞めたアスタロトは、正直化け物みたいに強いんだけど。果たしてオーリスが勝てるのか。

その辺は楽しみしておくでしょう。

で、ゼロとアスタロトが待つてるって事は、フェネクスの所に行くのかな。

世界樹に行って統括権の移譲も行われるから、メンバーは俺とアスタロトにバルバトスか。

「ところでこれ、どうかな。似合ってる？」

「悪くはないけどな。似すぎてるよ、それ。本当に見間違えそうになる」

立ち上がり、手帳をトリスリッターの格納領域に放り込む。

どうせロクに武器なんか積んでないんだし、少しくらい娯楽品を入れても良いだろう。

「ふーん。ま、行ってらっしゃい。遠出するんでしょ？ここは、わたしが守っておくから」

「どうせすぐに帰ってくるとは思うけど、留守は任せるよ」

暫く銀色の髪を弄っていた彼女だが、素直にそれで紅い瞳を隠しておくらしい。

両目を踵にすればアルトリアスさんとそっくりだし、かといって隠してみればまたそれはそれで似ている。難儀な話だ。

……しかし、いつの間に髪なんて伸ばしたんだろう。祝勝会の時は前と同じだったんだけど。

「それじゃ」

「うん。気を付けてね、そしきん陽彩」

待ち合わせ場所はクレイドル07の中央、管理施設の出撃用ゲートだ。

そこに向かって歩き出し——少し、後ろを振り返った。

そこには当然、オーリスが居る。

だが、ぼんやりと空を見上げる彼女の背後に、薄っすらともう一つの影があった。

「……………」

その人影はこちらを向くと、ふんわりと微笑んだ。

前髪は器用に右の金眼を隠しており、踵になつている左の瞳はルビーのように紅い。

長い銀髪を風に靡かせて、彼女は小さく手を振る。

「またね、アルトリアスさん」

笑つて手を振り返してから、俺は彼女に背を向ける。

今度こそ、前に歩こう。
一歩先の、未来へ。